

大和ハウス工業(株)中部工場内
埋蔵文化財発掘調査報告書

坂 尻 遺 跡

— 遺物・総括編 —

1 9 9 5

静岡県袋井市教育委員会

大和ハウス工業(株)中部工場内
埋蔵文化財発掘調査報告書

坂 尻 遺 跡

— 遺物・総括編 —

1 9 9 5

静岡県袋井市教育委員会

例 言

1. 本書は、大和ハウス工業株式会社中部工場増設（袋井市国本）に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告書（遺物・総括編）である。
2. 発掘調査は現地作業を1990年4月～1991年8月まで行い、本報告書作製作業を1991年9月～1995年3月まで行った。
3. 出土遺物量は、整理箱にして400箱を数え、その保管・管理は袋井市教育委員会が行う。
4. 遺物整理作業は大和ハウス工業(株)中部工場の委託により、袋井市教育委員会の加藤理文、松井一明が担当した。
5. 遺物整理作業に係わる費用は、委託者が全額負担した。
6. 本書の編集は松井が、執筆については目次に文責を記した。挿図・写真図版の作製は松井、水野かおり、鈴木美恵子、古環境研究所、パリノ・サーベイ株式会社が、写真撮影については松井、水野、梅川元美、東原真喜子が行った。
7. 遺物整理作業に関する事務経理は、袋井市教育委員会生涯学習課文化財係が担当した。
8. 既に刊行している遺構編に示された遺構の年代については、遺物整理の結果変更が生じたため、本書の内容を正式なものとして訂正し報告したい。
9. 本書の刊行と既刊の遺構編の作成が終了し本発掘調査事業のすべての作業を無事に完了することができたことは、委託者である大和ハウス工業(株)中部工場の関係者の方々の全面的かつ忍耐強い協力を得ることができたことによるものである。ここに特に記して感謝の意を表したい。
10. 本書作成にあたっては下記の方々にご協力、ご教示、資料の提供を賜った。（敬称略）

飯塚晴夫	石井克己	市田京子	市原寿文	伊藤寿夫	伊藤美鈴	岩本 貴	植田文雄
上原真人	潮田鉄雄	及川 司	太田好治	大谷宏治	河西克造	加藤芳郎	木村弘之
久野正博	栗野克巳	栗原雅也	小林正春	小柴秀樹	後藤健一	斎野裕彦	佐野五十三
寒川 旭	篠原修二	柴垣勇夫	柴田 稔	鈴木敏則	鈴木敏中	瀬川裕市郎	塚本和弘
戸塚和美	中野晴久	中井 均	中井正幸	西尾太加二	原秀三郎	平野吾郎	藤沢良祐
前田庄一	巻田克彦	松本一男	向坂鋼二	森 郁夫	八木勝行	山崎克巳	山口和夫
山中敏史	山本恵一	山本宏司	山本義孝				

総 目 次

遺 構 編

第1章 発掘調査の経緯	(加藤理文)	1
第1節 発掘調査の経過及び調査経過		1
第2節 遺跡の立地		3
第3節 発掘調査の方法・調査整理体制		3
1.方法		3
2.調査整理体制		4
第4節 基本層位		4
第5節 江戸時代・近代の遺構		19
第6節 平安時代の遺構		19
第7節 奈良時代の遺構		22
第8節 古墳時代の遺構		24
第9節 弥生時代の遺構		32
第10節 まとめ		33

遺 物 編 (本 書)

第2章 遺 物	(松井一明)	1
第1節 古墳時代前半期の土器		1
第2節 古墳時代後半期の土器		4
第3節 奈良時代の土器		24
第4節 平安～鎌倉時代の土器		28
第5節 江戸時代の土器		32
第6節 土製品・金属製品・石製品・木製品		33
第3章 自然科学分析		262
第1節 坂尻遺跡出土木製品の樹種	(パリノ・サーベイ株式会社)	262
第2節 坂尻遺跡の珪藻分析	(パリノ・サーベイ株式会社)	267
第3節 坂尻遺跡のプラント・オパール分析	(古環境研究所)	270
第4節 坂尻遺跡の花粉分析	(古環境研究所)	274
第4章 総 括	(松井一明)	280
第1節 遺構について		280
古墳時代前期の水田跡と地震痕跡		280
古墳時代後期の集落構成		282
奈良時代の集落構成		286
平安末～鎌倉時代の集落構成		289
第2節 遺物について		292
古墳時代前半期の土器編年		292
古墳時代後半期の土器編年		309
古墳時代の下駄について		338
第3節 総括		344

挿図目次（遺物編）

第 1 図	SD80 遺物出土状態図 1	36
第 2 図	SD80 遺物出土状態図 2	37
第 3 図	SD80 遺物出土状態図 3	38
第 4 図	SD80 遺物出土状態図 4	39
第 5 図	SD148 遺物出土状態図	40
第 6 図	SD185 杭列・水道管検出図 1	41
第 7 図	SD185 杭列・水道管検出図 2	42
第 8 図	SD217 遺物出土状態図 1	43
第 9 図	SD217 遺物出土状態図 2	44
第 10 図	SD217 遺物出土状態図 3	45
第 11 図	SD217 遺物出土状態図 4	46
第 12 図	SD217 遺物出土状態図 5	47
第 13 図	SD236 遺物出土状態図	48
第 14 図	SD244 遺物出土状態図(上層)	49
第 15 図	SD244 遺物出土状態図(下層1)	50
第 16 図	SD244 遺物出土状態図(下層2)	51
第 17 図	SD246 遺物出土状態図 1	52
第 18 図	SD246 遺物出土状態図 2	53
第 19 図	SD248 遺物出土状態図	54
第 20 図	SD260 遺物出土状態図 1	55
第 21 図	SD260 遺物出土状態図 2	56
第 22 図	SD260 遺物出土状態図 3	57
第 23 図	SD266 遺物出土状態図(上層)	58
第 24 図	SD268 木樋・砧出土状態図	59
第 25 図	SD267・SD270 堰検出状態図 1	60
第 26 図	SD270 堰検出状態図 2	61
第 27 図	SD270 堰検出状態図 3	62
第 28 図	SD282・SX6 遺物出土状態図	63
第 29 図	SK79 遺物出土状態図	64
第 30 図	SK93 遺物出土状態図	65
第 31 図	古墳時代前期土器実測図 1	66
第 32 図	古墳時代前期土器実測図 2	67
第 33 図	古墳時代前期土器実測図 3	68
第 34 図	古墳時代前期土器実測図 4	69
第 35 図	古墳時代前期土器実測図 5	70
第 36 図	古墳時代前期土器実測図 6	71
第 37 図	古墳時代前期土器実測図 7	72
第 38 図	古墳時代前期土器実測図 8	73
第 39 図	古墳時代前期土器実測図 9	74

第 40 図	古墳時代前期土器実測図 10	75
第 41 図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図 1	76
第 42 図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図 2	77
第 43 図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図 3	78
第 44 図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図 4	79
第 45 図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図 5	80
第 46 図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図 6	81
第 47 図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図 7	82
第 48 図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図 8	83
第 49 図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図 9	84
第 50 図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図 10	85
第 51 図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図 11	86
第 52 図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図 12	87
第 53 図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図 13	88
第 54 図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図 14	89
第 55 図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図 15	90
第 56 図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図 16	91
第 57 図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図 17	92
第 58 図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図 18	93
第 59 図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図 19	94
第 60 図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図 20	95
第 61 図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図 21	96
第 62 図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図 22	97
第 63 図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図 23	98
第 64 図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図 24	99
第 65 図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図 25	100
第 66 図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図 26	101
第 67 図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図 27	102
第 68 図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図 28	103
第 69 図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図 29	104
第 70 図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図 30	105
第 71 図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図 31	106
第 72 図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図 32	107
第 73 図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図 33	108
第 74 図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図 34	109
第 75 図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図 35	110
第 76 図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図 36	111
第 77 図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図 37	112
第 78 図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図 38	113
第 79 図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図 39	114
第 80 図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図 40	115

第 81 図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図 41	116
第 82 図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図 42	117
第 83 図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図 43	118
第 84 図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図 44	119
第 85 図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図 45	120
第 86 図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図 46	121
第 87 図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図 47	122
第 88 図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図 48	123
第 89 図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図 49	124
第 90 図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図 50	125
第 91 図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図 51	126
第 92 図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図 52	127
第 93 図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図 53	128
第 94 図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図 54	129
第 95 図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図 55	130
第 96 図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図 56	131
第 97 図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図 57	132
第 98 図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図 58	133
第 99 図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図 59	134
第100図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図 60	135
第101図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図 61	136
第102図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図 62	137
第103図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図 63	138
第104図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図 64	139
第105図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図 65	140
第106図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図 66	141
第107図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図 67	142
第108図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図 68	143
第109図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図 69	144
第110図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図 70	145
第111図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図 71	146
第112図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図 72	147
第113図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図 73	148
第114図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図 74	149
第115図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図 75	150
第116図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図 76	151
第117図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図 77	152
第118図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図 78	153
第119図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図 79	154
第120図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図 80	155
第121図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図 81	156

第122図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図 82	157
第123図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図 83	158
第124図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図 84	159
第125図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図 85	160
第126図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図 86	161
第127図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図 87	162
第128図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図 88	163
第129図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図 89	164
第130図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図 90	165
第131図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図 91	166
第132図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図 92	167
第133図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図 93	168
第134図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図 94	169
第135図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図 95	170
第136図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図 96	171
第137図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図 97	172
第138図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図 98	173
第139図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図 99	174
第140図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図100	175
第141図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図101	176
第142図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図102	177
第143図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図103	178
第144図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図104	179
第145図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図105	180
第146図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図106	181
第147図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図107	182
第148図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図108	183
第149図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図109	184
第150図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図110	185
第151図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図111	186
第152図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図112	187
第153図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図113	188
第154図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図114	189
第155図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図115	190
第156図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図116	191
第157図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図117	192
第158図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図118	193
第159図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図119	194
第160図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図120	195
第161図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図121	196
第162図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図122	197

第163図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図123	198
第164図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図124	199
第165図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図125	200
第166図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図126	201
第167図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図127	202
第168図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図128	203
第169図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図129	204
第170図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図130	205
第171図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図131	206
第172図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図132	207
第173図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図133	208
第174図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図134	209
第175図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図135	210
第176図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図136	211
第177図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図137	212
第178図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図138	213
第179図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図139	214
第180図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図140	215
第181図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図141	216
第182図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図142	217
第183図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図143	218
第184図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図144	219
第185図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図145	220
第186図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図146	221
第187図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図147	222
第188図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図148	223
第189図	古墳時代中期～奈良時代土器実測図149	224
第190図	平安～江戸時代土器実測図 1	225
第191図	平安～江戸時代土器実測図 2	226
第192図	平安～江戸時代土器実測図 3	227
第193図	平安～江戸時代土器実測図 4	228
第194図	平安～江戸時代土器実測図 5	229
第195図	平安～江戸時代土器実測図 6	230
第196図	平安～江戸時代土器実測図 7	231
第197図	平安～江戸時代土器実測図 8	232
第198図	平安～江戸時代土器実測図 9	233
第199図	平安～江戸時代土器実測図10	234
第200図	平安～江戸時代土器実測図11	235
第201図	平安～江戸時代土器実測図12	236
第202図	平安～江戸時代土器実測図13	237
第203図	墨書土器集成図1	238

第204図 墨書土器集成図 2・陶硯・参考資料実測図	239
第205図 土製品・金属製品・石製品実測図 1	240
第206図 土製品・金属製品・石製品実測図 2	241
第207図 土製品・金属製品・石製品実測図 3	242
第208図 土製品・金属製品・石製品実測図 4	243
第209図 木製品実測図 1	244
第210図 木製品実測図 2	245
第211図 木製品実測図 3	246
第212図 木製品実測図 4	247
第213図 木製品実測図 5	248
第214図 木製品実測図 6	249
第215図 木製品実測図 7	250
第216図 木製品実測図 8	251
第217図 木製品実測図 9	252
第218図 木製品実測図10	253
第219図 木製品実測図11	254
第220図 木製品実測図12	255
第221図 木製品実測図13	256
第222図 木製品実測図14	257
第223図 木製品実測図15	258
第224図 木製品実測図16	259
第225図 木製品実測図17	260
第226図 木製品実測図18	261
第227図 珪藻分析試料採取位置の模式柱状図	268
第228図 イネのプラント・オパール検出状況図	272
第229図 おもな植物の推定生産量と変遷図	273
第230図 主要花粉化石の分布図	279
第231図 古墳時代前期の水田跡・地震痕跡土層実測図	281
第232図 古墳時代後期の集落構成図	284
第233図 古墳時代後期の主要遺構別土器組成図	285
第234図 奈良時代の集落構成図	288
第235図 平安末～鎌倉時代の集落構成図	291
第236図 古墳時代前半Ⅳ期土器参考資料実測図	297
第237図 古墳時代前半期土器編年図 1	298・299
第238図 古墳時代前半期土器編年図 2	300
第239図 古墳時代後半Ⅰ-1期土器参考資料実測図	311
第240図 古墳時代後半期土器編年図 1	316・317
第241図 古墳時代後半期土器編年図 2	318
第242図 古墳時代後半期土器編年図 3・遠江出土飛鳥様式土師器参考資料実測図	319
第243図 古墳時代後半期土器隣接地域(西・東遠江)参考編年図 1	325
第244図 古墳時代後半期土器隣接地域(東三河)参考編年図 2	328
第245図 古墳時代後半期土器隣接地域(駿河西部)参考編年図 3	332

第246図 弥生～古墳時代下駄集成図 1	340
第247図 弥生～古墳時代下駄集成図 2	341
第248図 静岡県・愛知県三河地域弥生～古墳時代下駄分類図	343
第249図 坂尻遺跡歴代発掘調査区位置図	345

表 目 次

第 1 表 山茶碗産地別組成グラフ	31
第 2 表 材の樹種分析表	265
第 3 表 時代別・主な用途別の樹種構成表	266
第 4 表 珪藻の生態分類表	268
第 5 表 淡水生種の各生態に対する適応性分類表	268
第 6 表 珪藻分析結果表	269
第 7 表 プラント・オパール分析結果表	272
第 8 表 花粉化石一覧表	278

写 真 図 版

図版 1 遺物写真 1 (古墳時代前期)
図版 2 遺物写真 2 (古墳時代前期)
図版 3 遺物写真 3 (古墳時代中期～奈良時代)
図版 4 遺物写真 4 (古墳時代中期～奈良時代)
図版 5 遺物写真 5 (古墳時代中期～奈良時代)
図版 6 遺物写真 6 (古墳時代中期～奈良時代)
図版 7 遺物写真 7 (古墳時代中期～奈良時代)
図版 8 遺物写真 8 (古墳時代中期～奈良時代)
図版 9 遺物写真 9 (古墳時代中期～奈良時代)
図版10 遺物写真10(古墳時代中期～奈良時代)
図版11 遺物写真11(古墳時代中期～奈良時代)
図版12 遺物写真12(古墳時代中期～奈良時代)
図版13 遺物写真13(古墳時代中期～奈良時代)
図版14 遺物写真14(古墳時代中期～奈良時代)
図版15 遺物写真15(古墳時代中期～奈良時代)
図版16 遺物写真16(古墳時代中期～奈良時代)
図版17 遺物写真17(古墳時代中期～奈良時代)
図版18 遺物写真18(平安～江戸時代)
図版19 遺物写真19(平安～江戸時代)
図版20 遺物写真20(墨書土器・硯)
図版21 遺物写真21(土製品・石製品・金属製品・木製品)
図版22 遺物写真22(木製品)
図版23 木製品樹種顕微鏡写真
図版24 木製品樹種顕微鏡写真
図版25 珪藻化石顕微鏡写真
図版26 プラントオパール顕微鏡写真
図版27 花粉化石顕微鏡写真

平成6年度坂尻遺跡発掘調査報告書（遺物・総括編）

第2章 遺物

はじめに

遺物のうち土器に関しては遺構編に準じて古墳時代初頭～前期、古墳時代中期～後期、奈良時代、平安時代～鎌倉時代、江戸時代にわけて記述する。坂尻遺跡における古墳時代土師器編年についてはかつての報告書（袋井市教育委員会 1985）で時期設定がなされた。すなわち、集落において須恵器が普及し土師器の型式や組成に大変化を与えた要因、①銘々器であろう土師器の坏の普及、②竈の普及に伴う甗、長胴甕が安定的に出現する段階（畿内須恵器編年TK23・47＝宮之腰Ⅰ式段階）以前・以後で大きな画期を設定し、2時期で大別し土師器編年を考えてみた。しかし、近年古新田遺跡のTK208並行期の土師器資料が公表され（浅羽町教育委員会 1993）、TK208並行期においても②の要素である土師器の甗及び長胴甕が出現していることが明らかとなった。よってTK208並行期の土師器が古墳時代後半期土師器の基礎になる可能性がでてきたため、本報告書ではTK208並行期の土師器についても後半期土師器編年に編入し、旧来の坂尻遺跡前半期土師器編年Ⅳ期新段階を後半期土師器編年Ⅰ－Ⅰ期と改めたい。また、本報告書の後半期土師器は従来の坂尻編年ではⅢ期と報告しているが①前半期との大画期の問題、②模倣坏・丸底坏の出現の問題、③長胴甕の平底化について問題としたいため、従来の時期区分は採用しないことにした。よって、本報告書では古墳時代の土師器を5世紀中葉で区切り2時期の大区分を採用し、前半を前半期土師器Ⅰ～Ⅳ期、後半を後半期土師器Ⅰ～Ⅲ期に時期区分して記述を進める。また、今回の調査では古墳時代の土師器が最も充実して出土しているため、本章では出土している各時期の土師器・須恵器の記述に留めておき、本調査で充実していない段階の土師器については、第4章で過去の坂尻遺跡や周辺遺跡の発掘調査で出土した資料と遠江における基準資料の土師器を検討し、坂尻遺跡出土の土師器との比較検討を試みたい。

第1節 古墳時代前半期の土器（第31図～第189図）

今回出土した古墳時代前半期の土器については、従来の坂尻編年古墳時代初頭期（Ⅰ期）と、前期（Ⅱ期古段階）に該当するもの、前期末～中期前葉段階（Ⅲ・Ⅳ期）に該当するであろう資料の4つの段階の資料が出土している。Ⅰ期の土器は4世紀代の原野谷川流路のSD183・276をはさんで北岸の住居跡群より、Ⅱ期の土器は南岸の溝状遺構を中心に出土している。Ⅲ・Ⅳ期の土器としてはSD183・276埋没後の遺構面（Ⅱ面、古墳時代中期～奈良時代の遺構確認面）で検出されたSH5・12、SD93等出土の資料が該当する。なお、各段落の細分については第4章で行なう。

前半期土師器Ⅰ期（第31図～第40図）

Ⅰ期段階に該当する土師器はおもにSD183・276北岸のII4付近で検出された住居跡（SH25～33・56）から一括資料として出土している。特にSH25と33の資料が良好である。

壺類については、菊川式からの在来系の系譜をもつものと天竜川以西地域の土器型式に系譜の辿れる外来系がある。在来系は菊川式と同じく内彎単純口縁の25・28・34・56、折返口縁の2・29・30・35・36がある。その他縄文の施された文様や下膨れ形態、頸部の接合が口縁の屈曲部にない特徴から3・10・32・33・37・38なども在来系の壺形土器と考えてもよいだろう。文様としてはS字結節を伴う単節のLR縄文が肩部に施される25・27、同様の文様が口縁内部に施された34・56の他は無文化が進んでいる。器面調整は胴部上半のほとんどを刷毛目調整を残す33は極めて小数で、25や27のように肩部文様帯

までミガキ調整の施されたものが目立つ。

外来系の壺は単純口縁で球形胴の9、口縁端部をつまみ上げ短い受口状の口縁で球形胴の31、受口状口縁となり頸部に断面三角形の凸帯をもつ球形胴の8、所謂ひさご形壺の7などがある。口縁は頸部の屈曲するところで接合しており、ひさご形壺を除いて球形胴をなし、在来系の壺とは明らかに異なる手法で作られていることがわかる。文様は7のひさご壺は口縁と肩部に一条の波状沈線文、8のように凸帯部と肩部に一条の斜行刺突文、31の口縁端部の摘上げた部分に斜行の刺突文を施すものが見られるが、文様としては無文化が進んだものと理解される。

甕類についてはほとんどが台付甕で、僅かにSD187・276の南岸で検出されたSD267出土の76とSD270出土の103が外来系のB類S字甕（赤塚次郎 1990）の中段階に該当するものが出土している。まず台付甕のうち在来系と思われる弥生時代後期後半の特徴を良く残す口縁部に刻目を施した16・17・21・40・80がある。さらに新型式の台付甕は口縁部には刻目が施されず、代わってナデ調整の施され外反する口縁の11～13・15とナデ調整の施されない22が見られる。また、菊川式より系譜の辿れる折返口縁の41も存在している。18～20・23・42の脚部は何れも在来の台付甕の脚部に該当するものだろう。とくに18・20・23など脚部の接合部の刷毛目を指頭でナデ消すなど弥生時代後期の台付甕ではあまり見られない調整が施されている。

高坏は脚の接合部に近いところに稜があり大きく内彎気味に口縁が開き、脚部はあまり内彎しない小さなものが付く5・6の外来系のものしかなく、在来の弥生時代後期の系譜を引く鐙状口縁の高坏ないし脚付鉢形態の高坏については破片でも出土していない。他に外来系と思われる脚部と坏部の接合部付近に櫛描横線文が施された1などの高坏破片が出土している。

小型器台と思われるものとして4・24の2点が出土している。単純に大きく開く受部をもち、受部から脚部に貫通する円孔を持たないものである。これに伴うであろう小型埴や小型鉢については今回の調査では出土していないが、おそらく口縁が短く開く小型鉢が伴うと思われる。

前半期土師器Ⅱ期古段階（第31図～第40図）

Ⅱ期古段階の資料はおもにSD183・276（4世紀代原野谷川本流）南岸で検出された住居跡（SH49～51）や溝状遺構（SD266～277）が該当し、特にSD270 出土の資料が充実している。

壺類については、Ⅰ期と同じく在来系の菊川式の系譜をもつものと天竜川以西地域の土器型式に系譜の辿れる外来系のものが存在する。在来系はⅠ期と同じく内彎単純口縁の98・120、折返口縁が形骸化した121があるが量的には少なくなっている。文様としてはS字結節を伴う単節のLR縄文が口縁内部に施される120、S字結節が省略される98、形骸的な縄文が今までに施文されない位置である口縁部外側に見られるが121はさらに無文化が進んでいる。ただし内彎口縁の98と120はⅠ期の同型式の壺と比べてもさほどの型式変化はないので、Ⅰ期に近い時期になる可能性もある。

外来系の壺は胴部に対して口径が小さく、短く外反する単純口縁の球形胴になるとと思われる53・66・99と直線的に開いた口縁をもつ69・123などが知られる。69は口縁内部に暗文を彷彿させるミガキ調整が施されている以外、加飾性のないものがほとんどである。ただし、折返口縁であるが折返部に沈線を施し口縁が直立気味となる在来系のものとは思えない122も存在する。

甕類についてはほとんどが台付甕である。外来系のS字甕は76と103がB類でⅠ期段階に並行関係が求められる混入資料のほか、C類最古段階に属すると思われる90・104がありこれらは本段階に該当するであろう。他にS字甕の脚部と思われる50・51・55・61・62・105・106・108がある。これらの多くが金雲母を多量に含む胎土で明黄褐色の色調を示すことから見て、天竜川以西地域よりの搬入品が多数を占めるとと思われる。在来系の台付甕はⅠ期の段階で見られた口縁部に刻目を施すものは消滅し、代わりに口縁部にナデ調整の施され外反する口縁の台付甕である81・82・109・111・126、口縁が直立する89、口縁が内彎する110が存在する。これら外反口縁の台付甕の脚部はⅠ期からの接合

部をナデる特徴がある52・60・64・72・85・91のほかに、84のような脚部全体の刷毛目をナデ消すものもある。胴部形態も球形胴が主体であるが、126のようにやや長胴傾向のものも残る。

高坏はⅠ期からの系譜の辿れる脚部接合部に近いところに稜があり口縁が大きく内彎気味に開き脚部は外彎して開く94のほか、柱状脚になる65・125 などがある。

小型器台と思われるものとして75・92・93の3点が出土している。いずれも脚部のみの出土のうえに、受部から脚部にかけて貫通する円孔を持たないタイプであるが、全体の形態はよく分からない。小さく内彎する受部をもつ小型器台になるだろうか。この器台と組み合わせになる小型罎・鉢は球形胴の118とやや長胴になる119の2点が出土している。119はⅠ期からの系譜を引く小型鉢であるが、118についてはⅡ期から新たに見られる小型罎の形態のようである。

他に器形不明で底部が高台状に突出する102は、当地域ではあまり見られない形態の土器である。

前半期土師器Ⅲ・Ⅳ期（第41図～第189図）

Ⅲ期・Ⅳ期の資料はおもにSH5・11・12、SI2、SK48、SX4、SD93、I13区、K11区の古墳時代中期～奈良時代遺構面（Ⅱ面）で出土しているが出土量は少ない。

Ⅲ期に該当する資料は、SH5出土のものである。4は高坏脚部は柱状脚で水平に大きく開く形態のもの、5は底部を小さく押し上げられた丸底の罎、6は短く外反した口縁の壺形土器である。

Ⅳ期の資料はSH11・12、SI2、SK48、SX4、SD93、I13区、K11区から出土している。壺類は複合口縁から変化したと思われる短く直立した口縁をもち、球形の胴部形態となり、胴部ナデ調整の51・2882がある。ほかに直立口縁の50、外反する口縁の2884～2886、罎に近い形態になるとと思われる球形胴の49が出土している。572は折返口縁の壺形土器で球形胴になるとと思われる。

甕類は短く外反した口縁をもち、球形胴で小さな底部が付く形態になる575・950・1542～1547と、同形態で丸底の2891がある。調整手法では全体に刷毛目調整を残す1545、胴部上半に刷毛目調整を良く残し胴部下半はナデ調整が施される1543・2891と、全体に粗いナデ調整が施された1542・1544・1546・1547とに別れる。

台付甕は一括資料の中では確認できていないが、平底甕に似た形態で胴部全体がナデ調整仕上げとなっているSH14出土の80、SH34出土の114などがⅣ期の台付甕に該当しそうである。2269の胴部ナデ調整の台付甕もⅣ期に該当する可能性がある。しかし、胴部中央で稜をもつ点と脚部が扁平で低い形態のうえ端部に面を作り出している特徴があり、これは当地域のⅣ期の台付甕の一般的な形態ではないため、時期がⅢ期以前に遡るか他地域の系譜の台付甕とも思われ、今回はⅣ期に含まれる可能性の指摘に留めておきたい。

高坏は38～43・197～199・569～571で、脚部中央で膨らみ裾が大きく開く38・43・199・569と、あまり脚部中央があまり膨らまず広がり裾は大きく開く39・42・570・571の形態、坏部は接合部近くに稜をもち大きく外反する坏部の38～40・198、稜が凸帯状になる41・197 などがある。51は口径が小さいため脚部裾が直立気味になる高坏の脚部となると考えられるが、直立する複合口縁の壺形土器とした。

小型の壺については中形で球形胴で大きく開いた口縁をなす2887・2888と、直立気味の口縁となる2890がある。46・48は小型罎になると思うが、47については小型鉢になる可能性もあろう。いずれも胴部にはナデ調整が施された粗雑な造りである。ほかには上げ底の小さな底部をもち口縁が短く外反して開く鉢形土器の44があり、45・47なども同形態の小型鉢になるとと思われる。200は典型的な小型丸底罎で体部は粗雑なナデ調整が施されている。これらの資料は高坏や鉢形土器、甕形土器の特徴からⅣ期に該当する資料と思われる。

第2節 古墳時代後半期の土器（第41図～第189図）

今回出土した古墳時代後半期（5世紀中葉以降）における土師器については、諸型式の消長関係と伴出した須恵器の編年（遠江須恵器編年 浜松市教育委員会 1988）から、6世紀前葉（後半期土師器編年Ⅱ-1期＝遠江編年須恵器Ⅱ期＝陶邑田辺編年MT15並行 田辺昭三 1966）、6世紀中葉（後半期土師器Ⅱ-2期＝須恵器Ⅲ期前葉＝TK10）、6世紀後葉（後半期土師器編年Ⅱ-3期＝須恵器Ⅲ期中葉＝TK43）、6世紀末葉（後半期土師器編年Ⅱ-4期＝須恵器Ⅲ期後葉＝TK209）、7世紀前葉（後半期土師器編年Ⅲ-1期＝須恵器Ⅲ期末葉＝TK217古相？）、7世紀中葉（後半期土師器編年Ⅲ-2期＝須恵器Ⅳ期前葉＝TK217中相？）、7世紀後葉（後半期土師器編年Ⅲ-3・4期＝TK217新相？）に編年される資料がえられた。しかし、Ⅲ-3～4期については断片的な資料の出土にとどまり、また5世紀中葉と後葉（後半期土師器編年Ⅰ-1期＝須恵器Ⅰ期前葉＝TK208 と後半期土師器編年Ⅰ-1期＝須恵器Ⅰ期後葉＝TK23・47）の土師器は、今回の調査地区では明確には捉えられなかった。

後半期土師器の出土遺構はⅡ面の古墳時代中期～奈良時代の遺構確認面で検出された遺構から出土しており、今回の発掘調査の中では最も出土量の多い時期の資料となっている。報告書の紙面の都合もあるため資料が大量に出土した遺構、基準資料となる一括資料に限って遺構ごとに土器の段階を中心とする記述に留め、後半期土師器の編年の問題点や分類案などについては、第4章にて改めて検討する。

SH18（後半期土師器Ⅱ-4期、第44図～第47図）

須恵器の出土はなく、土師器の甑、広口壺、把手付鍋、長胴甕が出土している。

土師器の甑は小型の小穴が穿たれ丸底形態で口縁が大きく開いた98と、口径に対して底径が半分以下で直線的な筒状形態、把手は胴部中央より上につく99の2種類がある。何れもⅡ-4期に該当する。

壺類は底部が丸底で球形胴、口縁も直線的に広がる形態の広口壺である100が出土している。

把手付鍋は底部が丸底であるものの高台がつき、やや長胴で肩の張らない形態で口縁が直立気味に開く101が出土している。Ⅱ-4期に該当する。

長胴甕は102のように小型で丸底、口径と胴径が一致し、少し外反しながら開く口縁のもの、103～107のように中型で丸底、口径と胴径が一致し、胴部も直線的に長胴化しており、口縁は直立気味に開き端部が摘み上げられた形態の2種類が出土している。108については口縁が欠損しているため全体形が不明であるが、胴部中央に最大径があり、より古い形態を残しているものであろう。何れもⅡ-4期に該当する。

以上SH18出土土器群は須恵器が出土していないため須恵器編年との確実な対比はできないが、長胴甕や広口壺の形態から見るとⅡ-4期の良好な一括資料である。

SH54（後半期土師器Ⅱ-2期、第48図～第50図）

須恵器は坏蓋・身、小型壺、土師器は模倣坏蓋・身、坏、短脚高坏、小型鉢、小型広口壺、直口壺、長胴甕が出土している。

須恵器の坏蓋は150のように最大径13cm代を測り天井部の稜がはっきりし高い天井をもち口縁端部にも形骸した面をもつⅡ期前葉のもの以外、151～154のように最大径14～13cm代を測るが天井部の稜も形骸し天井も低くなりⅢ期前葉でも新相の特徴を示すものまである。坏身は155・156のように最大径14cm代を測り、口縁は短く傾斜気味となりⅢ期前葉新相の特徴を示すものが出土している。

157の小型壺については明瞭な沈線が施されておりⅢ期前葉に該当すると考えられる。

土師器の模倣坏蓋は天井の稜線が明確で口縁があまり開かない158と、天井の稜線が明瞭でなく口縁が開く159の2種類があるが、口径はいずれも14cm代を測るものである。模倣坏身については体部が浅く長く直立した口縁がつく160・161と、体部が深くやや内傾した短い口縁がつく162の2種類があり、

何れも最大径は15cm代に近い。模倣坏蓋・身ともに2種類に別れ、形態的には前者のほうが古い傾向にありⅡ-2期古相に、後者はⅡ-2期新相に該当すると思われる。

坏は口径14cm代で口径に比べて比較的浅い作りで口縁が外傾して開く163、口径11cm代と小型であるが深い作りで内彎傾向のある164が出土している。形態からみると口径の大きい前者がⅡ-2期、後者がⅡ-1期に該当すると思われる。

短脚の高坏は外反した比較的高めの脚がつき彎曲した深い作りの鉢形態の坏部、短く開いた口縁をもつ166・167、短く内彎した口縁で外に大きく開き比較的浅い坏部をもつであろう165の2種類が出土している。坏部の形態から前者がⅡ-2期、後者がⅡ-4期に該当すると思われる。

鉢の168は胴部が丸く彎曲し口縁が短く開く形態で、Ⅱ-2期に該当すると思われる。

小型壺はおそらく長頸で胴部が扁平になる直口壺の169と、広口で球形胴になるの170の2種類があり、どちらもⅡ-2期に該当すると思われる。

長胴甕は中型の丸底で口縁が直立気味に外反し肩がやや張り最大径が胴部中央近くにある172・174、口縁が直立気味のくの字口縁の175があり、前者はⅡ-2期、後者はⅡ-3期に該当すると思われる。外反口縁の173はⅡ-1期に該当する。小型の長胴甕の171は、丸底で直立気味に外反した口縁、下膨れの胴部形態となる。口縁・胴部の形態からⅡ-2期に該当すると思われる。

以上SH54出土土器群は須恵器、土師器ともにⅡ-1～4期の資料が混在しているものの、Ⅱ-2期が主体となる一括資料であろう。

SH55（後半期土師器Ⅱ-3期、第50図～第51図）

須恵器の出土はなく、土師器の模倣坏身、坏、短脚高坏、長脚高坏、甑、長胴甕が出土している。

土師器の模倣坏身は体部が深くやや内傾した短い口縁がつく178が出土している。最大径は13cm代と小型化したものであるが、Ⅱ-3期に該当する。

坏は口径14cm代で口径に比べて比較的浅い作りで口縁が外傾して開く179が出土しており、Ⅱ-3期に該当する。

短脚の高坏は短く外反した口縁で彎曲した深い作りの坏部、高い脚部をもつ180が出土しており、Ⅱ-3期に該当する。

長脚高坏の坏部と思われる182、脚部の181が出土しており、何れもⅡ-3期に該当する。

甑は単純口縁で胴部下半が内彎気味にやや窄まる185・186と、おそらく丸底となり中央に1穴ないし複数穴の小穴が穿たれる形態の187がある。何れもⅡ-3期に該当する。

長胴甕は中型で胴部との境が屈曲して丸底となり口縁が直立気味に開き肩がやや張る形態の188・190・192と、口縁がくの字状に開き、胴部中央に最大径をもつと思われる189・191の2種類があり、後者のほうが古い形態を残すと思われるが、両者ともⅡ-3期に該当すると思われる。

以上SH55出土土器群は須恵器は伴わないが、Ⅱ-3期の良好な一括資料である。

SK60（後半期土師器Ⅱ-3期、第66図）

須恵器は坏蓋が出土しており、土師器は模倣坏蓋、短脚高坏、長脚高坏、広口壺、長胴甕が出土している。

須恵器の坏蓋の627は色調・胎土から見て衛門坂窯産で、口径15cm代を測り口縁部は短くなり天井部の稜は明瞭で口縁端部に形骸化した面をもつ特徴からⅢ期中葉でも古い要素をもつものである。

土師器の模倣坏蓋は天井部の稜が明瞭で平な形態、短くあまり開かない垂直気味の口縁がつく628・629が出土している。最大径は14cm代近くあるのでⅡ-3期に該当すると思われる。

短脚の高坏は長く内彎した口縁でやや浅い作りとなる坏部をもつ形態の630・631が出土しており、何れもⅡ-3期に該当する。

長脚気味となる高坏の脚部632が出土している。Ⅱ-3期に該当するものか。

外反する口縁をもつ広口壺の634は、折返部が消失していることからⅡ－3期に該当するものか。

長胴甕はおそらく丸底で口縁がくの字状に開き肩がやや張るナデ調整の637と、口縁部が直立気味になる636が出土しており、前者はⅡ－3期に該当するが、後者はⅡ－4期に降る可能性もある。

以上SK60出土土器群はⅡ－4期の混入品を多少含むが、Ⅱ－3期が主体となる資料である。

SK61（後半期土師器Ⅱ－2期、第66図～第67図）

須恵器の出土はなく、土師器の模倣坏蓋・身、坏、甑が出土している。

土師器の模倣坏蓋は天井部の稜が明瞭でなく、口縁部が短く直立する638と、やや外に開いた639が出土している。最大径は14cm代近くありⅡ－2期に該当するものと思われる。

模倣坏身は口縁の立ち上がりが高く外反し深い坏部をもつ641～643と、坏部が浅くなることにより器高が低くなる644・645が出土している。最大径はいずれも14cm代近くあり前者はⅡ－2期に該当し、後者はⅡ－3期に降る可能性が高い。

坏は丸底で口縁部が外に開き深い作りになる口縁の646と、浅い作りでさらに外に開く口縁の形態となる647がある。口径はいずれも13cm代を測り、両者ともⅡ－3期に該当すると思われる。

甑は折返口縁で胴部下半が急速に内彎気味に窄まり底部にいたる形態の648が出土しており、Ⅱ－2期に該当する。

以上SK61出土土器群はⅡ－3期の混入品を多少含むが、Ⅱ－2期が主体となる一括資料である。

SK67（後半期土師器Ⅱ－4期、第67図～第68図）

須恵器の出土はなく、土師器の甑・長胴甕が出土している。

土師器の甑は単純口縁で胴部下半が少し内彎するが筒形形態となり、口径に対して底径が半分以下になる657が出土している。形態からⅡ－4期に該当する。

長胴甕はおそらく丸底で口縁が直立気味で端部を摘み上げ、肩がやや張る形態の658・659が出土している。Ⅱ－4期に該当する。

以上SK67出土土器群は、Ⅱ－4期の一括資料であると思われる。

SK79（後半期土師器Ⅱ－4期、第70図～第72図）

須恵器は小型壺（甗）が出土しており、土師器は模倣坏身、坏、高坏、小型高坏、広口壺、甑、台付甕、長胴甕が出土している。

須恵器の715は、胴部に叩き後横方向のカキメ調整の施されたもので、内面はナデ調整されており小型の壺ないし甗と思われるものである。形態から見るとⅡ期～Ⅲ期前葉に該当すると思われる。

土師器の模倣坏身は口縁が直に立ち上がり浅い坏部をもつ716と、坏部は深い口縁部の立ち上りが短い717が出土している。最大径は前者が14cm代、後者は12cm代を測る。形態、法量から見ると、前者はⅡ－3期、後者はⅡ－4期以降に降るものであろう。

坏は丸底でやや深い作りで内彎気味の口縁をもつ718と、浅い作りで外に開く口縁の719・720がある。口径はいずれも14cm代を測ることから、Ⅱ－3期に該当する。

短脚の高坏は内彎し外に開く口縁でやや浅い作りの坏部をもつ722、比較的短い脚になる723が出土している。何れもⅡ－4期に該当するものであろう。

小型の高坏の脚部725が出土している。時期は形態から見てⅢ－1期以降のものであろうか。

小型でおそらく長頸の壺と思われる726は、丸底でⅡ－1～2期に該当するものであろう。

広口壺の728が出土しており、外反度が大きい口縁部であるため、Ⅲ－1期以降に該当する可能性がある。

甑は単純口縁の733が出土している。粘土積上げ痕が観察され、口縁部の形態から見てⅡ－4期以降に該当すると思われる。

台付甕は球形胴の729・730と、脚部の731が出土している。おそらく751のような長胴甕と同形態

の直立気味の口縁部となると思われ、形態的に見て何れもⅡ－4期に該当すると思われる。

長胴甕は丸底で口縁部が直立気味に開き端部は摘み上げられ肩がやや張る形態の732・735・736と、同形態であるが口縁端部の摘み上げがなく単純に外反気味に開く口縁部形態となる734・737が出土している。いずれもⅡ－4期に該当するものである。

以上SK79出土土器群は混入品を多少含むが、Ⅱ－4期の一括資料であると思われる。

SK89（後半期土師器Ⅲ－1期、第72図～第73図）

須恵器は坏蓋、高坏、壺が出土しており、土師器は模倣坏蓋・坏身、坏、小型鉢、台付甕、長胴甕が出土している。

須恵器の坏蓋である752は、口径11cm代後半を測り口縁部に沈線が巡るが、既に小型化したものでⅢ期末葉に該当する。

無蓋の高坏の753は深い作りの坏部と形骸化した1段透になるものでⅢ期末葉、小型壺の754も体部内面に青海波を残すが、口縁部形態から見るとⅢ期末葉に該当すると思われる。

土師器の模倣坏蓋は短い口縁の立ち上で天井部との境に明瞭な段をもつ755・756と、段を持たず外に開く口縁部形態の757が出土している。口径は何れも11cm代を測り、形態、分量から見ていずれもⅢ－1期に該当するものである。模倣坏身は坏部は浅くおそらく短く口縁部の立ち上る758がある。最大径は12cm前後となるので、Ⅲ－1期に該当するものであろう。

坏は丸底で口縁は内彎せず外に開く形態で口径12cm前半代となる760～762、同形態・口径で直立気味口縁となる759、口径11cm前後～10cm代と小型化し浅い作りで口縁が外に開く形態となる763～765がある。前者の口径の12cm代のものはⅡ－4期に遡る可能性はあるものの、何れもⅢ－1期に該当するものであろう。

766は球形胴の平底ぎみの小型鉢になると思われる。Ⅲ－1期に該当するであろう。

台付甕は口縁部が大きく外反した形態の768、同口縁部形態で折り返し端部を示す脚部になる767が見られ、何れもⅢ－1期に該当する。

長胴甕は平底で口縁部が外反して開く769～771があり、何れもⅢ－1期に該当する。

以上SK89出土土器群はⅡ－4期の資料を多少含むが、Ⅲ－1期の一括資料であると思われる。

SK90（後半期土師器Ⅲ－1期、第73図～第77図）

須恵器は坏蓋・身、高坏が出土しており、土師器は模倣坏蓋・身、坏、広口壺、小型甕、把手付鍋、甑、長胴甕が出土している。

須恵器の坏蓋である775は、口径12cm前後を測り口縁部に沈線が巡り、坏身の776も最大径12cm前後を測り口縁部の立ち上がりも低くなった形態で、何れもⅢ期末葉に該当する。

無蓋高坏の777は深い作りの坏部と細身の脚部をもつ形態でⅢ期末葉に該当する。

土師器の模倣坏蓋は短い口縁の立ち上で天井部との境に明瞭な段をもつ778・779が出土しており口径は何れも11cm後半代を測り、Ⅲ－1期に該当するものである。模倣坏身は坏部は浅く短く開く口縁部の780が出土している。最大径は11cm後半代となりⅢ－1期に該当する。

坏は丸底で深い作りで内彎せず外に開く口縁で口径12前半～11cm後半cm代となる781～788、口径11cm代でやや小形化したせいか浅い作りになり外に開く口縁となる789～791がある。口径12cm代のものが気になるが、何れもⅢ－1期に該当するであろう。

広口壺はおそらく肩の張る形態で直立の口縁で平底となる793、同形態で大きく外反した口縁になる794があり、形態から見て何れもⅢ－1期に該当する。

把手付鍋は口縁部が外反し球形胴で中央に把手が付く平底形態の794～797があり、何れもⅢ－1期に該当する。

甑の792は口縁端部を内彎気味にする単純口縁の形態で、Ⅲ－1期に該当するものであろう。

長胴甕は799や805のように小さな平底で口縁部を大きく外反させ肩の張る形態になる801・806・812、同形態で口縁の外反度がさらに進み口縁端部を摘み上げるようになる800・802・803・809～811が出土している。後者のほうが新しい要素をもつものと思われるが、何れもⅢ-1期に該当するものである。直立気味の口縁の804はⅡ-4期に遡る可能性もある。

小型甕の807は短く外反した口縁部形態で、Ⅲ-1期に該当する。

小型球形胴甕は短く外反した口縁で球形胴で、ナデ調整の施された808が出土している。Ⅲ-1期に該当するものであろう。

以上SK90出土土器群は、Ⅲ-1期の良好な一括資料である。

SK93（後半期土師器Ⅱ-3期、第77図）

須恵器の出土はなく、土師器の長脚高坏・甑が出土している。

長脚高坏は坏部に稜を持ち、口縁部は外反し端部をやや摘み上げる形態、口径20cm以上を測る大型のもので、脚部は中央開き気味で裾部も大きく外反して開く形態となる。Ⅱ-3期に該当する。

土師器の甑は単純口縁で胴部下半が少し内彎するが概ね直線的に萎み口径に対して底径が半分以下になる形態の827が出土している。Ⅱ-3期に該当する。

以上SK93は、僅か2点の出土であるがⅡ-3期の一括資料であると考えられる。

SK129（後半期土師器Ⅲ-2期、第81図）

須恵器は坏蓋、坏身、土師器は坏が出土している。

須恵器の坏蓋である903は、口径11cm代を測り口縁部に形骸化した沈線が巡るが、天井は回転ヘラ削りが施されているので、Ⅲ期末葉に該当する。

904は身・蓋逆転後の平底形態の坏身で口径12cm代を測ることから、Ⅳ期後半でも新段階に該当する。

土師器の坏は906～910のように丸底で内彎せず外に開く口縁のものが多くなり口径も10cm代と小形化が進んだものが出土している。また、907のように粘土巻き上げ痕を明瞭に残すものもあり粗雑化が見られる。これらは、概ねⅢ-2期に該当するであろう。

以上SK129 出土土器群は、Ⅲ-4期のものも含むが概ねⅢ-2期に該当する資料であろう。

SX2（後半期土師器Ⅱ-1～4期、第81図～第82図）

須恵器は坏蓋・身、長脚高坏、器台、壺、甗、すり鉢、土師器は模倣坏蓋・身、坏、高坏、台付甕が出土している。

須恵器の坏蓋は918～923のように口径16～13cm代で天井部の稜がはっきりし、口縁端部に形骸化した面をもつもので、918はⅡ期、919・920は口縁端部にさらに形骸化した面をもつものでⅢ期前葉、921・922・923のように口径14cm代を測るが天井部の稜も沈線化し口縁端部の面もないⅢ期中葉の特徴を示すものが出土している。坏身については口縁部の立ち上りも小さくなり最大径13～12cm代に小型化した924が出土しており、Ⅲ期後葉に該当する。

925・926は無蓋の1段透長脚高坏？になるとと思われるもので、Ⅲ期前葉に該当すると考えられる。

927の器台は少し方向をずらした3段以上の透が穿たれ、乱れた櫛描波状文の施された脚部になると思われる。透かしの方向があまりずれていない点、脚部がかなり長脚化した形態から見るとⅡ～Ⅲ期前葉に該当すると考えられる。

その他、928は外面カキメ調整、内面粗い青海波を残す壺、929は体部に櫛描波状文の施された甗になると思われるもので、両者ともⅢ期前葉に該当するものであろうか。

なお、930のすり鉢についてはⅢ期末葉～Ⅳ期前半ないし奈良時代前葉に該当すると考えられる。

土師器の模倣坏蓋は口径15cm代の天井の稜線が明確で口縁が開く931～933が出土している。形態から見て931は天井が平であるためⅡ-1期、その他がⅡ-2期となるものと思われる。

模倣坏身は坏部が深く口縁が直立し最大径が15cm代を測る934、体部が深くやや内傾した長い口縁がつき最大径14cm代を測る935・936、体部が浅く長く内傾した口縁がつくと思われ最大径13cm代を

測る937・938が出土している。口縁の形態と法量からみると口縁部の形態が忠実に模倣されている935がⅡ-1期、口縁部の模倣がやや形骸化した934がⅡ-2期、936がⅡ-3期、口縁部が大きく内傾した937・938がⅡ-4期に降る可能性がある。

坏は口径13cm代とやや小型化したもので、口縁は内彎気味になる939・940が出土している。法量は小型化しているためⅡ-4期に該当するものであろう。

941・942は小型高坏の脚で、Ⅱ-1~2期に該当すると思われる。

943は台付甕の脚部と思われるもので、Ⅱ-3・4期に該当すると思われる。

以上SX2出土土器群はⅡ-1~4期にかけての資料が混在する資料で一括性は確認できないが、Ⅱ-2期の資料が多い。ちなみに、須恵器の器台についてはSK62(652)でも同形態になるとと思われる小破片が出土しており、Ⅲ期前葉に該当する可能性が高いと思われる。

SX5(後半期土師器Ⅱ-4・Ⅲ-2期、第82図~第84図)

須恵器は坏蓋・身、瓶、埴、壺、土師器は坏、高坏、広口壺、甑、長胴甕、甕が出土している。須恵器の坏蓋である952は、坏蓋・身逆転後の口径9cm代を測る最も小型化した段階のもので、乳頭状つまみがつく。Ⅳ期前半でも新段階に該当するものであろう。951は大型で扁平な宝珠形つまみがつく蓋で、Ⅳ期後半新段階~8世紀初頭の段階に該当するものであろう。953・954の坏身は、最大径10cm代を測ることから、Ⅳ期前半でも古段階のものであろう。956は口縁が短く直立した小型の埴、955は透もなくなり短脚化した長頸瓶の脚部になるもので、前者はⅢ期後葉、後者はⅢ期末葉に該当すると思われる。957・958の壺口縁は、Ⅲ期後~末葉に該当する特徴をもつ。

土師器の坏は959~961・963のように、丸底で浅い作り、口径も11cm代となり口縁は直立するか外に開くものとなる。960などは粘土接合痕を残すもので、粗雑な印象を受ける。962は口径が10cm代とさらに小型化したものである。これらは、概ねⅢ-1・2期に該当するものであろう。

高坏は低い脚部で大きく開く964・965があり、これらもⅢ-1期に該当すると思われる。

967~969は単純口縁となる甑である。Ⅱ-4~Ⅲ-2期に該当すると思われる。

広口壺は大型で口縁部が外反し、球形胴で平底の970・971が出土している。口縁部の外反度が強いのでⅢ-1・2期に該当するものであろう。

長胴甕は平底で口縁部がくの字状に外反する972、口縁部が大きく外反するようになる973、水平に近く外反し口縁端部を摘み上げるようになる974がある。972はⅡ-4期、973はⅢ-2期、974は8世紀代に該当するものであろう。

975は口縁端部に水平な面を作り、平底の球形胴になるとと思われる形態の甕である。胎土、色調とも在地の長胴甕とは異なり、駿河東部からの搬入品である所謂駿東型甕であると思われる。なおこの資料はSD244出土の2583と同一個体になる可能性もあり、Ⅱ-4期に並行する資料と思われる。

以上SX5出土土器群はⅡ-4~Ⅲ-2期や8世紀代の資料も混在するが、Ⅱ-4期の資料をSD244からの混入品と考えると、Ⅲ-2期の資料が主体を占めていると考えられる。

SX6(後半期土師器Ⅱ-3期、第84図~第86図)

須恵器は坏蓋・身、壺、土師器は模倣坏蓋・身、坏、高坏、広口壺、甑、長胴甕が出土している。

須恵器の坏蓋であると思われる979~981は、螺旋回転ヘラ削りが施されているもので、口縁部は出土していないが残存部分から見てⅢ期中葉に該当すると考えられる。982~984の坏身は、最大径15~14cm代を測り、口縁の立ち上がりが短くなったもので982より983・984のほうが新しい形態を示すが、法量から見て何れもⅢ期中葉に該当すると考えられる。

985は壺ないし甕の口縁部で、端部の作りはまだ明瞭で、Ⅲ期中葉に該当すると思われる。

土師器の模倣坏蓋は天井部の稜が明確で短い口縁部をもつ987~989と、稜があまり明瞭でない986がある。986については短脚高坏の坏部の可能性もある。口径は判明したもので14cm代を測り、口縁

部の形態と法量から見ても、Ⅱ－3期に該当するものである。模倣坏身は口縁の立ち上りが短く内傾し浅い坏部をもつ991～996と、深い坏部をもつ997がある。何れも最大径15～14cm代を測るもので、形態・法量ともにⅡ－3期に該当する。

坏は丸底、やや深い作りで内彎した口縁をもつ998～1000と、外に開く口縁の1001がある。口径は12cm代も含むが14～13cm代が主体で、前者はⅡ－2期、後者はⅡ－3期に該当する。

短脚の高坏は短く開いた口縁でやや浅い作りの坏部をもち、まだ比較的長い脚になる1003～1005・1007・1009と、長めに内彎する口縁、短い脚になる新しい特徴をもつ1006・1008が出土している。前者はⅡ－3期、後者はⅡ－4期に該当する。

長脚の高坏は脚部裾が大きく開き、坏部は稜を持ち口縁が大きく開き口縁端部を摘み上げるような深い作りの1011と1012が出土している。形態から見てⅡ－3期に該当するものである。

その他1011と類似の坏部をもつ高坏ないし脚付碗の脚部と思われる、脚内部の中空度の低い1013～1015が出土しており、これらはⅡ－4期～Ⅲ－1期に降る可能性がある。

広口壺の1016は大きく外反した折返口縁の形態をなすため、Ⅱ－1・2期に該当するもの、1022は把手付鍋の高台部になると思われるが、該当時期は分からない。

甗は折返口縁の1018～1021が出土しており、これらはⅡ－2期に該当する。

長胴甕は口縁部しか出土していないが、直立気味にくの字状に外反し端部の摘み上げない1023～1024・1026・1027と、直立気味の口縁で端部に摘み上げのある1025・1029、水平気味に大きく外反し口縁端部を摘み上げる1028・1030～1033が出土している。くの字状口縁はⅡ－3期、直立気味口縁甕はⅡ－4期、水平気味の口縁甕はⅢ－1期に該当するものであろう。1017の籠目のある土器は、Ⅱ－1・2期に該当する長胴甕の底部と思われる。

以上SX6出土土器群は広口壺や甗にⅡ－1・2期の資料が混入するが、おおむねⅡ－3期が主体を占める資料であると思われる。

SD66（後半期土師器Ⅲ－1・2期、第86図～第87図）

須恵器は坏蓋・身、土師器は坏、高坏、広口壺、台付甕が出土している。

須恵器の坏蓋である1056～1059は口径11cm代を測るもので、形骸化した沈線をもつ1056～1058と沈線がなくなった1059がある。何れもⅢ期末葉段階に該当する。口径10cm代と小型化した1060は天井部の調整もなく、Ⅳ期前半でも古段階に該当する。1061・1062の坏身は、最大径10cm代と小型化したもので、Ⅳ期前半でも古段階のものであろう。1063はⅣ期前葉の平底坏身と思われる。

土師器の坏は1064の1点だけ出土している。丸底で浅い作り口縁は外に開く形態で口径も10cm代と小型化したもので、Ⅲ－2期に該当するものであろう。

短脚高坏の1065は比較的深い作りの坏部であるが、短く外に内彎させて開く口縁となるもので、Ⅱ－3期に該当すると思われる。

広口壺は口縁部が外反する1067が出土しておりⅢ－1・2期に該当するものと思われる。

台付甕は口縁部が大きく外反しやや肩の張る形態の1066が出土している。胴部と口縁部の形態はⅢ－1・2期に該当するものであるが、脚の形態は古い型式でありⅡ－4期の別個体の可能性もある。

以上SD66出土土器群はⅡ－4期～Ⅲ－2期の資料が混在するが、Ⅲ－1・2期の製品が主体を占める資料であると思われる。

SD73（後半期土師器Ⅱ－3～Ⅲ－1期、第87図～第89図）

須恵器は坏蓋・身、甗、壺、甕、土師器は模倣坏蓋・身、坏、高坏、広口壺、直口壺、甗、長胴甕が出土している。

須恵器の坏蓋である1075は口径14cm代で天井部に明瞭な段をもち口縁部も比較的長く外に開く特徴がありⅢ期前葉、1076は口径12cm代で天井部に沈線が巡るものでⅢ期後葉、1077は口径11cm代でⅢ期

末葉、1078は口径9cm代でⅣ期前葉でも新段階に該当する。坏身の1079は最大径13cm代でⅢ期中葉、1080・1081は最大径12cm代でⅢ期後葉、1082は最大径9cm代で最も小型化したⅣ期前半でも新段階に該当する。なお、1082は坏部が浅く蓋・身が逆転した坏蓋になる可能性もある。

1083の甗は肩の張る形態から、Ⅳ期前半に該当すると思われる。

1084の壺口縁と、1085の内面青海波文を残す甕についてはⅢ期後～末葉に該当すると思われる。

土師器の模倣坏蓋は天井部の稜が明確で短い口縁部をもつ1086・1088と、あまり稜が明瞭でない1087がある。口径は判明したもので13～12cm代が主体で、口縁部形態と法量から見て何れもⅡ－4期に該当すると思われる。模倣坏身は口縁の内傾度が小さくなり立ち上がりも短く浅い坏部をもつ1091～1093と、深い坏部で直立気味の口縁となる1089・1090が出土している。1089と1090は蓋になる可能性もある。最大径は1089～1091は13cm代、1092・1093は12cm代を測るもので、口縁部形態と法量から見て前者はⅡ－3期、後者はⅡ－4期に該当する。

坏は丸底のやや深い作りで直立した口縁をもつ1094と、深い作りで外に開く口縁の1095～1098がある。口径はいずれも10～9cm代を測りⅢ－1・2期に該当すると思われる。

短脚の高坏は短く内彎した口縁で深い坏部をもつ1099、長く内彎した口縁でやや浅い作りの坏部の1100、比較的脚の長い1102、脚が短くなった1101が出土している。1099・1102はⅡ－3期、1100・1101はⅡ－4期に該当する。

長脚の高坏は脚部裾が少し開く1107・1108が出土している。Ⅱ－3期に該当するものだろう。

1106高坏脚部は低脚化したもので、Ⅲ－1期に降るものであろう。

1109・1110は大型の広口壺の口縁部で、1109は直立気味の口縁部をもつのでⅡ－4期、1110は外反口縁となるためⅢ－1期に該当すると思われる。また、1111は直立口縁壺の口縁部と、くの字状に外反した球形胴の壺になるとと思われる1115は、前者はⅡ－1・2期、後者はⅢ－1期に該当するものであろうか。

1112～1114の甗は筒状に直線的に開く単純口縁の形態で、直線的に開く1112はⅡ－4期、内彎傾向のある1113はⅢ－1期に該当するものであろうか。

1116は口縁部が短く外反する平底の小型甕で、Ⅲ－1期に該当する。

長胴甕でくの字状に開く口縁の1117・1119・1122はⅡ－3期、直立気味に開く口縁の1118・1123・1126はⅡ－4期、口縁部が水平気味に大きく外反する口縁の1120・1124はⅢ－1期、水平口縁で口縁端部を摘み上げる1125は8世紀代に該当すると思われる。

以上SD73出土土器群はⅡ－2～Ⅲ－3期と8世紀代のものまで含むが、Ⅱ－3～Ⅲ－1期が主体となる時期の資料と思われる。

SD80（後半期土師器Ⅱ－3～Ⅲ－1期、第90図～第110図）

須恵器は坏蓋・身、埴、高坏、高坏蓋、甗、長頸瓶、壺蓋、平瓶、提瓶、横瓶、広口壺、甕、土師器は模倣坏蓋・身、坏、小型鉢、高坏、脚付鉢、長頸壺、壺、広口壺、把手付鍋、甗、小型甕、長胴甕、台付甕が出土している。

須恵器の坏蓋である1133～1135は口径15～14cm代で天井部に明瞭な段をもち口縁端部に形骸化した段をもつものでⅡ期、1136・1137は口径15cm代で口縁端部は丸くおさめるものでⅢ期前葉、1138～1142は口径13～12cm代で天井部に沈線が巡るものが多くⅢ期後葉、1143～1147・1151は口径11cm代でⅢ期末葉、1148・1149・1152～1154は口径10cm代でⅣ期前半でも古段階に該当すると思われる。なお、天井部の破片のうち1156～1161は口径の大きいものでⅡ期ないしⅢ期前葉、1162～1170はⅢ期後葉、1171～1183はⅢ期末葉～Ⅳ期前半の古段階に該当すると思われる。坏身の1184～1188は最大径15～14cm代で口縁部を丸くおさめるのでⅢ期前葉、1190・1191は最大径14cm代で口縁の立ち上がりが短く外反するⅢ期中葉、1189・1192～1198は最大径12cm代でⅢ期後葉、1199・1200・1203～

1212・1214～1225・1227は最大径11cm代でⅢ期末葉、1226・1228・1229は最大径10cm代でⅣ期前半の古段階のものであろう。なお、1213は口径が11cm代でⅢ期末葉段階とも思われるが、口縁の立ち上りが高い形態で胎土・色調から見ると衛門坂或は東遠江産の可能性が高い製品で、Ⅲ期前葉に編年される可能性もある。

1230は口縁部が直立した埜で、肩の張り方が少ないのでⅢ期末葉に該当すると思われる。

1231は中央部を窪ませたつまみがつく短脚の有蓋高坏の蓋で、Ⅲ期前葉に該当するものか。1232・1234は何れも2段透の高坏であるが、1234はⅢ期中～後葉、1232はⅢ期末葉に該当すると思われる。1233は半円形の坏部で透の無い脚部をもつ形態の高坏で、坏部が深いのでⅢ期末葉段階に該当する。

1235の甕は注口部が張り出すものの、体部が丸く頸部も長めの形態になるのでⅢ期末葉、1236の張り出した注口で肩の張る胴部形態と、1237も短く変化した頸部形態になるものは、何れもⅣ期前半に該当するものであろう。

1240・1241は長頸瓶の口縁部と思われるもので、1240は波状文が施文されⅢ期前葉、1241はⅢ期後葉以降に該当するであろう。1238は長頸瓶の蓋でⅢ期末葉～Ⅳ期前半に該当する。1247は高台付の長頸瓶の底部で奈良時代前葉に該当するものである。1239と1246の平瓶は、小型で肩の張る形態の1239はⅣ期前半、大型の1246はⅢ期中～後葉に該当するものと思われる。1245はフラスコ瓶の底部と思われるものでⅣ期に該当するものであろうか。広口壺の1243は衛門坂産或は東遠江産の肩の張る形態で、Ⅲ期前～中葉に該当すると思われる。1248・1249の提瓶は扁平な胴部形態で、1249は輪の把手と胴部に回転カキメが施され何れもⅢ期後葉に該当すると思われる。1250はカキメ調整の施された横瓶で比較的古い形態となるが、Ⅲ期中～後葉に該当するものであろう。1251の大型壺は内面底部ナデ調整が施され、外面疑似格子目叩き後にカキメ調整が施されⅡ期～Ⅲ期前葉以前に該当しそうである。

土師器の模倣坏蓋は天井部の稜をあまり明確に作り出さず口縁部が外に開く1252～1258・1261・1272・1274～1277・1279・1281～1284、同じ形態で口縁部が直に下がる1259・1260・1262～1271・1273・1278・1280にわけられる。法量から見ると口径14～13cm代になる大型の1283・1284、口径12cm代になる中型の1258・1271～1282、口径11～10cm代になる小型の1252～1257・1263・1264にわけられる。法量だけでなく形態から見ても大型はⅡ－3期、中型はⅡ－4期、小型はⅢ－1期にそれぞれ該当すると思われる。模倣坏身は丸底で口縁部の立ち上りは短く最大径も13～12cm代の1286～1289・1291と、口縁部の立ち上りが比較的長く作り出され最大径も15～14cm代を測る1290・1292～1295がある。前者はⅡ－4～Ⅲ－1期、後者のうち1292・1294・1295はⅡ－3期に該当すると思われる。また、口縁部を忠実に模倣している1292はⅡ－1期、口縁部の立ち上りが高い1291はⅡ－2期に該当する可能性が高い。

坏はいずれも丸底で口縁部は直立ないし外に開く形態のものがほとんどで内彎するものはない。口径で分類すると、14～13cm代を測る1297・1298・1300・1301・1349、12cm代を測る1302～1304・1306～1309・1312～1317・1329・1331・1334・1336・1339～1345・1347・1348・1364・1375、11cm代を測る1299・1305・1318～1328・1330・1332・1333・1335・1337・1350～1363・1365～1374・1376～1383・1385・1387・1390・1391・1394～1402・1404～1407・1409・1414～1419・1424・1426、10cm代を測る1384・1388・1389・1392・1393・1403・1408・1410～1413・1420～1423・1425・1427、9cm代を測る1428～1431となる。何れも口径の割に深めのものが多く、おそらく13cm代のものがⅡ－3期、12～11cm代のものがⅡ－4期、10～9cm代のものがⅢ－1期に該当すると思われる。

小型鉢は器高が低く大型坏にも見える1432、平底気味で体部は直線的、器高も低い形態の1433・1434、体部が内彎し器高も高い平底気味の1435・1436・1440、口縁が開く1440、1435と同形態で平底となる1442、丸底で体部は直線的で口縁部を作り出す1439、丸底で体部が内彎し口縁部を作り出す1437・

1438・1441がある。丸底のものがⅡ－4期、平底気味のものがⅢ－1期に該当すると思われる。

短脚高坏は短く内彎した口縁をなし深めの内彎する坏部をもち高い脚部をもつ形態である1451・1460・1467と、浅い作りで直線的な坏部、より短くなった脚部の形態の1446～1450・1452～1459・1461～1466の2種類がある。前者はⅡ－3期、後者はⅡ－4期に該当する。

有蓋の短脚高坏と思われるものがある。脚が長い1443と、短めの脚になる1444・1445の2種類が認められたが、坏部の形態は変わらないのでどちらもⅡ－4期に該当するものであろう。

長脚高坏は口径が20～17cmで坏部に明瞭な稜をもち高い脚の1468・1471～1475・1480・1481・1491～1495と、小型化した1468・1470・1484がある。前者がⅡ－3期、後者がⅡ－4期に該当する。

他に長脚高坏の器高が小さくなったようなもので、稜が比較的明確でなくなり口径も16～18cm代と小さくなりあまり高い脚のつかない1469と受口状の口縁になる1476、これらの脚部になると思われる1485～1490・1496～1499がある。何れもⅢ－1期に該当すると思われる。1482・1483については前半期土師器Ⅳ期に遡るものであろう。

1477～1479は内彎した胴部形態の小型鉢に脚を付けた脚付鉢がある。口縁部を作り出す1478・1479と、作り出さない1477があるが、何れもⅡ－4期に該当するものであろう。

広口壺は小型で肩の張らない球形胴、丸底の形態で口縁が直立気味になる1503～1505、大型の球形胴で口縁が外反する1507～1509、肩の張る形態で大きな外反口縁の1510・1511がある。球形胴の1503～1505・1057～1509がⅡ－4期、肩の張る形態の1510・1511はⅢ－1期に該当する。

把手付鍋の1512は口縁部が直立気味、肩の張らない形態となることから、Ⅱ－4期に該当する。1513は肩の張る形態になりそうでⅢ－1期に該当するものであろうか。

1502は横瓶の形態を模したような特殊な壺であり、Ⅱ－4期に該当するものであろう。1501は球形胴の薄手の長頸壺で前半期土師器Ⅱ期古段階、1500の折返口縁の広口壺はⅡ－1・2期に該当する。

1514・1515の甗は筒状に直線的に開く単純口縁、胴部下半も直線的に窄まる形態で、口径に対して底径が半分以下になる形態から何れもⅡ－4期に該当する。他は全体形は分からないので時期決定できないが、胴部下半が彎曲して窄まる1521はⅡ－3期、他の多くはⅡ－4期に該当すると考えられる。1524の底部に刺突による穿孔のある甗は、Ⅱ－3・4期に該当する小型甗であろうか。

長胴甗は直立気味に外反し端部を摘み上げる口縁部で丸底、胴部中央に最大径のある形態になる1532・1533・1535はⅡ－4期、水平気味に大きく外反し端部を摘み上げる口縁部、最大径が胴部中央より上になる形態で平底の1534・1536はⅢ－1期に該当する。

台付甗は端部を折り返さない厚手の台部の1537・1538・1541はⅡ－3・4期、台部端部を折り返し薄手の1539・1540はⅢ－1期に該当する。

短く外反する口縁部をもつ小型甗1530はⅢ－1期、1531の直立口縁の小型甗はⅡ－4期、1506の平底甗の底部は胎土から見て駿河東部から搬入された駿東型甗でⅡ－4期に並行するものである。

以上SD80出土土器群は、Ⅱ－1～4期・Ⅲ－1期の多時期にわたる資料を含むが、Ⅱ－4とⅢ－1期が主体的で特にⅡ－4期の資料が多い。Ⅲ－2期以降の資料は、少量の混入品と思われるものを除いてほとんど含まれていない。

SD126（後半期土師器Ⅱ－4・Ⅲ－1・2期、第113図～第114図）

須恵器は坏蓋・身、すり鉢、壺、土師器は模倣坏蓋、坏、高坏、壺、広口壺、長胴甗が出土している。

須恵器の坏蓋である1597はおそらく口径15～14cm代で天井部に明瞭な段をもち口縁端部は丸くおさめるものでⅢ期前葉、1598は口径12cm代で天井部に沈線を巡らせたものでⅢ期後葉、1599は口径11cm代でⅢ期末葉、1600は口径10cm代でⅣ期前半でも古段階、1601・1602は口径9cm代となりⅣ期前半でも新段階に該当する。坏身の1603は最大径15～14cm代で口縁部を丸くおさめるものでⅢ期前葉、1604は最大径13cm代で口縁が短く外反するⅢ期後葉、1605は最大径11cm代でⅢ期末葉、1606・1608

は最大径10cm代でⅣ期前半の古段階、1607は口径9cm代となりⅣ期前半でも新段階に該当する。

1609はすり鉢で、破片資料であるがⅢ期末葉～Ⅳ期あるいは奈良時代に該当すると思われる。

1610は口縁の折り返しが明確でない壺でⅢ期後葉～Ⅳ期に該当するものであるか。

土師器の模倣坏蓋は1611の天井部の稜をあまり明確に作り出さず口縁部が外に開き口径12cm代のものがあり、Ⅱ－4期に該当する。

坏はいずれも丸底で口縁部は直立ないし外に開く形態のものがほとんどで内彎するものはない。口径で分類すると、12cm代を測る1612・1614、11cm代を測る1613があり、前者はⅡ－4期、後者はⅢ－1期に該当すると思われる。

短脚の高坏は短く内彎し大きく開く口縁をもち、浅い作りの直線的な坏部でより短い脚部をもつ1616～1622がある。Ⅱ－4期に該当する。

有蓋の短脚高坏の1615は短く直立する口縁部をもち、Ⅱ－4期に該当すると思われる。

壺は受口状口縁になる1623があるが、これは前半期土師器Ⅳ期に該当しそうなものである。

広口壺になる1624は口縁が大きく外反し肩の張る形態になりそうなもので、Ⅲ－1期に該当すると考えられる。1625・1626は球形胴の把手付鍋の口縁部になりそうなもので、口縁部が大きく外反することからⅢ－1期に該当すると思われる。

長胴甕となる1627は口縁部が外反し端部を摘み上げるもので、Ⅲ－1期に該当する特徴である。

以上SD126 出土土器群は、Ⅱ－2・4期・Ⅲ－1・2期のものを含むが、Ⅱ－4とⅢ－1期が主体で特にⅡ－4期の資料が多い。SD80と同時期に利用されⅢ－2期に埋没した遺構と考えられる。

SD140（後半期土師器Ⅲ－2期、第115図～第116図）

須恵器は坏蓋・身、高坏、提瓶、土師器は模倣坏蓋・身、坏、高坏、広口壺、長胴甕が出土している。

須恵器の坏蓋である1665～1668は口径11～10cm代でⅣ期前葉でも古段階に該当するものである。坏身の1669は最大径10cm代でⅣ期前半の古段階、1670は口径9cm代となりⅣ期前葉でも新段階、1671は口径10cm代となる坏蓋・身逆転後のものでⅣ期前葉でも新段階に該当するものである。

1672・1673は半円形の坏部で透のない脚をもつ高坏で外反しない口縁と深い坏部の1672はⅢ期末葉、短くなった脚らしい1673はⅣ期前葉に該当するものであろう。

1674の提瓶は鉤状の把手付きで口縁部に波状文を施し、Ⅲ期後葉に該当すると思われる。

土師器の模倣坏蓋は1675の天井部の稜をあまり明確に作り出さず口縁部が外に開き口径11cm代のものがあり、Ⅱ－4ないしⅢ－1期に該当すると思われる。

模倣坏身も1676の口縁部が短く立ち上がる最大径11cm代のやや小型したものがあり、Ⅱ－4ないしⅢ－1期に該当すると思われる。

坏はいずれも丸底で口縁部は直立ないし外に開く形態のものがほとんどで内彎するものはない。口径で分類すると、10cm代を測る1677・1678・1682、9cm代を測る1679・1680・1683があり、前者はⅢ－1期、後者はⅢ－2期段階に該当するものと思われる。

高坏は脚部の短くなり坏部の稜線もあまりはっきりしなくなった形態の1684があり、Ⅲ－1期に該当すると思われる。

広口壺は球形胴の1685と口縁が大きく外反する1686があり、前者はⅡ－4期、後者はⅢ－1・2期に該当するものであろう。

長胴甕となる1688は口縁部が直立するもので、Ⅱ－4期に該当する。

以上SD140出土土器群は、Ⅱ－4期～Ⅲ－1・2期のものを含むが、Ⅲ－2期が主体であると考えられる資料である。

SD148（後半期土師器Ⅱ－3・4・Ⅲ－1期、第116 図～第141図）

SD148は幅広の自然流路のため途中で調査区域外に出ることから土器出土地点が南北に分断され

ており、第116 図1694～第134 図2047が調査区南半部分、第134 図2048～第141 図2229が調査区北半部分の出土である。ほぼ同じ時期に該当するものが出土しているので両地点を合わせて報告する。

須恵器は坏蓋・身、高坏、甕、長頸瓶、同蓋、平瓶、提瓶、横瓶、広口壺、すり鉢、甕、土師器は模倣坏蓋・身、坏、小型鉢、高坏、脚付鉢、壺、広口壺、把手付鍋、甑、小型甕、長胴甕、台付甕が出土している。

須恵器の坏蓋である1695・1737は口径15～14cm代で天井部に明瞭な段をもち口縁端部に形骸化した段をもつものでⅡ期、1738は口径14cm代で口縁端部は丸くおさめるものでⅢ期前葉、1697は口径14cm代で天井は低くなり口縁部の段も沈線化したものでⅢ期中葉、1696・1698・1699・1738・2154・2157・2158は口径13～12cm代で天井部に沈線が巡るものや無いものがありⅢ期後葉、1700・1701・1706・1744は口径11cm代でⅢ期末葉、1702～1705・1707・1708・1745・1746は口径10cm代でⅣ期前葉でも古段階に該当すると思われる。なお、天井部の破片のうち1740～1742・2155・2156は口径の大きいものと思われⅡ期ないしⅢ期前葉、1709・1743はⅢ期後葉、1710はⅢ期末葉ないしⅣ期前半の古段階に該当すると思われる。

坏身の2160はおそらく最大径15～14cm代で口縁部に形骸的な面をもつものでⅡ期、1747・1748・2161・2162は最大径15～13cm代で口縁部を丸くおさめるものでⅢ期前葉、1751・2165は最大径14cm代で口縁が短く外反するⅢ期中葉、1711～1716・1718・1719・1752・1753～1755・2163は最大径13～12cm代でⅢ期後葉、1717・1720・1756・2164・2166は最大径11cm代でⅢ期末葉、1722・1757は最大径10cm代でⅣ期前半でも古段階、1721は最大径9cm代でⅣ期前半でも新段階のものであろう。2167は口径19cm代の大型坏であるが、口縁部形態から見るとⅢ期後葉の可能性が高いと思われる。2170は底部が高台よりも張り出す8世紀初頭に編年される高台坏身であり混入品であらう。

1760はおそらく坏部に羽状刺突文が施された長脚1段透の高坏でⅢ期前葉、1758・1759は口径14cm代になる2段透の高坏でどちらもⅢ期中葉に該当すると思われる。1723・2168は半球状坏部を有する高坏で深めの坏部になる2168はⅢ期末葉、浅めの坏部をもつ1723はⅣ期前半であらう。2169は短脚高坏の脚部でⅢ期末葉～Ⅳ期に該当するものか。1724は盥で脚付かどうか分からない。Ⅲ期末葉のものか。

1733のすり鉢は叩き目調整を残すものでⅢ期末～Ⅳ期前半に該当すると思われる。

甕は注口部の形態は分からないものがほとんどであるが、2171は体部にカキメが施され下半はナデ調整で形態的にはⅢ期中葉、1762は底部調整にナデ調整が施され球形胴でⅢ期後葉、1763は色調と肩の張る形態に変化しているのでⅣ期段階に該当するものであろう。

1728・1729・1731・1764・1766・2173は長頸瓶と思われるものであり、いずれも色調や肩の張る形態からⅢ期末葉～Ⅳ期前半に該当するものと思われる。1725の長頸瓶の蓋もⅢ期末葉～Ⅳ期前半に該当すると思われる。1730は衛門坂窯産の丸底でカキメの施された瓶であるが、形態的に見て横瓶になる可能性もある。また、2172も衛門坂窯産と思われる広口瓶？で肩の張る形態から1730とともにⅢ期前～中葉に該当すると思われる。1732は肩の張る広口壺でⅣ期～奈良時代前葉に見られる形態である。1761の提瓶は扁平な胴部形態で輪状把手が付きⅢ期中葉に該当すると思われる。2174はカキメ調整が体部上半に施される壺でⅢ期前～中葉、1765の広口壺も口縁部形態からⅢ期前～中葉に該当しそうである。

1727・1735・1736・2179～2181・2183の衛門坂窯産と思われる甕破片はⅢ期前～中葉、1767・2175・2177・2182の湖西産と思われる叩目が浅く内面ナデ整形のものはⅣ期に降るとと思われる。

土師器の模倣坏蓋は天井部の稜を明確に作り出し口縁部が直に下がる2184、天井部の稜をあまり明確に作り出さず口縁部が外に開く1770～1772・1776・2048・2051・2185～2188、同じ形態で口縁部が直に下がる1773～1775・2049・2050・2052・2189・2190にわけられる。ただし、1776・2049・2050は口縁部の作り出しが明確でなく、無蓋の坏身になる可能性が高い。法量では口径11～10cm

代で小型の1773・1776・2052・2189はⅢ－1期、口径12cm代で中型の1772～1775・2050・2189はⅡ－4期、口径15～13cm代で大型の1770・1771・2048・2049・2051・2184～2188のうち2184・2185はⅡ－2期、その他はⅡ－3期に該当すると思われる。

模倣坏身は丸底で口縁部の立ち上りは短く最大径も10cm代で小型の1783はⅢ－1期、同形態で最大径も12cm代の中型となる1779～1781・2054・2056・2057・2195・2197はⅡ－4期、口縁部の立ち上がりが比較的長く作り出され最大径も13～14cm代を測る大型の1777・1778・1782・2053・2055・2191・2192・2194・2196のうち比較的口縁部の作りがしっかりしている2053・2054はⅡ－1期、少し崩れた1777・1778・2154はⅡ－2期、それ以外の大型品はⅡ－3期に該当するであろう。2193は内外面とも赤彩されている坏で、形態・胎土から見て駿河西部地域の搬入品と思われ、口径から判断するとⅡ－4期ぐらいに伴うものであろう。

坏はいずれも丸底で口縁部は直立ないし外に開く形態のものがほとんどであるが、1785・2198は口径14cm代で口縁部が内彎する形態でⅡ－1・2期に該当すると考えられる。内彎しないものを口径で分類すると、14cm代を測る2058・2229、13cm代を測る1784・1786・1788・1790・2059・2060・2062・2063・2199、12cm代を測る1789・1792・1793・1818・2061・2064・2200、11cm代を測る1791・1794・1796～1801・1804・1806・1808・1810・1811・1814・1816・1819・1822・1823・1827～1829・1832・1839・1844・2065・2066・2068～2070・2201～2203・2205～2207・2213・2215～2218、10cm代を測る1795・1805・1807・1809・1812・1813・1815・1817・1821・1824～1826・1830・1831・1833～1838・1840～1843・1845・2067・2219・2222～2224・2226～2228、9cm代を測る2072・2073・2221・2225となる。何れも口径の割に深めの形態のものが多く、おそらく14～13cm代がⅡ－3期、12～11cm代がⅡ－4期、10～9cm代がⅢ－1・2期に該当すると思われる。これ以外にも平底で直立した口縁、深めの形態をなした口径13～11cmを測る平底の1847・1848の坏と、2075・2076のような丸底のコップ状坏がある。前者はⅢ－1期、後者はⅡ－4期に該当するものであろう。1846は口径11cm代で平底の木葉痕が見られる底部で内部調整にハケメを残す坏で、胎土・色調とも異質な土器である。駿河西部からの搬入品であろうか。

小型鉢については口縁部を摘み出し体部が内彎し球形胴で丸底となるであろう1855・1858・1859、体部の内彎度が弱くなり平底気味になる1851～1854・1856・1857・1861～1864があり、前者はⅡ－4、後者はⅢ－1期に該当すると思われる。底部に籠目痕のつく1962は大型の鉢ないし壺となるもので、Ⅱ－1期に該当すると思われる。

短脚高坏は短く内彎した口縁で深めで内彎形態の坏部でやや高い脚部の1866・1867・1874～1876・1879・1880・2079、より外に開く内彎した口縁でやや浅い作りの坏部、より短く外に開いた脚をもつ1865・1868～1873・1877・1878・1881・1889・2077・2078の2種類がある。前者はⅡ－3期、後者はⅡ－4期に該当する。

長脚高坏は口径が20～19cmで坏部に明瞭な稜があり高い脚をもつ大型の1903・1905～1910・1915・1916・2088と、脚がより短くなり坏部の口径も15cm内外に小型化した1904・1911・1917～1924・2089～2091がある。前者はⅡ－3期、後者はⅡ－4期に該当すると思われる。

稜が比較的明確でなくなった坏部で口径も15～14cm代と小さくなりあまり高い脚のつかない1925～1933・1937～1950・2092～2101の高坏がある。何れもⅢ－1期に該当すると思われる。

2086・2087の小型鉢に脚を付けた脚付鉢がある。いずれも体部は内彎し口縁部を作り出すもので、どちらもⅡ－4期に該当するものであろう。

広口壺は口縁が直立気味で肩の張らない形態になるとと思われる1966・1967・1973・1980・1982・1987、口縁が外に大きく外反し肩の張る形態になるとと思われる1964・1965・1968・1969・1970・1975・1976～1979・1991・2103・2104・2106がある。前者がⅡ－4期、後者がⅢ－1期に該当する。

短く直立する口縁の1972・1983はⅡ-1・2期に遡る資料かも知れない。ほかに折返口縁の広口壺の1951・1952・2102と、直頸壺の1954もⅡ-1・2期に該当する。1953は前半期土師器Ⅲ～Ⅳ期の小型埴に該当する。口縁部摘み上げ球形胴の広口壺の1957は、Ⅱ-4期に該当するものであろう。

小型の把手付鍋と思われる1956は、Ⅱ-4～Ⅲ-1期に該当するであろう。

甑は筒状に直線的に開く単純口縁の形態で、口径に対して底径が半分以下になる1992・2002と、口径に対して底径が増し半分以上になる1993・1996・2001の2種類が認められる。前者がⅡ-4期、後者がⅢ-1期に該当する。

長胴甕はくの字状口縁で底部に籠目痕が見られる丸底形態の2014・2015・2108・2109・2119・2122はⅡ-1・2期、直立気味に外反し口縁端部を摘み上げる胴部中央に最大径のある丸底形態の1974・1984・1985・2009・2010・2016～2018・2114・2115・2120～2123・2125・2126・2132はⅡ-4期、口縁部が水平気味に外反し胴部も最大径が中央より上にある平底形態の2008・2011・2012・2013・2020～2024・2111～2113・2116～2118・2124・2128・2129はⅢ-1期に該当する。

台付甕は台部端部を折り返し大きく外反した口縁をもつ形態の2025～2027・2130は、Ⅲ-1期に該当するものであろう。

他に短く外反する小型甕2005・2007はⅢ-1期に該当する。2127はくの字の外反口縁の台付甕で前半期土師器Ⅱ期に該当する。

以上SD148 出土土器群は、Ⅱ-1～Ⅲ-1期と多時期にわたる資料を含むが、Ⅱ-3～Ⅲ-1期が主体で特にⅡ-4期の資料が中心となる。Ⅲ-2期以降は埋没したと考えられる遺構である。

SD202（後半期土師器Ⅲ-1期、第143図～第145図）

SD202では須恵器は坏身、甗、長頸瓶、土師器は坏、鉢、壺、広口壺、甑、台付甕が出土している。

須恵器の坏身である2270・2271は最大径11cm代で口縁部も短く立ち上る形態で、Ⅲ期末葉に該当する。2272～2274の坏身は底部が高台より下に張り出す形態で、8世紀初頭段階に該当する。

2275はおそらくⅣ期前葉～8世紀初頭に該当する甗の口縁部破片と思われるものである。

2276～2279は長頸瓶の口縁部で、2276はⅣ期、2277～2279は8世紀代初頭に該当する。

土師器の坏2280～2282はいずれも丸底で口縁部は外に開く形態のもので、口径11cm代を測る2281・2282、10cm代を測る2280がある。口径に対して浅めのもが多いので、おそらく何れもⅢ-1期に該当すると思われる。

小型鉢については体部口縁部とも内彎度がなくなり平底化した形態の2283～2284があり、いずれもⅢ-1期に該当すると思われる。他に平底で口縁が直線的に開くコップ形を呈する小型鉢2286もⅢ-1期に該当すると思われる。

口縁部が内彎する長頸壺の2287は、Ⅱ-1・2期以前（前半期土師器？）に遡るものであろう。

広口壺は肩が張り平底となる2288・2290がある。Ⅲ-1期に該当すると思われる。

甑は筒状に直線的に開く単純口縁で、口径に対して底径が半分近くなる形態の2291が認められた。2292～2294も同形態になると思われ、何れもⅢ-1期に該当する。

台付甕は端部を折り返した台部の2295・2296が出土しており、Ⅲ-1期に該当する。

以上SD202出土土器群は、奈良時代資料を混入品として含むが、Ⅲ-1期が主体となる資料である。

SD205（後半期土師器Ⅱ-2期、第145図）

SD205では図化できる資料は須恵器のみで坏蓋、高坏が出土している。

須恵器の坏蓋の2300は口縁端部に形骸化した面を作り出し天井部の稜もやや不明瞭となったもので口径13cm代を測り小型化しているが天井が高く、Ⅲ期前葉新相に該当すると思われる。

2301は長脚一段透の高坏で、口縁部は外反しており坏部の稜も甘いもので、これもⅢ期前葉新相に該当するものであろう。

以上SD205 出土の2点の須恵器は、Ⅱ－2期新相に該当する資料である。

SD217（後半期土師器Ⅱ－1～4・Ⅲ－1期、第145図～第149図）

SD217では須恵器は坏蓋・身、脚付埴、高坏、甕、土師器は模倣坏身、坏、小型鉢、高坏、広口壺、甗、長胴甕、小型甕、台付甕が出土している。

須恵器の坏蓋の2302は衛門坂窯産と思われるもので、口縁端部に比較的明瞭な面を作り出すが、天井の稜は形骸化しており口径も13cm代を測るが、Ⅲ期前葉に該当するものであろう。2303は天井の稜もなくなり、口径12cm代を測るⅢ期後葉に該当する。坏身の2304は口縁部は短く立ち上がり最大径も12cm前後を測るので、Ⅲ期末葉に該当する。

脚付の埴である2305は口縁部が直立するもので、埴部の形態からⅢ期後葉に該当するであろう。

長脚2段？透の高坏の脚部と思われる2306は端部の垂下が認められ、Ⅲ期中～後葉に該当する。

2307はくの字状に大きく開く口縁部、端部の面の形成が甘いもので、内面ナデ調整の中型の甕で、Ⅲ期後～末葉に該当するものであろうか。

土師器の模倣坏身の2308は直立気味の短めの口縁部をもつが、最大径は13cm代を測るのでⅡ－3期あたりに該当するものであろう。

坏は口縁部が内彎し深めの作りで最大径13cm代を測る2310はⅡ－1・2期、口縁は開く形態で口径13cm代で深めの作りの2309はⅡ－3期、口径13～12cm代であるが浅めの作りの2311～2313はⅡ－4期に該当すると思われる。

くの字状に開く口縁部をもつ小型鉢の2315と2316は法量に大小があり、2316は底部に籠目圧痕が見られるのでともにⅡ－1・2期に該当すると思われる。

高坏は短脚の脚の高そうな2322は、Ⅱ－2・3期に該当するものであろう。

長脚高坏は口縁部は稜をもって大きく外反し口径も21～18cm代を測る大型の2317～2321・2323が出土しており、いずれもⅡ－3期に該当するものであろう。

短脚化した高坏で脚部に指頭痕を多く残す2324～2331はⅢ－1期に該当するものである。

広口壺は肩があまり張らない2332が出土している。Ⅱ－4期に該当するものであろうか。

甗は筒状に直線的に開く単純口縁で、口径に対して底径が半分以下となり、胴部下半が屈曲気味に窄まる形態である2337はⅡ－3期、底径の法量が増して口径に対して底径が半分以上を越える筒形形態の2338・2339はⅢ－1期、底の傾が大きい2341はⅡ－4期に該当するものであろう。

長胴甕はくの字状に開く口縁で最大径が胴部中央にある2348はⅡ－1期、くの字状に大きく開く口縁で最大径は胴部中央にくる丸底の2344～2347はⅡ－3期、直立気味の口縁で端部を摘み上げ最大径が胴部上半にくる丸底の2351～2353・2355・2356はⅡ－4期、口縁部が外反し平底の長胴甕2349・2350・2358と口縁端部を摘み上げる平底の長胴甕2354はⅢ－1期に該当する。

小型甕の2357はくの字状口縁で最大径が胴部中央にある丸底形態で、Ⅱ－1・2期に該当する。

台付甕は2359～2361の口縁部が大きく外反しやや肩の張る形態のものが出土しており、何れもⅢ－1期に該当すると思われる。2342はS字甕、2343は在来系の甕脚部で、何れも前半期土師器Ⅰ～Ⅱ期に該当する。

以上SD217 出土土器群は、前半期土師器やⅡ－1～Ⅲ－1期の時期幅がかなり広い資料が出土しているので、特に主体となる時期は特定できない。

SD219（後半期土師器Ⅱ－4・Ⅲ－1期、第150図～第151図）

SD219では須恵器は坏蓋・身、高坏、長頸瓶、壺蓋、広口壺、甕、土師器は模倣坏蓋、坏、小型鉢、高坏、広口壺、長胴甕、台付甕が出土している。

須恵器の坏蓋と思われる2367・2368があるが、天井部のみの破片で全体形は分からない。大きさから見てⅢ期後～末葉に該当するものであろうか。坏身の2369は高い口縁部の立ち上り端部に面を

持ち最大径は13cm代であるがⅢ期前葉、2371は口縁部は短く立ち上り最大径も12cm代を測るⅢ期後葉に該当する。2373・2374は最大径10cm代を測るⅣ期前半でも古段階、2372は最大径9cm代を測るⅣ期前半でも新段階に該当するものであろう。高台を持つ2370と口縁部が外に外反する無蓋の坏の2375は8世紀代に降る可能性が高い。

2376は透の消失した高坏の脚部と思われるが、長めの脚なので8世紀代に降る高盤の可能性もある。

2377・2378は長頸瓶の頸部でⅢ期末葉～8世紀代に該当するものであろう。2379は長頸瓶の蓋で天井部に刺突文が見られる。形態から見てⅢ期末葉～Ⅳ期前半に該当するものであろう。

2380・2381ともに広口の壺で2380はⅣ期、2381は8世紀代まで降る可能性が高い。

2382・2383は口縁部に凸帯をもつ湖西窯産の甕で8世紀代初頭まで降るものである。

土師器の模倣坏蓋の2384は直立気味の口縁部をもち天井の稜線も明確で口径も12cm代を測るので、Ⅱ－4期に該当すると思われる。

坏は口縁部が直立し深めの作りで最大径11cm代を測る2385はⅢ－1期、同形態で口径10cm代になる2386はⅢ－1・2期、浅めの作りになり口径10cm代の2387はⅢ－2期に該当すると思われる。

体部の内彎度が高く口縁部を内側に引き出したものであるが、平底気味の小型鉢である2388はⅢ－1期に該当する。

長脚になるとと思われる高坏は2389～2391が出土しており、Ⅱ－3・4期に該当するものであろう。

短脚化した高坏で指頭痕を多く残す2392～2394はⅢ－1期に該当するものであろう。

広口壺の2395・2396は、形態から見て前半期土師器Ⅱ期の混入品であろう。

長胴甕は直立気味に開く口縁で最大径が胴部中央にあると思われる2399～2401は、Ⅱ－4期に該当するものである。

台付甕は台部の小破片2402が出土している。胎土・色調から見てⅢ－1期に該当すると思われる。

以上SD219 出土土器群は、Ⅱ－4～Ⅲ－3期・8世紀の資料が出土しているが、特にⅡ－4とⅢ－1期が主体となる資料である。8世紀代の資料は上層出土のものと考えられる。

SD244（後半期土師器Ⅱ－4・Ⅲ－1期、第152図～第162図）

SD244 は上層にて奈良時代遺物、下層にて古墳時代後期の資料を多く含むため、本節では古墳時代後期の土器の記述に留め、奈良時代の遺物は後節にて記述する。SD244 では須恵器は坏蓋・身、盃、埴、高坏、甕、長頸瓶、平瓶、提瓶、広口壺、すり鉢、甑、土師器は模倣坏蓋・身、坏、小型鉢、高坏、広口壺、把手付鍋、甑、長胴甕、小型甕、甕、台付甕が出土している。

須恵器の坏蓋の2430・2526は口径10cm代を測るものでⅣ期前半の古段階、2428・2429・2431は口径9cm代を測るものでⅣ期前半の新段階に該当するものであろう。破片資料であるが2524はⅢ期中～後葉、2525はⅢ期後～末葉に該当するものであろう。2432は口径16cm代を測る大型化した坏の蓋で、Ⅳ期後葉の新段階に該当する。坏身の2529は口縁部は短く立ち上るが最大径は14cm代を測るためⅢ期中葉、最大径13～12cm代を測る2527・2528はⅢ期後葉、最大径11cm代を測る2438・2530・2531はⅢ期末葉、最大径10cm前後を測る2439・2440・2534はⅣ期前半でも新段階に該当する。2449・2450・2452は口径13～12cm代を測る坏身であるため、Ⅳ期後半でも新段階に該当するものである。

盃と思われる2532は口縁部が内傾し、形骸化した沈線が巡り脚付の所謂ウィングラス型盃と呼ばれる形態になるとと思われる。Ⅲ期末葉に該当するものであろう。

2536・2537は短く直立した口縁部をもつ小型の埴で、Ⅲ期末葉に該当するものであろう。

2454は透の無い高坏の脚部と思われ、Ⅲ期末葉に該当するものであろう。

甕は注口部が突出しないで長めの頸部がつきそうな2538が出土している。Ⅲ期後葉に該当するものであろうか。2540は注口部が観察できないものの、形態・胎土から見てⅠ期前葉（TK208）に該当する大型の甕と思われる。産地は不明（陶邑産ではない）。

長頸瓶は奈良時代のものと区別するのが難しいが、単純口縁であり開く口縁部形態とならない2457はⅢ期末～Ⅳ期前半に該当するものであろう。

平瓶は何れも肩の張る形態で明るい色調の2463～2465・2539などはⅢ期末～Ⅳ期前半に該当する。

大型の提瓶の口縁と思われる2466は胎土・色調から見て衛門坂窯産で、短く単純に開く口縁部形態となりⅢ期中葉に該当するものであろうか。

無頸の広口壺である2467～2470はⅣ期前～後半に該当するものと思われるが、同形態のものは8世紀前半代まで残存し区別がつかない。

すり鉢は口縁部に叩き目を残し口縁端部が外に開かない2541と、口縁端部が外に開く2471の2種類が出土している。前者の2541は色調から見てⅢ期末葉～Ⅳ期に該当すると思われるが、後者については8世紀代のものと区別がつかない。

甗は口径と底径の差があまりない筒形の形態になる2473が出土した。口縁部形態からみると2472も甗らしい。Ⅳ期ないし8世紀代に該当するものか。

土師器の模倣坏蓋はやや外に開く口縁部で天井も平気味になる形態ををなし口径が14～13cm代を測る2542・2543はⅡ－3期、口縁部が外に開き天井の稜線も不明確となり口径も13cm前後～12cm代を測る2545～2547はⅡ－4期、さらに口径が10cm代まで小型化した2477はⅢ期末葉まで降る時期に該当するであろう。模倣坏身の2548・2549は内傾ないし直立する短めの口縁部をもち最大径も14cm代を測るものでⅡ－3期、直立する口縁部をもち最大径12cm代の2550はⅡ－4期、口縁部の作りが形骸化し最大径も11cm代と小型化した2551はⅢ－1期に該当するものであろう。

坏は内彎口縁の2494の他は、いずれも口縁部は直立するか外に開くかの形態である。口径14～13cm代を測る2478・2495・2496はⅡ－3期、口径12cm代で深めの作りの2479・2480・2482・2552・2553はⅡ－4期、口径11cm代になる2481・2483～2489・2554はⅢ－1期、口径10～9cm代に小型化した2490～2493・2555～2557はⅢ－1・2期に該当すると思われる。2494は最大径10cm代であるが、法量の割に深い作りである形態のためⅡ－1・2期に該当するものと考えたい。

小型鉢は口縁が直線的に開き平底形態の2497は、Ⅲ－1期に該当するものであろう。坏形態の小型鉢である口径17cm代を測る2498は、Ⅱ－4～Ⅲ－1期に該当するものであろう。口縁部を短く引き出し内彎度が強い球形胴になる小型鉢の2559は、Ⅱ－4期に該当すると思われる。

小型高坏の2494は碗形の坏部をもつもので、2500と同様に前半期土師器Ⅳ期に関係したものか。

長脚高坏は脚部と思われる2501が出土しているのみで、Ⅱ－3・4期に該当する。

短脚化した高坏は指頭痕を多く残す2502・2503・2560はⅢ－1期に該当する。

広口壺は肩があまり張らず口縁部が直立気味に外反する2507～2508・2567・2568・2570はⅡ－4期、平底で肩が張り口縁部が大きく外反する平底形態の2506・2563～2566・2573と、口縁は直立するが肩の張りそうな形態の2571・2572はⅢ－1期に該当する。

把手付鍋2562は肩の張らない球形の胴部、直立した口縁部をもつ形態から、Ⅱ－4期に該当する。

甗は口縁部は直立気味であるが胴部下半が屈曲して急激に窄まる2505はⅡ－3期、筒状に開く単純口縁で口径に対して底径が半分前後になる2504はⅡ－4期に該当するものであろう。

長胴甗は短いくの字状口縁になる2569はⅡ－1期、直立気味の口縁で端部を摘み上げ最大径が胴部上半にあり丸底形態となるであろう2515～2518・2576～2578・2584～2588はⅡ－4期、口縁部が大きく外反し平底形態となるであろう2520・2521と、同形態で口縁端部を摘み上げる2519・2579・2589・2590はⅢ－1期に該当する。2582は最大径は胴部上半にあり平底形態で胴部下半の接合痕も観察されⅢ－1期の長胴甗の特徴を示すが、底部は厚く張り出す形態で口縁部の外反度も弱くⅢ－1期に出現する通常の平底甗としては異質である。丸底甗から平底甗に移行する形態の資料かも知れないが、現段階ではⅢ－1期にしておくがⅡ－4期まで遡る可能性も考えておきたい。

小型甕の2514は口縁部は短く外反した口縁、最大径が胴部上半にある平底形態で、Ⅲ－1期に該当する。

くの字状口縁で端部内面を肥厚させる球形胴の2583は所謂駿東型甕で、胎土・色調から見て駿河東部域からの搬入品の特徴を示す。Ⅱ－4期に並行関係のあるものであろう。

台付甕は台部のみ出土で、端部を折り返さない2523・2595と、端部を折り返し薄手に仕上げた2522・2596がある。前者はⅡ－3・4期、後者はⅢ－1期に該当すると思われる。

以上SD244出土土器群は、Ⅱ－1～Ⅲ－1期の時期幅の広い資料が出土しているが、特に主体となる時期はⅡ－4とⅢ－1期に特定できそうな資料である。

SD246（後半期土師器Ⅱ－4・Ⅲ－1期、第162図～第166図）

須恵器は坏蓋・身、盃、埴、長頸瓶、すり鉢、甕、土師器は模倣坏蓋・身、坏、小型鉢、高坏、広口壺、把手付鍋、小型甕、長胴甕が出土している。

須恵器の坏蓋の2611・2612は口径11cm代を測るのでⅢ期末葉、2613は口径9cm代を測るものでⅣ期前半の新段階に該当する。2614は口径16cm代を測りつまみの形態から8世紀初頭段階に該当する。坏身の2615・2616は色調・胎土から見て衛門坂窯産に類似する製品で口縁部は短く立ち上り最大径は13cm代を測るⅢ期後葉、最大径11cm代を測る2617はⅢ期末葉、最大径10～9cm前後を測る2618・2619はⅣ期後半でも新段階に該当する。2620・2621は8世紀前半代に該当する高台付身の底部である。

2622の盃は無脚で口縁部は直立し形骸化した沈線が巡る。Ⅲ期後葉に該当するものであろうか。

2623・2624は小型の埴で、2623は口縁部が内傾するもの、2624は口縁部が直立する形態である。どちらもⅢ期末葉に該当するものであろう。

長頸瓶の2625は頸部に波状文と刺突文が施されているもので、Ⅳ期に該当するものであろうか。

すり鉢の2626は直立する口縁で、色調・胎土から見て衛門坂窯ないし森町森山窯産に類似する。形態から見るとⅢ期末葉～Ⅳ期に該当すると思われるが、8世紀代の可能性もある。

甕の破片の2627～2629は外面細かな叩目内面ナデ調整で、Ⅳ期～8世紀代の湖西産甕であろう。

土師器の模倣坏蓋はやや外に開く口縁部で天井も平気味になる形態をなし口径が13cm前後を測る2630はⅡ－4期、口縁部が直立気味で天井の稜線は比較的明瞭で口径が12cm前後を測る2631はⅢ－1期に該当するであろう。模倣坏身の2632は内傾する短めの口縁部をもち最大径は13cm前後を測るものでⅡ－4期、同形態で最大径11cm代の2633はⅢ－1期に該当する。

坏は何れも口縁部は直立するか外に開くかの形態しかない。口径13cm前後を測る2634はⅡ－3期、口径11cm代になる2635はⅢ－1期に該当すると思われる。

小型鉢は平底の2636は外面刷毛目、内面ミガキ調整を施すもので胴部は球形にならない。Ⅲ－1期に該当するものであろうか。

短脚化した高坏で脚部に指頭痕を多く残す2637～2641は、Ⅲ－1期に該当するものであろう。

広口壺は平底で肩が張り口縁部が外反する2644は、Ⅲ－1期に該当するものである。丸底の2646はⅡ－4期に該当するものと思われる。

把手付鍋の2645は丸底のなで肩で直立気味の口縁部をもつ形態から、Ⅱ－4期に該当する。2643はなで肩であるが口縁部は外反する形態の把手付鍋で、Ⅲ－1期に該当する。

長胴甕は短いくの字状口縁になる2652はⅡ－3期、直立気味に開いた口縁で端部を摘み上げ最大径が胴部上半にくる丸底形態となるであろう2650・2653～2656・2660はⅡ－4期、口縁部が外反し平底形態となるであろう2659と、同形態で口縁端部を摘み上げる2657はⅢ－1期に該当する。

小型甕の2658は口縁部は直立気味に開いた口縁で端部摘み上げ最大径が胴部中央にある丸底形態であることから、Ⅱ－4期に該当する。

以上SD246出土土器群は、Ⅱ－3～Ⅲ－1期と8世紀代の時期幅の広い資料が出土しているが、特に

主体となる時期はⅡ-4とⅢ-1期に特定できそうである。8世紀代の土器も前葉を中心とするものであるが、出土量は少なく混入品と思われる。

SD248（後半期土師器Ⅱ-4・Ⅲ-1期、第166図～第168図）

SD248では須恵器は高坏、甗、長頸瓶、広口壺、土師器は鉢、高坏、広口壺、甗、長胴甕が出土している。

須恵器の高坏は透が無い高坏の脚部と思われる2682・2683は、Ⅳ期に該当する。

2684の甗は注口部が突出するがあまり肩の張らない形態で、Ⅲ期末葉に該当するであろう。

長頸瓶の2681は高台化した底部で、8世紀代まで降るものと思われる。

無頸の広口壺である2685はⅣ期に該当するか、8世紀前半代まで残存したものか区別がつかない。

土師器の小型鉢である2686は口縁部を短く引き出し内彎度が弱い球形胴になる形態で、Ⅱ-4期に該当すると思われる。

短脚の高坏は鉢形の坏部をもつもので、口縁部が直立気味で深い形態になる2687はⅡ-3期、短く内彎し大きく開く口縁部をもつ2688はⅡ-4期に該当するものである。

長脚高坏は脚部と思われる2692～2694が出土しており、Ⅱ-3・4期に該当するものであろう。

短脚化した高坏で指頭痕を多く残す2690・2691・2695～2701は、Ⅲ-1期に該当するものである。

広口壺は肩が張り口縁部が大きく外反する2702・2703は、Ⅲ-1期に該当する。

甗の2705は直立気味に立ち上がる単純口縁で胴部下半は湾曲して窄まる形態であるが、口径に対して底径が半分前後になるためⅡ-4期に該当するものである。

長胴甕は口縁部が大きく外反し平底形態となるであろう2706はⅢ-1期に該当する。

以上SD248出土土器群は、Ⅱ-3～Ⅲ-1期の時期幅の広い資料が出土しているが、特に主体となる時期はⅡ-4とⅢ-1期に特定できそうである。8世紀代の遺物は少なく、上層遺物と思われる。

SD260（後半期土師器Ⅱ-3・4・Ⅲ-1・2期、第168図～第184図）

SD260では須恵器は坏蓋・身、埴、高坏、長頸瓶、広口壺、すり鉢、甕、土師器は模倣坏蓋・身、坏、鉢、盃、高坏、広口壺、把手付鍋、甗、長胴甕、小型甕、台付甕が出土している。

須恵器の坏蓋の2710は口径13cm代を測るものでⅢ期後葉、2711～2713は口径11cm代を測るⅢ期末葉、2714～2719は口径10cm代を測るⅣ期前半でも古段階に該当する。破片資料であるが2720・2724は、Ⅲ期末葉に該当するものであろう。坏身の2722は口縁部は短く立ち上り最大径は12cm代を測るものでⅢ期後葉、最大径11cm代を測る2723～2726はⅢ期末葉、最大径10cm代を測る2727はⅣ期前半でも古段階に該当する。2728は平底の口縁部が外反する形態で口径10cm代を測り、Ⅳ期前半でも新段階に該当するものである。

2731短く直立した口縁部をもち胴部下半にカキメ調整を施した小型の埴で、Ⅲ期後葉に該当するであろう。胎土・色調から見ると衛門坂窯産に類似する。

透が無い高坏の坏部と思われる2729は口縁の外反はなく深い作りのため、Ⅲ期末葉に該当する。

2730は無蓋の小型高坏の脚部と思われるもので、Ⅳ期前半～8世紀初頭に該当するものであろうか。

長頸瓶は頸部の2732と肩の張る2734が出土している。何れもⅢ期末～Ⅳ期前半に該当する。

無頸の広口壺の底部と思われる2733が出土している。Ⅳ期に該当するものであろうか。

すり鉢は底部の2735が出土している。Ⅳ期ないし8世紀代に該当するものか。

甕は湖西窯産と思われる2736が出土している。Ⅲ期後葉～Ⅳ期に該当するものであろう。

土師器の模倣坏蓋は口縁部が外に開き天井の稜線も不明確となり口径も12cm代を測る2737・2738・と、2738のように稜線は明確で短く直立した口縁となるものがあり何れもⅡ-4期、さらに口径が11～10cmまで小型化した2739～2742はⅢ-1期に該当するであろう。模倣坏身は直立ないし内傾する口縁部をもち最大径12cm代の2743・2744はⅡ-4期、最大径が11cm代になる2745～2748はⅢ-1期に

該当する。2743は無蓋模倣坏身になる可能性がある形態である。

坏はいずれも口縁部は直立するか外に開くかの形態しかない。口径12cm代で深めの作りの2749・2769はⅡ-4期、口径11cm代になる2750~2762はⅢ-1期、口径10~9cm代に小型化した2763~2768・2770はⅢ-1・2期に該当するものと思われる。

口縁部を短く引き出し内彎度が弱い球形胴の鉢の2771・2782は、Ⅲ-1期に該当すると思われる。

把手の付いたコップ形態の2772は把手付盃に分類すべきものであろうか。Ⅲ-1期に該当する。

短脚化した高坏で脚部に指頭痕を多く残し2773の稜の付く坏部と、2774の稜の付かない坏形態の坏部のものと、短い脚部の2775~2780は、Ⅲ-1期に該当するものであろう。

広口壺は小型と大型のものが出土している。大型のものは丸底で肩が張らない球形胴で口縁部が直立気味に開く2789・2796と同形態で外反口縁の2787はⅡ-4期、平底で長胴、直立気味の口縁となる2785・2794・2795と、平底で肩が張る胴で口縁部が大きく外反する2788・2790と同形態で口縁が直立する2793はⅢ-1期に該当する。2786は肩の張らない球形胴で口縁部は外反する小型の広口壺形態であるが、胴部に煤が付着しているので煮沸具の丸底甕に分類でき、Ⅲ-1期に該当するものか。小型の平底壺の2783は口縁部が直立気味に開く形態で、底部に木葉痕が観察される。Ⅱ-4期に該当するものか。

把手付鍋の2791・2792は球形で把手が中央に付く胴部、外反口縁部の形態からⅡ-4期に該当する。

甕は開き気味の口縁で胴部下半が直線的に窄まり口径に対して底径が半分以下になる2799・2800・2808はⅡ-4期、筒状に開く単純口縁で口径に対して底径が半分前後になるとと思われる2797・2798・2807・2809はⅢ-1期に該当するものであろう。

長胴甕はくの字状口縁で直線的な胴部で底部が屈曲する丸底形態の2835はⅡ-3期、直立気味の口縁で端部を摘み上げ最大径が胴部上半にくる丸底形態の2811・2813~2816・2819はⅡ-4期、口縁部が大きく外反し最大径が胴部上半にくる平底形態となるであろう2812・2827・2830~2832・2834と、同形態で口縁端部を摘み上げる2817・2818・2820・2836、同形態で水平気味に近いくの字口縁の2833はⅢ-1期に該当するものである。

小型甕はⅢ-1期の長胴甕と比べると類似した形態であるが短く外反した口縁、やや開き気味の頸部になる特徴を持つ2821~2823と、Ⅲ-1期の中型の長胴甕とほぼ同形態になり口縁端部に摘み上げの無い2828・2829がある。何れもⅢ-1期に該当するものである。

台付甕は口縁部はいずれも大きく外反し胴部上半は肩の張る形態であるが、胴部下半が窄まる2840・2845と球形ないし直線的になる2841~2844の2種類がある。いずれも薄手の作りで台部の端部に折り返しがあり、Ⅲ-1期に該当するものである。台付甕の台部と思われる厚手のハの字型に開く2781は、小さく端部を折り返すが形態から見てⅡ-4期に遡るとと思われる。

以上SD260 出土土器群は、Ⅱ-3~Ⅲ-1期の時期幅の広い資料が出土しているが、特に主体となる時期はⅡ-4とⅢ-1期に特定できそうであり、おそらくSD246・248 など同時期に機能しており、Ⅲ-2期になると機能を停止し埋没した遺構である可能性が高い。

埴輪（第20図）

253・254の埴輪は、江戸時代の遺構であるSD185から出土したものである。

焼成から見てあな窯焼成のものでM字状のタガが付くが、表面の調整は摩滅してよく分からない。特徴から見ると隣接遺跡である原川遺跡で確認された6世紀前葉に該当する原川古墳の埴輪に類似するようだ（静岡県埋蔵文化財調査研究所 1989）。付近に原川古墳と時期の近い古墳が存在していた可能性があるのだろうか。

第3節 奈良時代の土器（第41図～第189図・第203図・第204図）

今回の調査地点からは遺構出土の奈良時代土器は非常に少なく、僅かにSE3～5・19などの井戸状遺構を中心として出土している。遺物量こそ少ないが、井戸を中心として掘立柱建物群、畑遺構に関係したものも見られるため、本節でも個別の遺構毎に記述を進めたい。なお編年の目安は本地域の編年案が提示されていないこと、本調査地点では編年に使えそうな奈良時代の土器が非常に少ないため、概ね後藤健一氏の湖西窯須恵器編年（後藤健一 1983）との対比のなかで、奈良時代前葉（8世紀初頭～前葉＝後藤編年Ⅴ期）、奈良時代中葉（8世紀中葉＝後藤編年Ⅵ期1・2）、奈良時代後葉（8世紀後葉＝後藤編年Ⅵ期3・4）の3時期区分として記述を進めたい。

SH13（中葉段階、第43図）

SH13からは須恵器として坏蓋・身、坏、土師器として坏身、皿、高盤、長胴甕が出土している。

須恵器の坏蓋は52・53が出土しており、反りのある高い天井で口縁端部の折り返しも小さいことから中葉段階に該当すると思われる。54の坏蓋は古墳時代の須恵器でⅣ期後半新段階に該当する。坏身は外縁をまるく仕上げる形態の56、やや平ら気味の底部になる57があり、前者は中葉でも古段階、後者は後葉段階に該当するものであろう。

無蓋の坏である58は口縁が大きく開き、底部も平底気味となるもので中葉段階に該当する。

土師器の高台坏身55は、高台が底部外縁に付くもので前葉段階になる要素もあるが、口縁部の外反度が強いので中葉段階に該当すると考えておきたい。

59の小型の丸底坏は口径9cm代を測る小型のものであるが、古墳時代後半期土師器Ⅲ－2期に該当するものであろうか。

皿である60は口縁部が直立した形態のもので、中葉段階に該当するものである。

脚付の皿、高盤と思われる61は奈良時代中葉～後葉になると出現する器種である。

長胴甕は口縁部を水平に外反させる65～68が奈良時代で、中葉段階に該当するものか。

以上SH13出土土器群は、古墳時代後半期土器の混入品はあるものの、ほぼ奈良時代中葉段階に該当する資料が出土している。

SE3（後葉段階、第59図）

SE3からは須恵器として坏身、高盤、土師器として坏が出土している。

須恵器の坏身は426の底部が持ち上がるように外縁部まで平底になったもので、後葉段階に該当する。底部に「日根大」と墨書されている。

433は高盤の脚部と思われ、後葉段階のものであろう。

土師器の坏432・431は口縁部を僅かに外反させ外に開く形態となり、口径13cm代を測り後葉段階に該当すると思われる。小型の坏430も古墳時代に見られるものでないため、後葉段階に属すると思われる。427～429の丸底坏は形態・法量から見て古墳時代後半期土師器で混入品であらう。

434～436は古墳時代後半期土師器に該当する混入品であらう。

以上SH13出土土器群は、古墳時代後半期土器の混入品はあるものの、奈良時代後葉段階に限定できる資料が出土している。

奈良時代掘立柱建物出土の土器（第54図～第58図）

掘立柱建物については、遺構編では形態的な特徴から古墳時代と奈良時代のを区別してきているが、ここでは掘方出土の土器を検討し、問題となるいくつかの掘立柱建物群についてさらに該当時期の認定を試みたい。

まず、古墳時代の掘立柱建物建物群が集中する、古墳時代のSD80内検出の掘立柱建物群出土の土器

について検討してみたい。小破片が多く該当時期の確定に不安を残す資料であるが柱穴内出土土器から見ると、SB18出土の313・315は前葉、SB20の317も前～中葉、SB22の321・322も前～中葉、SB23の325も前～中葉、SB25の337も前葉に該当する。土器は出ていないが建物配置・規模・構造から見て、奈良時代のSB17・SB19・SB21・SB25なども奈良時代に該当する可能性が高い。おそらくSE4（中・後葉段階）やSE5（前葉段階）を中心として小型の掘立柱建物のまとまる地域であったと思われる。とするならば、柱穴出土遺物・建物形態から古墳時代に該当しそうな掘立柱建物は、総柱建物のSB12・13、大型掘立柱建物のSB16・15のみとなる。問題の大型掘立柱建物のなかでSB14の柱穴（P9）から、280～282の奈良時代中葉段階の土器が出土している。これについては、SB14を構成する柱穴群からは比較的多くの古墳時代の土器を出土しているにもかかわらず、P9からのみ奈良時代の遺物の出土が見られるので、何らかの奈良時代の遺構が切りあい混入したものと考えておきたい。よって、現段階ではSB14は古墳時代の遺構と考えておきたい。

総柱建物の集中するSB28～32・SB43・SB100については奈良時代の遺物はほとんど出土していない。ただし、SB43の366とSB100の415長胴甕は奈良時代になる可能性もある。また、他のいくつかの掘立柱建物も古墳時代の竪穴住居や大溝と切り合いがあり、なおかつ白鳳の地震（684年）と思われる憤砂の痕跡より古いことが確認されているため、これらの総柱の掘立柱建物群は白鳳～奈良時代の遺構になることは間違いなかろう。奈良時代の遺物が出土していないことを重視すると、前葉段階（白鳳期）の掘立柱建物群になる可能性が高い。

長大な掘立柱建物であるSB58とそれに付随するSB57・59からも一切の奈良時代の土器は出土していない。周辺に井戸等の遺構もなく奈良時代の包含層出土の土器も少ないため、どの段階に属する掘立柱建物か皆目見当がつかない。しかし、周辺部の畑遺構と思われる小溝からの出土土器が奈良時代末葉段階に該当するため、それ以前の建造物と考えたと奈良時代に該当する建物と思われる。これらの掘立柱建物の形態から見ると極めて官衙的な建物で、奈良時代末葉段階以前白鳳期以後の佐野郡（評）衙関連の何らかの機能をもった掘立柱建物群である可能性が高い。

古墳時代のSD246・260に囲まれた地域で検出された総柱を中心とする掘立柱建物群は、総柱のSB66～68・74、南面の底付建物と思われるSB76、あるいはSB64等が奈良時代に該当すると思われる。柱穴出土の土器を見ると、SB66の379・382・385は前葉段階、SB68の389・390は中葉段階に該当すると思われる。周辺にある井戸のSE19からは前～中葉段階の土器が出土していることと、SD244上層の土器も前～中葉段階の土器が集中しているので、SE19を中心として前～中葉段階の倉庫と底付建物が組み合わせになる掘立柱建物群が形成されている地域と思われる。

建物配置は分からないが、底付建物と思われるSB81からも405・406の前葉段階の土器が出土している。SB82も同様な掘立柱建物と考えられ、SB66～68・76と同様な組み合わせを持つ掘立柱建物群がもう一単位付近に存在しているかも知れない。

今回の発掘調査で検出できた奈良時代の建物群は、調査区よりも東側に集中しそうで、今まで行われてきた坂尻遺跡の発掘調査の成果と符合するが、SB58を中心とする掘立柱建物群は坂尻遺跡における郡（評）衙中心施設の問題を考えるうえで一石を投じる建物であろう。

SE4（中葉・後葉段階、第59図～第60図）

SE4からは須恵器として坏蓋・身、坏、甕、土師器として小型甕、長胴甕が出土している。

須恵器の坏蓋は438～442が出土しており、小さな扁平のつまみが付き、反りある高い天井で、口縁端部の折り返しも比較的小さい438・440・441は中葉段階、天井が低くなりさらに小さなつまみが付くようになる439・442は後葉段階に該当する。437の坏蓋は古墳時代須恵器の混入品である。坏身は444～446の口縁部を短く外に少し開く形態で、底部外縁を丸く仕上げ外縁に近い位置に高台を付けた444は中葉段階、高台を外縁よりも内側につけ角高台になる445は後葉段階に該当する。

無蓋の坏である447～453は口縁が大きく開き、底部も平底気味となるもので内彎傾向のある447・449・450・452・453は中葉段階、完全に平底化し直線的に開く形態に変化している448・451は後葉段階に該当する。ほかに454のように口縁部が外反したコップ形の坏があるが、底部外縁を丸く仕上げる形態をなすので中葉段階に該当するものであろうか。

湖西窯産の甕と思われる455は、口縁部に形骸化した突帯が巡るので、中葉段階に該当する。

土師器の小型甕である459は古墳時代のものと異なり、肩の張り具合が強くなり小さな底部が付く形態に変化しているものであり、明らかに奈良時代中葉以降に該当するものであろう。

長胴甕は口縁部を水平に外反させ最大径が口縁部にある形態の461～468が奈良時代であろう。中葉～後葉段階に該当するものか。

以上SE4出土土器群は、古墳時代後半期土器の混入品はあるものの、奈良時代中葉～後葉段階に該当する資料が出土している。

SE5（前葉段階、第61図）

SE5からは須恵器として坏蓋・身、坏、長頸瓶、広口壺、土師器として坏蓋・身、坏、長胴甕が出土している。

須恵器の坏蓋は476の小破片が出土しているが、該当期は分らない。472～475は古墳時代須恵器の混入品である。坏身は480の底部中央が底に付き潰れた高台が底部外縁よりやや内側に付いたもので前葉でも新段階の特徴を示すものであろう。478は古墳時代須恵器の混入品である。

無蓋の坏の底部と思われる481は丸底傾向があるため前～中葉段階に該当するものであろう。

広口の無頸壺になるとと思われる491～493は前葉段階に該当するものと思われる。ほかに長頸瓶と思われる494・495も前葉段階に該当するものであろう。

土師器の坏蓋は小さな尖ったつまみである477が出土している。つまみの形態から見ると後葉段階のものか。坏身は479の高台が底部外縁につくものが出土している。前～中葉段階のものか。

坏は内面放射状暗文が施され口縁が直線的に開く484・486は前葉段階、口縁部が外反する487と丸底形態と思われる488も前葉段階に該当する。482・483・490は古墳時代土師器の混入品である。

長胴甕は口縁部を水平に外反させる496が奈良時代であろう。

以上SE5出土土器群は、古墳時代土器の混入品はあるものの、奈良時代前葉に該当する資料が主体的に出土している。

SE19（前葉・中葉段階、第61図～第62図）

SE19からは須恵器として坏蓋、広口壺、土師器として坏が出土している。

須恵器の坏蓋は天井の反りが少なく、口縁端部の折り返しが外に開く500は前葉段階、反りのある高い天井で比較的小さな扁平なつまみが付く501と502は中葉段階に該当するであろう。498・499・503は古墳時代須恵器の混入品であろう。

広口の無頸壺になるとと思われる504は前葉段階に該当すると思われる。

土師器の坏は体部下半を丸く仕上げ口縁部が外反した506・507?があり、前葉段階に該当する。皿形態に近い505も口縁部を直立気味にさせるもので、前葉～中葉段階に該当するものであろう。

以上SE19出土土器群は、古墳時代後半期土器の混入品はあるが、奈良時代前葉～中葉段階に該当する資料が出土している。

SK32（後葉段階、第63図）

SK32からは須恵器として坏蓋・身、坏、壺蓋、甕、土師器として長胴甕が出土している。

須恵器の坏蓋は537～539が出土しており、すべて小さな扁平のつまみが付き、そりのある比較的低い天井となり、口縁端部の折り返しも比較的小さい特徴があるので後葉段階に該当する。坏身は540は潰れた高台を底部外縁に近い位置につき、中葉段階に該当する。

無蓋の坏である541は口縁が大きく開き、完全に平底化し直線的に開く形態となるもので、後葉段階に該当する。

542は形態から見て短頸壺の蓋で、口縁が外に開く形態で、後葉段階に該当するものであろうか。

湖西窯産の甕と思われる543は口縁部突帯が省略されたもので、後葉段階に該当するであろう。

土師器の長胴甕は口縁部を水平に外反させ最大径が口縁部にある形態の545～548が奈良時代のもであろう。口縁部と肩部の法量差が大きく、後葉段階に該当するものか。

以上SK4出土土器群は奈良時代中～後葉の資料が出土しているが、後葉段階が主体となる。

畝状遺構（後葉新段階、第86図）

畑の畝状遺構になると思われる小溝群から奈良時代の遺物が出土しているので、該当時期について検討してみたい。

奈良時代の須恵器としては坏蓋の1049・1053・が出土している。口縁端部は短く外に開くもので、後葉でも新段階に該当するものであろう。坏身は1046・1047・1054・1055が出土しているが、明確な該当時期は分からない。直線的に開く1054・1055などは後葉段階に該当するものであろうか。

以上、畝状遺構から出土している古墳時代の土器を除いた奈良時代の土器は、いずれも下限が奈良時代後葉でも新段階の土器が出土していることと、付近の遺構群との切り合い関係から考えても、畝状遺構の時期を奈良時代末～平安時代初頭という時期に限定できそうな資料である。

SD244 上層遺物群（前葉・中葉段階、第152図～第155図）

SD244はすでに記述したように、古墳時代後半期の遺構であるが、上層から奈良時代包含層の遺物集中部分が認められた。周辺の奈良時代に該当するであろう掘立柱建物やSE19などの遺構群との関連で考えられる遺物群であるため検討をする。本遺物群からは須恵器の坏蓋・身、坏、広口壺、長頸瓶、甕が出土しているが、土師器の出土はほとんどなかった。

須恵器の坏蓋は2433～2437が出土している。大きな扁平のつまみが付き、反りのある高い天井で、口縁端部の折り返しもしっかりしている2433は前葉段階、天井が低くなりさらに小さな扁平なつまみが付くようになる2434～2437は中葉段階に該当する。坏身は2441～2448が出土している。2441・2442は直線的に外に大きく開き開く口縁部、高台を底部外縁近くに付け底部が張り出すような形態となるので前葉段階、底部外縁を丸く仕上げ外縁に近い位置に高台を付けた2443・2444は中葉段階、高台を外縁付近に付けるが角高台になる2445～2447は後葉段階に該当すると思われる。2448は直立した口縁で深めの形態、角高台が底部外縁近くに付く特徴的な形態で遠江地域の土器とは明らかに形態が異なる。胎土・色調から見ると駿河地域に分布する藤枝市助宗窯産の須恵器と考えられる（八木勝行 1990）。中葉段階に並行するものか。

無蓋の坏である2453は口縁が大きく開き彎曲した体部となるので、前葉でもかなり古い段階に該当しそうである。

長頸瓶は2456・2459～2461などで、形態的には何れも前葉でも古段階に該当するものである。

前節で述べたように2467～2470の広口無頸壺や、2471のすり鉢、2472・2473の甕は7世紀代のものと区別がつかないが、8世紀代のものなら前葉段階に該当すると思われる。

湖西窯産の甕と思われる2474～2476は、口縁部の突帯が消失した段階のもので、中葉段階までは降ると思われる。

以上SD244 上層出土の須恵器は、奈良時代前葉～後葉段階という幅広い時期のものが見られるが、前葉から中葉段階のものが多いように思われ、SE19やその周辺部の掘立柱建物に関連し同一時期に廃棄された土器群であると考えられる。

墨書土器・硯及び稲荷領家遺跡出土の墨書土器・硯（第203図・第204図）

当調査地点では奈良時代の遺構・遺物量が少なかったせいか、墨書土器の出土量も少なかった。

しかしながら、奈良時代に該当する墨書土器の出土点数は9点にも及んだ。また、硯や転用硯等の硯類も確実なものが各1点出土している。出土場所は井戸等の遺構からも出土したが、多くは包含層や中・近世遺構出土である。遺構出土の墨書土器の他に包含層出土のものを加えたのが第203 図である。

1はSE3出土の「日根大」で、後葉の土器である。人名を示すと思われる記号も付けられ、国一バイパスの調査でもかなり出土している。なお、日根は佐野郡の郷名である。

2は「日根駅」で、小破片で該当時期はよく分からないが、中葉段階のものと思われる。駅関係の墨書土器は袋井市教育委員会実施の国一バイパス調査地点で豊富に出土している。日根駅の下に文字のつくものをあげれば「日根駅家」がある。「日根駅」と読めるものは今のところ出土例はないので、おそらく2も「日根駅家」と書かれていたと思われる。

3は記号のようなもので中葉段階に該当する。4は「田子」で中葉段階、5は「田中」で後葉段階のもの、6・7は人名につくと思われる記号で何れも後葉段階のもの、8は「中」であるが「田中」であると思われるもので後葉段階、9は墨痕程度で意味不明で中葉段階に属していると思われる。国一バイパス調査地点で「田」関連の墨書土器をあげると、「田子」「田人」が出土している。「田中」は坂尻遺跡の周辺遺跡になるが、不入斗Ⅰ遺跡から「□田中」が出土している（袋井市教育委員会 1993）。「田中」は地名の可能性もあるが、「田」に関連した墨書は、「田中」「田子」「田人」等のバラエティがあることと、一定量が広範囲に存在することから考え合わせると、郡衙の水田経営に関する役割を担った人々を指す意味の可能性も指摘しうる。「田」関連の墨書の意味については、第4章にてさらに考察を深めたい。

硯は30の直径9cm代を測る円面硯、31の口径15cm代を測る坏蓋の転用硯が出土している。30の円面硯は小型の部類に属し体部の透などの装飾文様はない簡素なもので、円面部分の使用頻度も低く未使用に近いものである（森郁夫氏ご教示）。円面硯としてはかなり退化した型式で、浜北市吉名窯で同形態のものが灰釉陶器段階（9世紀後葉～10世紀前葉）まで見られることから（松井一明 1989）、8世紀後葉～9世紀代にまで降る可能性がある。31は中葉段階の蓋を転用して使用した転用硯で、墨痕跡は顕著で使用面も光沢があり使用頻度の高いものである。また、墨痕跡が僅かにあり転用硯の可能性のあるものが、他にも数点存在するが確証もないため図示しなかった。

袋井市内での円面硯出土遺跡は、坂尻遺跡では本例を含めて3点目、稲荷領家遺跡で1点の合計4点の出土が知られている。参考までに県道調査地点で出土した32は、圈足硯の退化した方形の透のはいった型式のもので8世紀後葉以降9世紀代まで降るもの、国一バイパス調査地点で出土した33は突帯のしっかりした円面硯で8世紀代に収まるものと思われる。

また、参考までに34～38の袋井市山梨地区の稲荷領家遺跡出土の墨書土器と硯を図示した。34は圈足硯がさらに退化し透が沈線文化したもので8世紀後葉以降9世紀代まで降る可能性のあるもの、35の転用硯は8世紀後葉段階のものである。他の墨書土器については36が中葉段階で「知」、37が後葉段階で「大」か？、38は8世紀代と思われる土師器で「九周」、39が10世紀後葉段階の灰釉陶器で意味不明で朱書されたものである。稲荷領家遺跡は袋井市内で坂尻遺跡と共に郡衙推定遺跡とかねてから考えられてきた遺跡であり、山名郡の郡衙とも目されていた。今回紹介した「知」や「九周」などの墨書土器を見ると、周智郡の郡衙になる可能性も否定し得ないであろう。

第4節 平安～鎌倉時代の土器（第190図～第199図・第203図・204図）

今回の調査地点では平安末～鎌倉時代の良好な遺構面は検出できたが、平安時代中～後葉の遺構面は今までの歴代の発掘調査と同じく明確には捉えられなかった。平安時代の遺物は鎌倉時代の遺構や包含層から少量出土しているにすぎない。

平安末～鎌倉時代の土器出土量もあまり多くないが、井戸や溝内より段階的にまとまった資料が得られたので、本節では個別の遺構毎ではなくて段階ごとに記述を進めたい。なお編年の目安は湖西・渥美窯と東遠江系山茶碗編年を基本に記述を進めた。すなわち、松井の編年（松井一明 1993）との対比のなかで、灰釉陶器の時期、山茶碗Ⅰ－1期（12世紀前葉）、山茶碗Ⅰ－2期（12世紀中葉）、山茶碗Ⅱ期（12世紀後葉～13世紀初頭）、山茶碗Ⅲ－1期（13世紀前葉）、山茶碗Ⅲ－2期（13世紀中葉～後葉）、山茶碗Ⅲ－3期（13世紀末葉～14世紀前葉）の大別3時期区分を採用するが、本発掘調査地点ではとくに山茶碗Ⅰ期の製品が最も多く、Ⅱ～Ⅲ－1期段階の土器が少量出土し、Ⅲ－2期以降の製品の出土はほとんどなかった。また、遠距離地からの搬入山茶碗は尾張系のうち瀬戸窯は藤沢良祐氏の最新の編年（藤沢良祐 1994）、知多窯は中野晴久氏の最新の編年（中野晴久 1994）を採用した。また、各段階の土器の記述は代表的なものに留め、段階と産地については図中に記入し、その組成率と変遷については第1表に示した。

灰釉陶器

何れも平安末～鎌倉時代の遺構からごく少量の出土である。時期は遠江灰釉陶器編年（松井一明 1989）のⅡ期（9世紀後葉）の26・28・238、Ⅲ期（10世紀前～後葉）段階の8・9・27・64・131・239・240・247、Ⅳ期（10世紀末～11世紀）段階の17・21・22・33・96・120が見られた。

今回の調査地点からはⅠ期の（9世紀前葉）灰釉陶器は出土しておらず、Ⅱ期の段階と思われる製品は清ヶ谷産の26・28と尾張産とおぼしき耳付瓶の238の僅か2点と、Ⅰ期並行と思われる31や250の低い削出高台の須恵器などに留まっているため、混入品といえども平安末～鎌倉時代の遺構面の近い面に10世紀前葉～11世紀代の遺構面ないし包含層が存在していた可能性が指摘しうる。坂尻遺跡中枢部では9世紀代の遺物出土面が奈良時代の遺構面に近いところで確認されていることから、本発掘調査地点での灰釉陶器の出土傾向を状況を支持しているようである。なお、Ⅲ期以降の灰釉陶器の産地については、地元の大須賀町清ヶ谷窯産のものが大半であった。

山茶碗Ⅰ期

SD17・16やSB1～10の発掘調査区北半の掘立柱建物群やそれに伴う井戸、溝などの遺構からまとまって出土している。

碗・小碗は古い段階（Ⅰ－1期）と新しい段階（Ⅰ－2期）のものが出土している。Ⅰ－1期の湖西・渥美窯産についての碗の特徴は比較的高い高台がつき、深い碗形態で、口縁部もよく外反している特徴がある。体部が内彎する碗A類と、直線的に仕上げている碗B類がある。碗A類は40・154・155・158・188・200・252が該当する。碗B類は、6・34～37・152・164・193が該当する。小碗としては口径10cm前後、深い碗形態になる10・46・67・182・226・230・245が伴うと思われる。今回出土した湖西・渥美窯産のⅠ－1期段階の製品は碗や小碗の特徴から見ると、碗の口径は16cm代、小碗も口径10cm間前後に留まり口縁部の外反度も弱く高台もさほど高いものとはならないので、Ⅰ－1期としては新相を示す内容である。組成比率は72%を数え、主体的な産地となっていることが分かる。

Ⅰ－1期段階の東遠江系山茶碗は高台が高く口縁部の外反があり深い作りの碗になる126・150・187・189が出土している。小碗は口径10cm前後で比較的高い高台の付く、184・235が該当すると思われる。組成比率は18%を数え一定量存在する。

Ⅰ－1段階に伴う尾張系山茶碗のうち知多窯産として243の碗はⅠb期、瀬戸窯系として碗は191・201、小碗の231の4期古段階のものが確認されるが量的には少ない。尾張系山茶碗は知多窯産で4%、瀬戸窯系で6%の合計10%の組成比率となる。

Ⅰ－2期の湖西・渥美窯産の碗の特徴はⅠ－1期と比べると高台も潰れたように低くなり、口縁の外反度も弱くなってきたものである。体部を丸く仕上げる碗A類形態は3・18・39・54・153・192・197・198・258・259が該当する。体部が直線的で口縁部の外反も少ない碗B類形態は38・55・156・157・

159・165・195・196・199・204 が該当する。これに伴う小碗は口径9cm代と小型化するとともに扁平な坏部と高台も潰れた形態になる4・47・123・183・202・227・228 があげられる。湖西・渥美窯産山茶碗の組成比率は72%を数え、Ⅰ-1期とさして変化はない。

Ⅰ-2段階に伴う東遠江系山茶碗としては碗は皿山窯産と思われる57、金谷・旗指窯産と思われる257、小碗は口径10cm以内に小型化し高台も潰れたように変化し口縁部の外反もなくなった20・115・116・229・232が見らる。東遠江系山茶碗の組成比率は11%となり、Ⅰ-1期段階よりやや減少傾向はあるが一定量の組成は示している。

Ⅰ-2段階に伴う尾張系山茶碗のうち、知多窯産山茶碗は2期の碗である16・56・111・163・177・211と、小碗は236・237・261、瀬戸窯系山茶碗は4期新段階の碗である41・161・190・225と、小碗は65・66・224が見られる。尾張系山茶碗は東遠江系山茶碗以上の量が出土しており、その組成比率は知多窯産で9%、瀬戸窯産系は8%の合計17%となる。その原因は東遠江系山茶碗の流通量が減少した分、尾張系山茶碗が瀬戸・知多窯の何れの産地も増加したためと考えられる。

他にⅠ期に該当する陶器としては117～119の湖西・渥美窯産の甕、湖西・渥美窯産と思われる縄目叩の施された124の平瓦が出土している。

Ⅰ期に該当する土師器質土器は、甕とかわらけが少量出土している。甕は2種類あり、1種類はくの子状口縁をもつ丸底?の甕になるとと思われる7・24・127・242、もう1種類は口縁端部を内側に折り返す薄手の平底甕の12・13である。前者は口縁部の形態に若干のバラエティがあるものの佐野五十三氏らによる分類(佐野五十三 1990)では清郷型甕D類、後者は伊勢地域からもたらされた12世紀代の伊勢鍋4類(新田洋 1985)に該当すると思われる、山茶碗との並行関係の存続時期とも合致する。かわらけはロク口整形の48・251と手びねり整形の241があり、かわらけとしては13世紀以前に編年できる遠江では初期のかわらけである(松井一朋 1993)。104は托?形態をなし、10世紀代によく見られる土師器形態で、10世紀代に該当するものだろう。

また、今回の調査地点ではⅠ期段階の輸入陶磁器は1点も確認されていない。

山茶碗Ⅱ期

SE13・23やSK86の発掘調査区南半の掘立柱建物群やそれに伴う井戸、土坑などの遺構から少量出土した。遺構群としてはⅠ期の遺構群からは外れ、Ⅲ-1期の遺構と重複している。

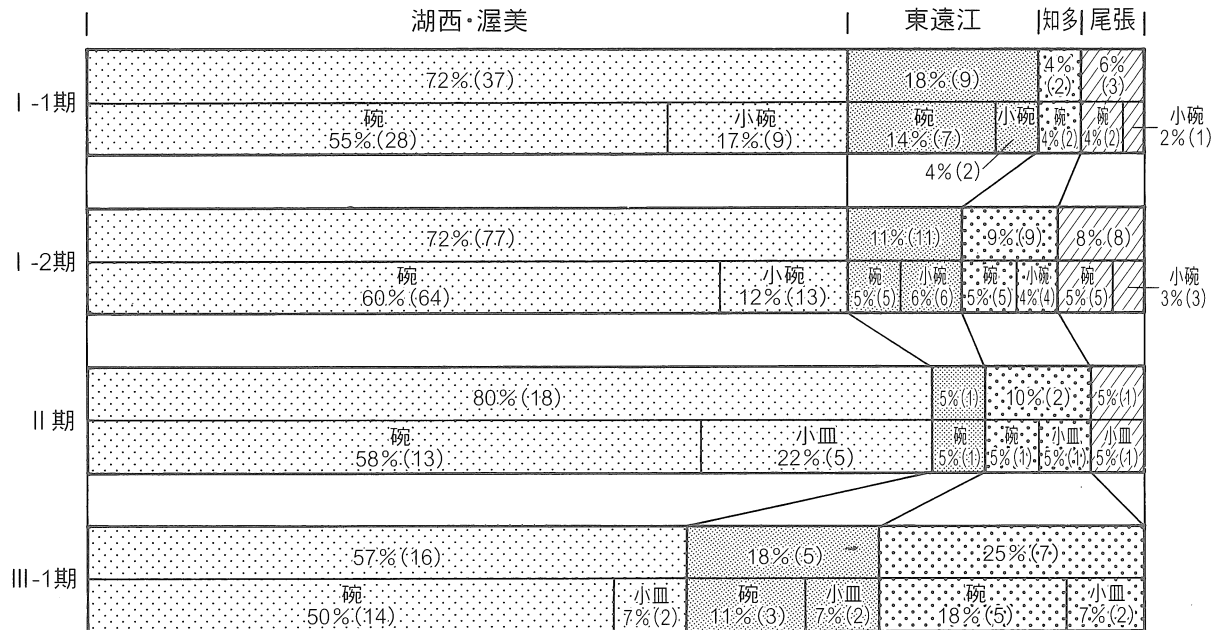
Ⅱ期の湖西・渥美窯産についての碗の特徴は潰れた高台がつき、さらに浅い形態に変化し、口縁部の外反も鈍くなる特徴をもつ。体部が内彎する碗A類と、直線的に仕上げている碗B類が存在する。碗A類は88・89、碗B類は、25・92が該当する。小皿としては口径9cm代の口縁が外反し比較的扁平な形態に変化している95・135が伴うものと思われる。94の鉢も口縁部の外反が少ないなどⅡ期の特徴をもつ。83の壺、84大甕もⅡ期に該当するものであろう。今回出土した湖西・渥美窯産山茶碗Ⅱ期段階の製品は、小皿の形態の特徴から見るとⅡ期のなかでも新相を示すものと考えられる。Ⅱ期段階の組成比率は80%と東遠江系山茶碗の激減と相反し増加傾向が読み取れた。

Ⅱ段階に伴う東遠江系の山茶碗は低い三角形の高台に変化した128があるが、全体形はよく分からない。組成率はⅠ期段階と比較するならば5%と減少傾向にあるが、Ⅱ期全体の山茶碗確認個体数が少ないため普遍化できうる数値なのか確証はない。

Ⅱ段階に伴う尾張系山茶碗のうち瀬戸窯系山茶碗の小皿である103・130は5期古段階の特徴をもつが、確認しうる個体数は少ない。知多窯産の製品については148の底部が突出した小皿が出土しており3期に該当すると思われる。Ⅱ期の尾張系山茶碗の組成率は、知多窯産で10%、瀬戸窯系で5%と、尾張系の中でも瀬戸窯系が減少傾向であるがこの数値も普遍化しうるか確証はない。

Ⅱ期段階の土師質土器・輸入陶磁器は今回の調査地点では全く確認できていない。

第1表 山茶碗産地別組成グラフ



山茶碗Ⅲ－1期

SE7～9・12・15やSK88の発掘調査区南半の掘立柱建物群やそれに伴う井戸、土坑などの遺構から一定量出土した。遺構群としてはⅠ期の遺構群からは外れ、まとまる傾向がある。

Ⅲ－1期の湖西・渥美窯産山茶碗についての碗の特徴は口径16cm前後、かなり潰れた高台がつき、体部は浅く内彎度も減少する形態、口縁部の外反もかなり鈍くなる特徴をもつ。体部が内彎する碗A類と、直線的に仕上げている碗B類が存在する。碗A類は68・69、碗B類は139が該当する。小皿は扁平化した口径9cm代のものが伴うが、典型的なものは本調査地点では確認できなかった。湖西・渥美窯産山茶碗の組成比率は57%となり、前段階と比較すると20%以上の減少傾向にある。

Ⅲ－1段階に伴う東遠江系山茶碗は口径16cm前後と小型化し低い高台、内彎した口縁部形態に変化した72は金谷産、潰れた高台で靱殻痕のつく76は皿山窯産に該当する。小皿は底部が突出した145が出土している。東遠江系山茶碗の組成率は18%で、確認のないⅡ段階と比較すると4倍増加となるし、Ⅰ期段階との比較でも1.5倍～2倍程度はある。何れの増加数値が正しいとしても増加傾向は読み取れるので、その原因は湖西・渥美窯産山茶碗の生産量の減少に連動した現象と考えられる。

Ⅲ－1段階に伴う尾張系山茶碗としては知多窯産の碗である82・86・87・146は5期段階の特徴をもち、一定の個体数が確認できた。瀬戸窯産系山茶碗については確認できなかった。組成率は知多窯産が25%となり、劇的に増加している。瀬戸窯産系山茶碗の消滅と知多窯産山茶碗の増加については、湖西・渥美窯産山茶碗の生産量の減少だけでは説明がつかない。おそらく知多窯産山茶碗のみの流通の激増の原因は、13世紀代になると湖西・渥美窯産のうち広域流通品である鉢・壺・甕の流通量が減少するとともに山茶碗生産も減少し、それに取って代わり知多窯産の鉢・壺・甕の流通が独占状態になったことにより山茶碗流通も連動して増加したと考えられる。

Ⅲ－1期には並行しないが、東濃産とおぼしき均質手の山茶碗の256が確認できた。かなり薄手のもので明和窯段階に該当すると思われる。Ⅲ－2期に並行するものか(田口昭二 1983)。

Ⅲ-1段階に該当する土師器は出土していないが、輸入陶磁器の青磁が出土している。80はやや褐色掛かった青磁碗で花文の施された龍泉窯系、81の端反の小皿は同安窯系の製品と思われるもので、何れも13世紀前葉に該当すると見て大過ないものである。

墨書土器（第203図・第204図）

当地域の中世陶器に書かれた文字資料は、一般的に見て記号や吉祥文字のようなものが多く出土しが、意味不明なものが多い。推測のつく範囲で説明を加えたい。

文字として判読できるものは、14・19の「大」、18の「中」、15の「十」、22の「万一」である。これらは数字や大きさに関係した文字であるため、食器や内容物の管理に関係したものあるいは人名の略記号になるものであろうか。17・26の記号もまったく同じものが2個体出土しているので、人名や記号に関係したものであろうか。花押のような記号としては11・16・20・21・23・24がある。同様の記号として小碗の底と体部にも同じ記号が書かれた13・25・27があるため、これらは何らかの儀式に使用する吉祥文字の一種の可能性があろう。13～16のように井戸の中から出土した完形品、20～22のSD17出土土器のように方形区画割の南西隅に集中的に出土している例などがあるため、後者は区画地での吉・凶の方向性を示す道教的？儀礼、後者は井戸祭祀に関係した墨書土器であると推測したい。

第5節 江戸時代の土器（第200図～第202図）

今回の調査地点で江戸時代の遺構として確認された遺構はSE17とSD185であるが、土器はSD185からのみ出土している。江戸時代の陶磁器類と土師質土器が多量に出土したが、埴輪や中世陶器も混入し一定量出土したので代表的なものを限定してあわせて図示した。なお、近世陶磁器は瀬戸窯産、肥前系、常滑窯産のほか、静岡県内の初山窯産と志戸呂窯産が確認できた。なお、肥前系陶磁器は大橋康二氏の編年（大橋康二 1984）、瀬戸窯産陶磁器は藤沢良祐氏の編年（藤沢良祐 1989）、常滑窯産陶器は中野晴久氏の編年（中野晴久 1986）を参考にして年代観を示した。

陶磁器・土師質土器

肥前系陶器は丸碗の271・272・276・319・323、広東碗手の325・326、箱形茶碗の322、端反碗の蓋と思われる281・328は19世紀前葉、外面青磁様仕上げ碗の277は肥前茂右衛門窯の製品に類似するもので18世紀後葉～19世紀前葉、陶器の唐津系刷毛目碗の278は17世紀末～18世紀後葉の製品であろう。仏餉器の327や、玉縁の皿の287、角大皿になる288・289、瓶類の296、亀形の水滴？の298なども18世紀後葉～19世紀前半に該当するものである。ただし、19世紀前葉代で今回肥前系磁器としたものの中に、瀬戸窯系磁器と区別がつかないものがある。

瀬戸産陶磁器は陶器の丸碗273、柳茶碗の266と箱形の柳茶碗である329、磁器の丸碗になる268～270・274・275・324、湯飲茶碗の320・321、広東碗手の267などは19世紀前葉に該当するものである。灰釉系陶器のうち見込に鉄釉摺絵が施された皿の282と鬚盥の335、型押の菊皿である283、水滴の336などは18世紀代、短い脚の仏餉器の330～332、小型の灯明皿の286と短檠の333、玉縁の片口鉢の291は19世紀前半の製品である。すり鉢の299は18世紀後半、高台付のすり鉢である318は明治時代、鉄釉掛広口壺の307、刷毛目釉徳利の316も19世紀前葉に該当するであろう。

常滑産の甕は形骸化したN字状縁帯がつく300・305は、17世紀初頭に該当するものである。

初山窯産丸皿の264は大窯Ⅲ期並行の16世紀後葉に該当する。志戸呂窯産のうち265の小壺は形態から見て、大窯Ⅲ期並行に該当するものであろう。江戸時代に属する志戸呂窯産陶器は、高い高台がつく鉄釉丸碗の280、端反口縁の鉄釉丸皿の284・285、鉄釉三足香炉の292、鉄釉小型壺の334、すり鉢で厚手の鐔状口縁になる302、受口状口縁の304は17世紀代、灰釉掛鉄釉仏餉器の294、灰釉

掛鉄釉片口の290、鉄釉徳利の底部の293、灰釉掛鉄釉徳利の底部の295、縁溝になる鐔状口縁のすり鉢の303・301は18世紀～19世紀前葉代に該当する製品と思われる。

土師質の土器はかわらが少量出土している。口縁部が大きく外反している308・310、外反しない口縁になる309・311・312は18世紀代、小型化しレンガ質焼成になる313・314は19世紀前葉まで降る可能性がある。

墨書陶器は瀬戸窯産の徳利である316に「口屋」の店名の記されたもの、瀬戸窯産と思われるすり鉢に意味不明の片仮名で「ロ口ハ」と記されたものが出土している。

以上SD185出土の江戸時代の陶磁器類は、18世紀～19世紀前半までの資料が主体で、明治時代のものはほとんど含まないことから、明治時代には廃棄され埋められた溝（給排水路）であったと考えられる。産地別の組成から見ると、18世紀～19世紀代においては瀬戸産陶磁器が一貫として優位であり、肥前産陶磁器がこれに続いている。しかし、17世紀代では志戸呂窯産陶器が目立って存在しているので、17世紀代においては志戸呂窯産陶器の流通がかなり多かったことを示す。

また、陶磁器の質的内容から見ると、さしたる優品や伝世品らしいものは見られず、すべて雑器に該当するものであるが、遺物量は決して少ないものではないことと、遺構の性格から考えても溝底より給水用の水道管が検出されており、単なる農村部で使われていた陶磁器類とも思えない。想像を逞しくすると、原野谷川東岸に間の宿場町として栄えた原川遺跡との関係をもった集落が、発掘調査地点付近の原野谷川西岸にも存在していたのではないかと指摘しておきたい。

第6節 土製品・金属製品・石製品・木製品（第205図～第208図）

土製品（第205図・第206図）

土製品としては1～24のミニチュア土器、25の土製紡錘車、26・27の土製土錘、28～30・32の土馬？、33～37の土製支脚、31・38～42のふいごの羽口が出土している。ミニチュア土器のうち遺構出土のもので時期の分かるものは、1・2・6～8・13・14は6世紀後葉～7世紀前葉のもの、3・4は8世紀代、5は12世紀後葉に属する。それ以外は、確実な時期の判定はできなかった。形態別に見ると壺形を呈する1・6～9・13・14・17～21・23・24、坏形の3・4・10・12・15・16、甗形の22、不明の5に分けられる。壺形は比較的大型で壺の形を留めている1・7・8・13・19・24と、それ以外の小型で壺の形態がデホルメされたものに分けられる。時期的には前者が6世紀後葉、後者が8世紀代に属する傾向は見られるが確実ではない。坏形については深めのコップ形を呈する2は古墳時代後期、丸底坏の3・4、平底坏の10・15、甗形に近い12は8世紀代に属する可能性が高いだろう。22の甗形と不明の5も8世紀代のものと推測されるが、5は12世紀代になる可能性もある。

25の土製紡錘車は饅頭形を呈するもので、形態から見て古墳時代後期に該当するものと思われる。

26・27の土錘は長さ5cmにも満たない小型のもので、時期は6世紀～8世紀代の何れかであろう。

土馬は足と思われる28～30・32が出土している。何れも奈良時代に属すると考えられる。

土製支脚は方柱状の33・37と、円柱状の31・34・35、中間形態の隅丸方柱状の36が出土している。33は中世遺構からの出土であるが、何れも6世紀後葉～7世紀代に該当するものであろう。

羽口は口縁が分かる部分のみを図示した。時期の分かるものは少ないが、38は8世紀代に該当する可能性が高く、今回出土の羽口のほとんどは奈良時代に属すると考えている。

金属製品（第206図）

金属製品としては43の小刀、44・45の刀子、47の鎌、48・49の耳環、51～53の鉄斧、46の不明鉄器が出土している。

小刀の43は全長25cmを測る両関造りで、12世紀中葉に属するものである。井戸祭祀の形代として用

いられたものであろう。

小振り刀子の先端である44、やや幅広刀子の45が出土している。何れも奈良時代のものか。

鎌の47は小型で直刃の形態をなしている。6世紀～8世紀の何れかに該当する。

耳環は何れも銀装で直径2.5cmを測る普通サイズのものである。48は中世遺構出土であるが、形態から見て何れも6世紀～7世紀代のものと考えられる。

鉄斧は鍛造の袋状手斧である51・52、鍛造の厚手の板状手斧の53が出土している。51は12世紀中葉の平安時代末遺構出土のものであるが、他は6世紀～8世紀代の何れかに属するものと思われる。

石製品（第206図～第208図）

石製品としては50の管玉、54～66の砥石が出土している。

管玉の50は碧玉製の片面穿孔である。古墳時代のものか。

砥石は小型で持ち運びのできる54・56・57・61と、普通サイズの柱状の55・58・59、方形の63、板状の60・62、軽石製の64～66が見られる。板状の砥石は破片資料であるが砂岩製で荒研用として置いて使用されたと思われる。柱状、方形状のものは白色凝灰岩製で多面にわたり使用しているので、仕上用として置いたり手持て使用したと思われる。軽石砥石は仕上ないし簡単な補修用の砥石と考えられる。時期は55・60・65は古墳時代後期、57・64は12世紀末～13世紀前葉に、他のものは6世紀後葉～8世紀代の何れかの時期に該当するものである。

木製品（第209図～第226図）

木製品は木槌の1、容器？の底板と思われる2、下駄の3・4、曲物の底板5、刀形の6・7、木錘（ツチノコ）の8～10、形代と思われる板・棒状木製品の11・12・15・16、漆碗13・14、礎板の17、井戸枠に転用されていた曲物の18、井戸枠に転用された扉と思われる板材の20、柱根の21～33・42～43、井戸枠に転用された板材の34～36と杭の37～41、SD270で水田の堰に使用された杭や板材の56～76、水道管のジョイントである77～80を図示することができた。堰や井戸枠として使用されていた杭や板材については、代表的なものに限り全てを図示していない。

木槌（横槌）の1は芯持材を使用し、肩を丸く仕上げた形態をなしている。使用痕が抉入の穴状に見られるので、藁を叩いたりするもの以外の利用も考えられる。4世紀代のものである。

容器の底板と思われる2は、桜皮を通したと思われる穴が側縁近くに穿たれているが、何かに転用されている可能性もあり容器底板とすべきものか検討を要する。4世紀代になる可能性もある。

3・4は6世紀後葉～7世紀前葉に該当する下駄である。何れも板目材を使用し1枚造りの連歯下駄で、歯も低く中央の鼻緒の穴も片側により、断面形が台形をなす歯の基部幅よりも足を乗せる台板部分のほうが幅広になる古墳時代の下駄の特徴をよく示している。静岡県下での弥生～古墳時代の下駄の出土例を沼津市歴史民俗資料の図録（沼津市歴史民俗資料館 1992）を参考にし近年の出土例を加えると、弥生時代後期～古墳時代初頭の下駄は静岡市登呂遺跡で3点、沼津市雌鹿塚遺跡で1点の合計4点、古墳時代の下駄は浜松市伊場遺跡で6～7世紀代の1点、三島市芝本町遺跡で5～7世紀代のものが1点、三島市中島西原田遺跡で古墳時代らしいものが1点、静岡市大谷川遺跡で6～7世紀代のものが1点、掛川市梅橋北遺跡で5～6世紀代のものが1点、今回の坂尻遺跡で6世紀後葉～7世紀前葉のものが2点の合計7点が出土している。弥生～古墳時代の県内出土下駄との詳細な比較・検討は第4章にて行いたい。

6・7は直刀を模したと思われる同一個体の刀形である。12世紀中葉に該当する形代であろう。形代状木製品は棒状のタイプの11・12、曲物側板の再利用品と思われる板状の15・16がある。板状のものには墨痕はなく、紙を貼り付けた痕跡も確認できなかった。12世紀中葉に該当する形式であろうか。

木錘はムシロを編むために使用する錘と考えられる。8は穿孔するタイプ、9は挟り込みを入れるタイプ、10は部材の再利用品で挟り込みはないので未製品か。何れも12世紀中葉に該当する。

漆碗は2点とも高台を少し内反りに削り出した形態で、黒漆仕上げであるが丁寧なものではなく普及

品であろう。何れも12世紀中葉に該当する。

大型の曲物は図示した18の12世紀末葉～13世紀前葉のもののほか、SE16の12世紀中葉、SE3の8世紀代のものが出土しているが、保存状況が悪く図化できなかった。

20は8世紀代の井戸枠に転用されていた扉と思われる幅38cmを測る板材である。把手になると思われる穴が穿たれている。両開の扉とすると入口幅80cmの半間になる建物の扉であろうか。

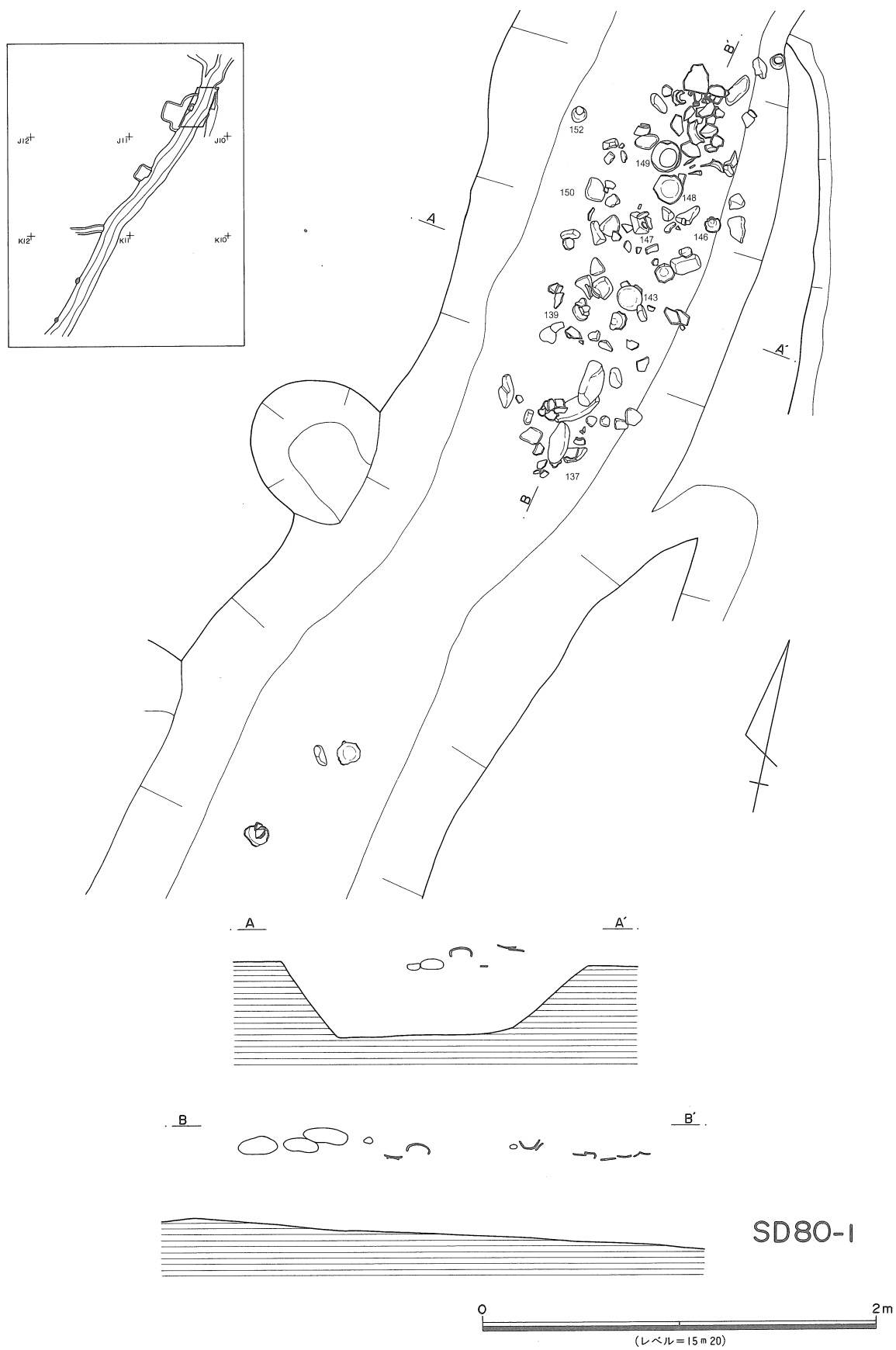
SB14出土の柱根はいずれも底面に金属製の鑿による整形痕が見られ、材質はマキ材が多い。

SD270の4世紀代に造られた堰に使用されていた杭材は65・71～75のような細い自然木の先端を加工したもののほか、60～64のような杭と56～59のような板材は建築部材の再利用と見られ、57～59は矢板状に整形されている。何れも金属製の鉋や斧のようなもので加工されている痕跡が見られる。

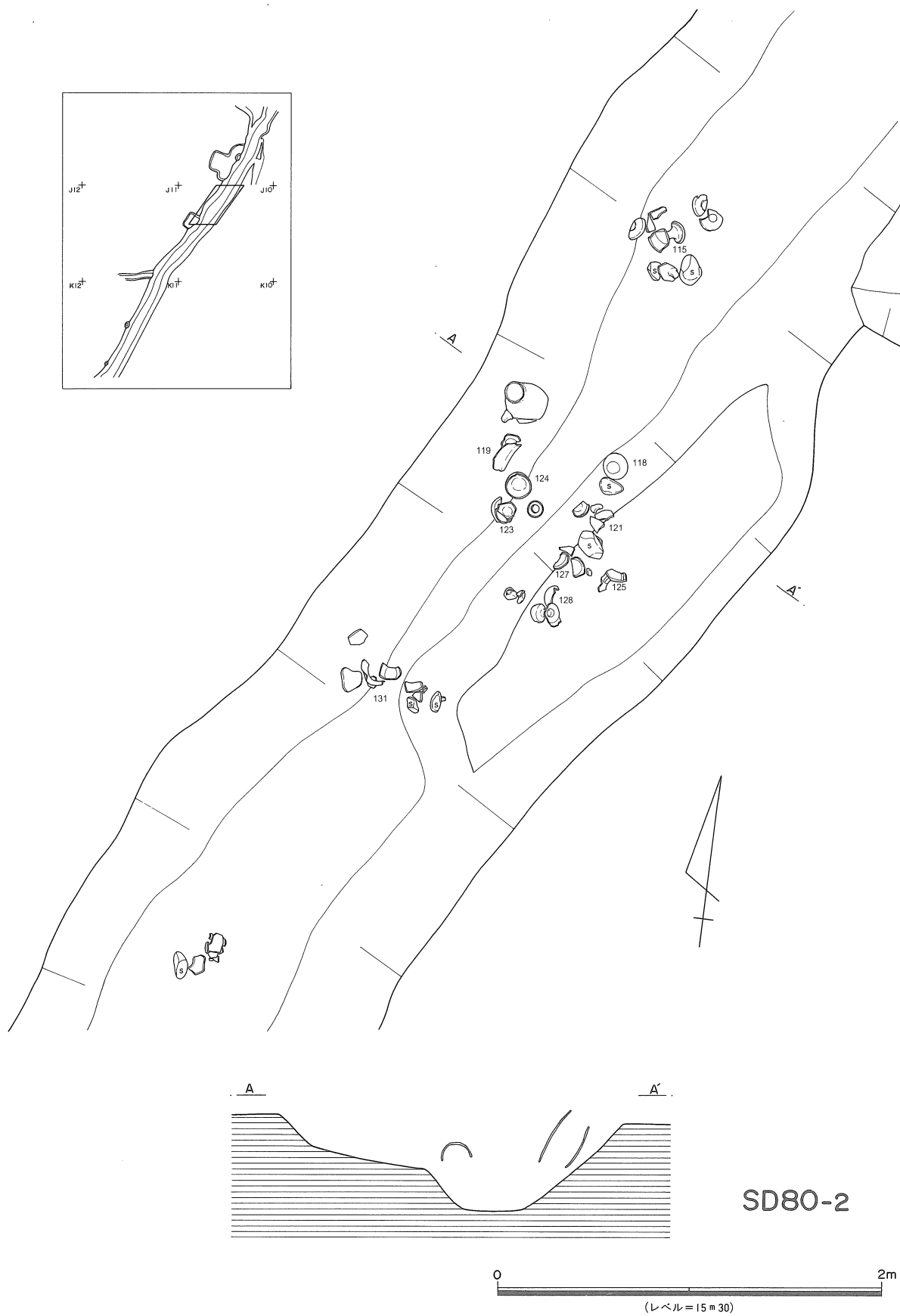
77～80はSD185の溝底に設置されており18世紀～19世紀前葉まで利用されていた竹管使用の水道管のジョイントである。墨書の見られるものだけ図化した。墨書の意味は確実なところはよく分からないが、「十八」や「貳百」などの数字に関するものがジョイントだけでなく竹管にも観察されたので、ジョイントの設置位置を決める番号を記載したものと思われる。77～79の横置きのは直線部分、80の縦置きのは方向の変換点に設置されていた。材質は水と腐食に強い芯持ちの松材を使用しており、設置面については加工せずに表皮を残していた。

【 参考文献 】

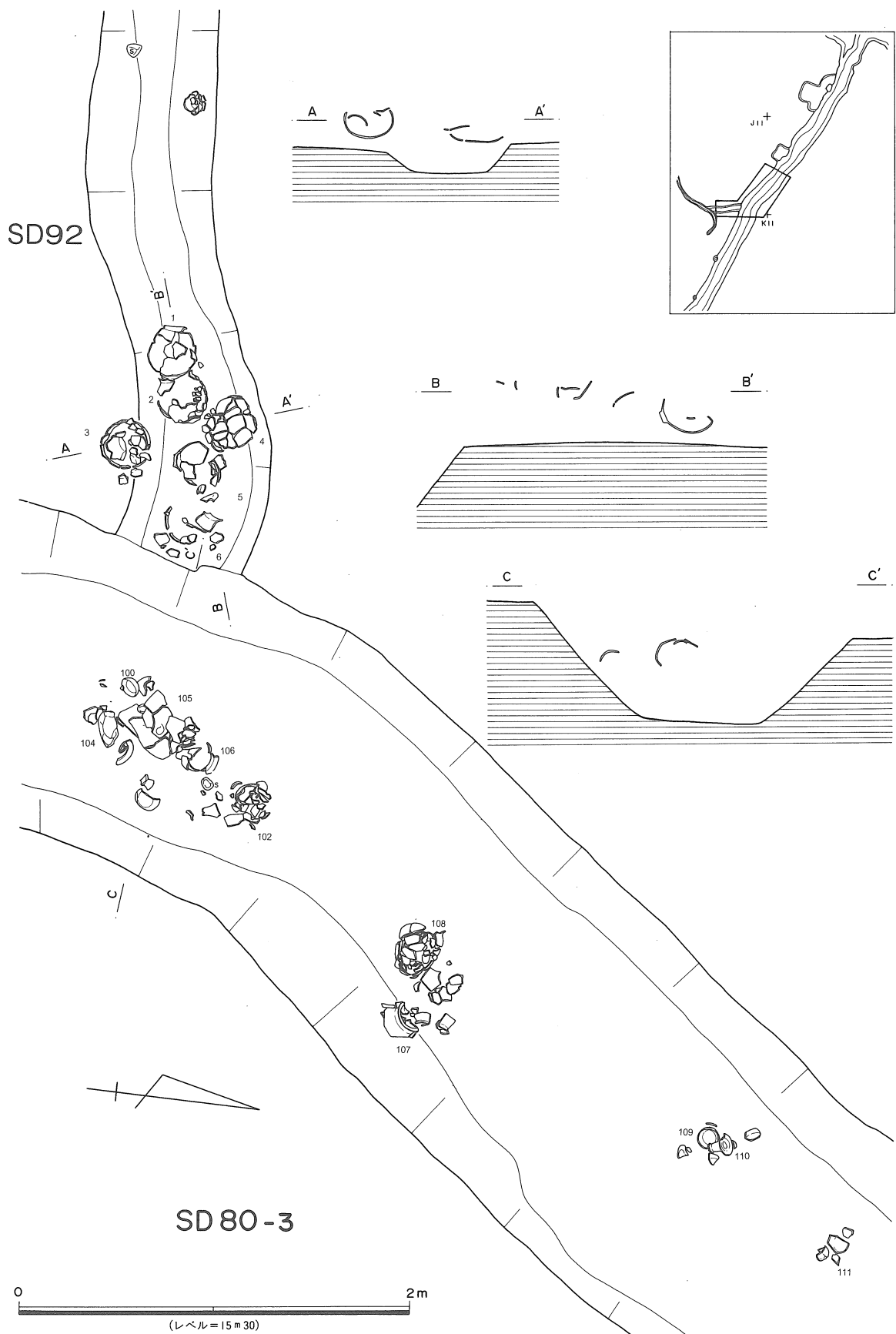
- | | | |
|---------------|------|--|
| 浜松市教育委員会 | 1988 | 『半田山古墳群Ⅳ中支群－浜松医科大学内－』 |
| 袋井市教育委員会他 | 1985 | 『坂尻遺跡－序文・古墳時代編－』 |
| 袋井市教育委員会 | 1993 | 『平成4年度補助金関係発掘調査報告書』 |
| 浅羽町教育委員会 | 1993 | 『古新田Ⅱ（遺物編）』 |
| 沼津市歴史民俗資料館 | 1992 | 『下駄』 |
| 静岡県埋蔵文化財調査研究所 | 1989 | 『原川遺跡Ⅱ』 |
| 大橋康二 | 1984 | 「肥前陶磁の変遷と出土分布」『国内出土の肥前陶磁』九州陶磁文化館 |
| 後藤健一 | 1983 | 「まとめ」『東笠子遺跡群発掘調査概報』湖西市教育委員会 |
| 佐野五十三 | 1990 | 「清郷型甕の研究－煮沸形態から見た古代末の東海地方－」『静岡県埋蔵文化財調査研究所紀要』Ⅱ
静岡県埋蔵文化財調査研究所 |
| 田口昭二 | 1983 | 「美濃窯における白瓷と山茶碗」『土岐市美濃陶磁歴史館報』Ⅱ 土岐市美濃陶磁歴史館 |
| 田辺昭三 | 1966 | 『陶邑古窯跡群1』平安学園考古学クラブ |
| 中野晴久 | 1986 | 「近世常滑焼における甕の編年の研究ノート」『常滑市民俗資料館研究紀要』Ⅱ 常滑市民俗資料館 |
| 中野晴久 | 1994 | 「知多（常滑）古窯址群の山茶碗について」『研究紀要』第3号 三重県埋蔵文化財センター |
| 新田 洋 | 1985 | 「平安時代～中世における煮沸用具－「伊勢型」鍋－に関する若干の覚書」『三重県考古学研究』創刊号
三重県考古学談話会 |
| 藤沢良祐 | 1989 | 「本業焼の研究3」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ⅷ 瀬戸市歴史民俗資料館 |
| 藤沢良祐 | 1994 | 「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要』第3号 三重県埋蔵文化財センター |
| 松井一明 | 1989 | 「灰釉陶器をつくる人々」『浜北史通史 上巻』浜北市 |
| 松井一明 | 1989 | 「宮口古窯跡群と清ヶ谷古窯跡群における須恵器陶器生産の一考察」『静岡県の窯業遺跡』
静岡県教育委員会 |
| 松井一明 | 1993 | 「遠江における山茶碗生産について」『静岡県考古学研究』No25 静岡県考古学会 |
| 松井一明 | 1993 | 「遠江のかわけ編年」『久野城Ⅳ』袋井市教育委員会 |
| 八木勝行 | 1990 | 「志太地域における律令須恵器について」『藤枝市郷土博物館年報・紀要』No2 藤枝市郷土博物館 |



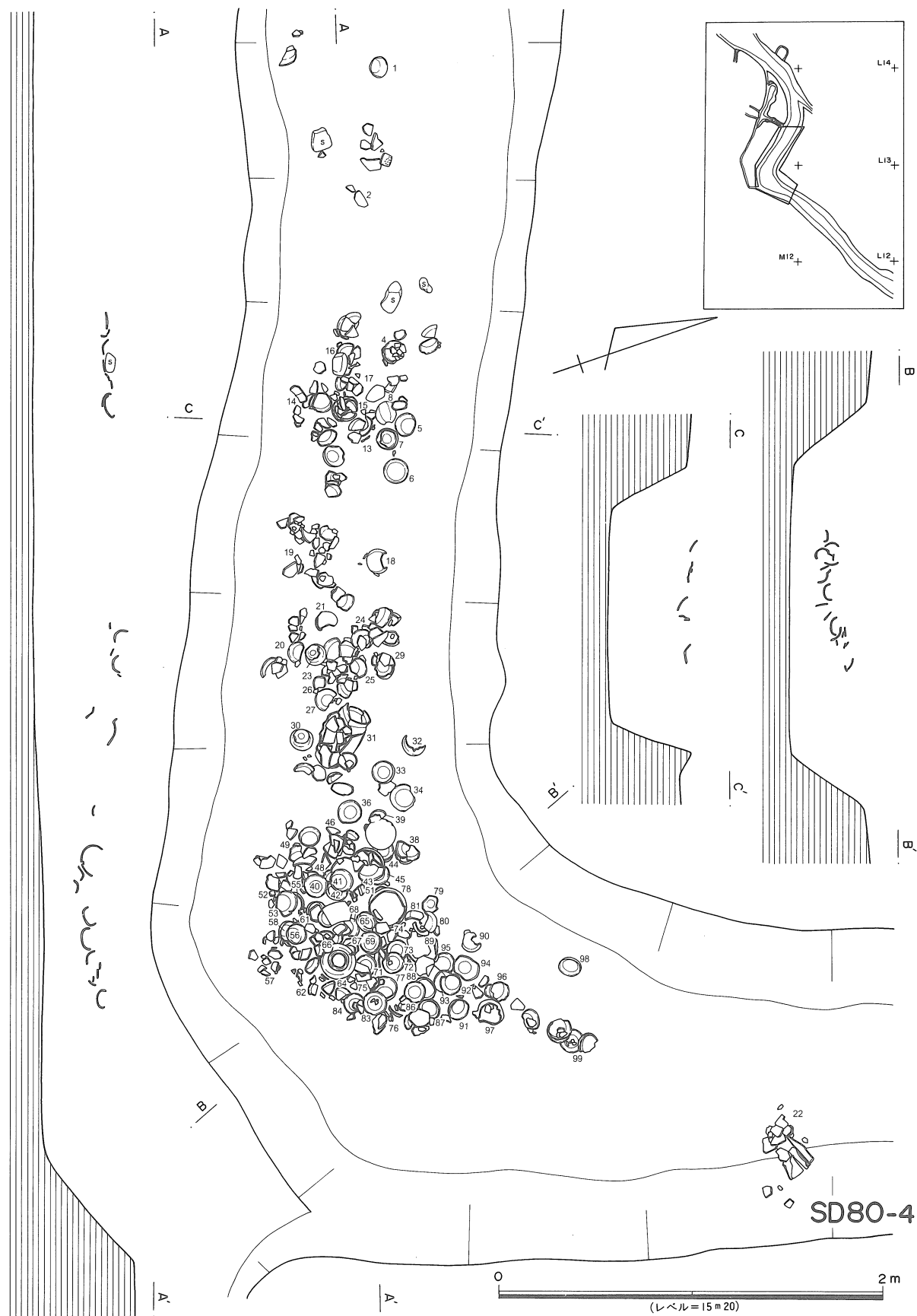
第 1 図 SD80 遺物出土状態図 1



第 2 図 SD80 遺物出土状態図 2



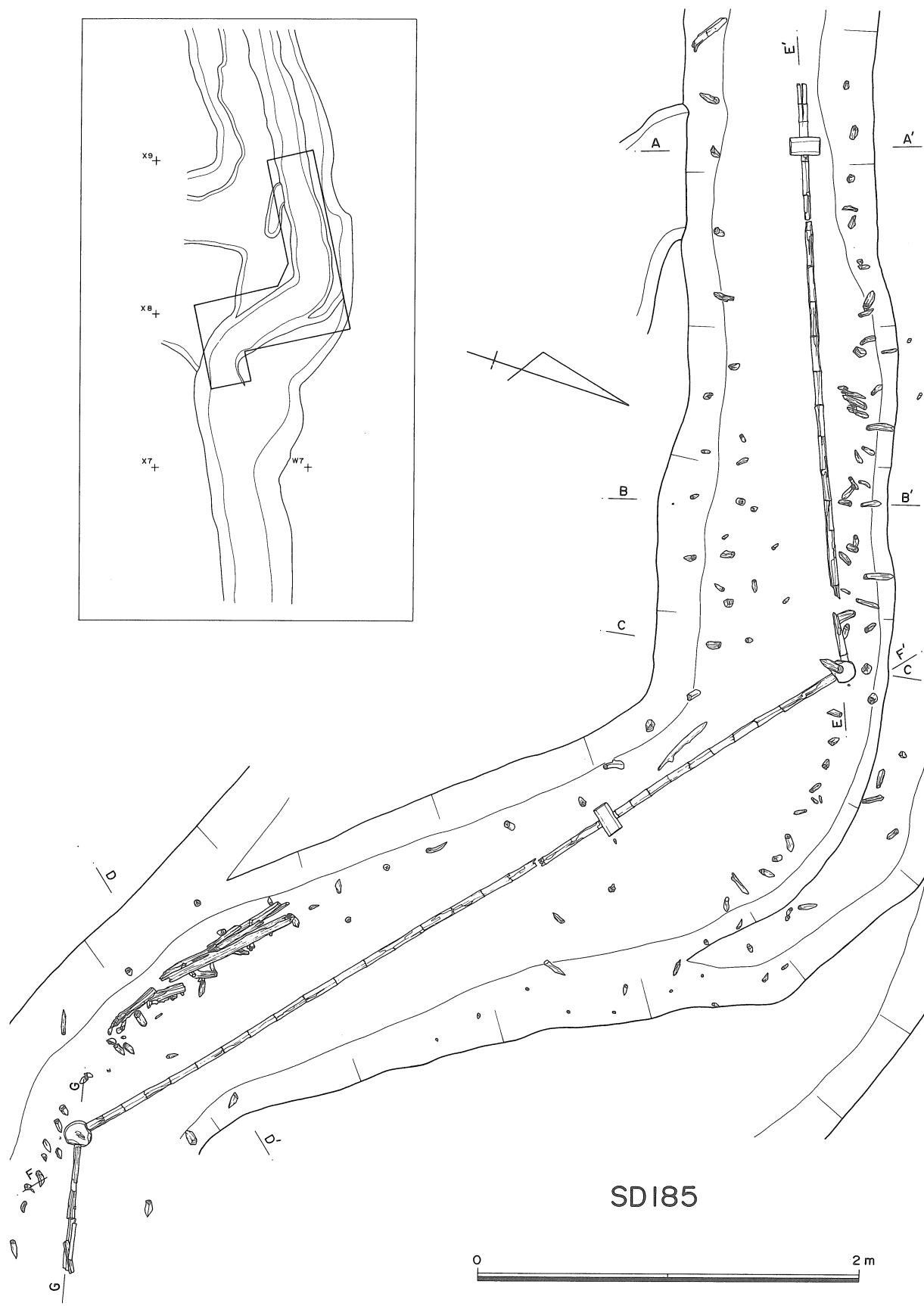
第 3 図 SD80 遺物出土状態図 3

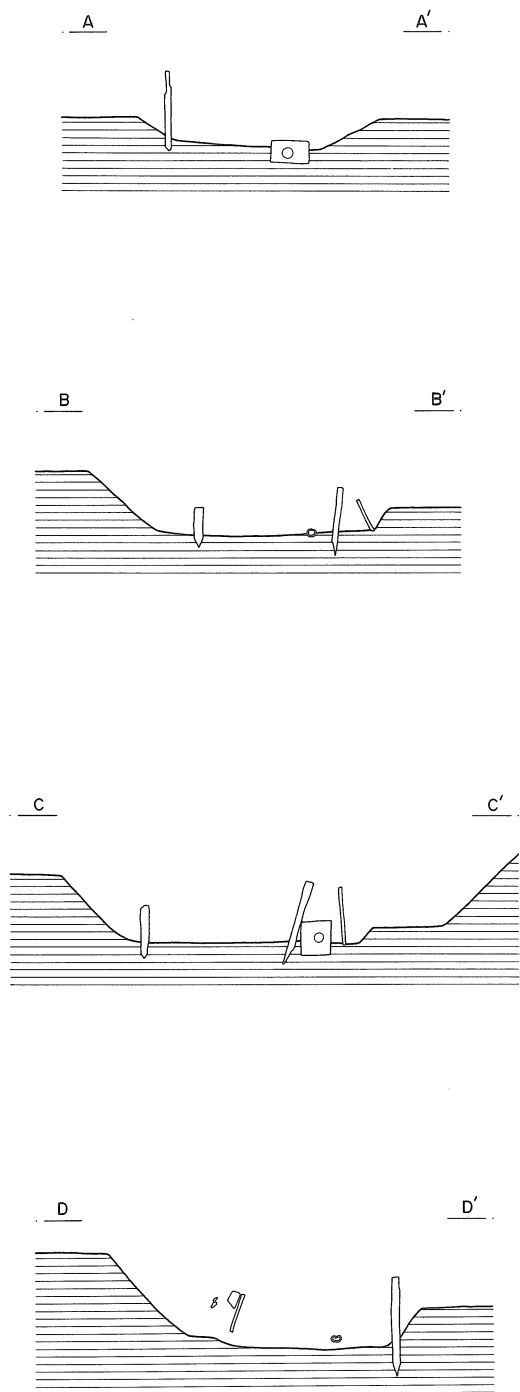


第 4 図 SD80 遺物出土状態図 4

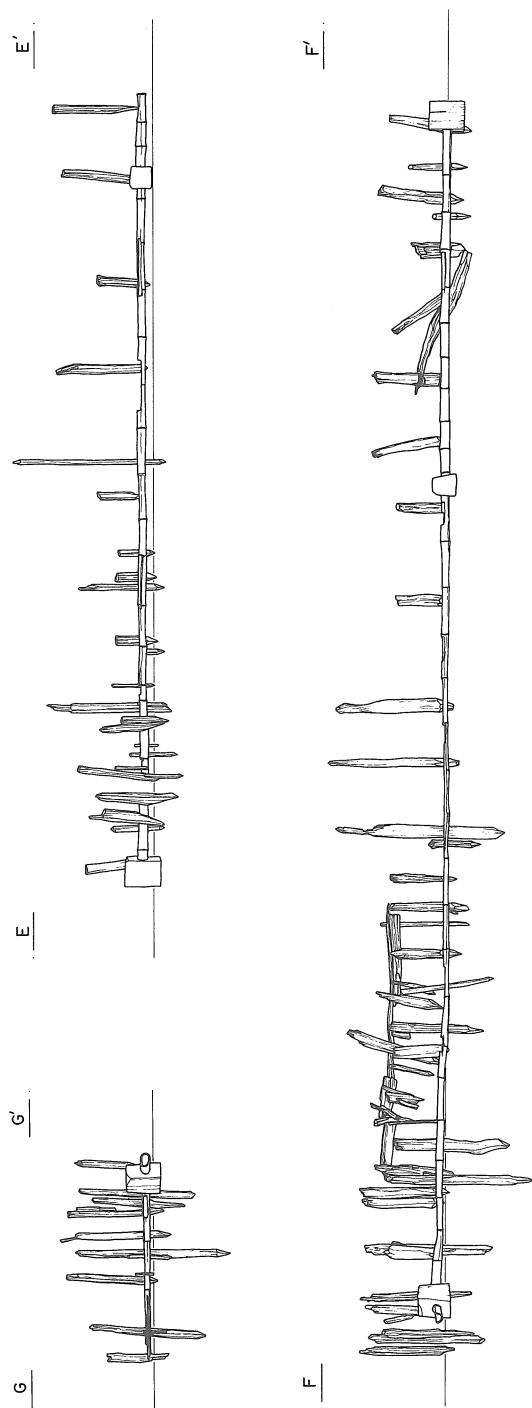


第 5 図 SD148 遺物出土状態図



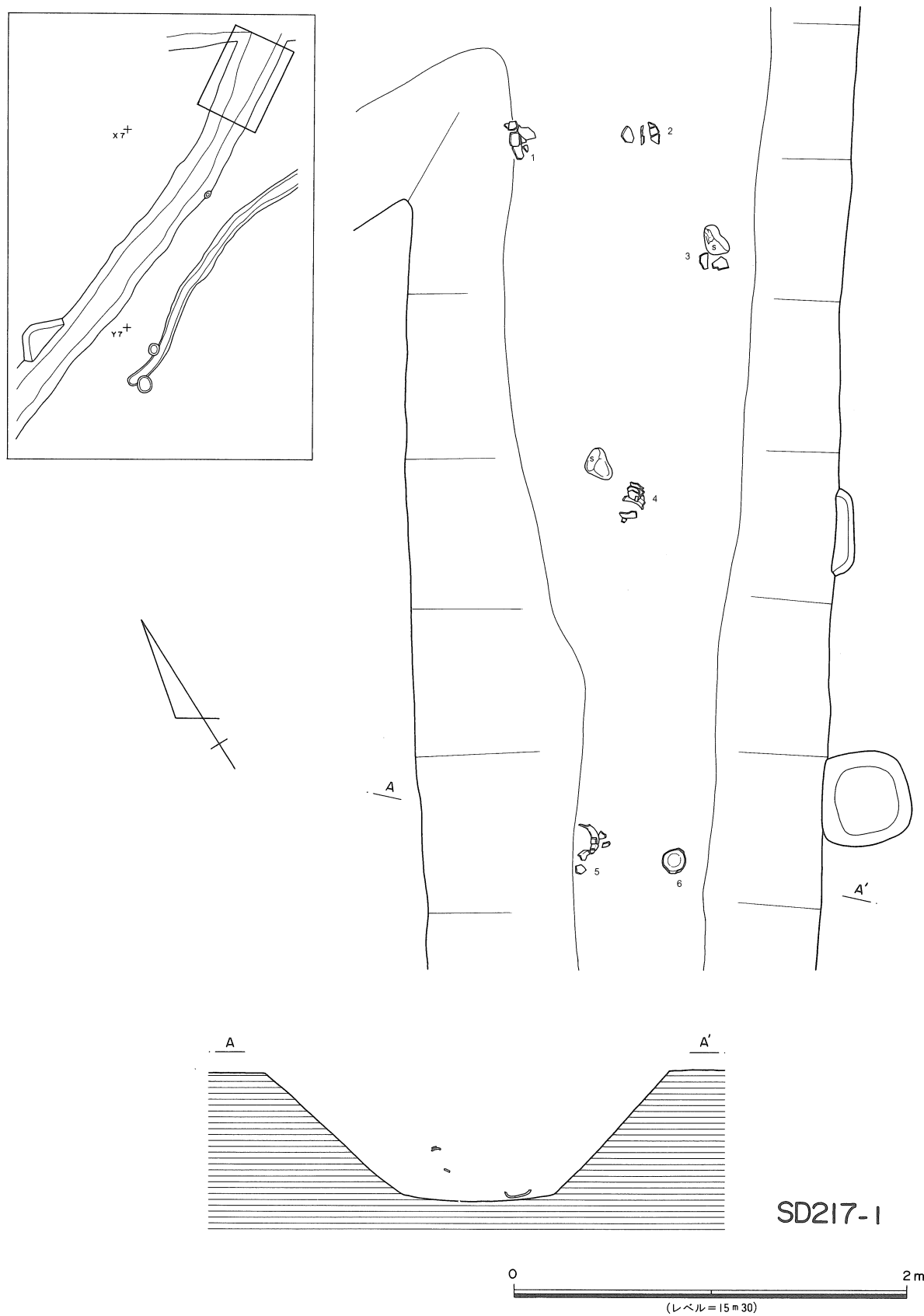


SD185

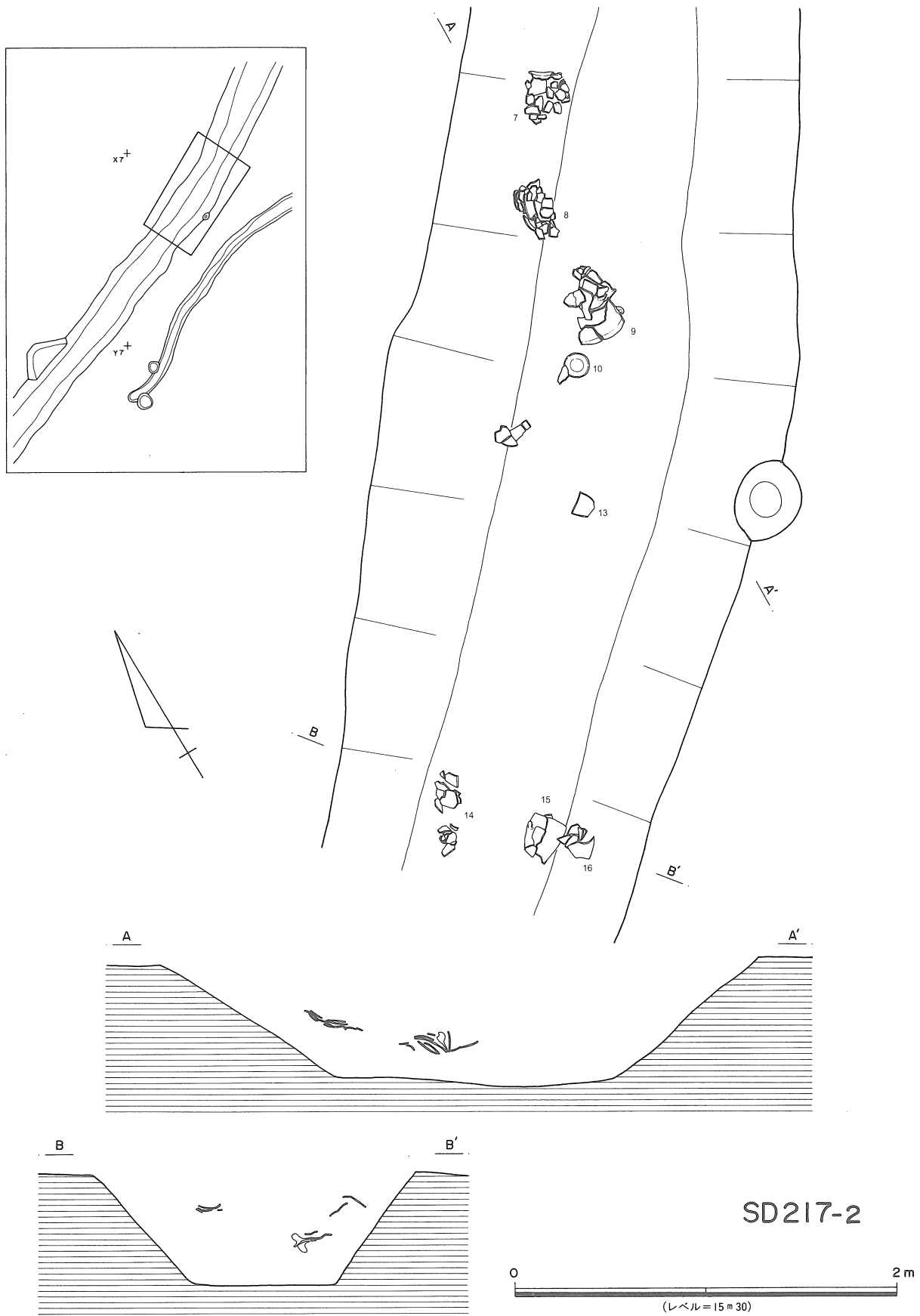


0 2 m
(レベル=15 m 30)

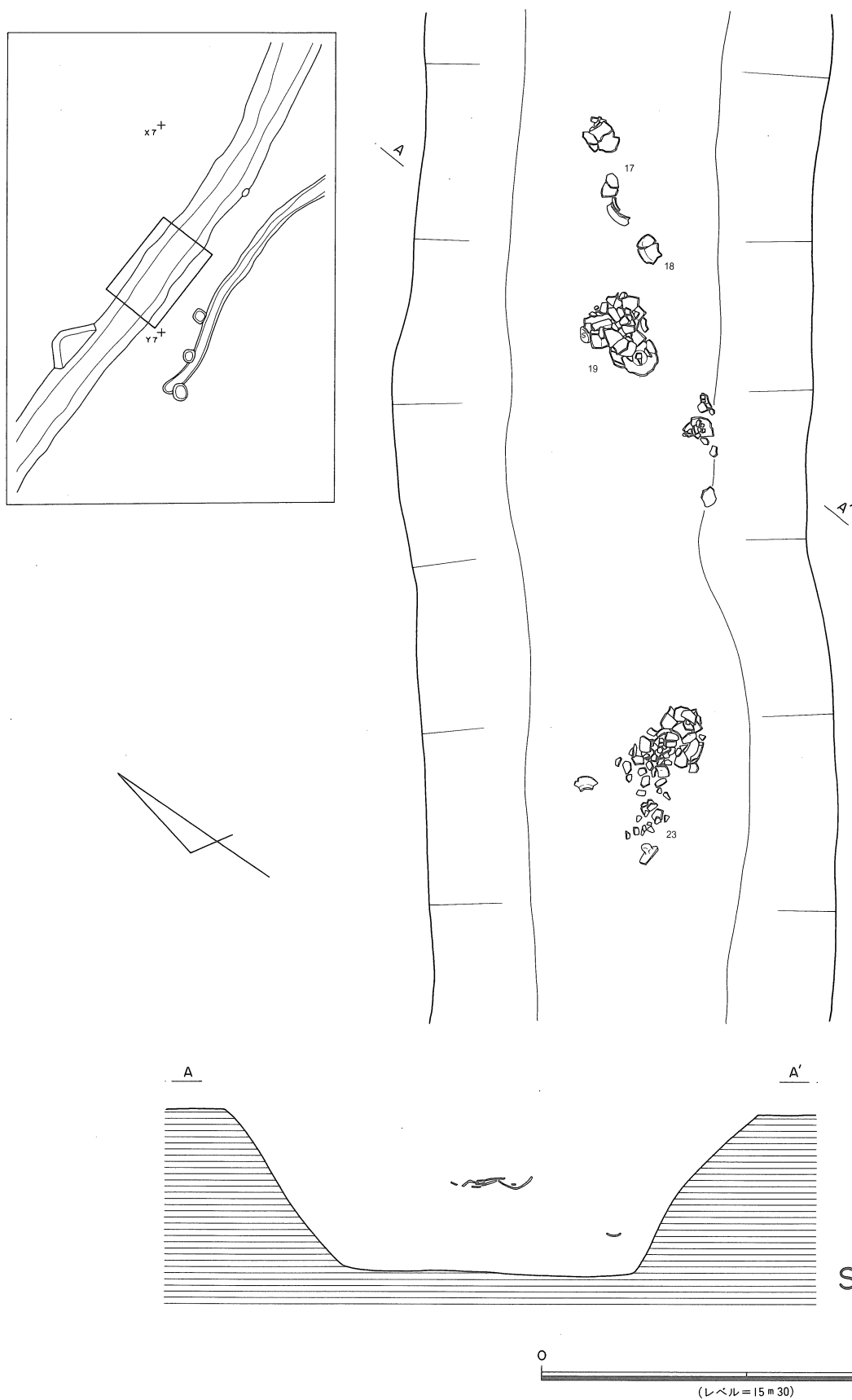
第7図 SD185 杭列・水道管検出図 2



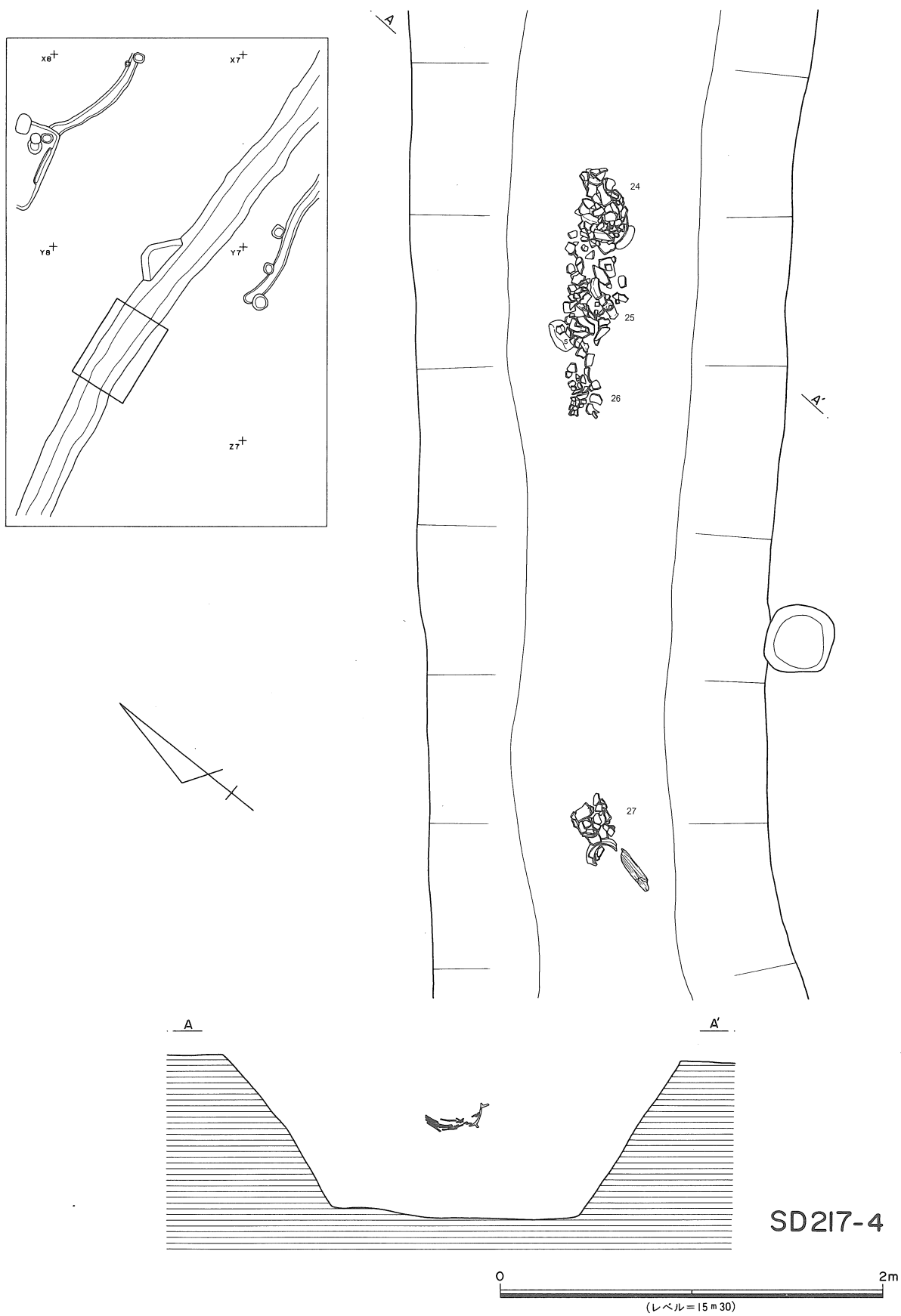
第 8 図 SD217 遺物出土状態図 1



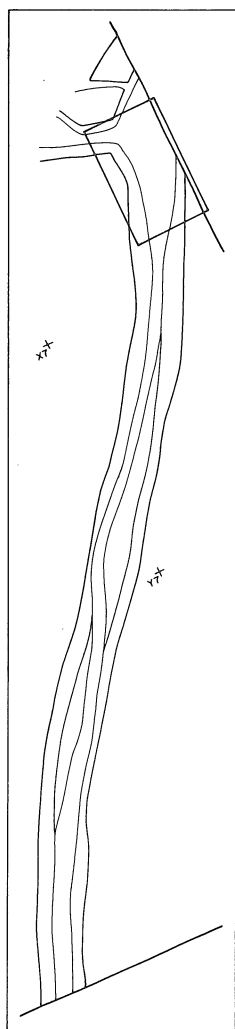
第 9 図 SD217 遺物出土状態図 2



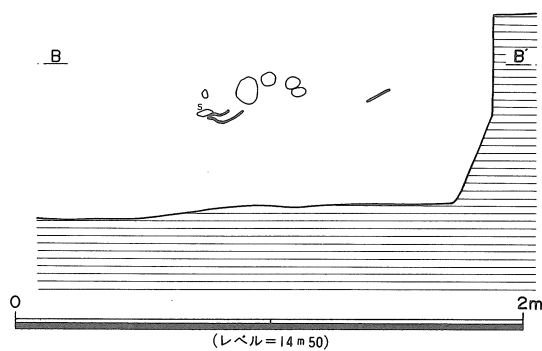
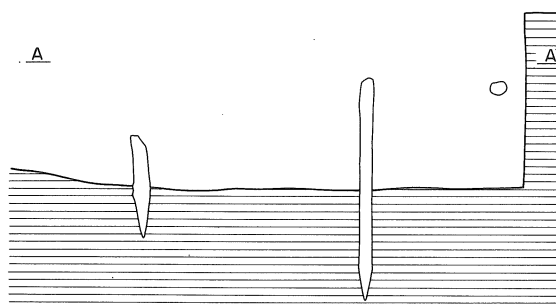
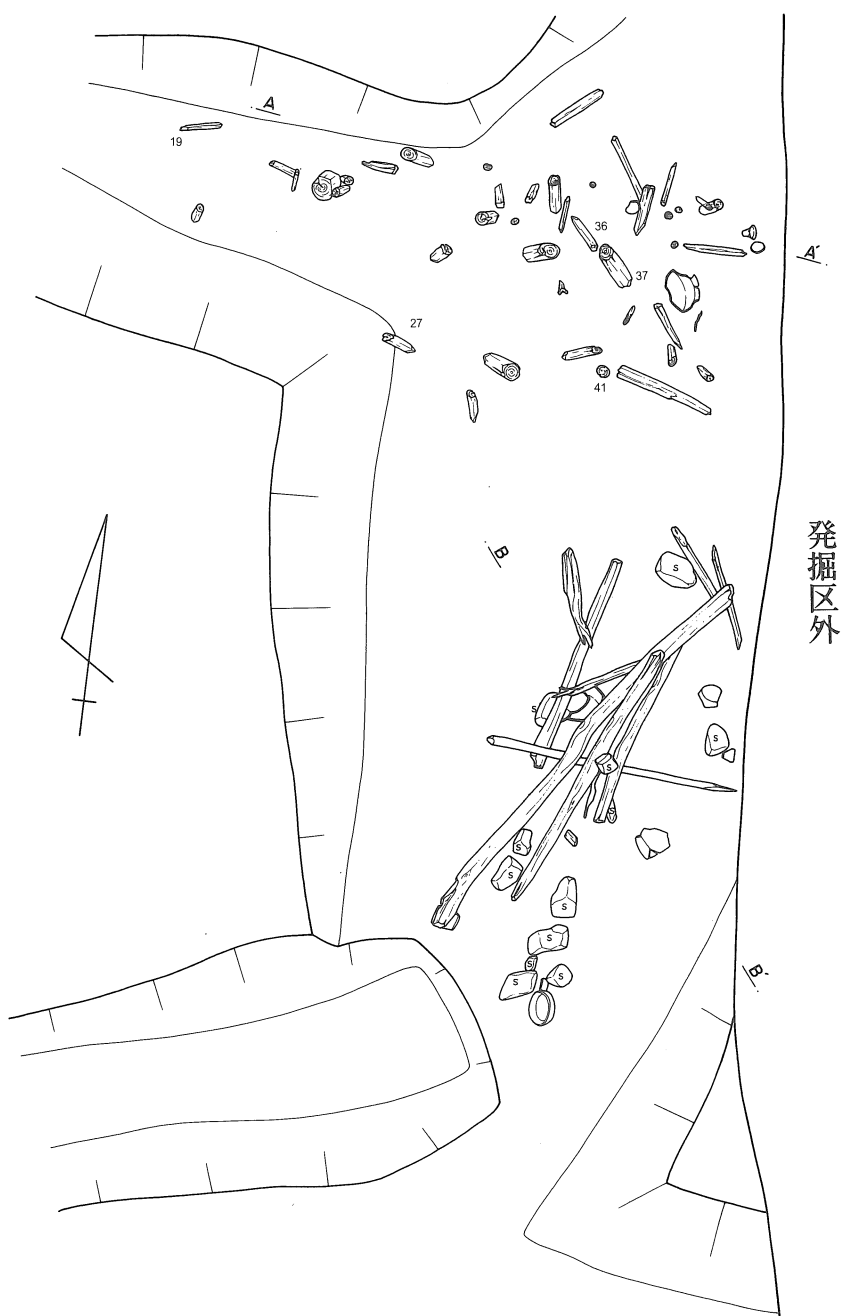
第10図 SD217 遺物出土状態図 3



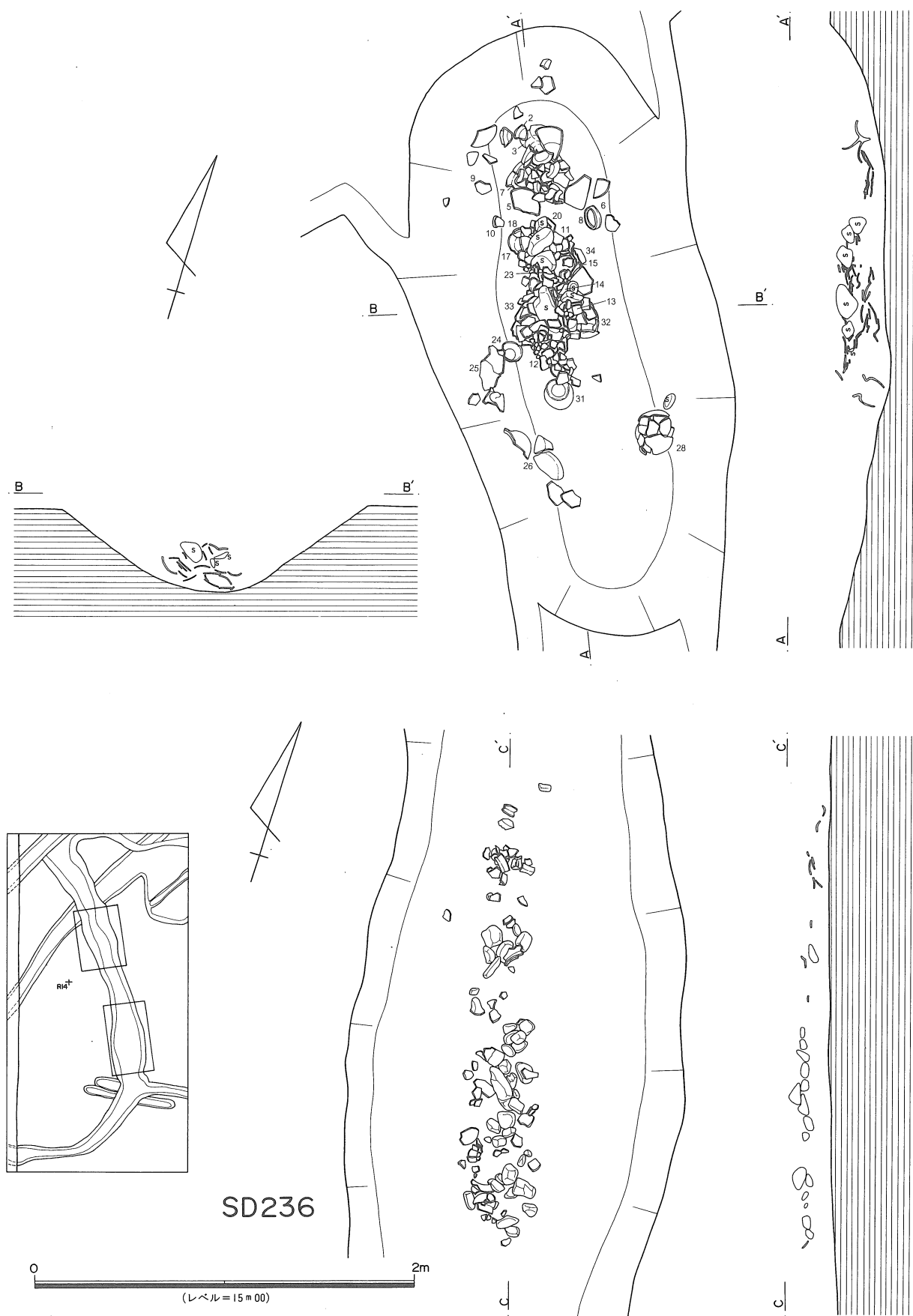
第11図 SD217 遺物出土状態図 4



SD217-5



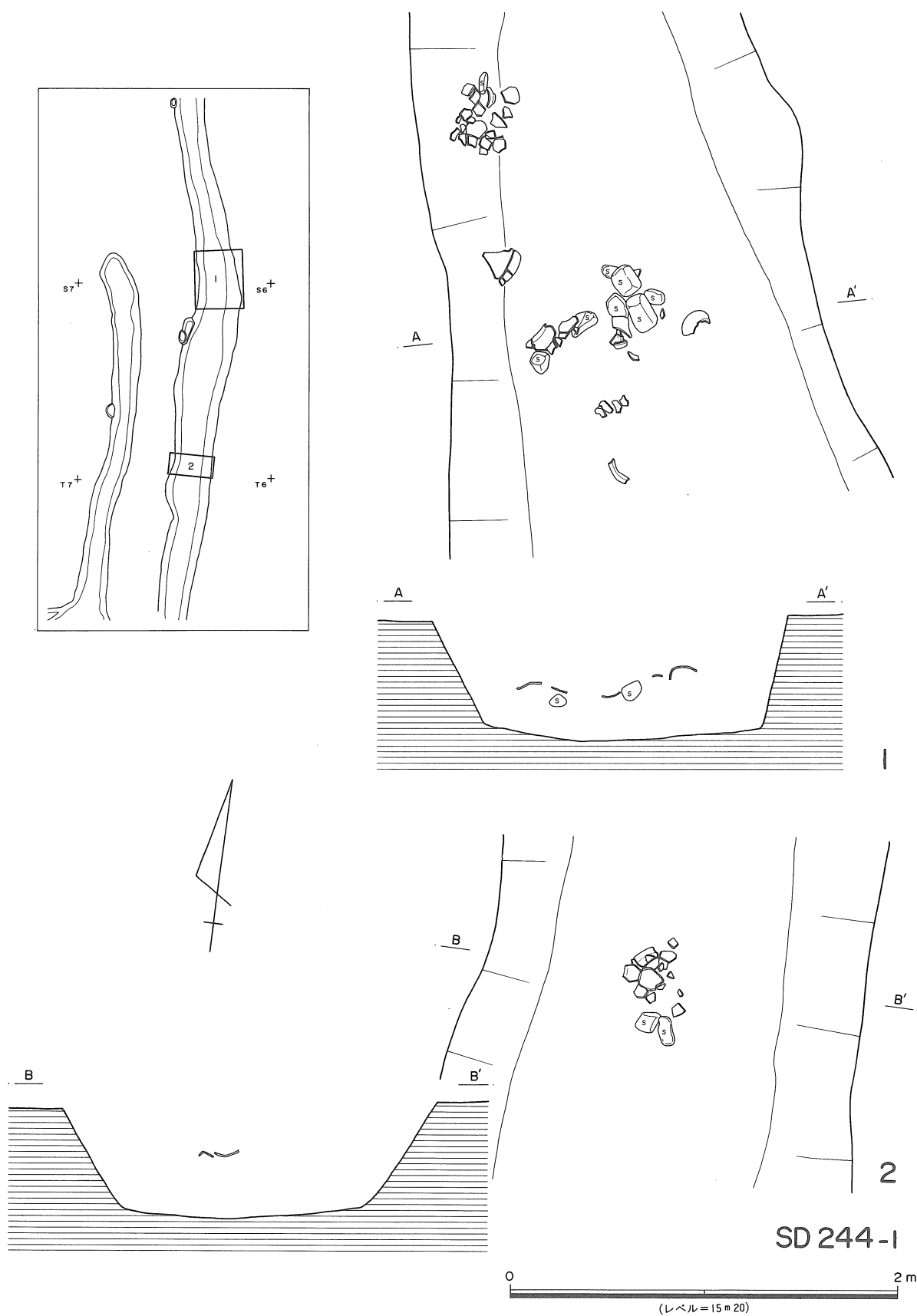
第12図 SD217 遺物出土状態図 5



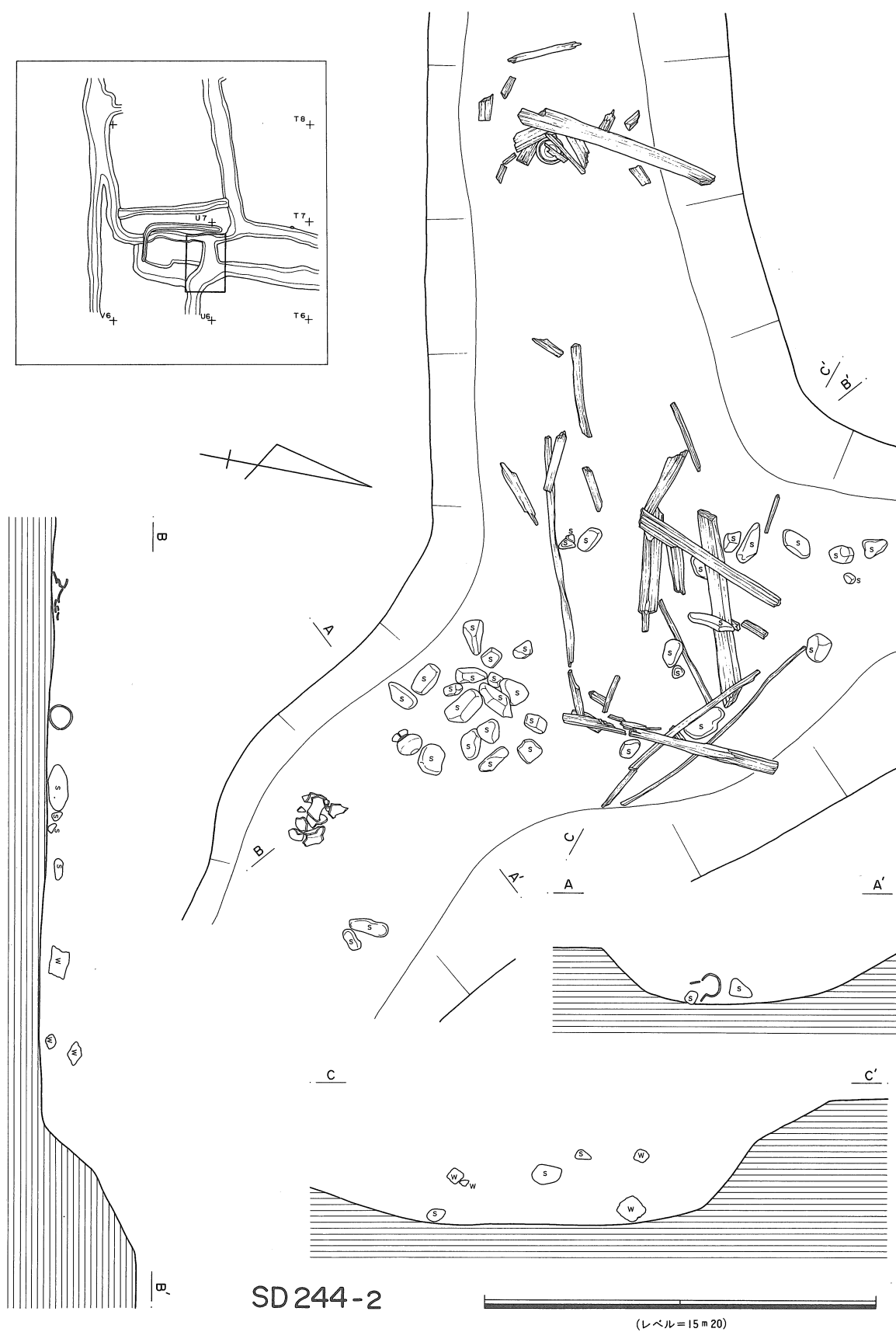
第13図 SD236 遺物出土状態図



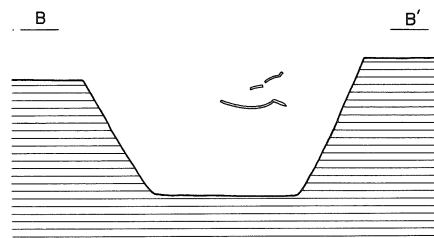
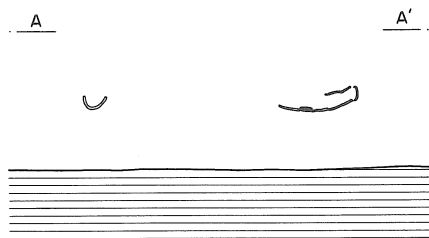
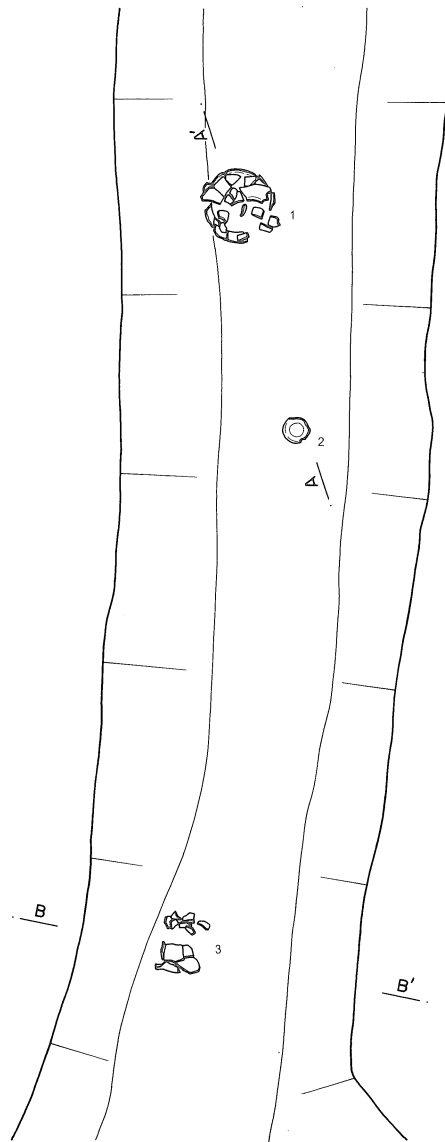
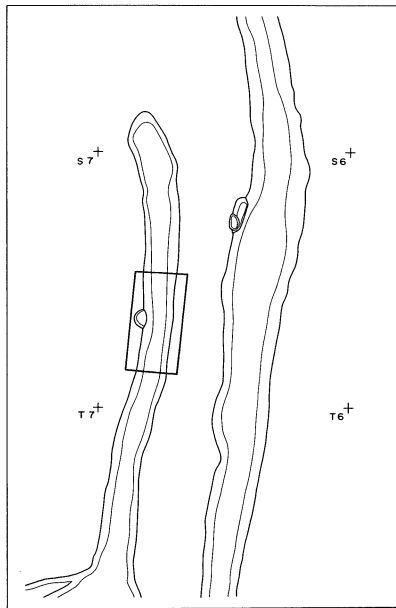
第14図 SD244 遺物出土状態図 (上層)



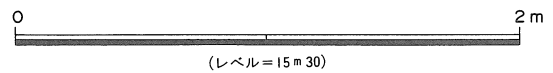
第15図 SD244 遺物出土状態図（下層1）



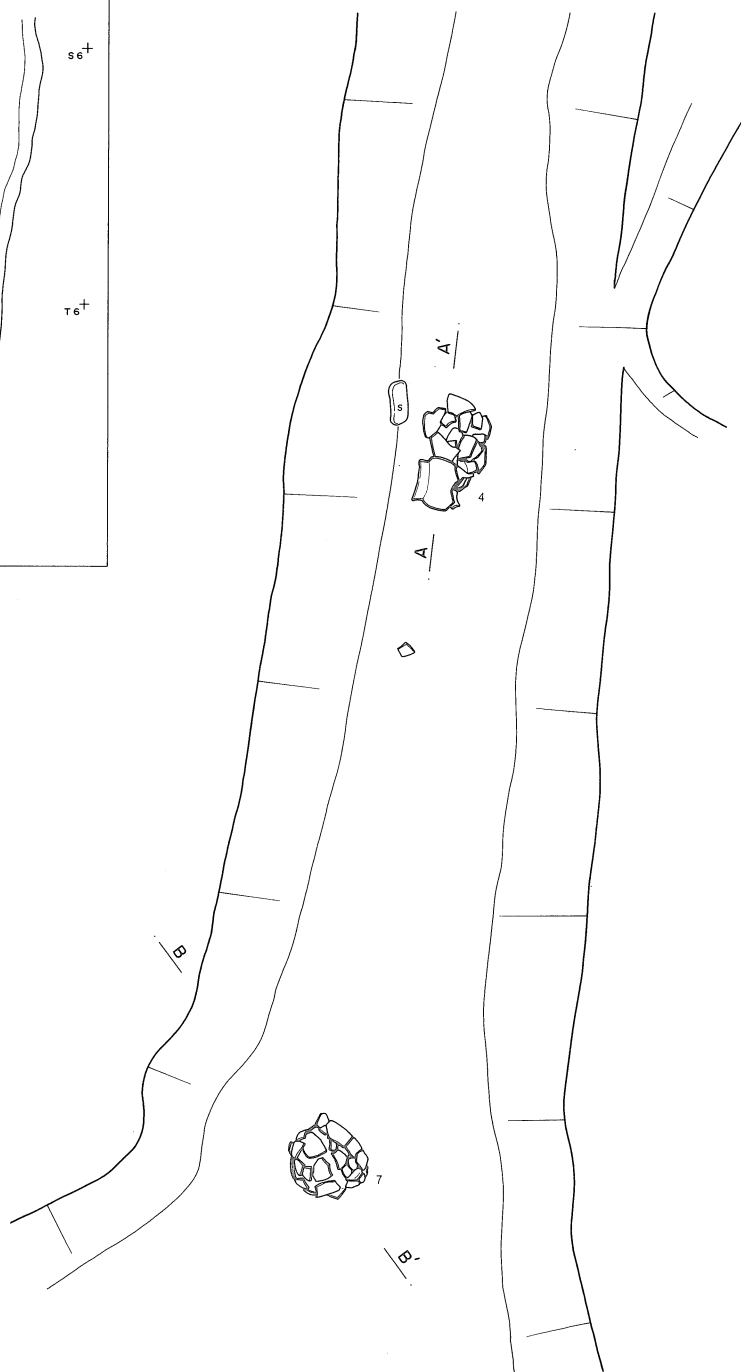
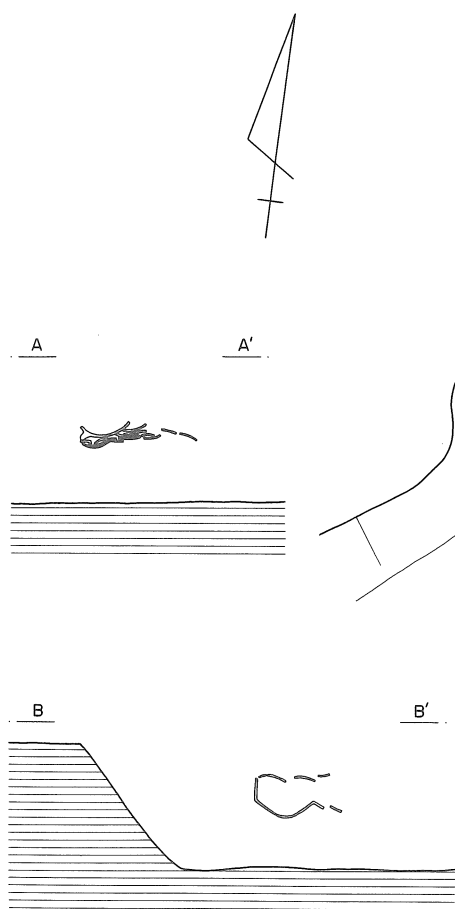
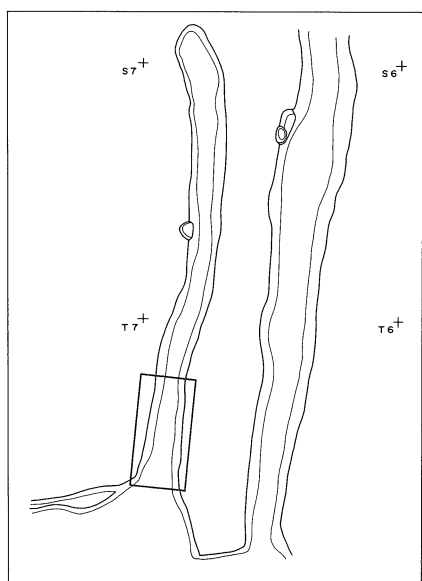
第16図 SD244 遺物出土状態図 (下層2)



SD246-1



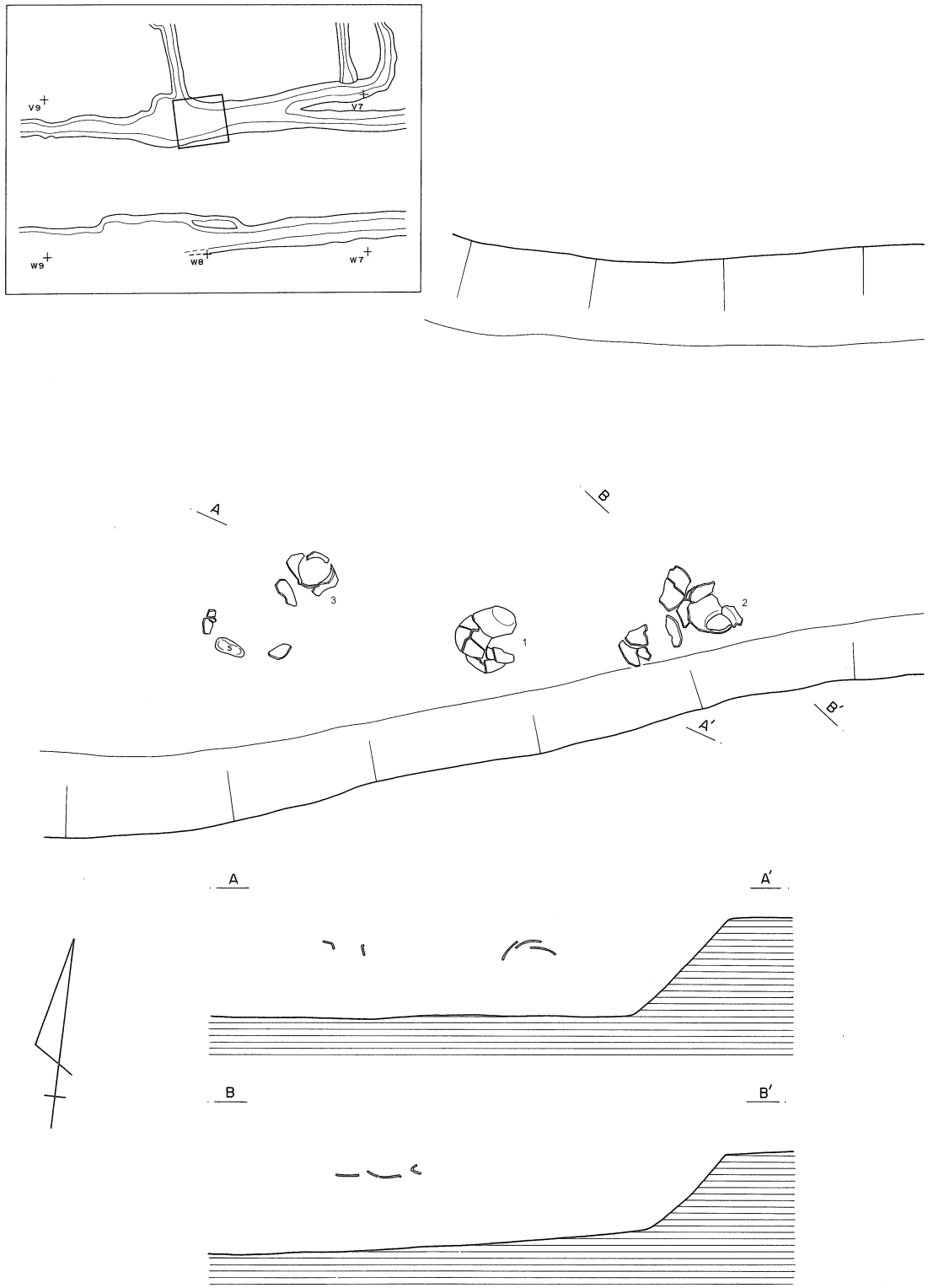
第17図 SD246 遺物出土状態図 1



SD 246-2

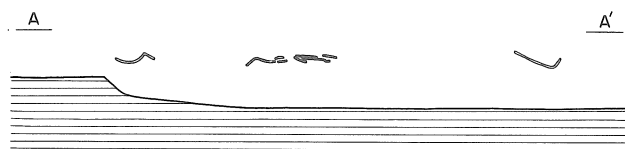
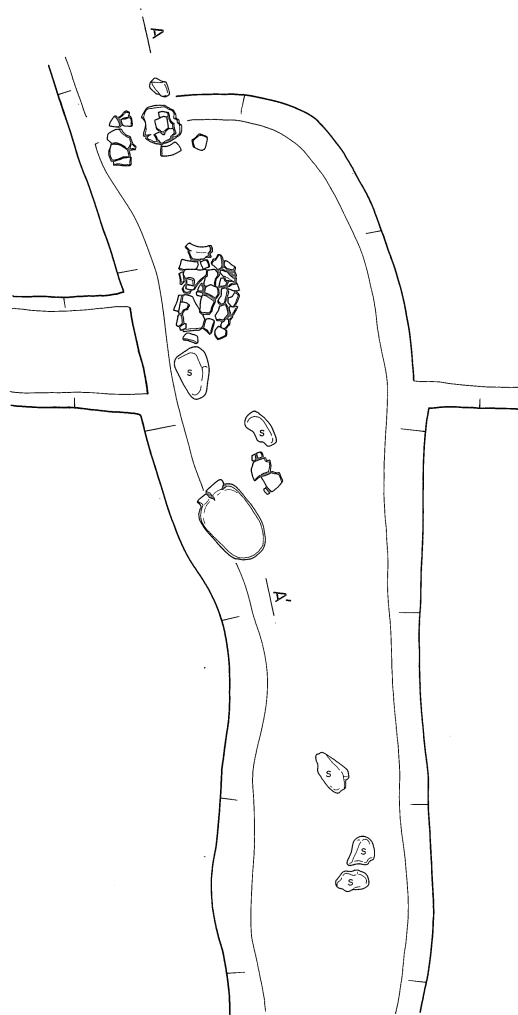
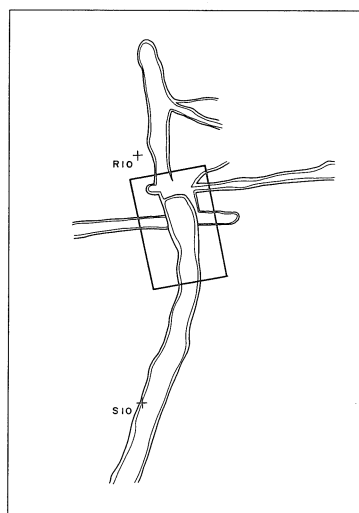
0 2m
(レベル = 15 m 20)

第18図 SD246 遺物出土状態図 2

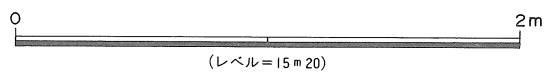


SD248

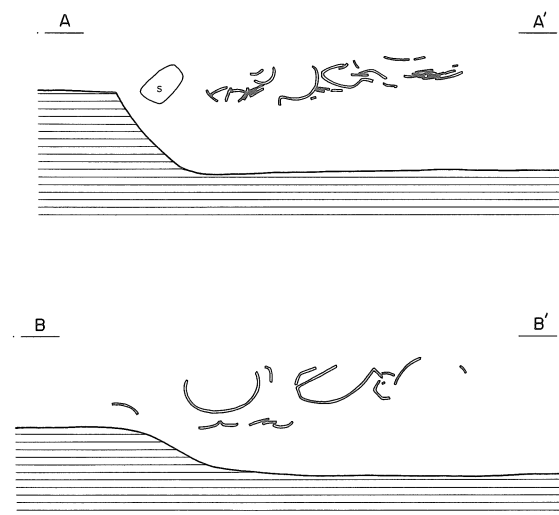
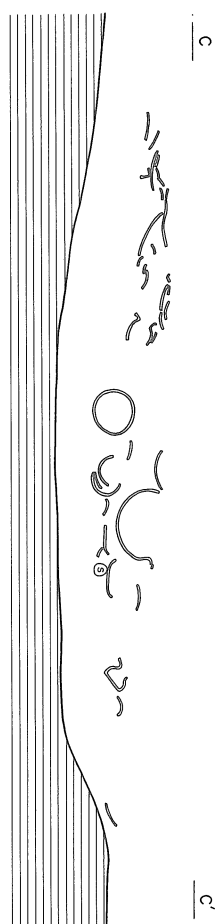
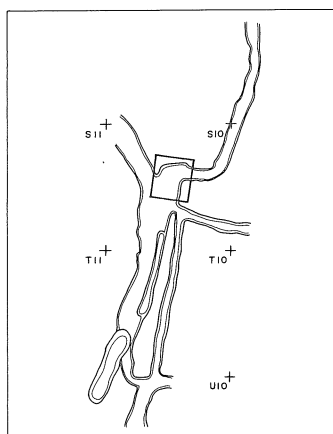
第19図 SD248 遺物出土状態図



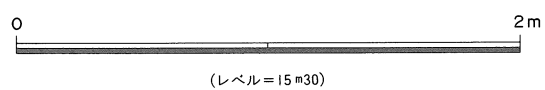
SD260-I



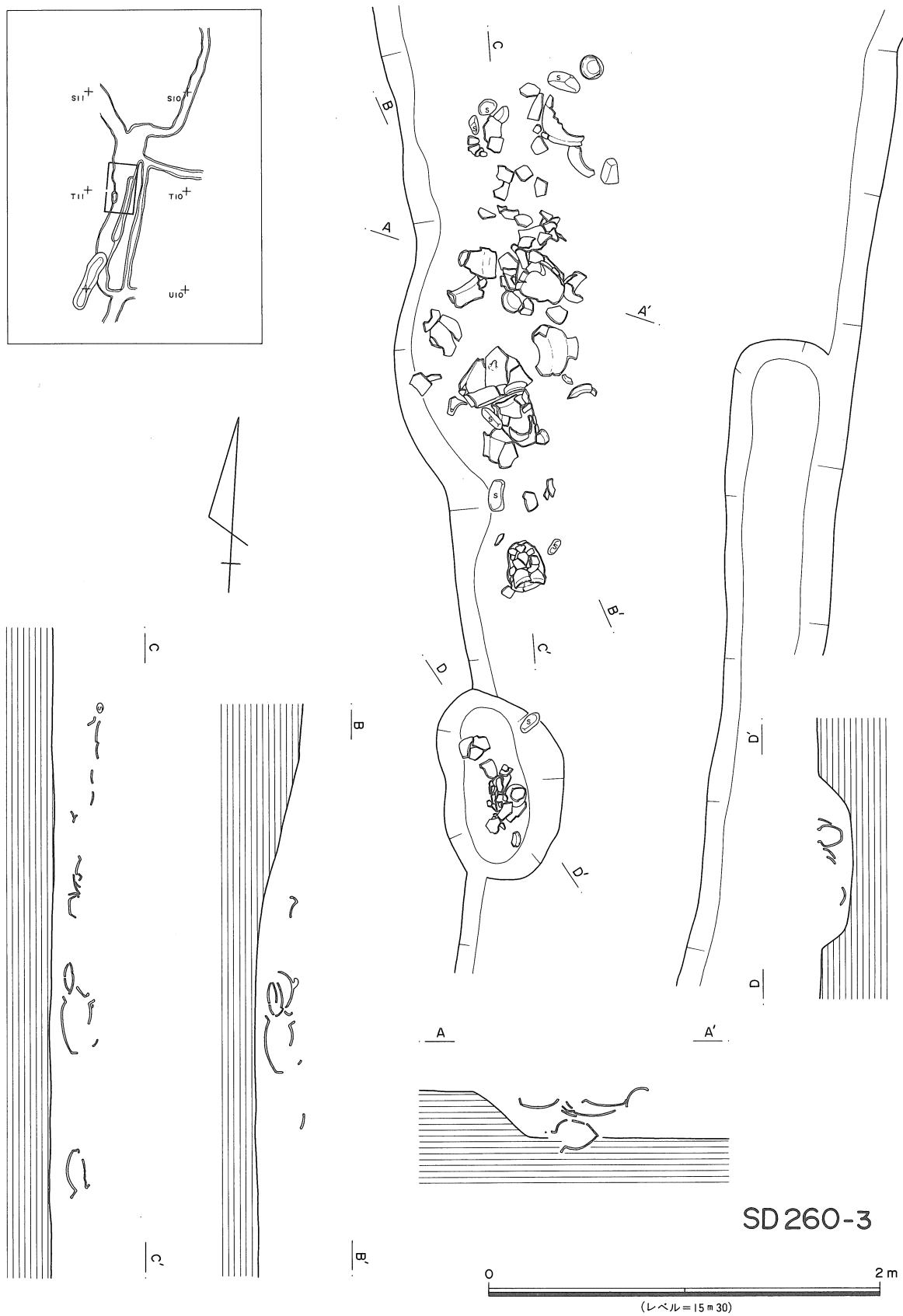
第20図 SD260 遺物出土状態図 1



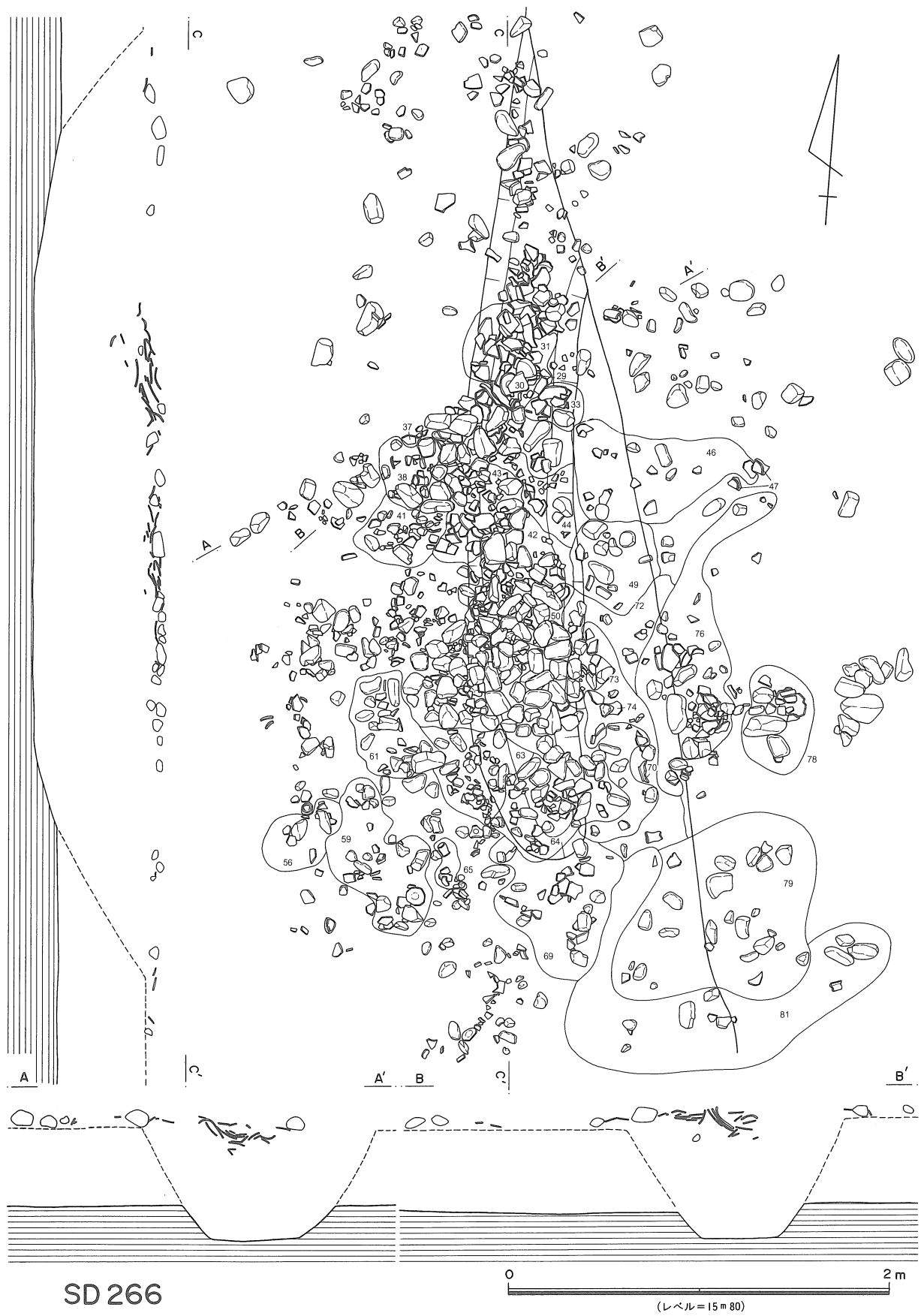
SD 260-2



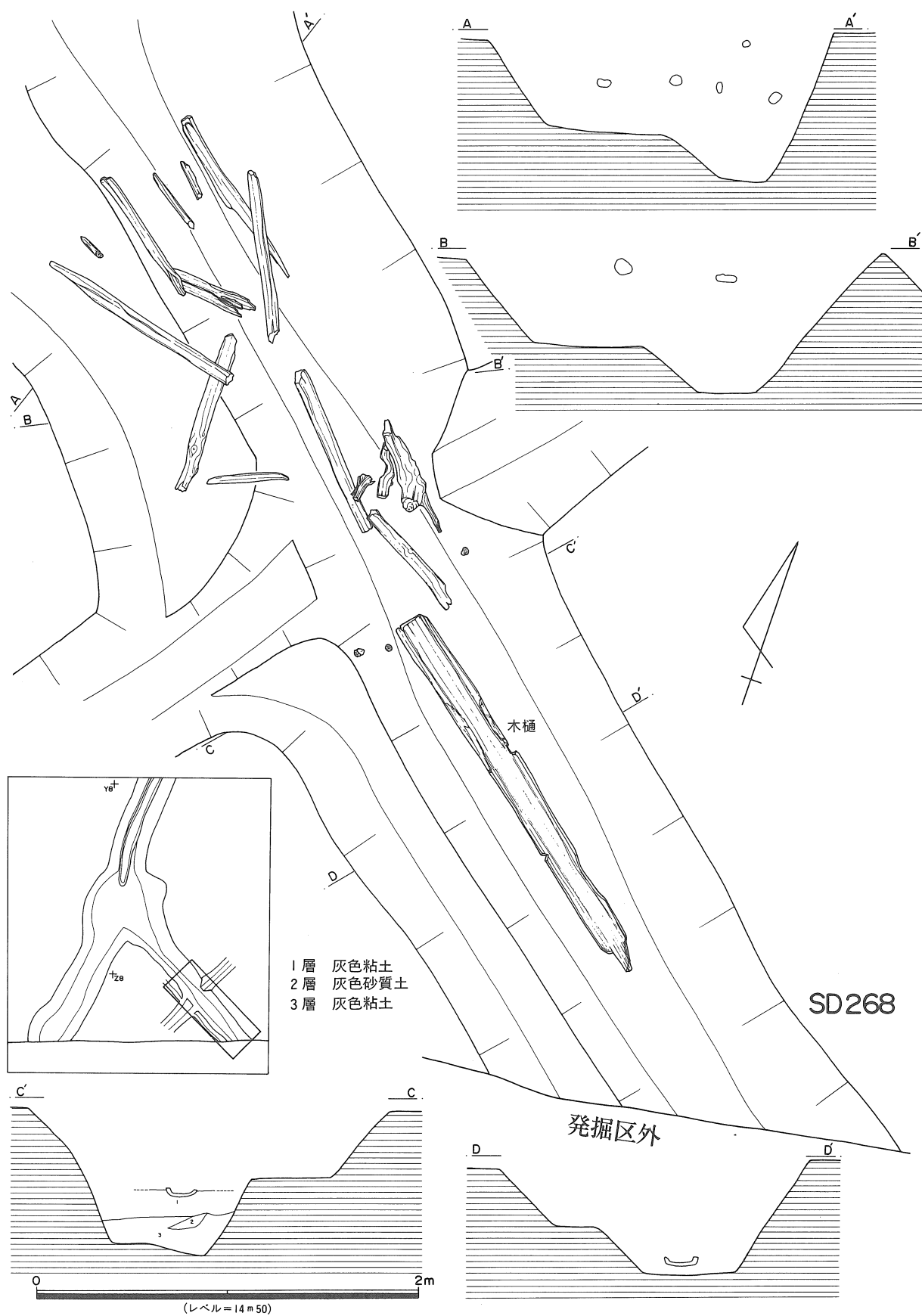
第21図 SD260 遺物出土状態図 2



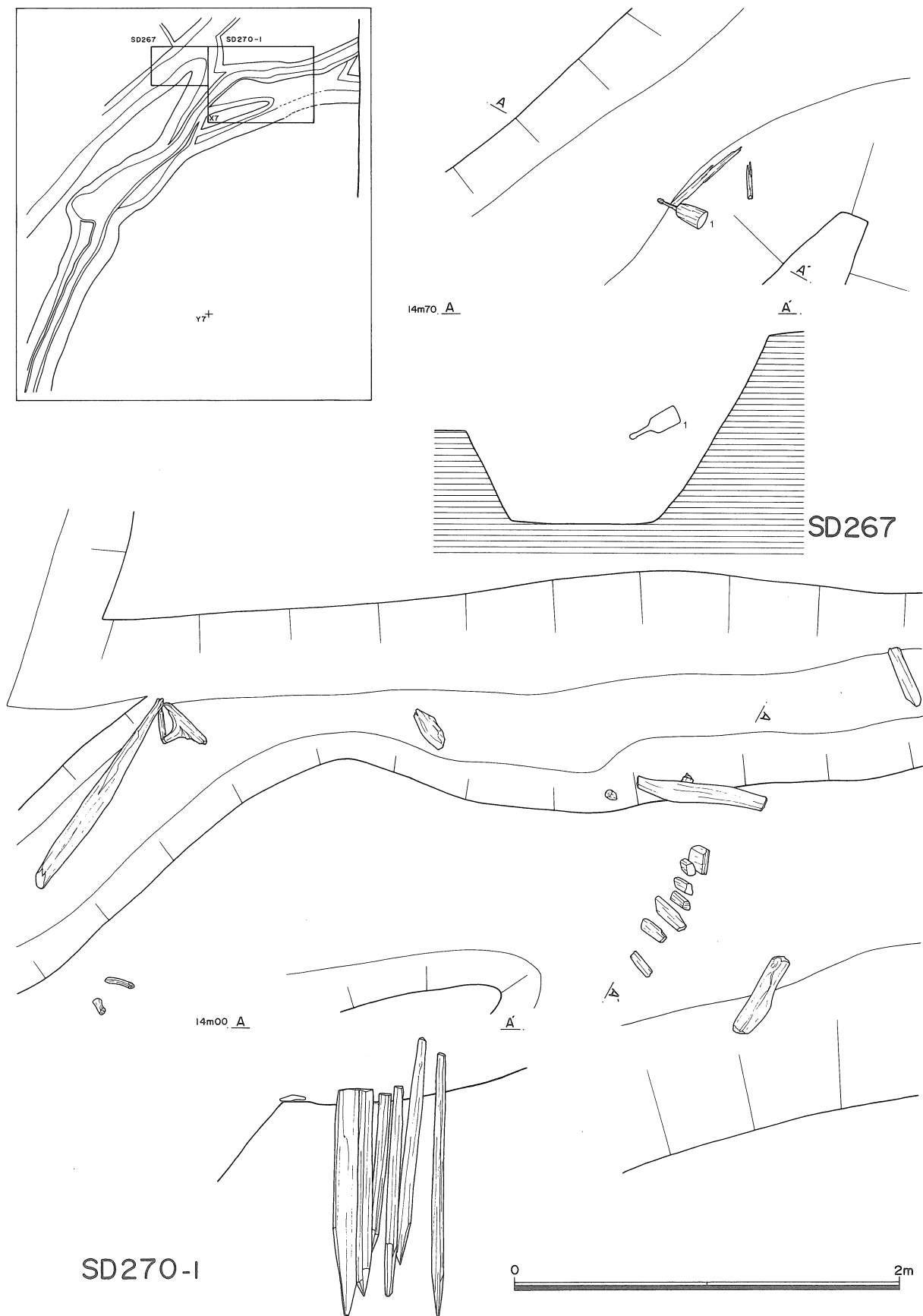
第22図 SD260 遺物出土状態図 3



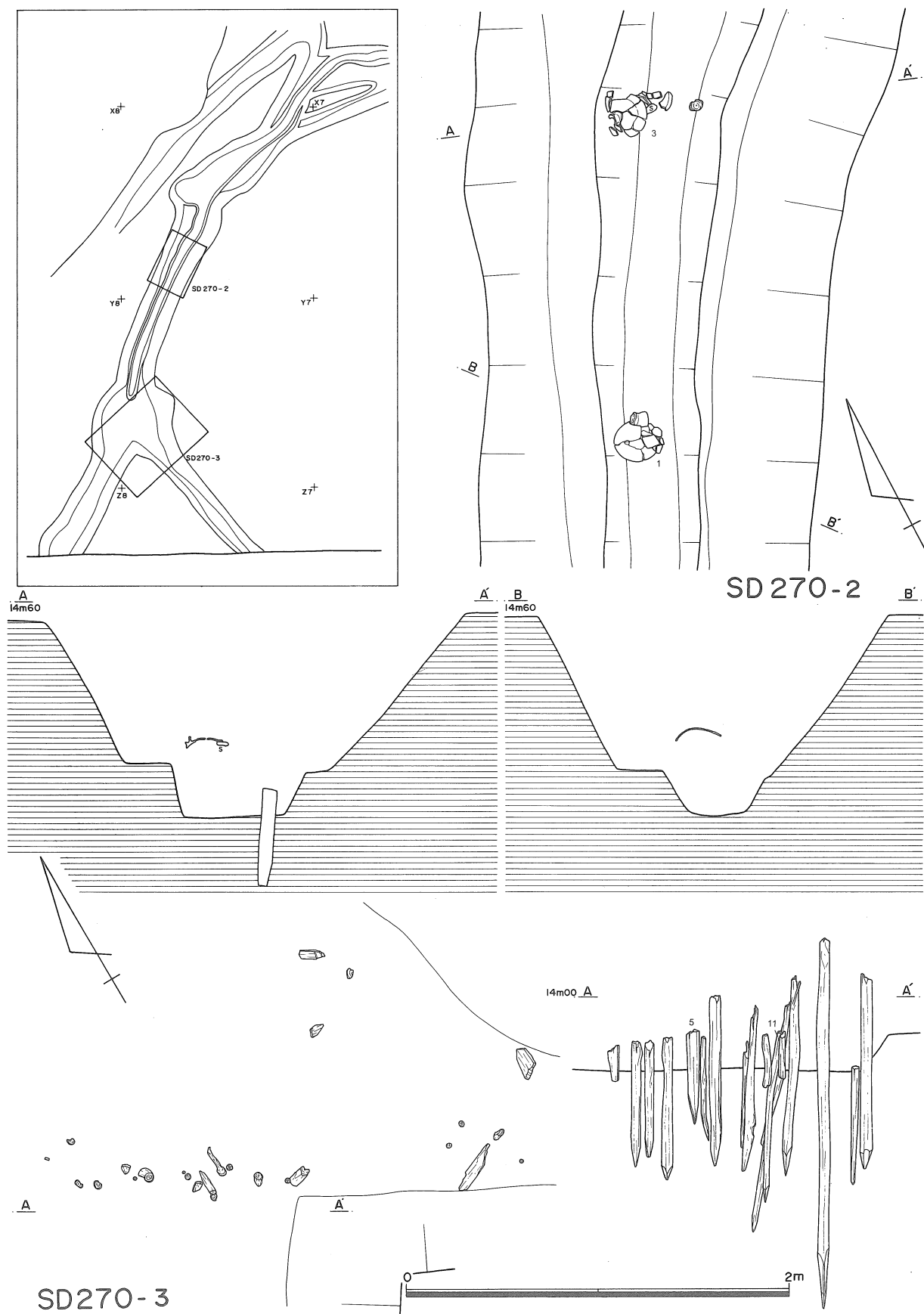
第23図 SD266 遺物出土状態図（上層）



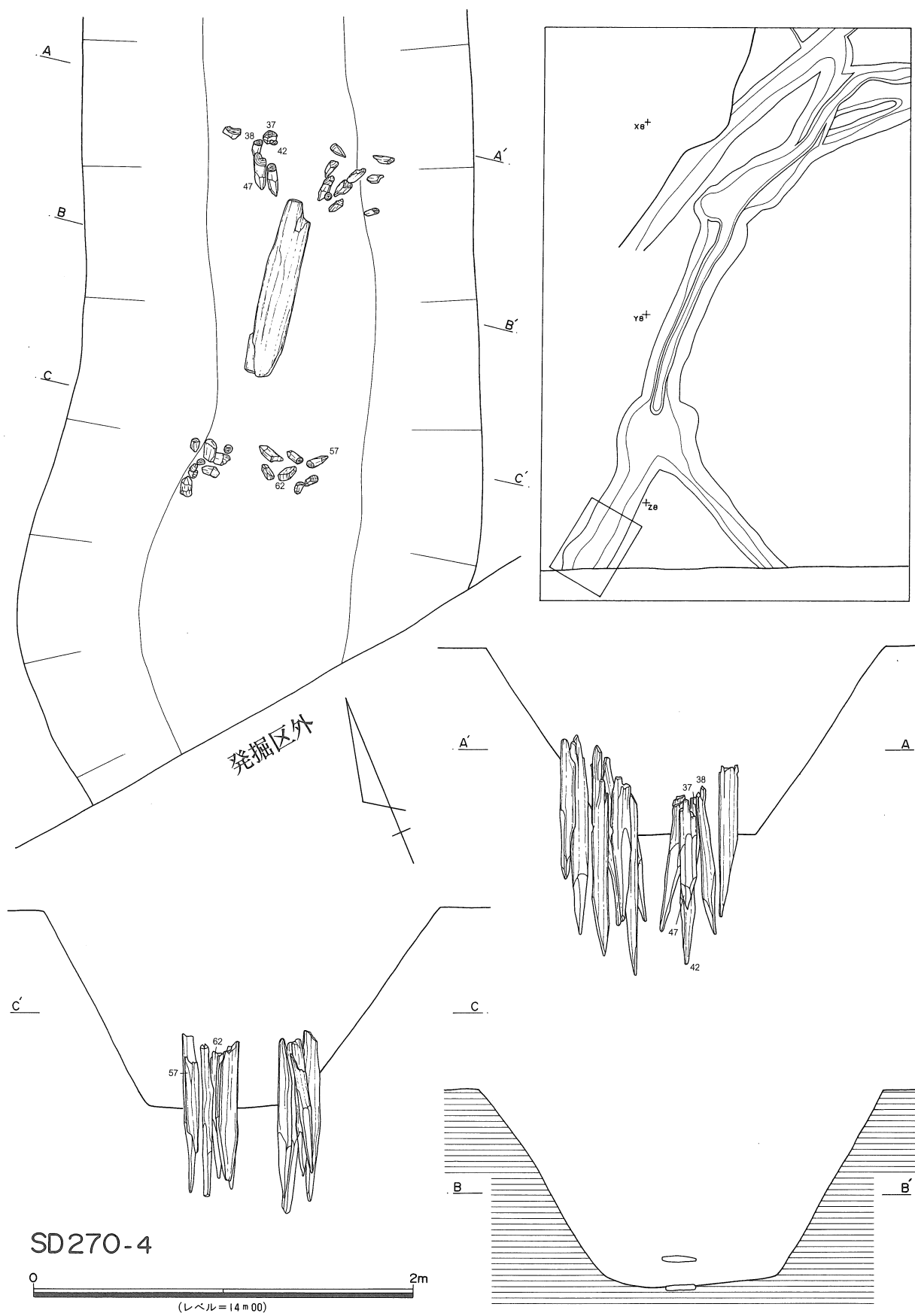
第24図 SD268 木樋・砦出土状態図



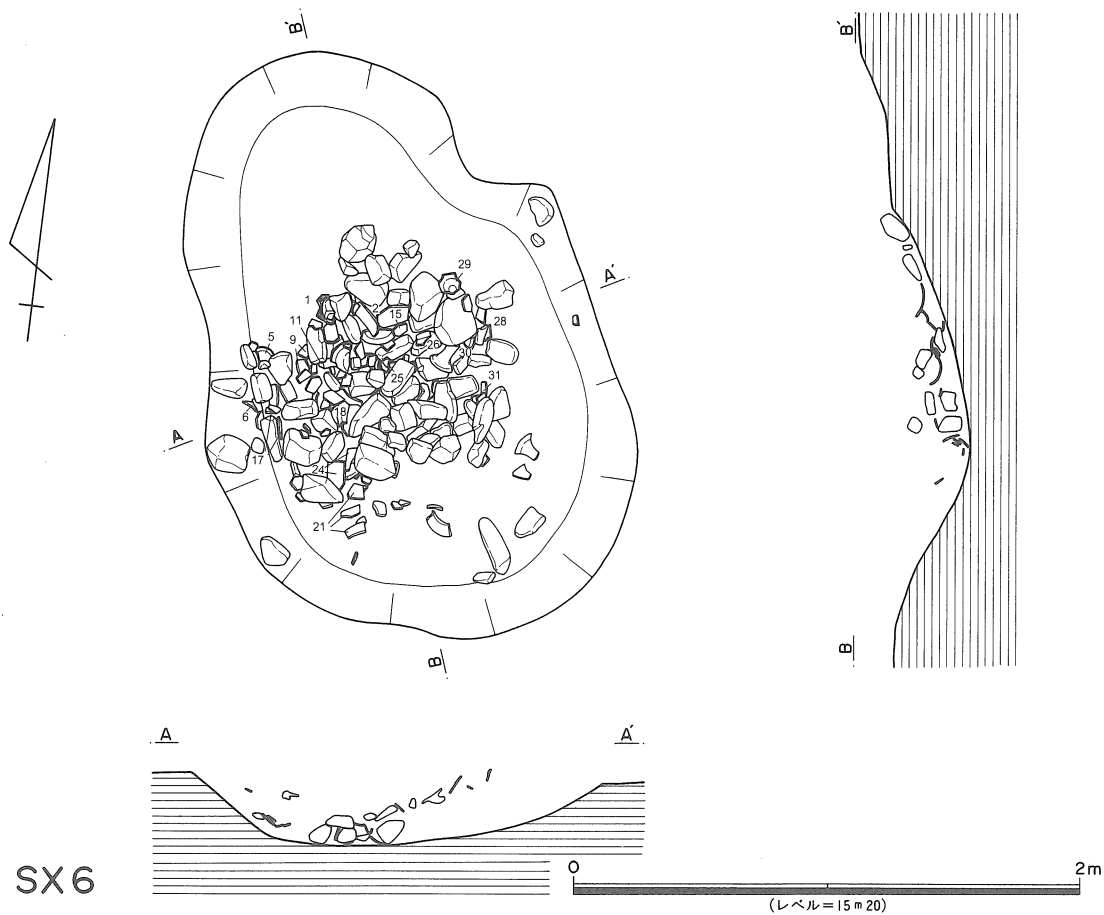
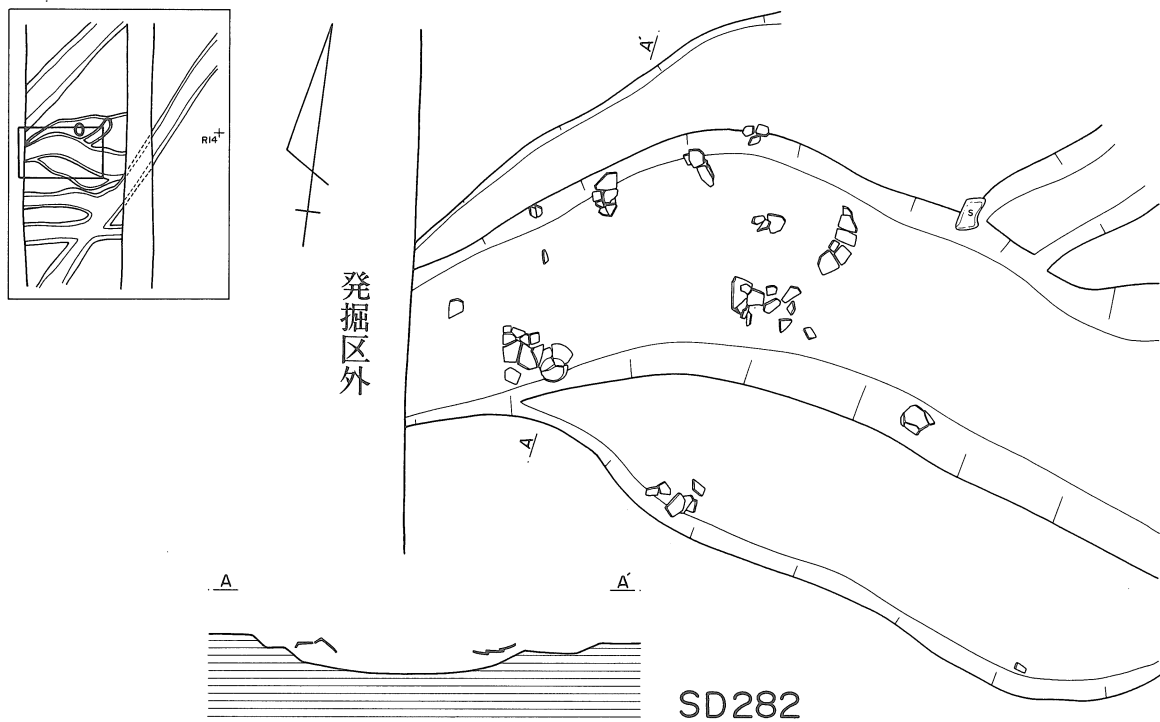
第25図 SD267・SD270 堀検出状態図 1



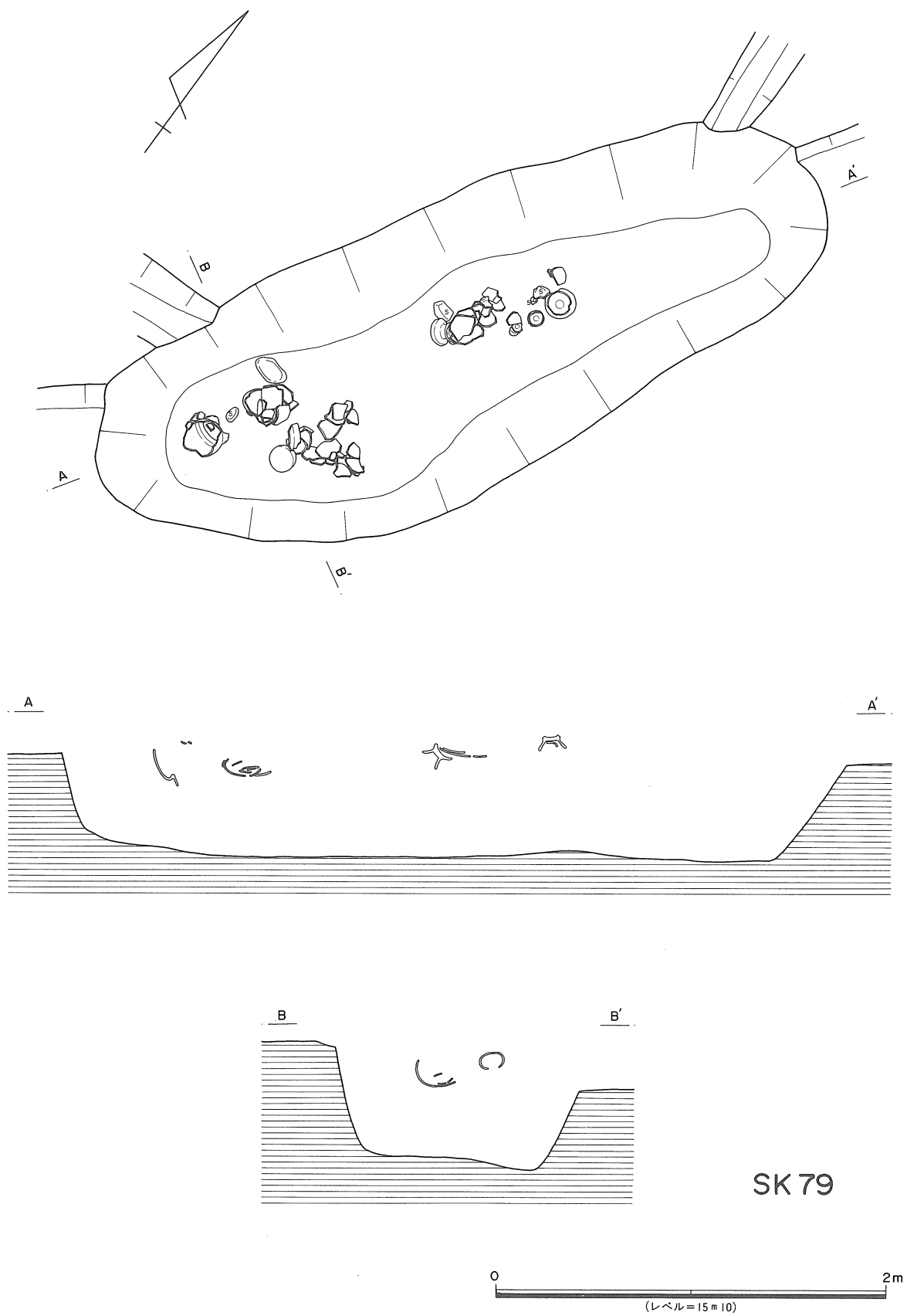
第26図 SD270 堰検出状態図 2



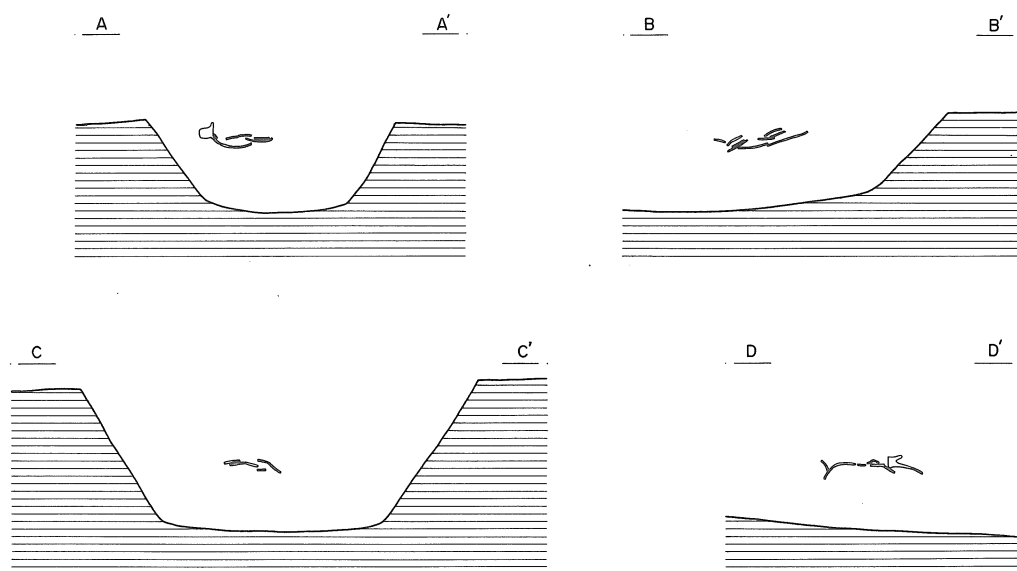
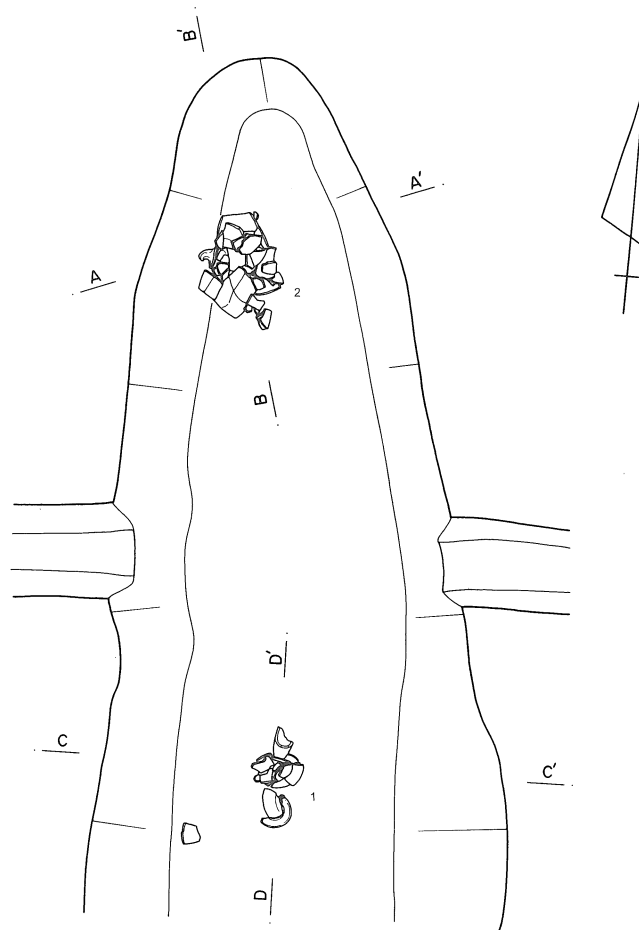
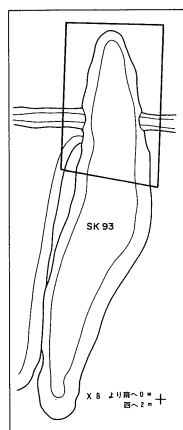
第27図 SD270 堰検出状態図 3



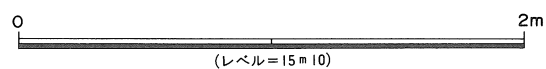
第28図 SD282・SX6 遺物出土状態図



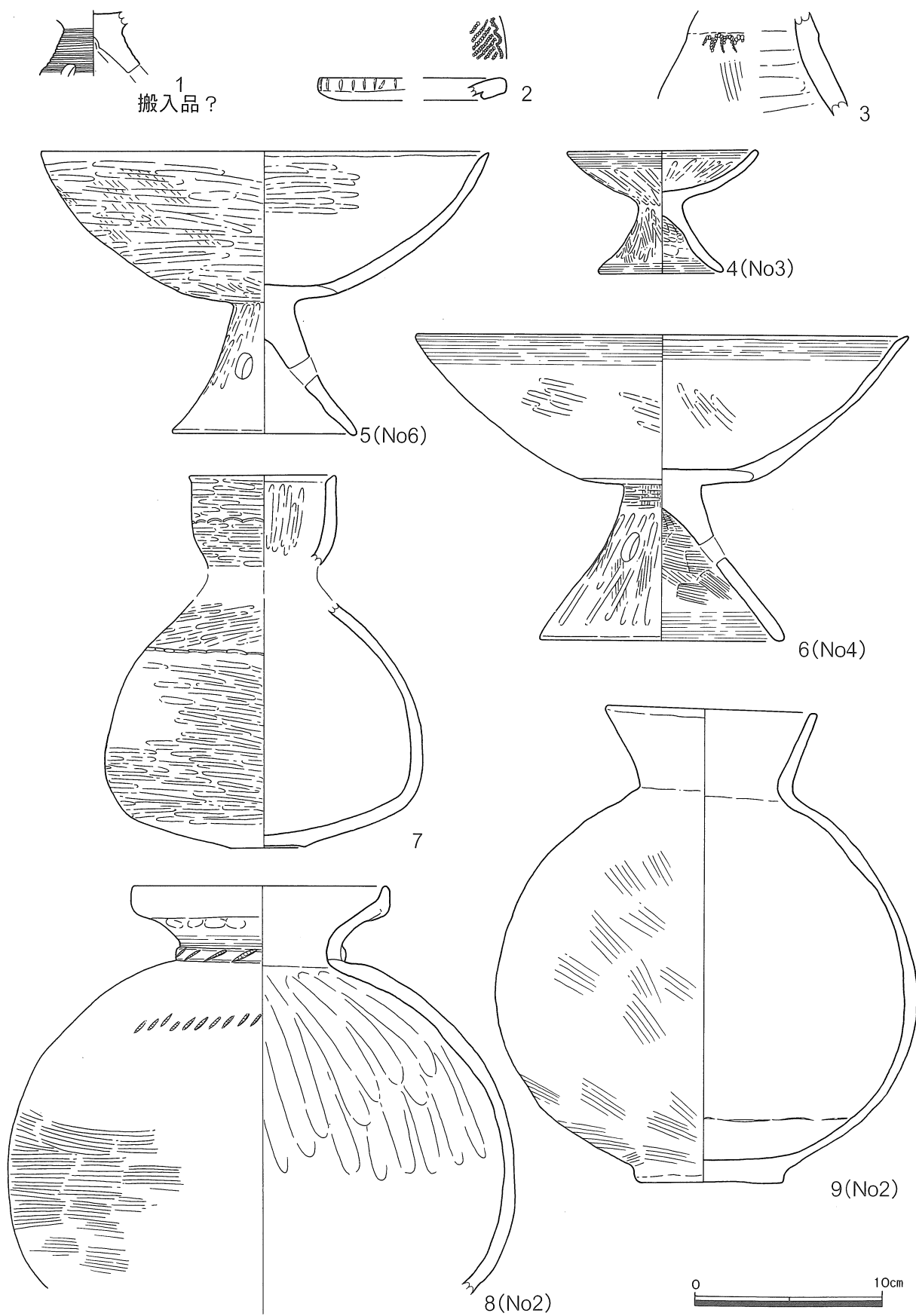
第29図 SK79 遺物出土状態図



SK 93

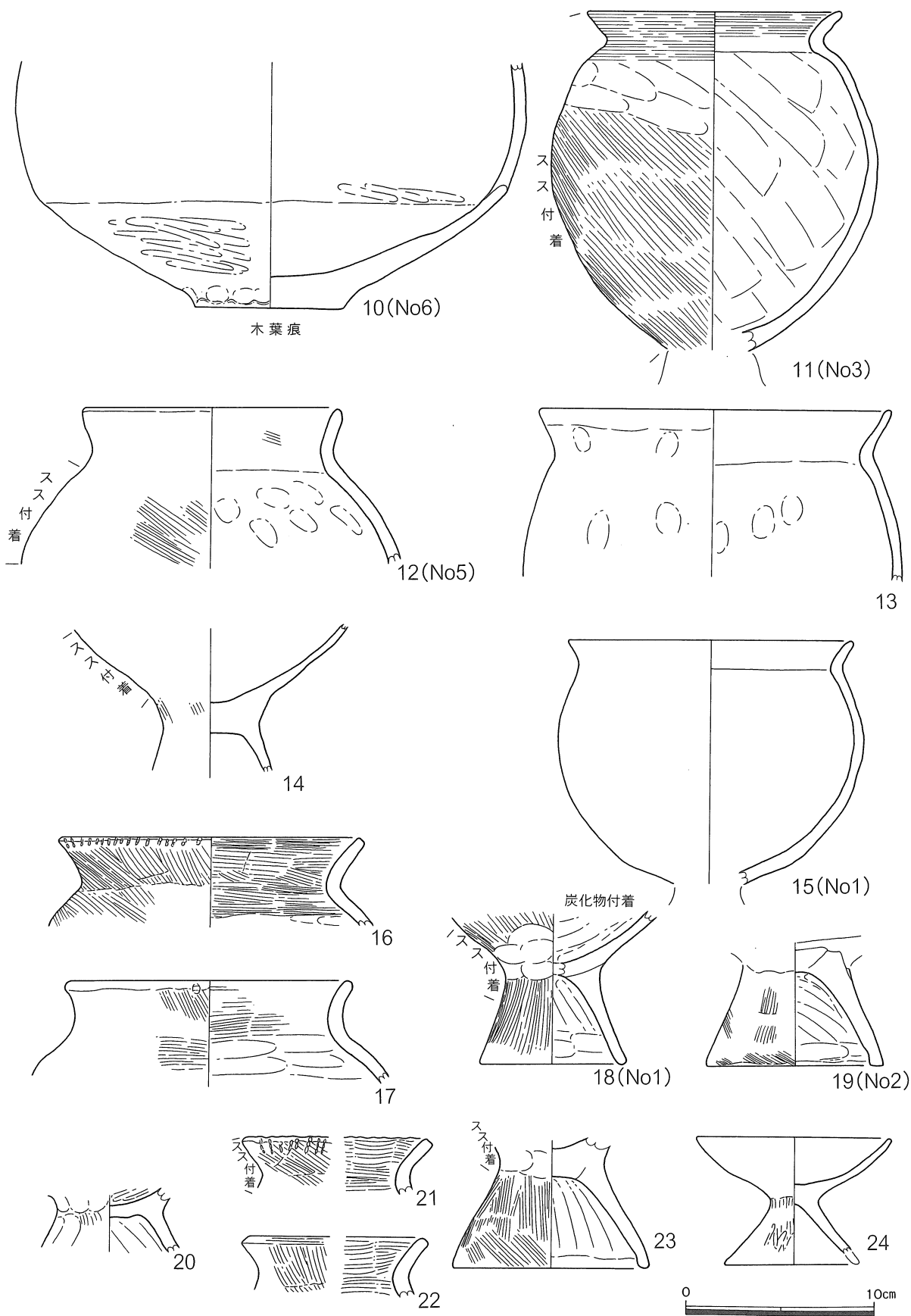


第30図 SK93 遺物出土状態図



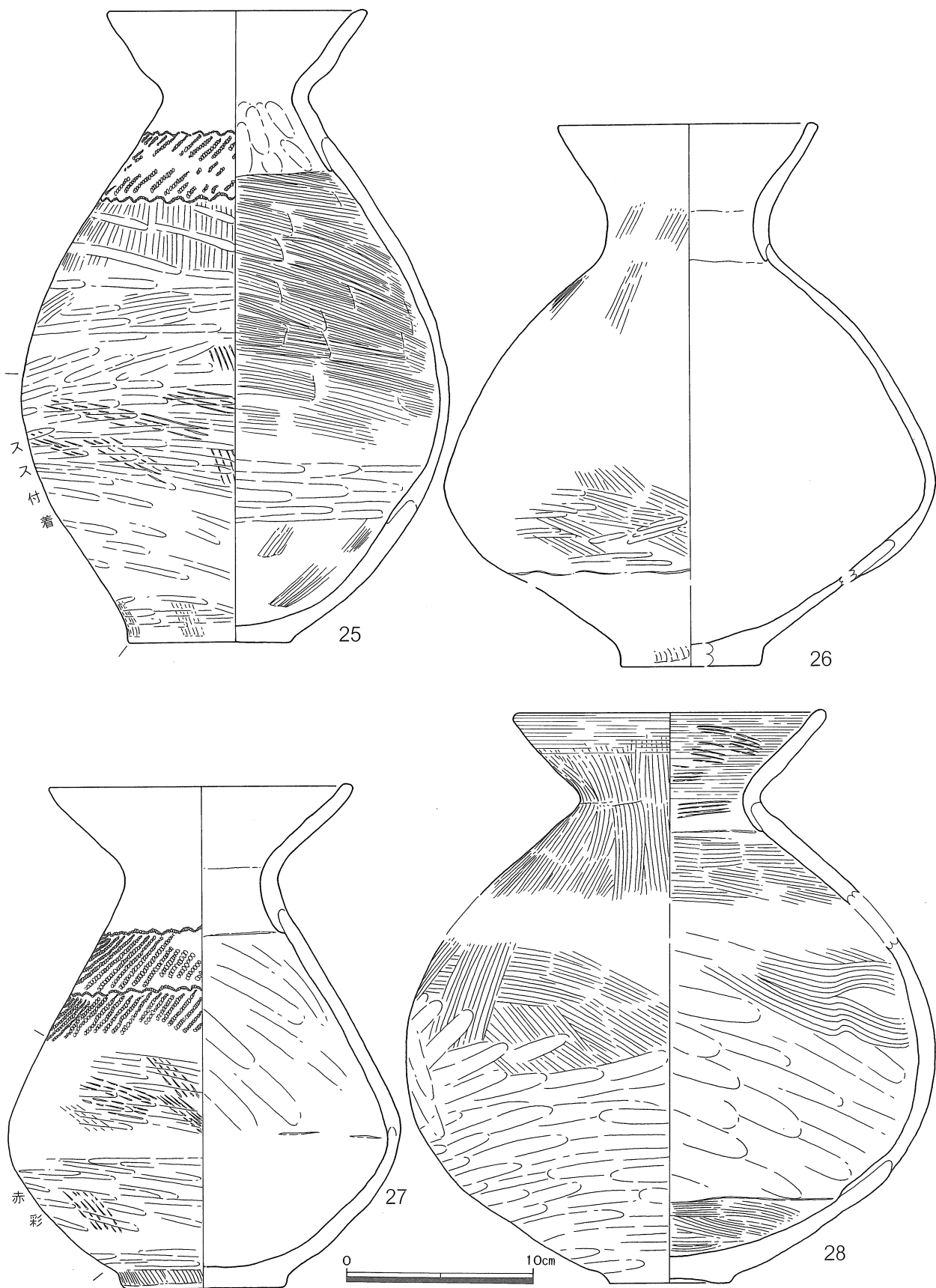
第31図 古墳時代前期土器実測図 1

1=SH23 2・3=SH24
4~9=SH25



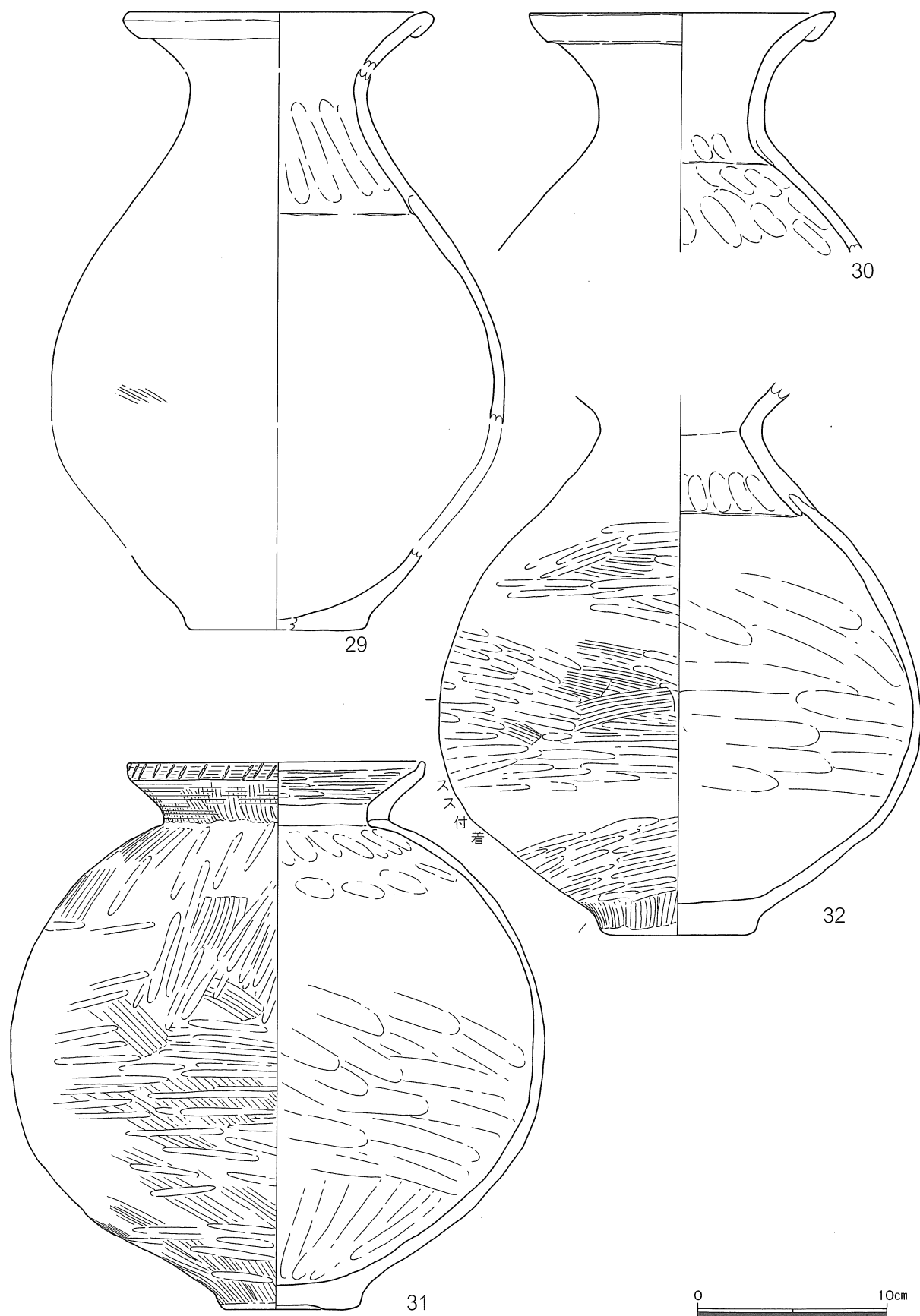
第32図 古墳時代前期土器実測図 2

10~14=SH25 15~20=SH26
 21・22=SH29 23=SH32
 24=SH33



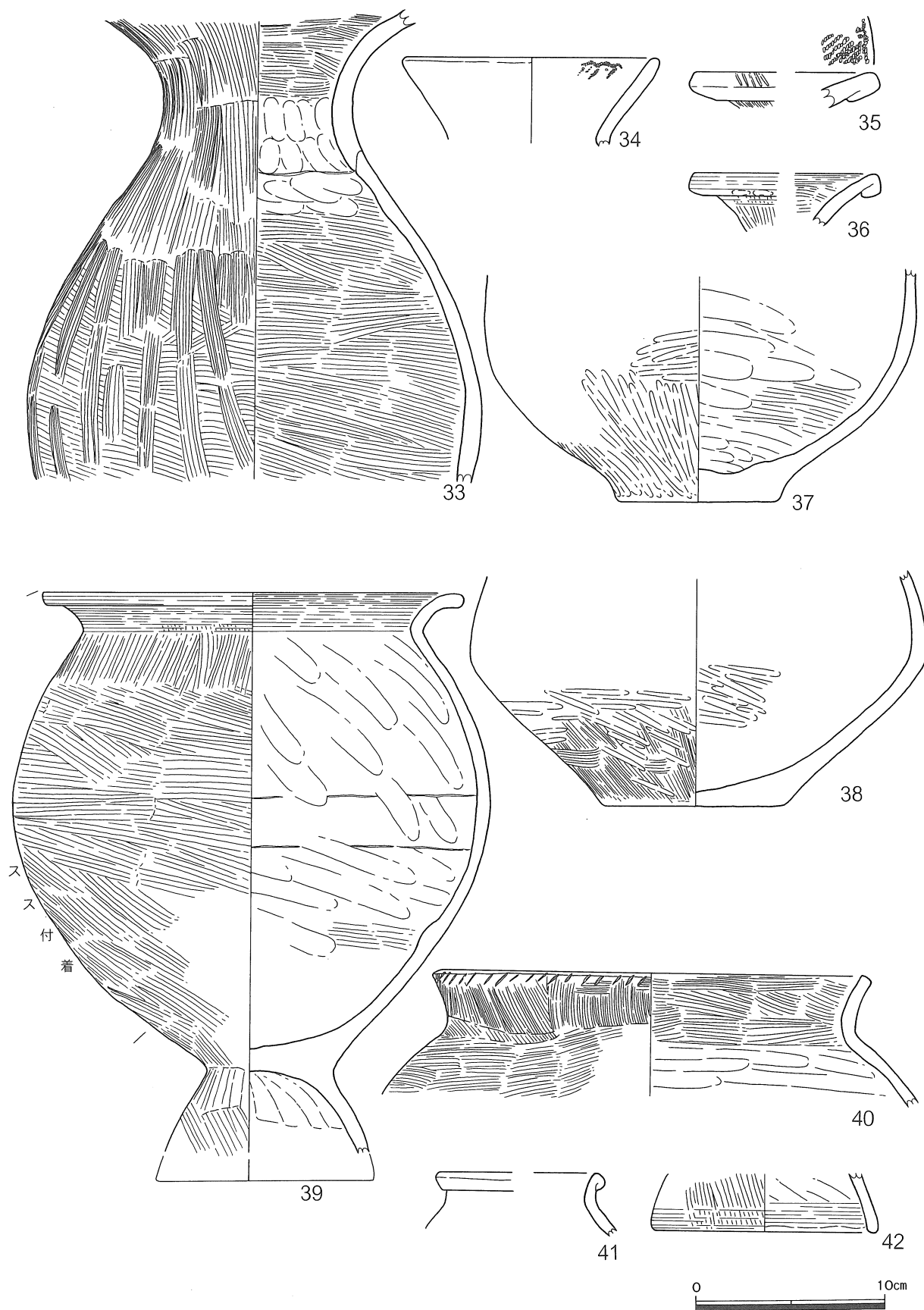
第33図 古墳時代前期土器実測図 3

25~28=SH33



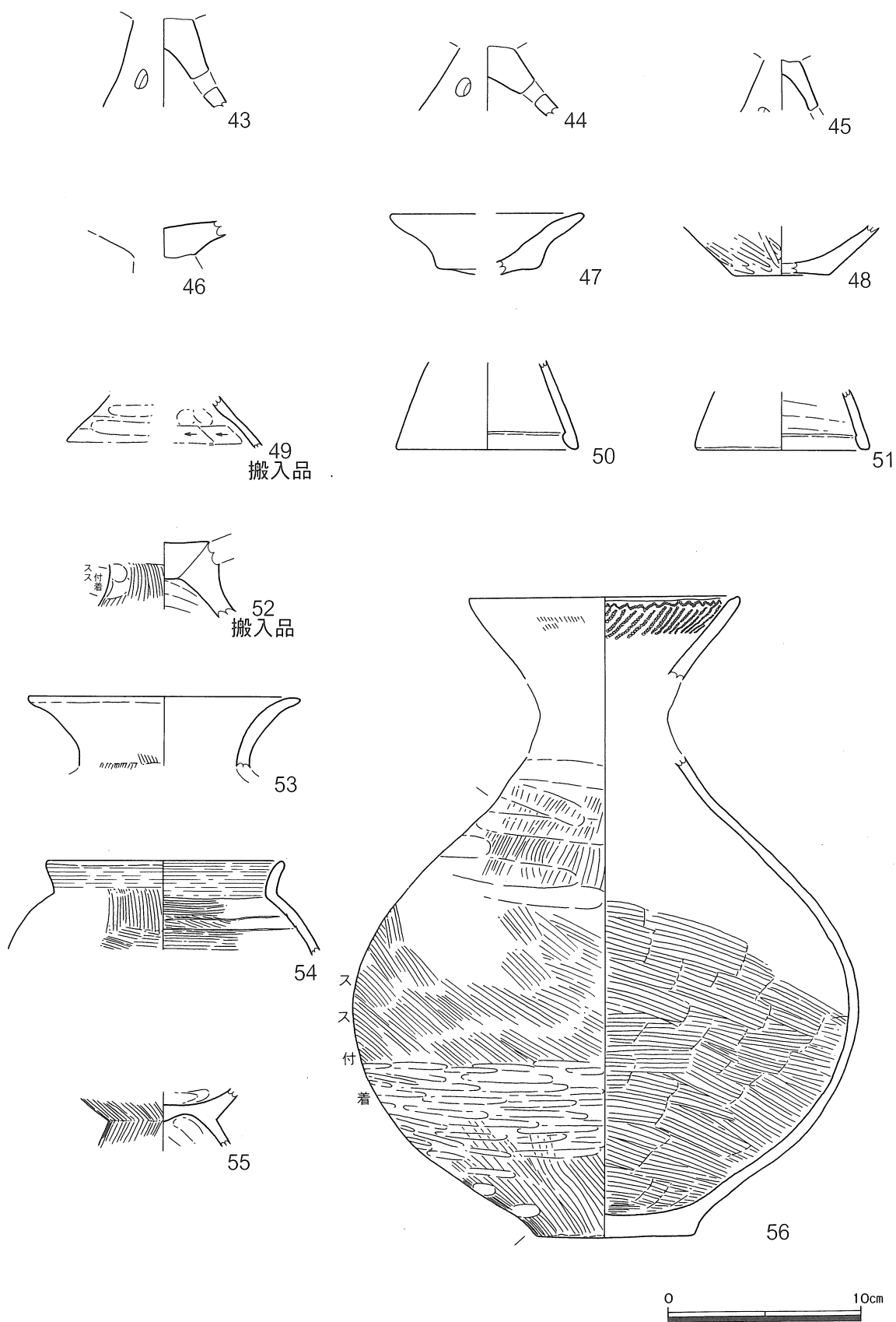
第34図 古墳時代前期土器実測図 4

29~32=SH33



第35図 古墳時代前期土器実測図 5

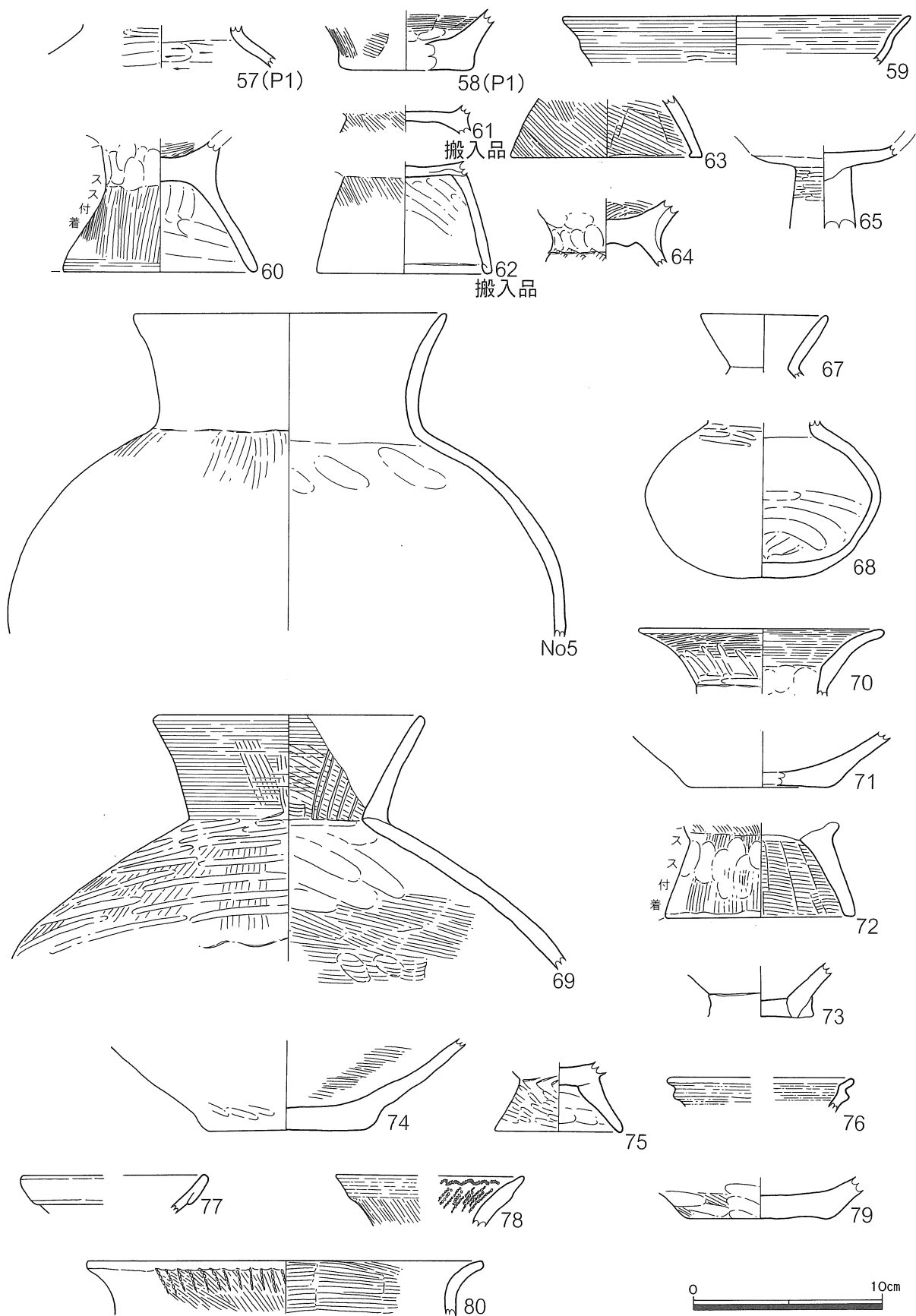
33~42=SH33



第36図 古墳時代前期土器実測図 6

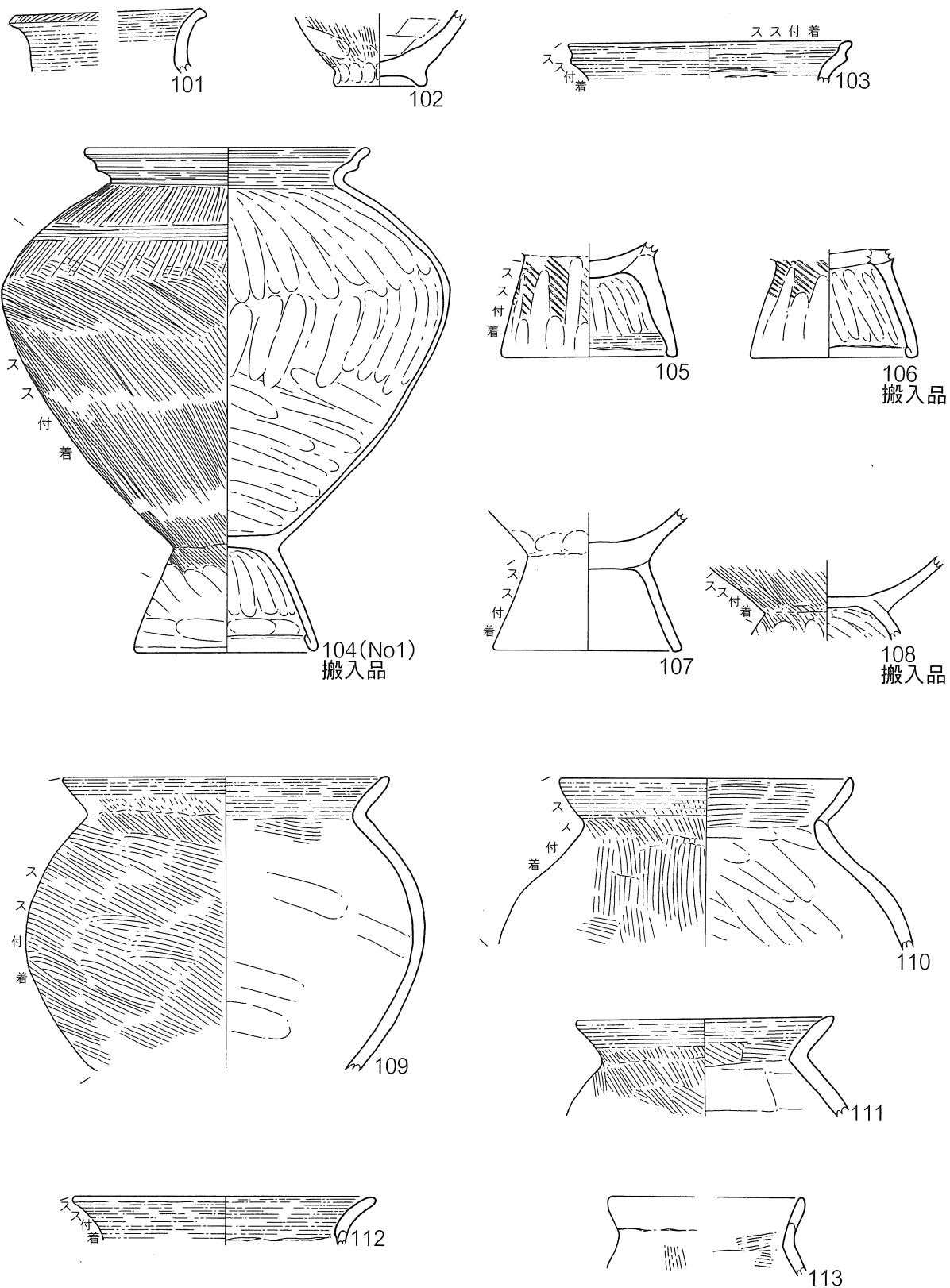
43~51=SH49
55=SH51

52~54=SH50
56=SH56



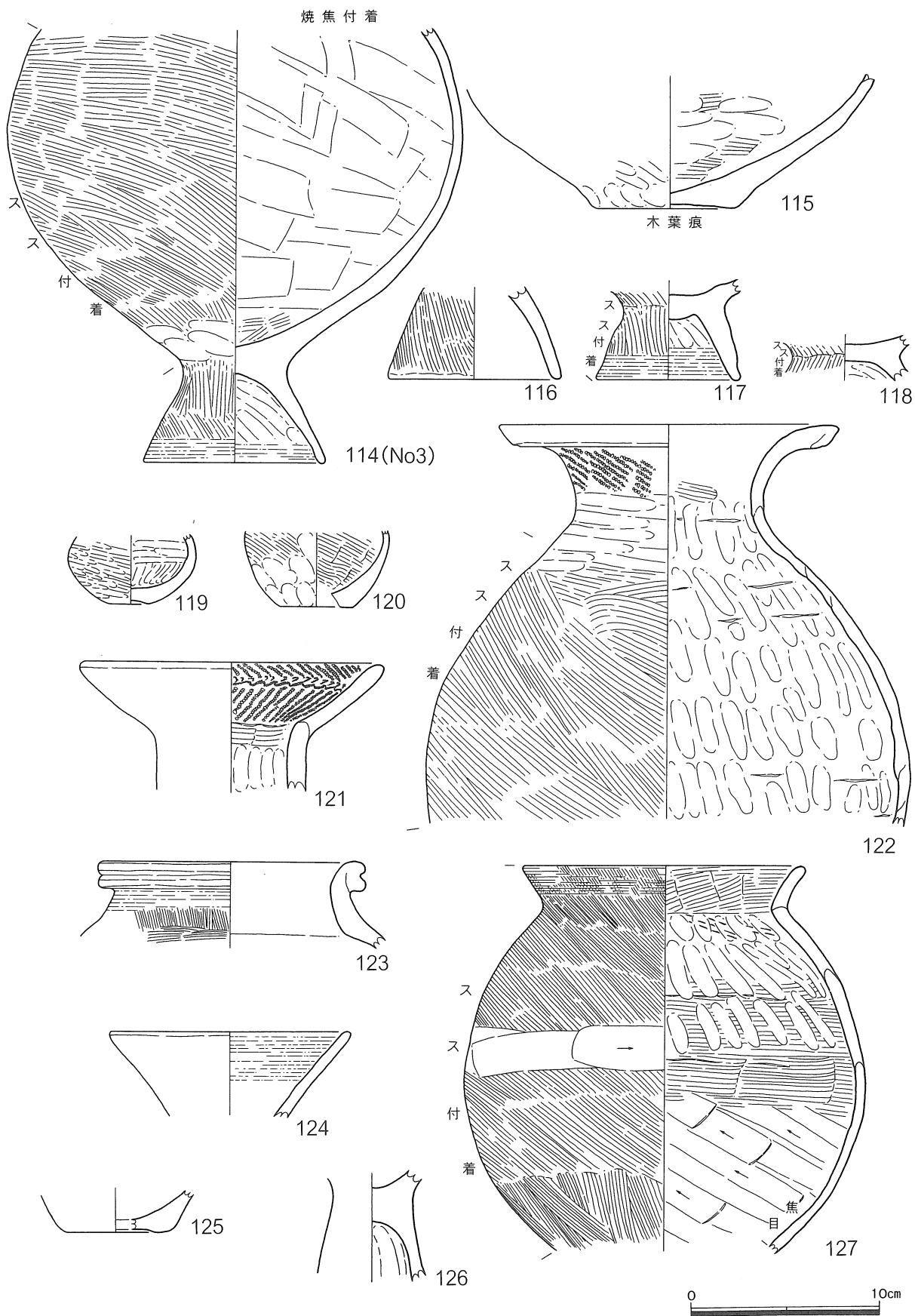
第37図 古墳時代前期土器実測図 7

57~59=SB92 60=SK119
 61・62=SK120 63・64=SK130
 65=SK131 66=SD81
 67~73=SD183 74~76=SD267
 77=SD268 78~80=SD269



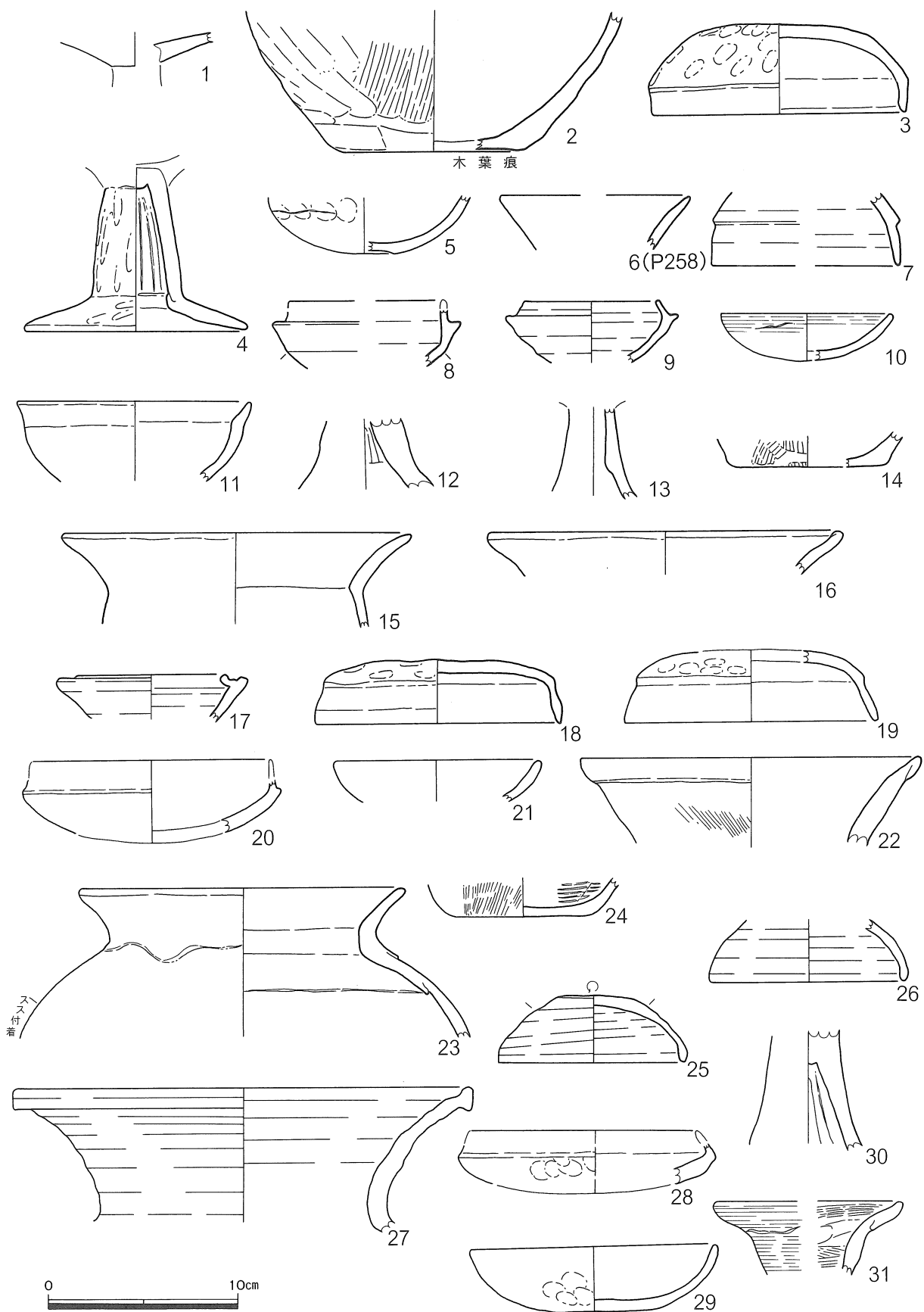
第39図 古墳時代前期土器実測図 9

101~113=SD270



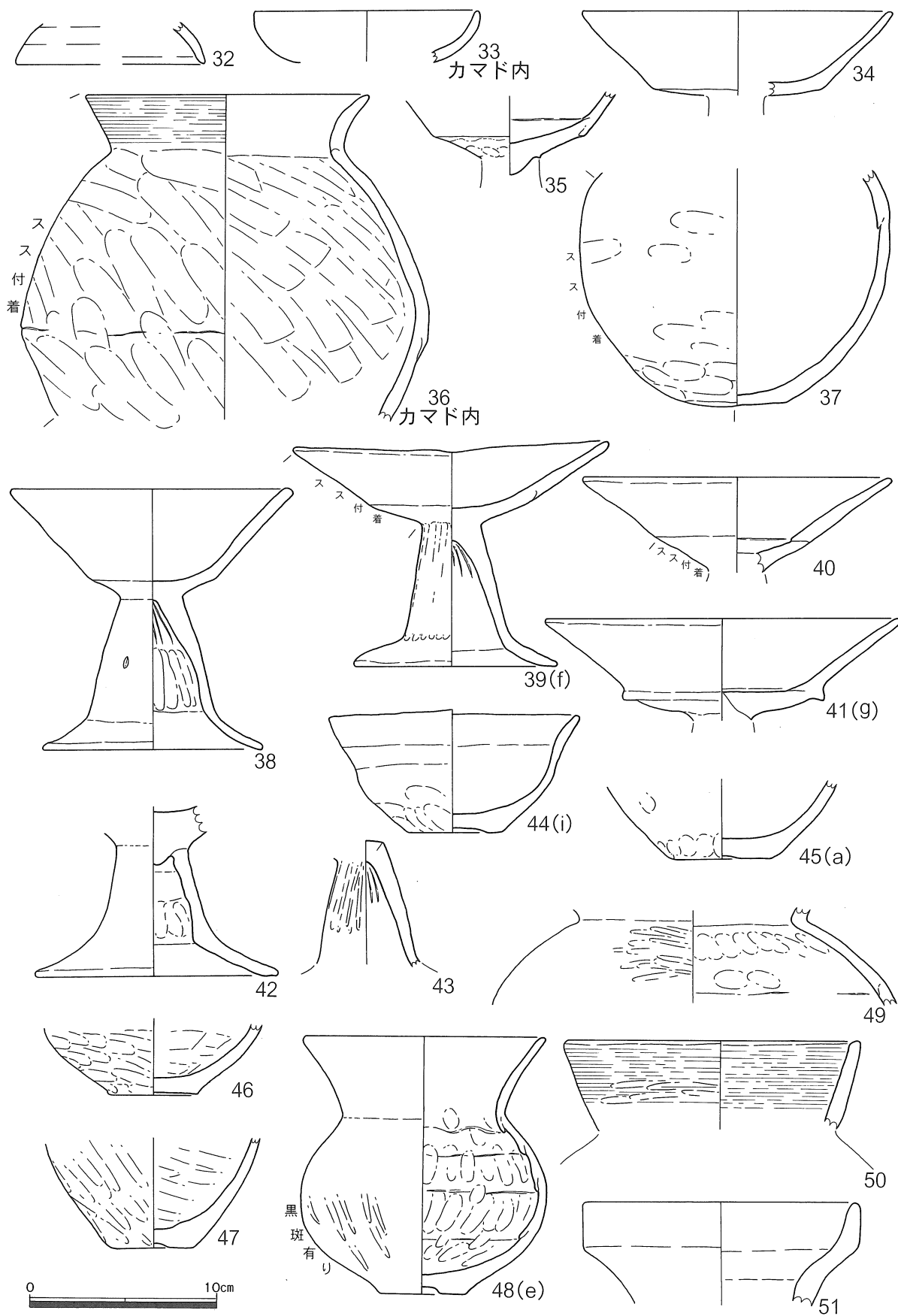
第40図 古墳時代前期土器実測図 10

114~118=SD270
119~127=SD276



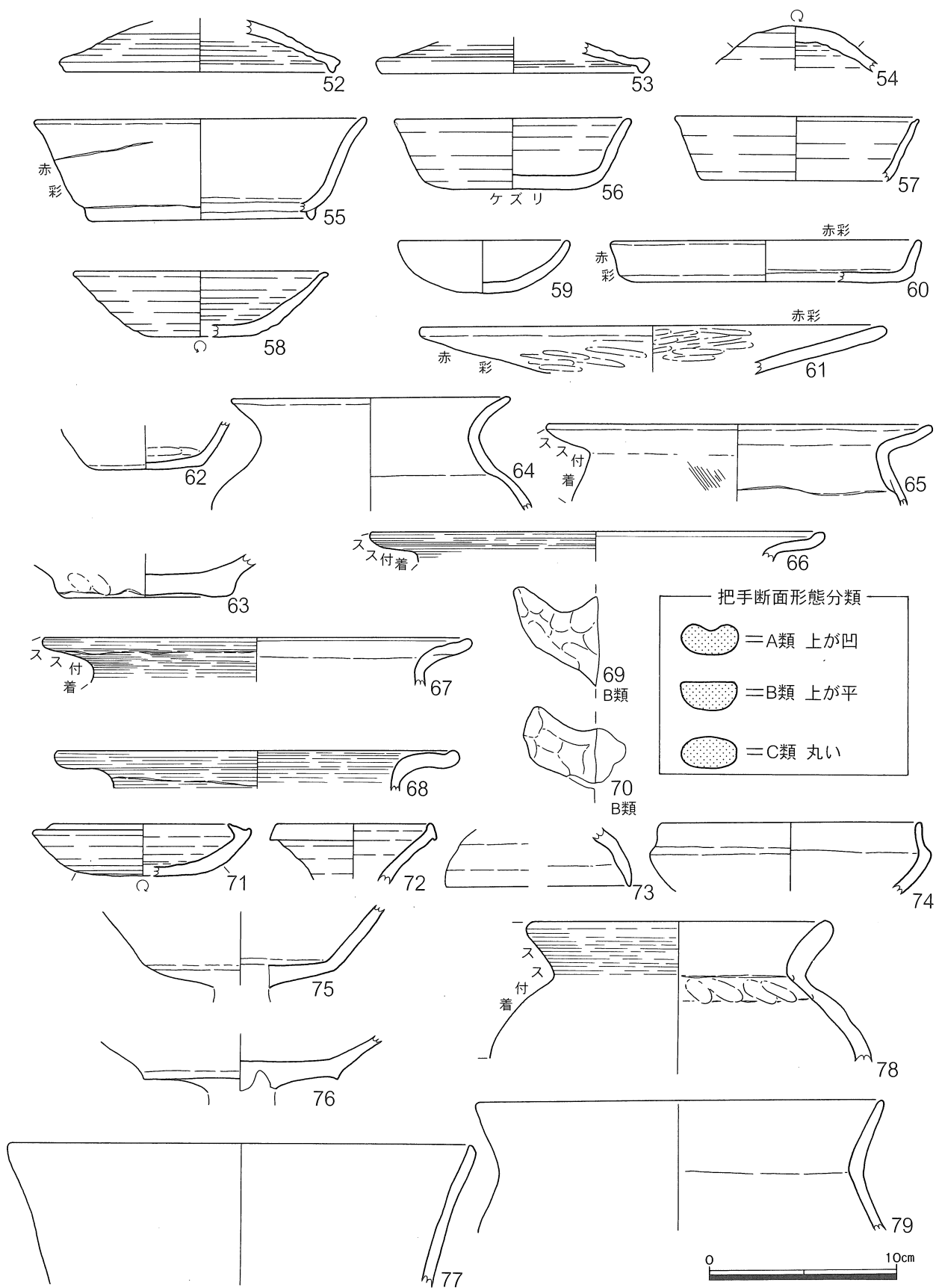
第41図 古墳中期～奈良時代土器実測図 1

1・2=SH1 3=SH3
 4~6=SH5 7~16=SH7
 17~24=SH9 25~31=SH10



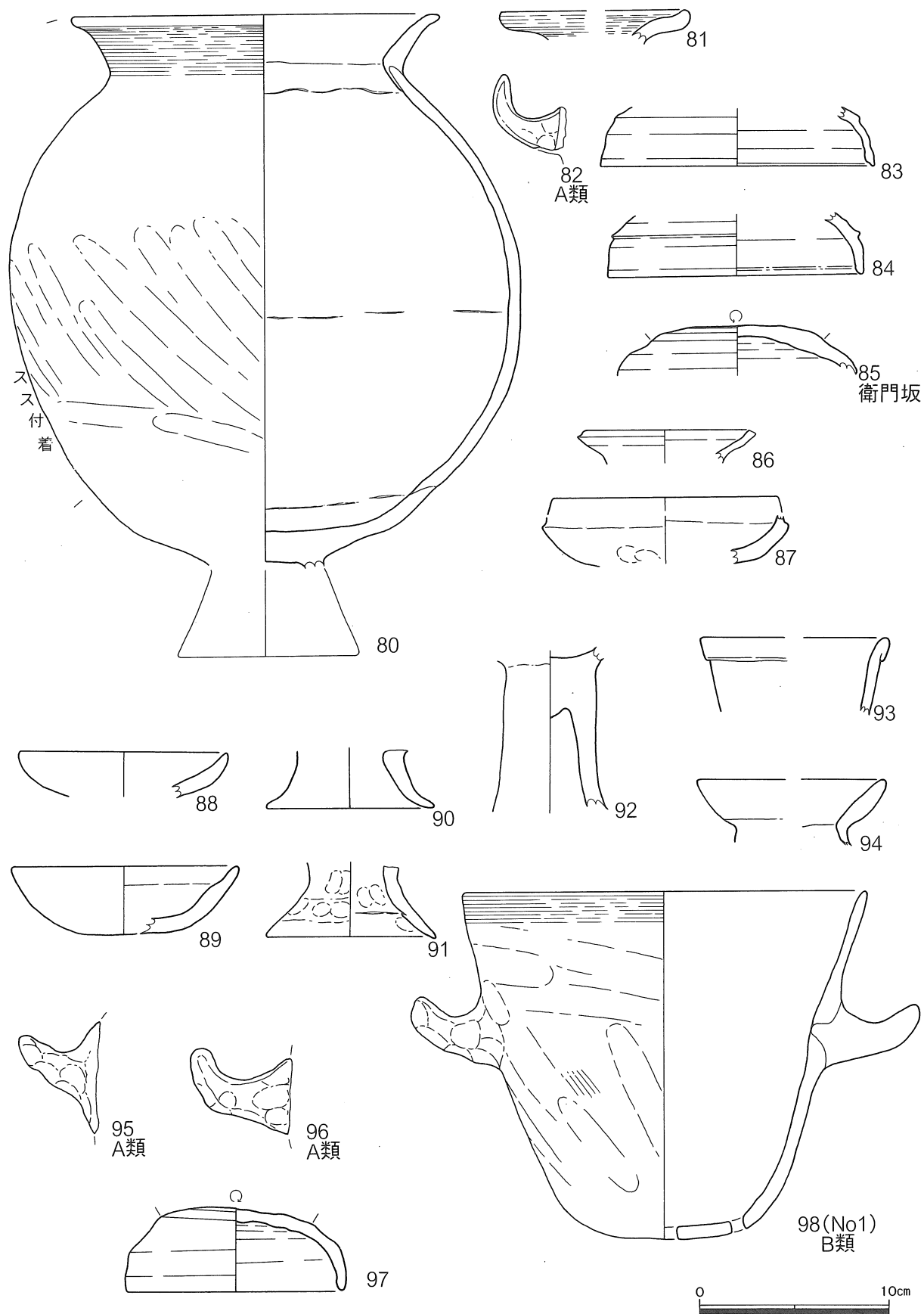
第42図 古墳中期～奈良時代土器実測図 2

32～37=SH11
38～51=SH12

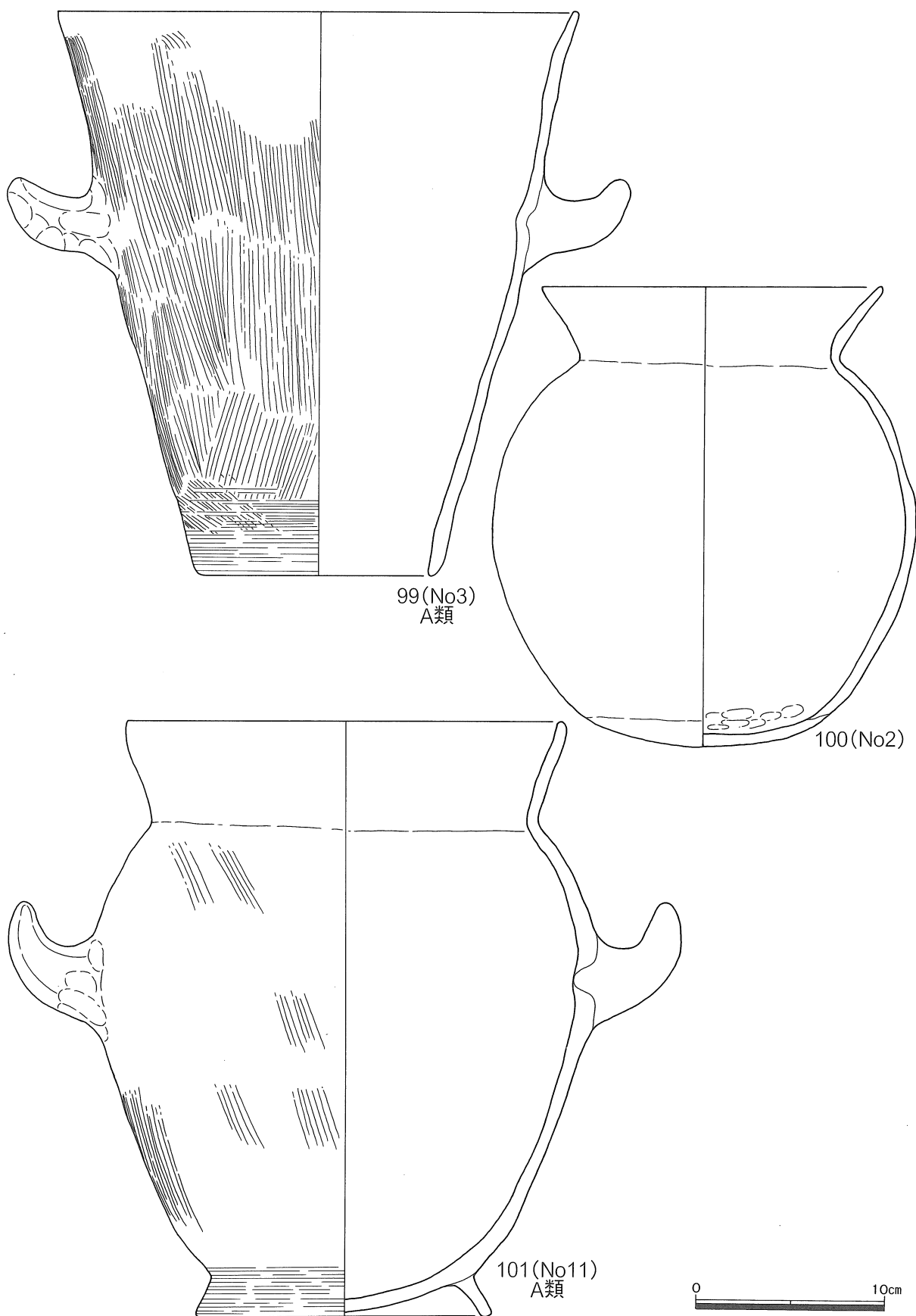


第43図 古墳中期～奈良時代土器実測図 3

52～70＝SH13
71～79＝SH14

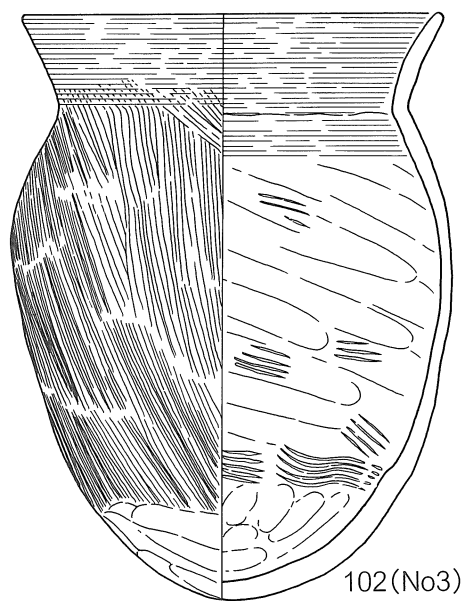


第44図 古墳中期～奈良時代土器実測図 4 80～82=SH14 83～96=SH15
7=SH16 98=SH18

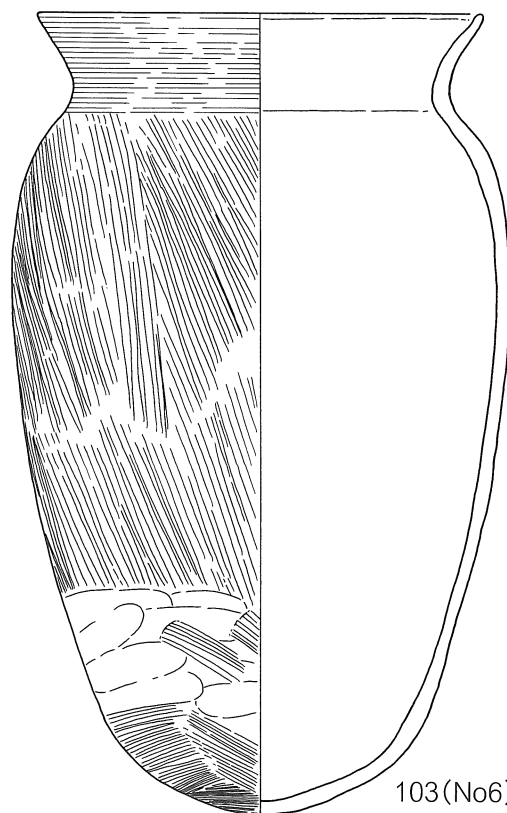


第45図 古墳中期～奈良時代土器実測図 5

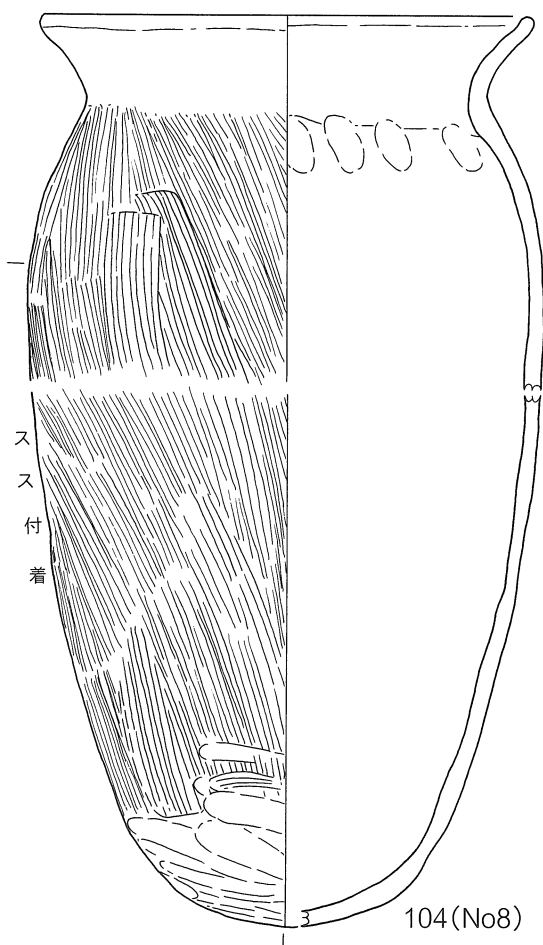
99~101=SH18



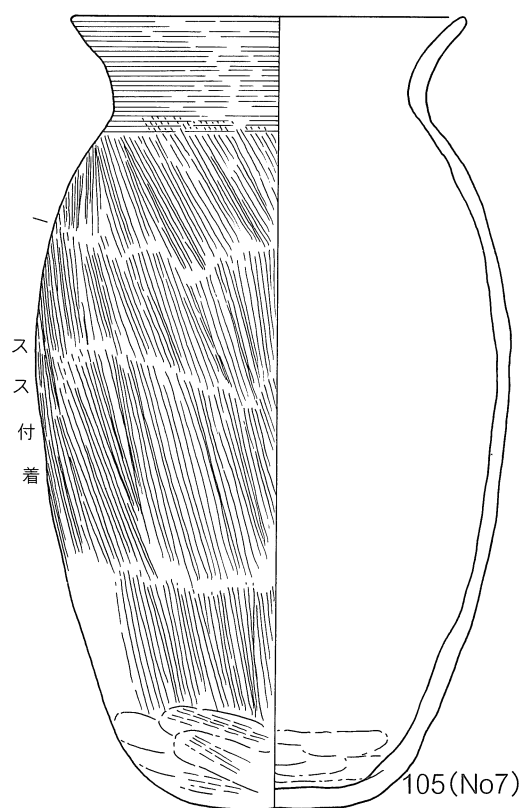
102(No3)



103(No6)



104(No8)

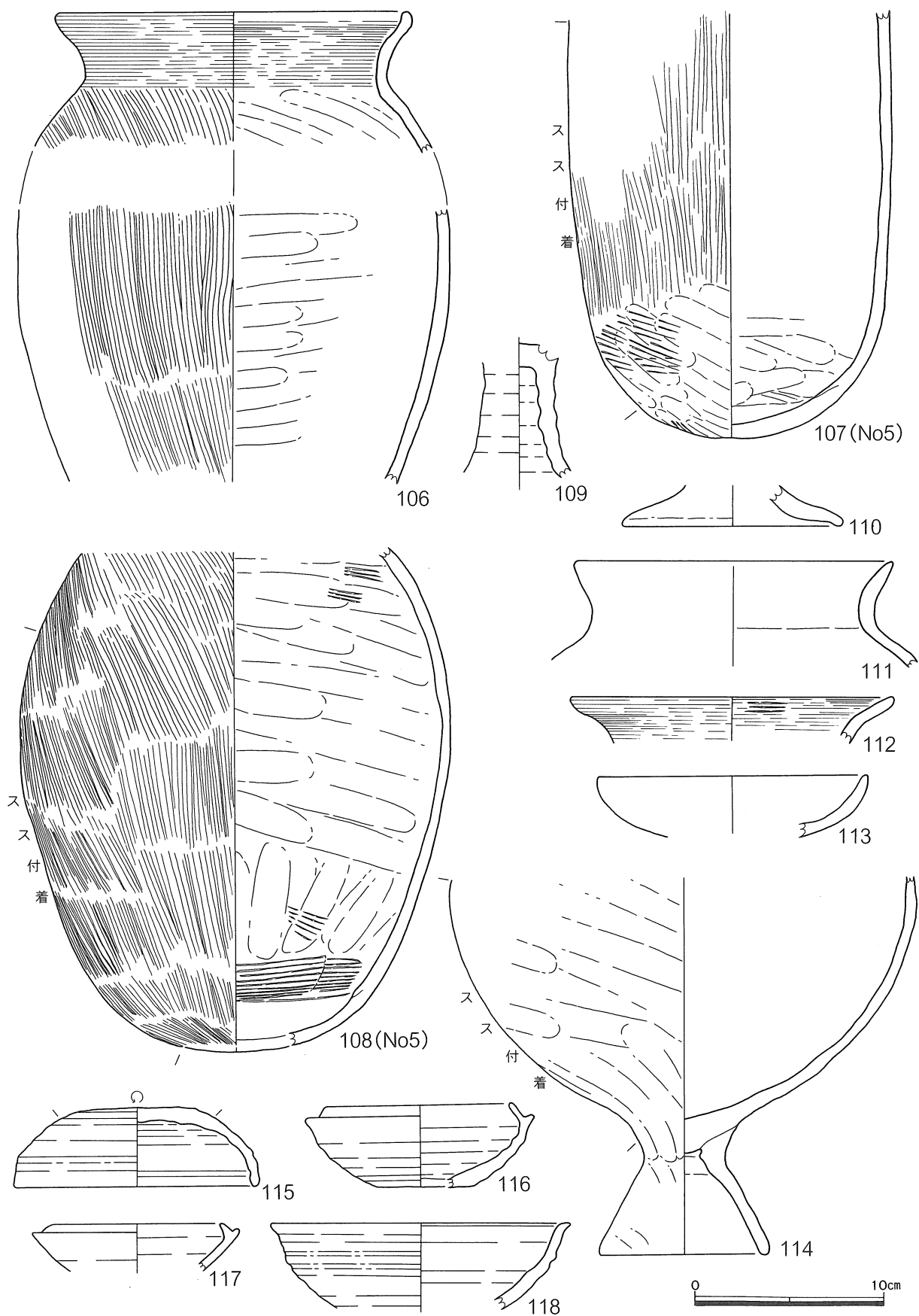


105(No7)

0 10cm

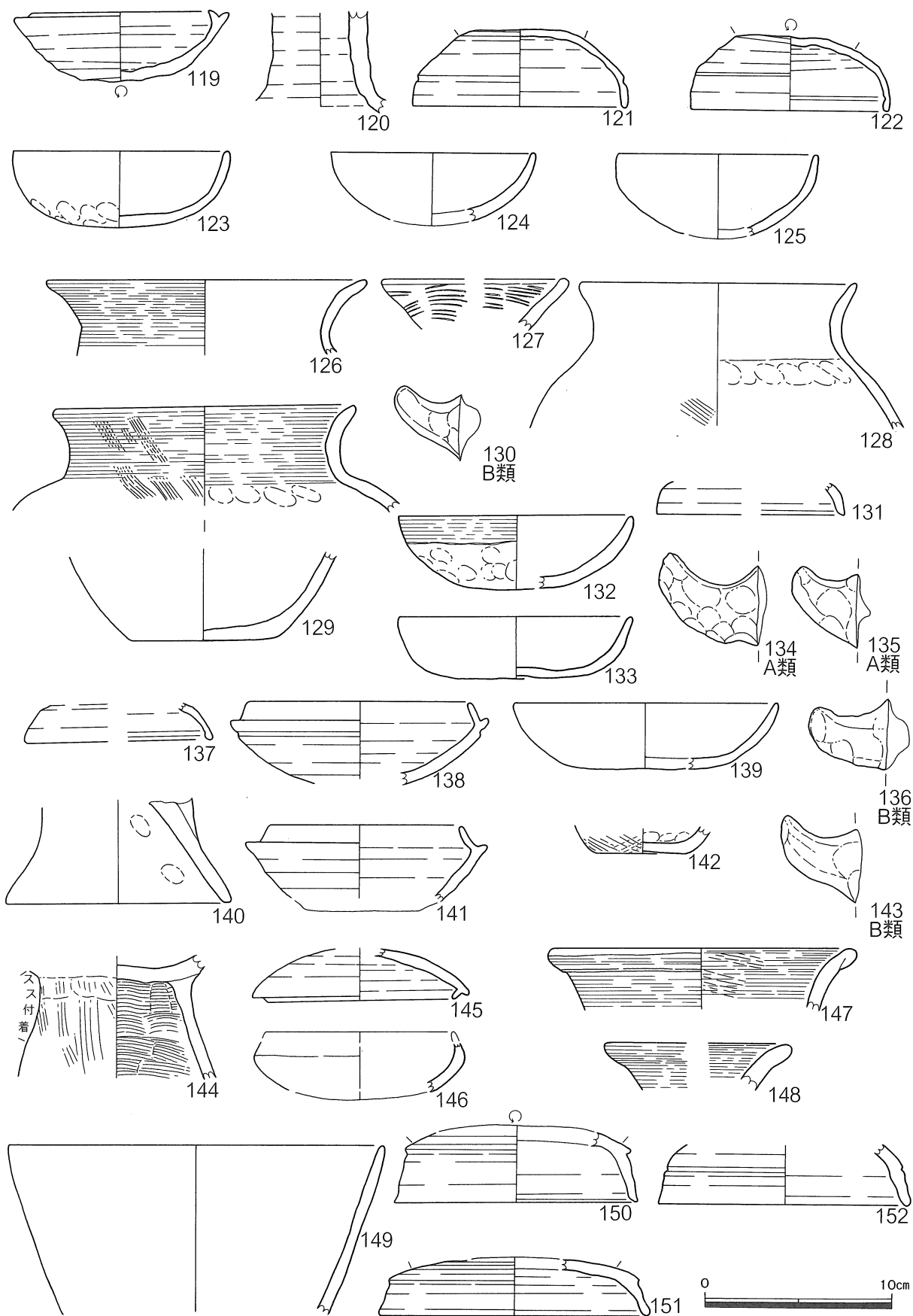
第46図 古墳中期～奈良時代土器実測図 6

102～105=SH18



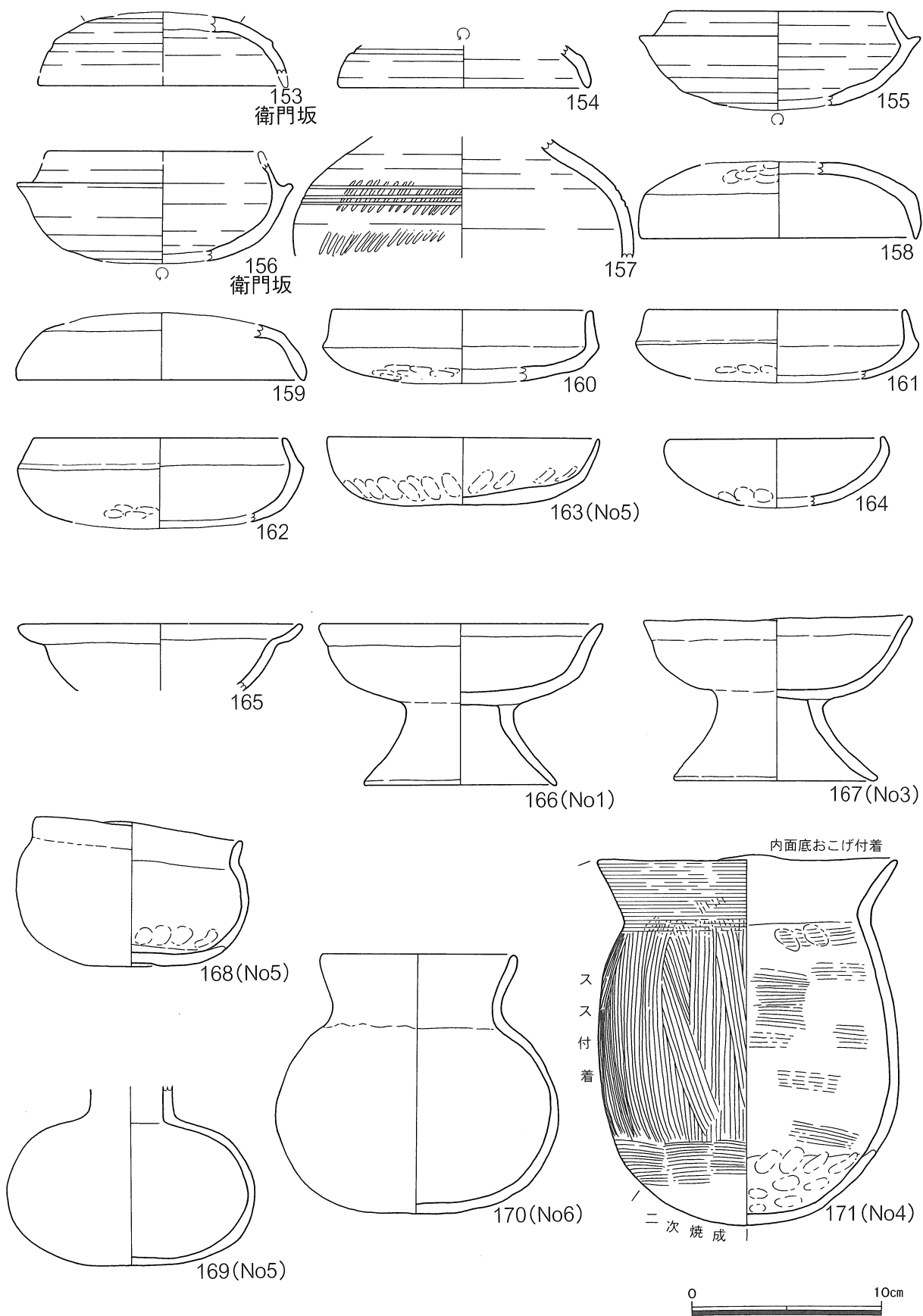
第47図 古墳中期～奈良時代土器実測図 7

106～108=SH18 109～112=SH19
113=SH20 114=SH34
115～118=SH35



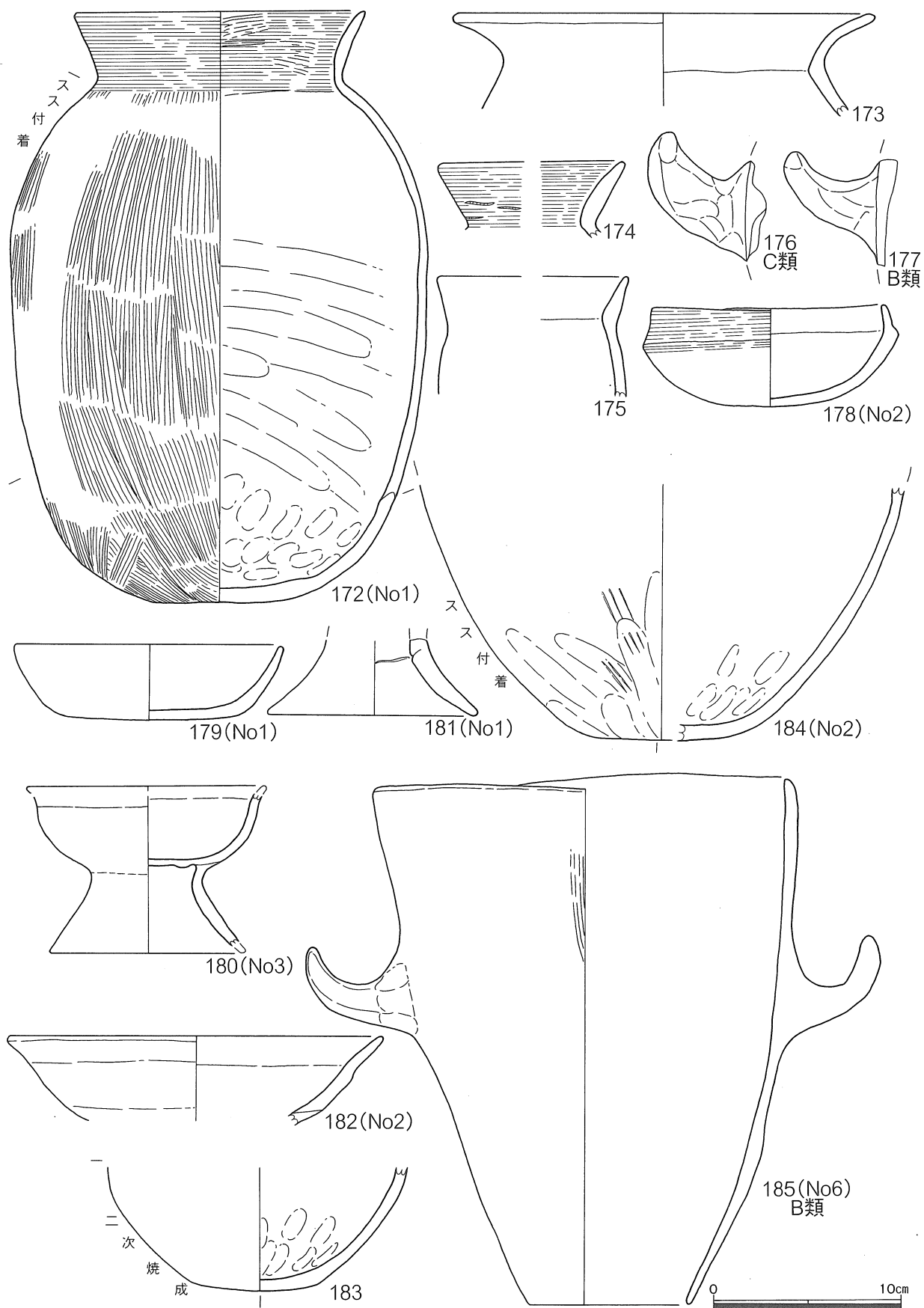
第48図 古墳中期～奈良時代土器実測図 8

119・120=SH36	121~126=SH38
127=SH40	128~136=SH43
137~140=SH44	141~143=SH45
144=SH46	145=SH47
146~149=SH52	150~152=SH54



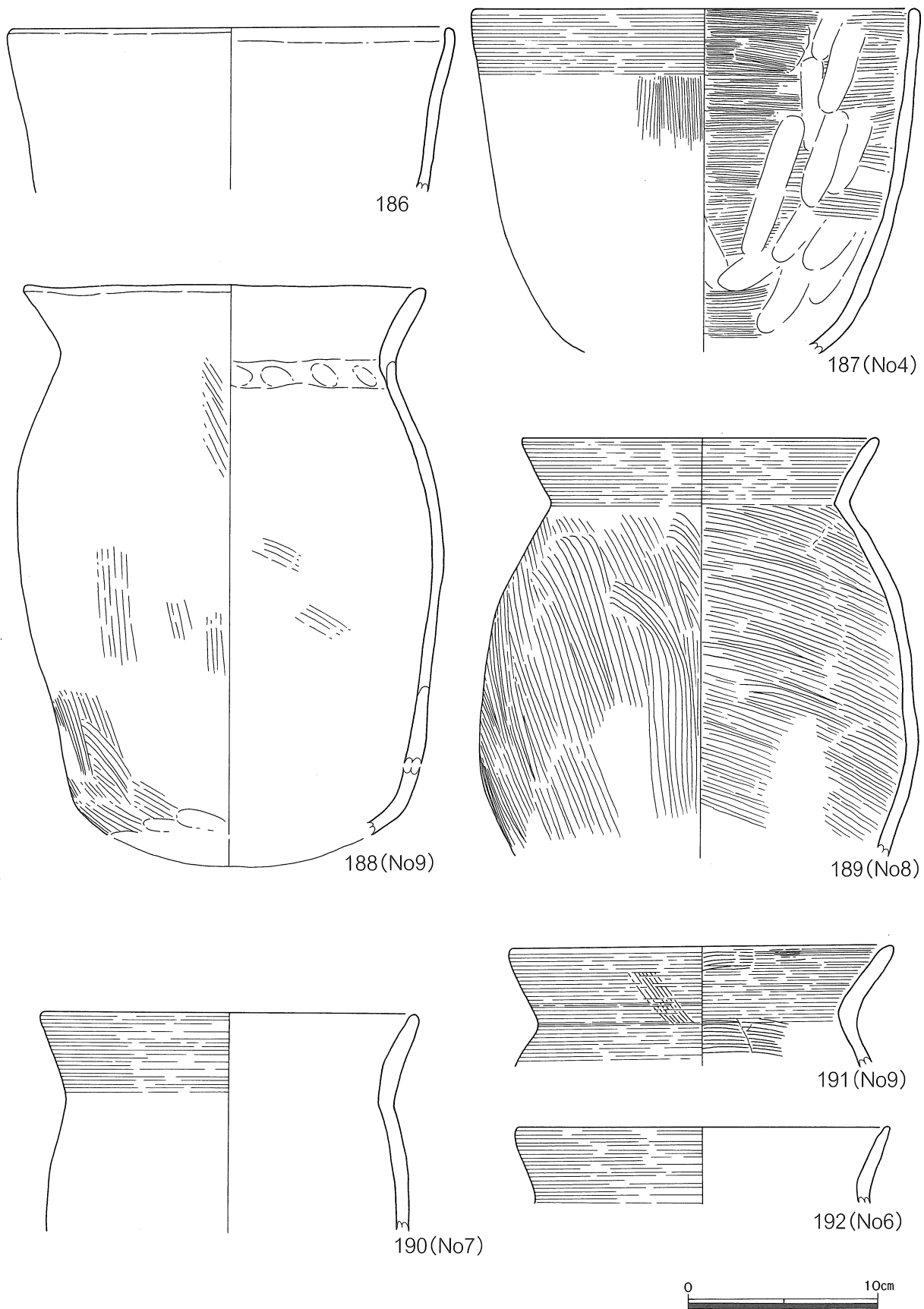
第49図 古墳中期～奈良時代土器実測図 9

153～171=SH54



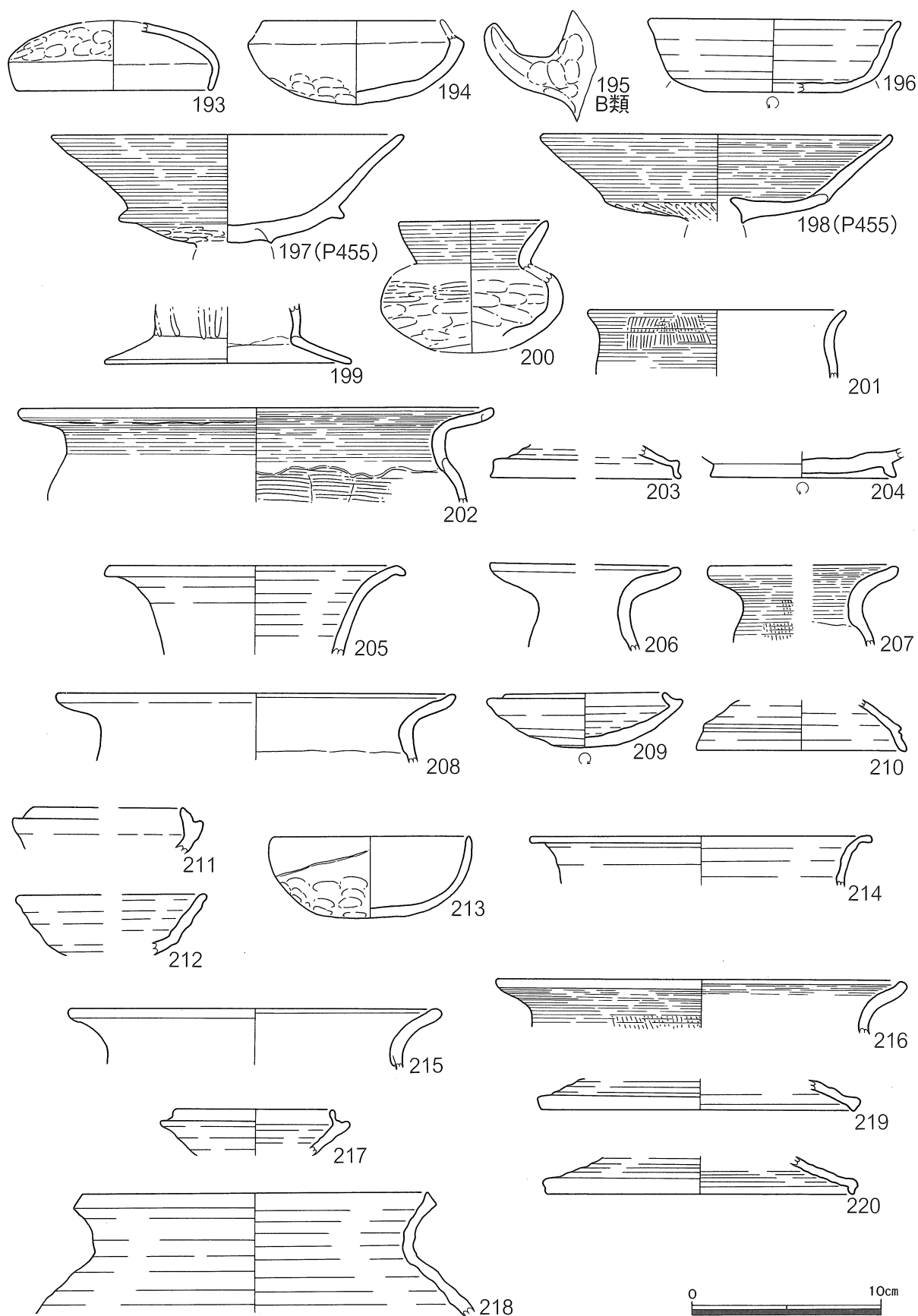
第50図 古墳中期～奈良時代土器実測図 10

172～178=SH54
179～185=SH55



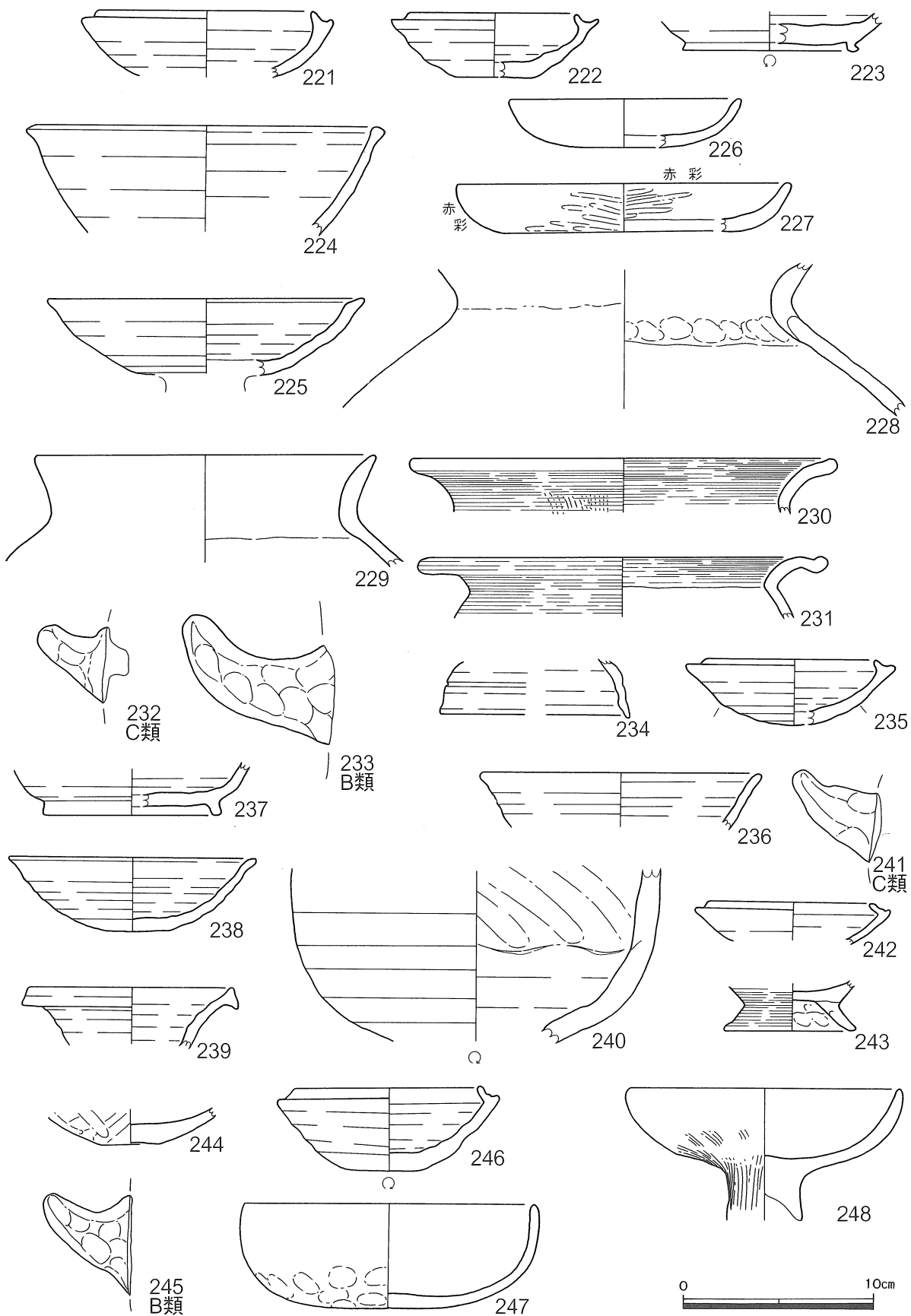
第51図 古墳中期～奈良時代土器実測図 11

186~192=SH55



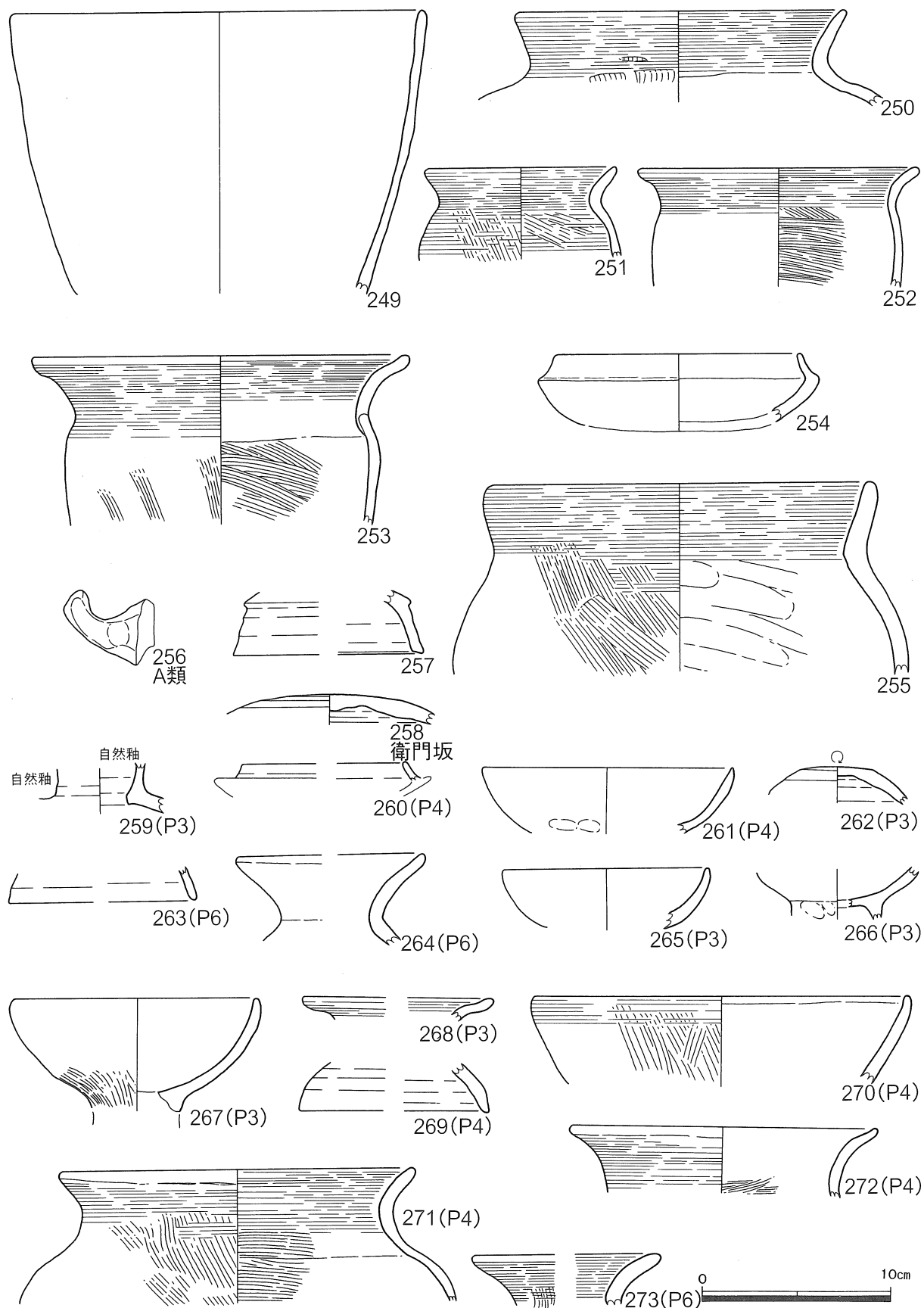
第52図 古墳中期～奈良時代土器実測図 12

193~195=SI1	196~202=SI2
203~208=SI3	209=SI4
210~216=SI5	217・218=SI7
219・220=SI8	



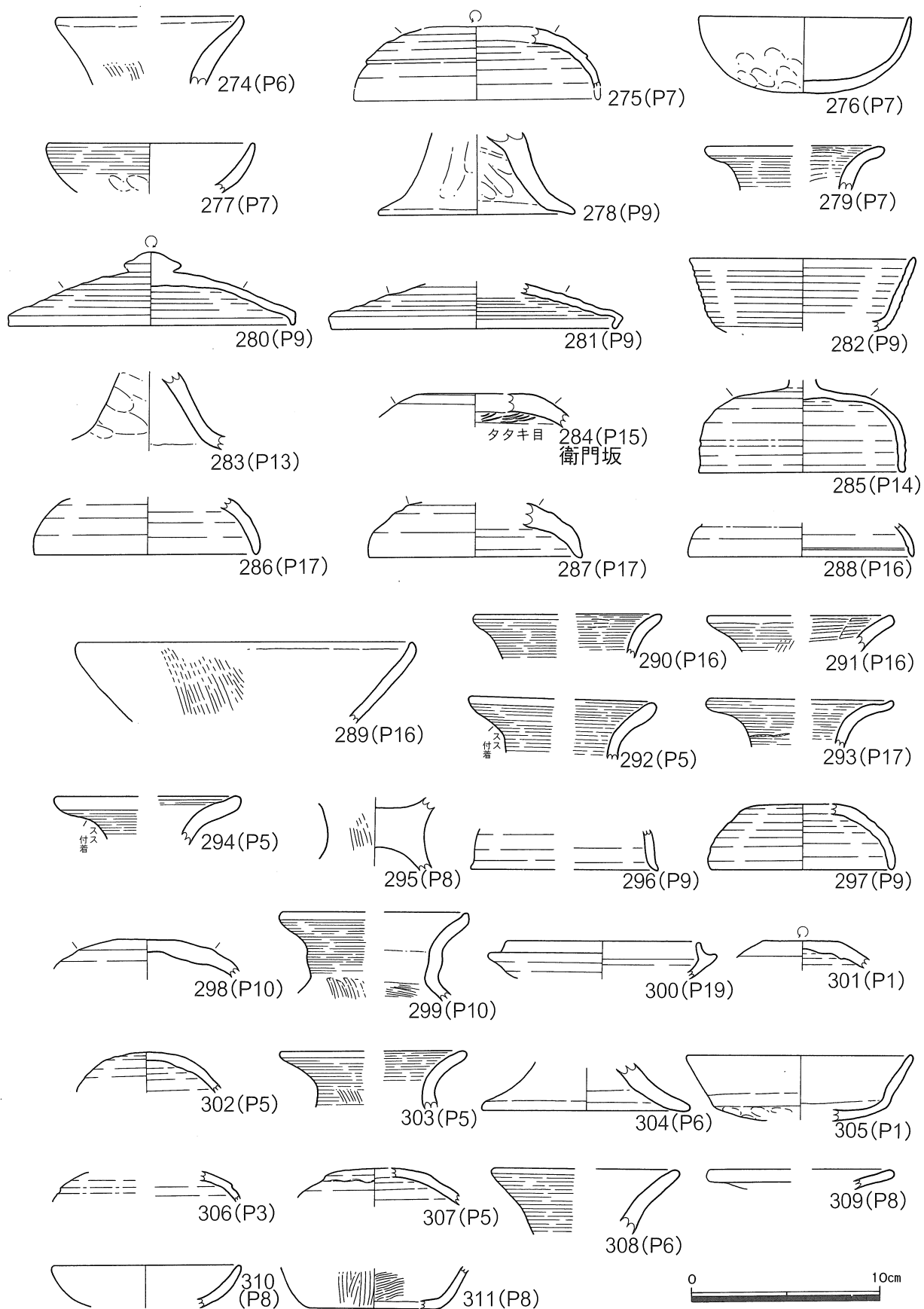
第53図 古墳中期～奈良時代土器実測図 13

221～233=SI8 234～241=SI9
242～245=SI10 246～248=SI12



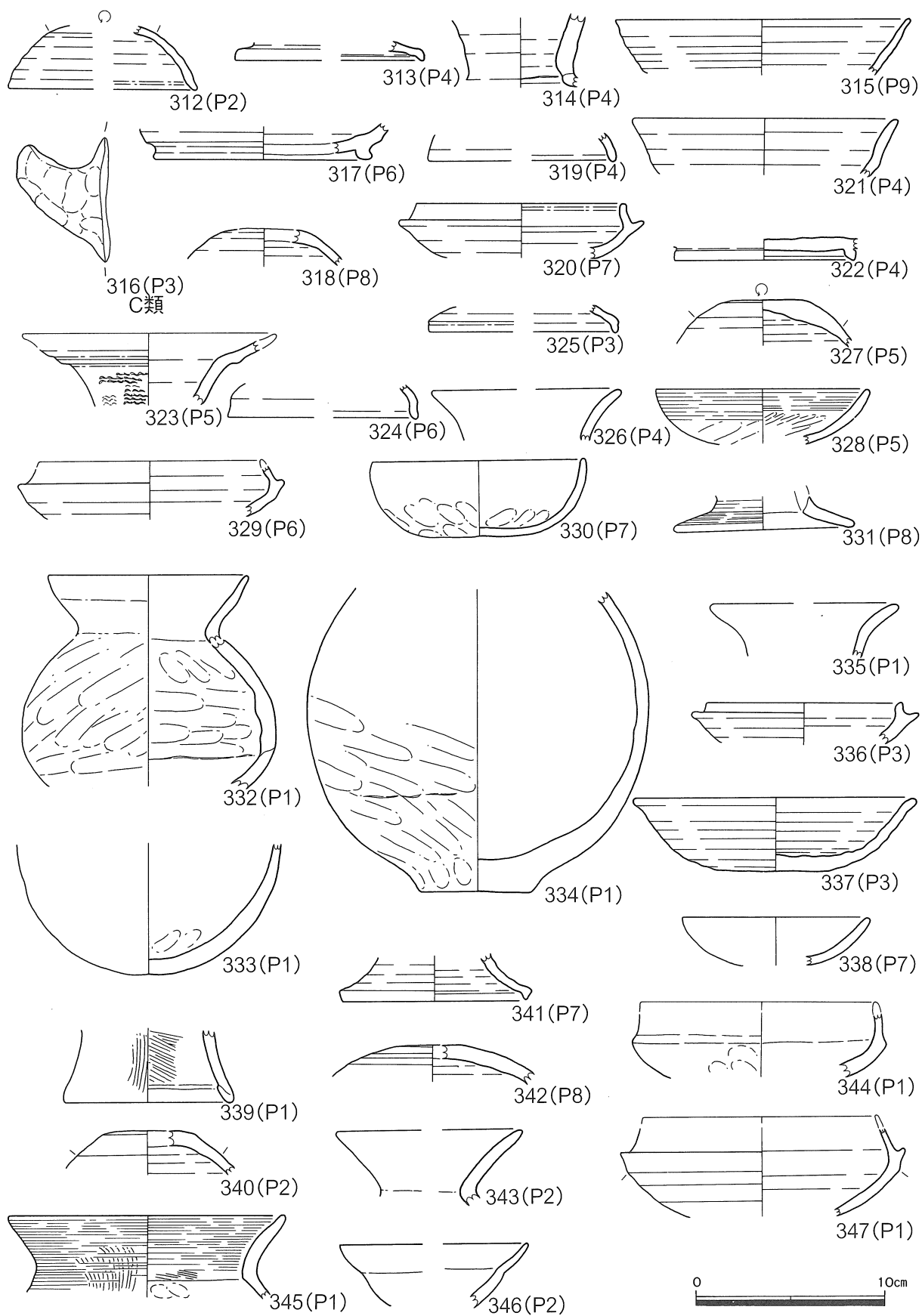
第54図 古墳中期～奈良時代土器実測図 14

249～253=SI12 254～256=SI13
 257・258=SI14 259～261=SB12
 262～264=SB13 265～273=SB14



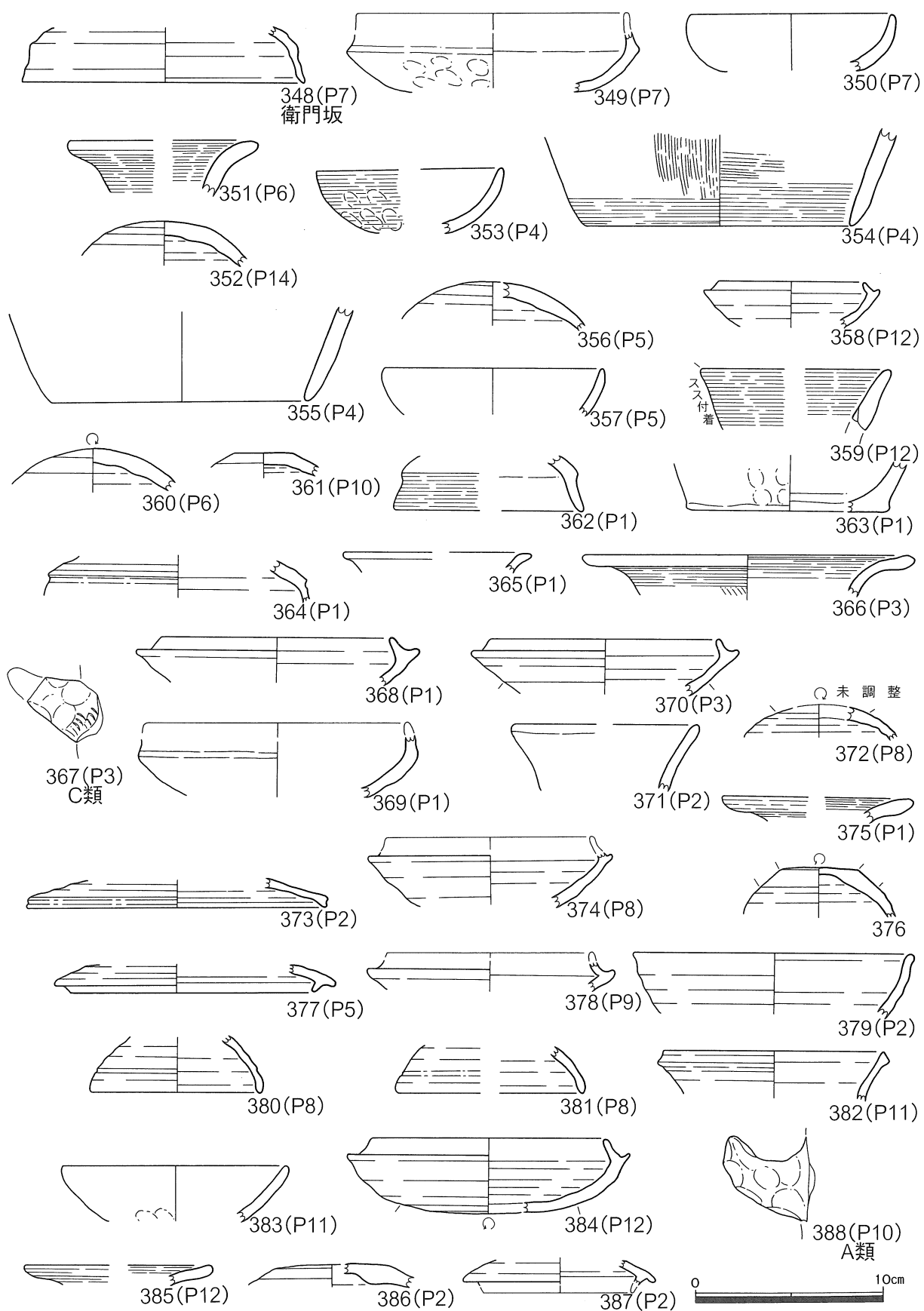
第55図 古墳中期～奈良時代土器実測図 15

274～293=SB14 294～300=SB15
301～305=SB16 306～311=SB17



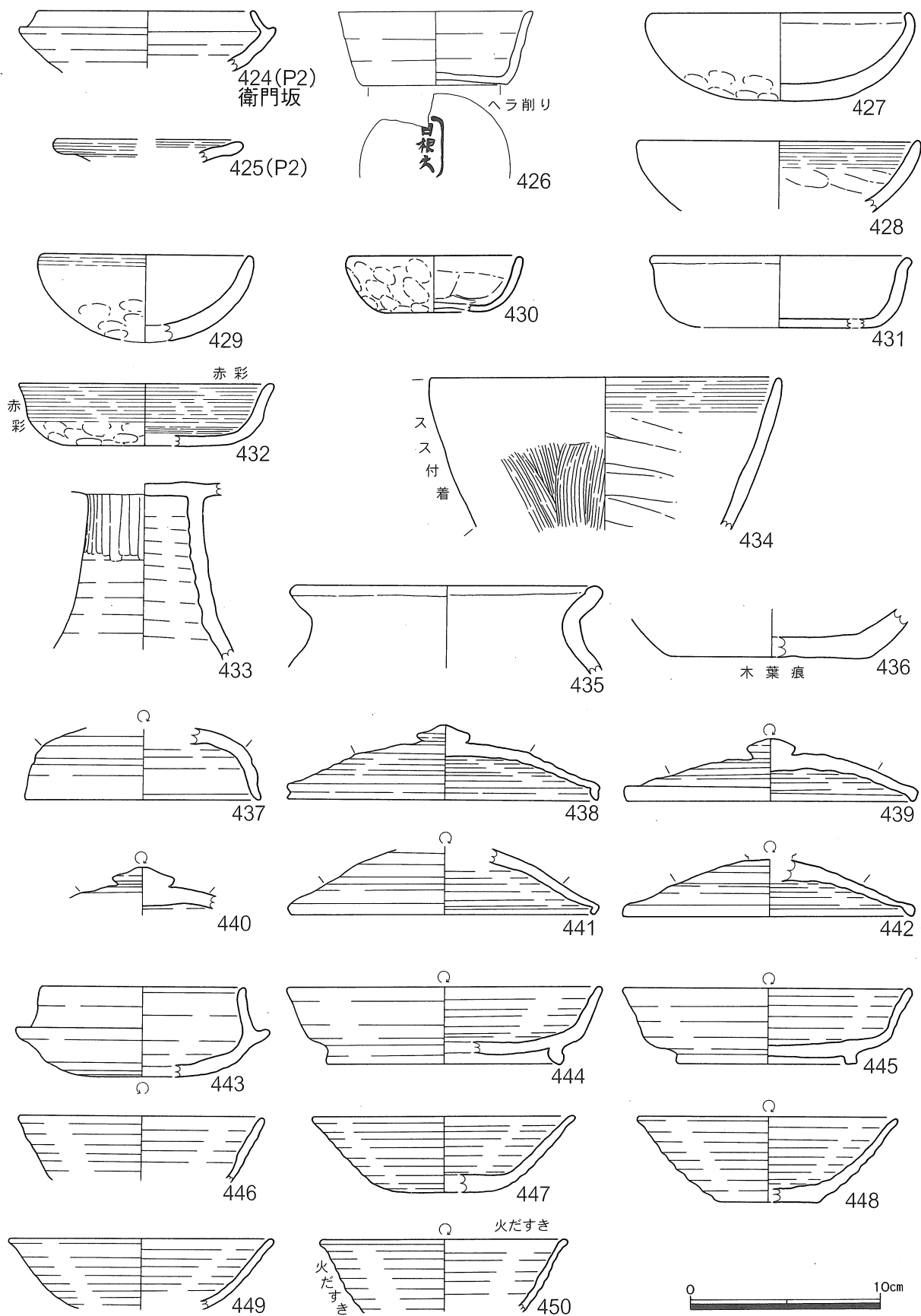
第56図 古墳中期～奈良時代土器実測図 16

312~315=SB18	316~318=SB20
319・320=SB21	321~324=SB22
325~331=SB23	332~338=SB25
339・340=SB26	341・342=SB28
343=SB29	344・345=SB30
346・347=SB31	



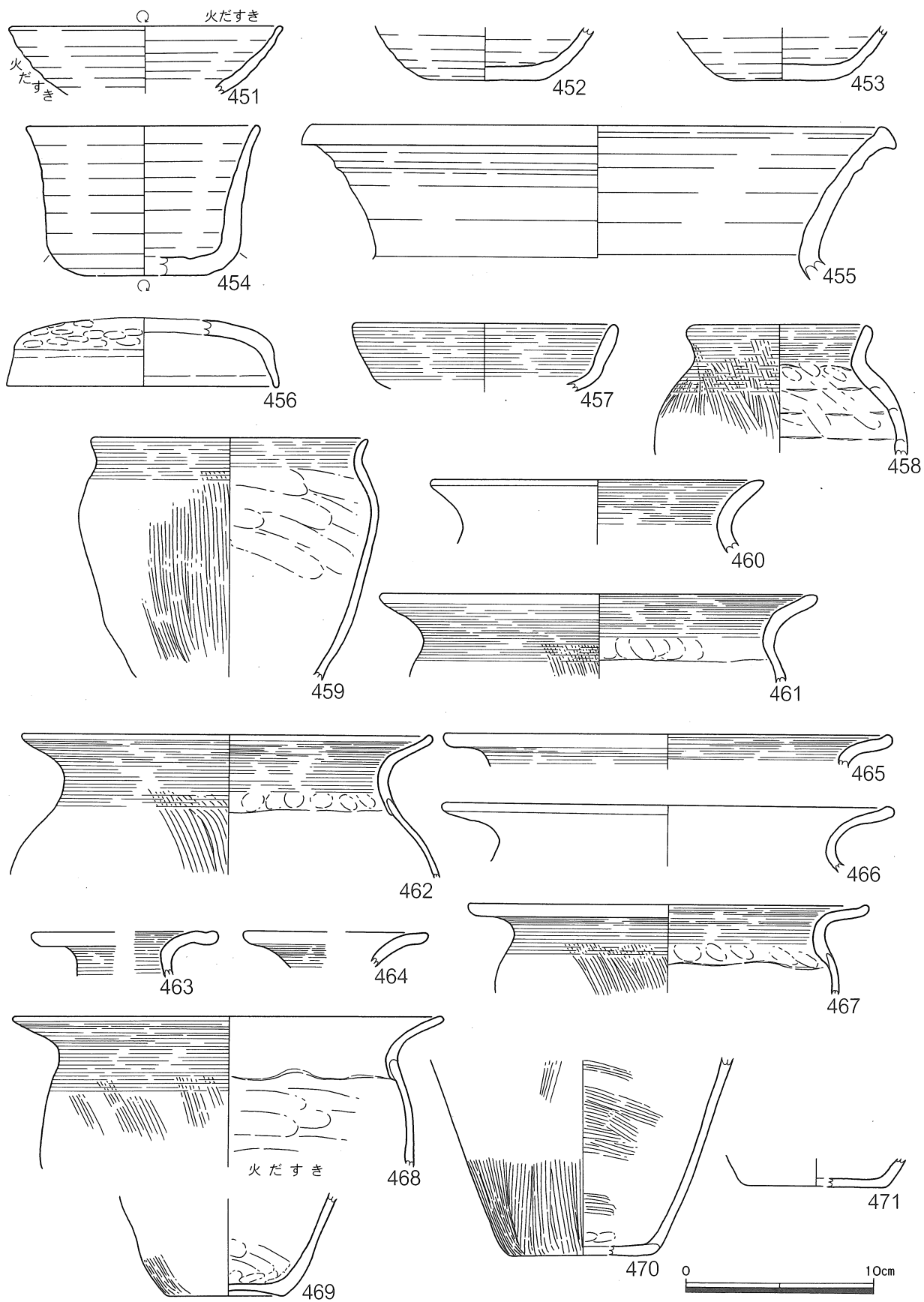
第57図 古墳中期～奈良時代土器実測図 17

348～350=SB31	351・352=SB32	353～359=SB33
360・361=SB35	362・363=SB38	364・365=SB39
366・367=SB43	368～370=SB44	371・372=SB60
373=SB61	374=SB63	375～377=SB64
378=SB65	379～385=SB66	386～388=SB67



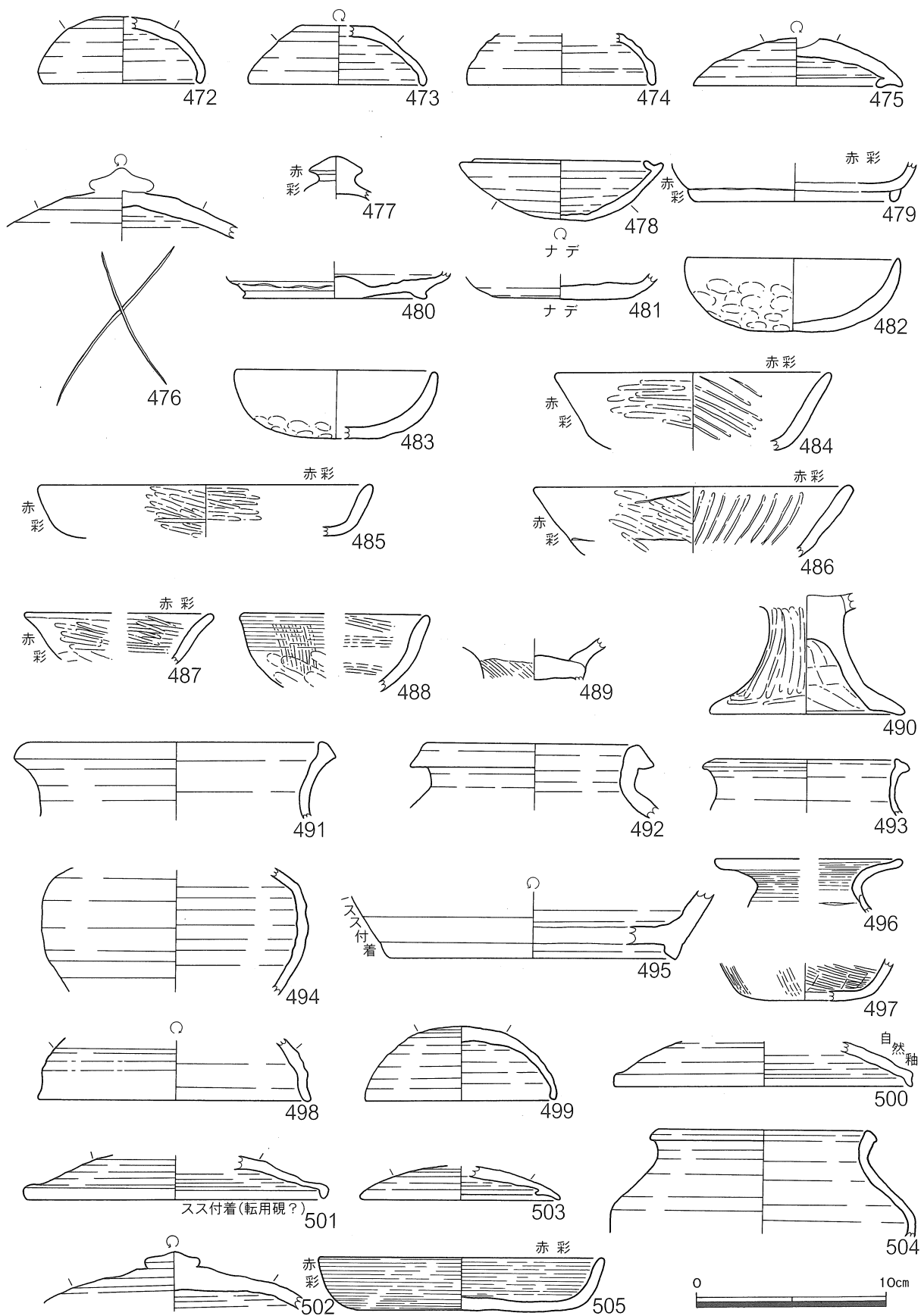
第59図 古墳中期～奈良時代土器実測図 19

424=SA14 425=SA17
426～436=SE3 437～450=SE4



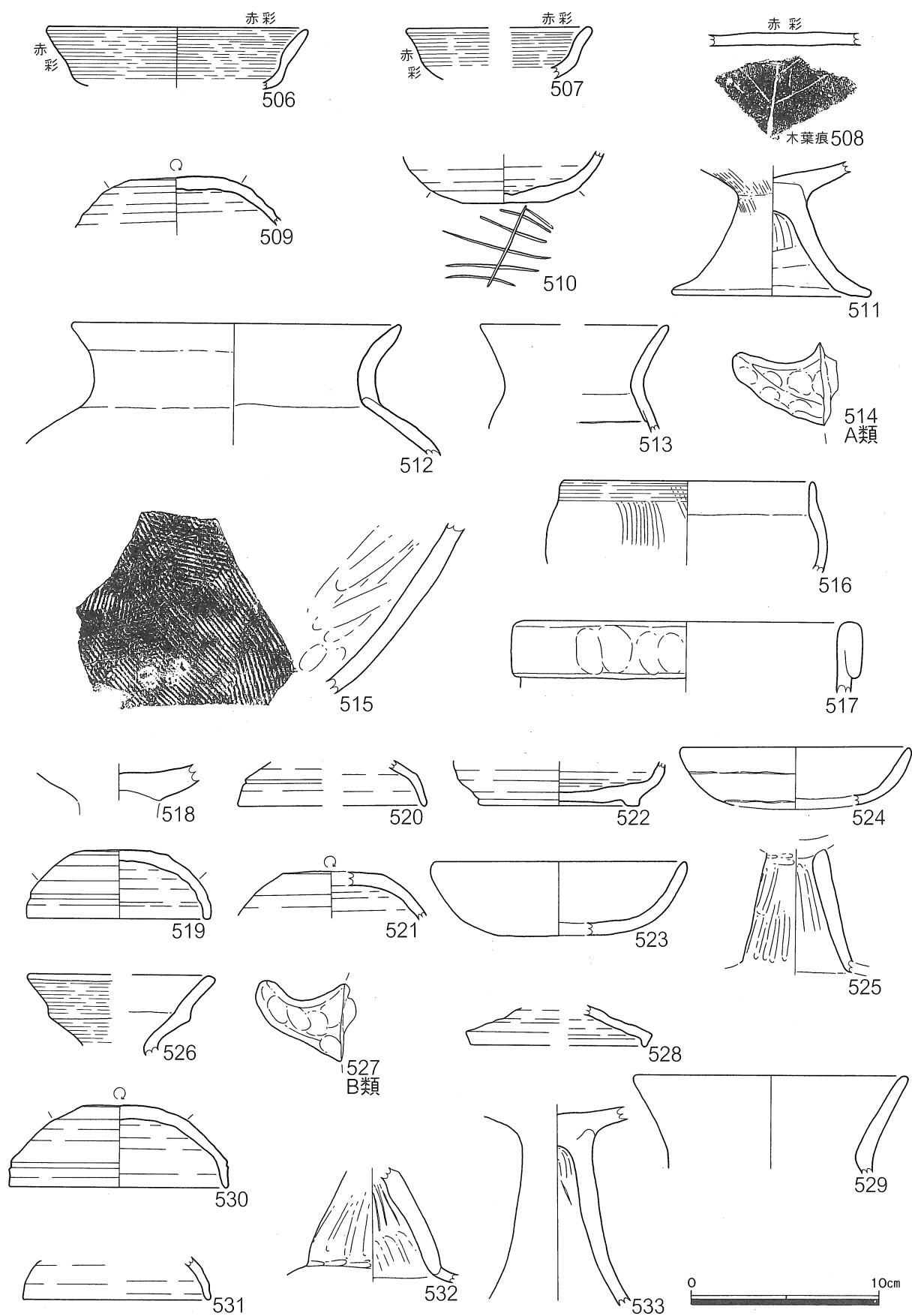
第60図 古墳中期～奈良時代土器実測図 20

451～471=SE4



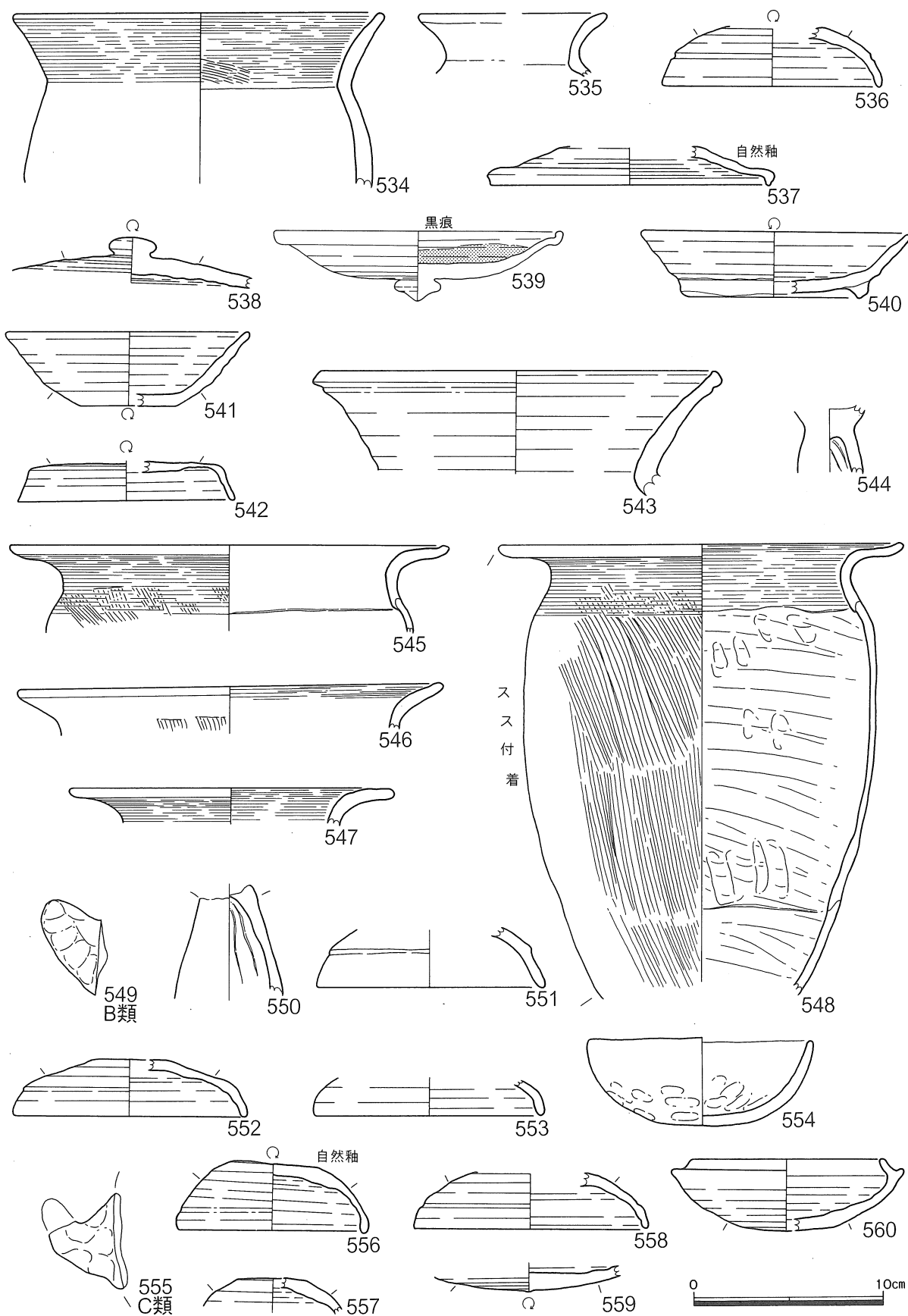
第61図 古墳中期～奈良時代土器実測図 21

472～497=SE5
498～505=SE19



第62図 古墳中期～奈良時代土器実測図 22

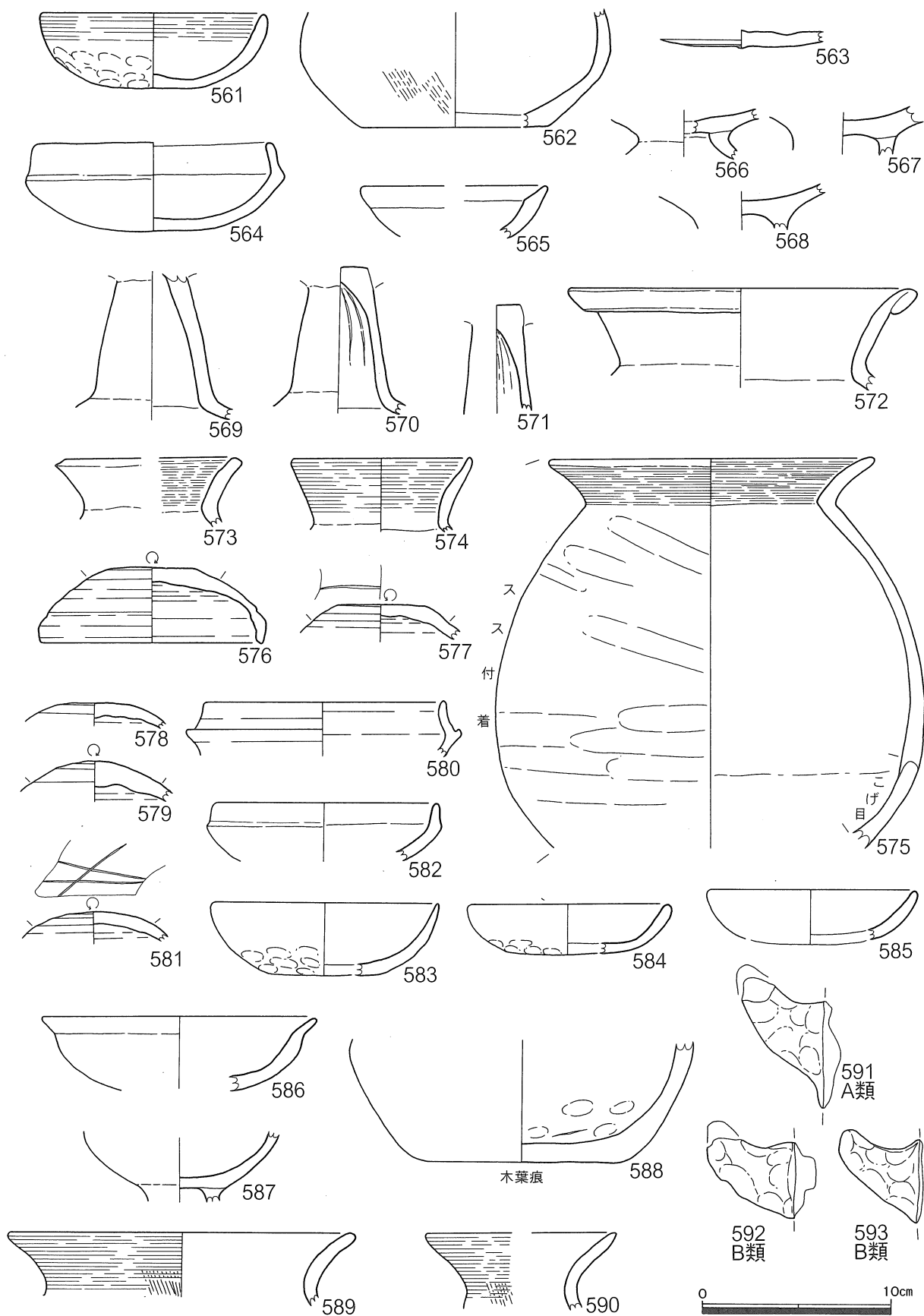
506~508=SE19	509~514=SK15
515=SK17	516=SK18
517=SK20	518=SK22
519=SK26	520~529=SK28
530~533=SK29	



第63図 古墳中期～奈良時代土器実測図 23

534=SK29
536~549=SK32
551~555=SK39
557=SK44
560=SK46

535=SK30
550=SK36
556=SK42
558・559=SK45



第64図 古墳中期～奈良時代土器実測図 24

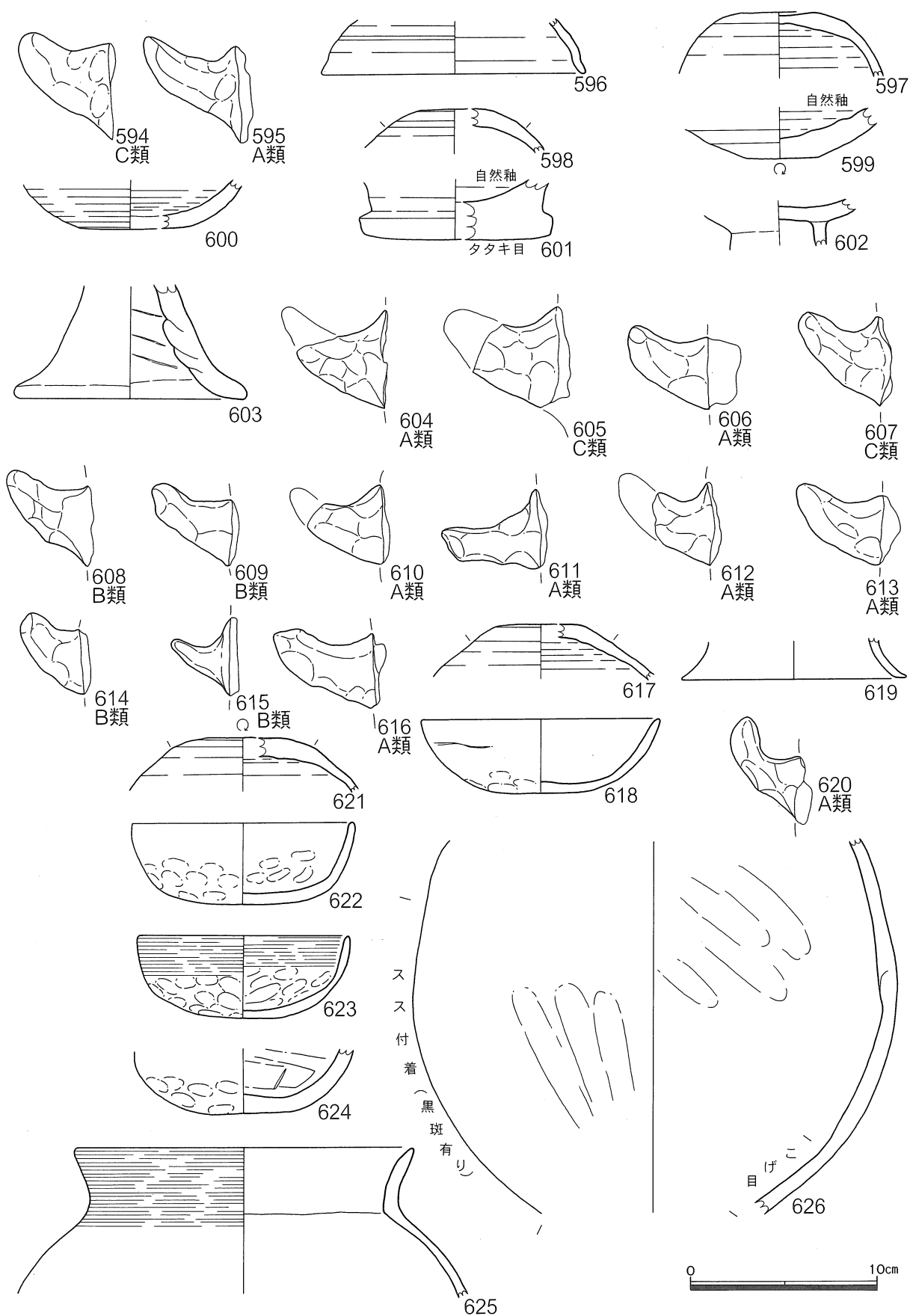
561・562=SK46

563～568=SK47

569～575=SK48

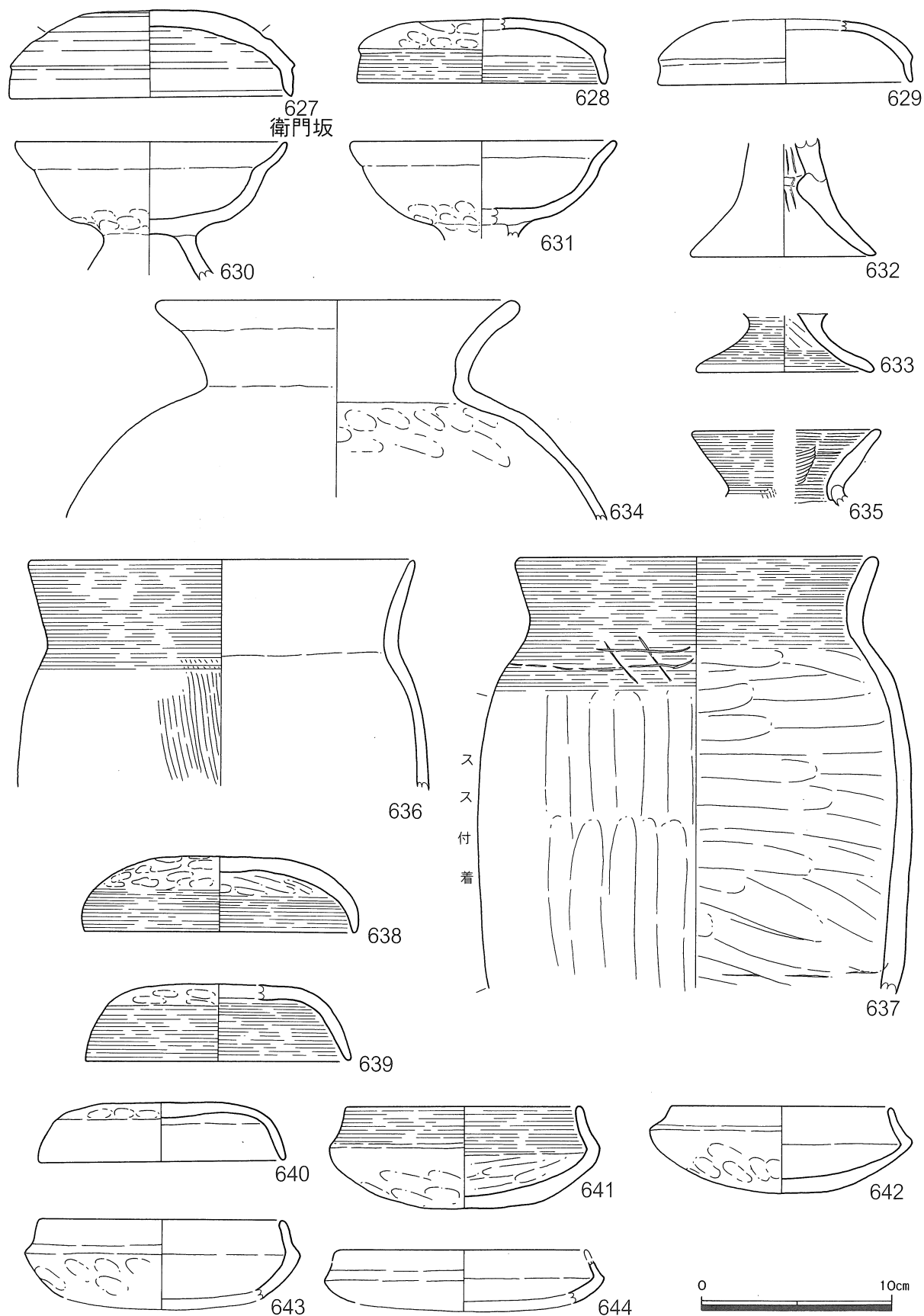
576=SK49

577～593=SK50



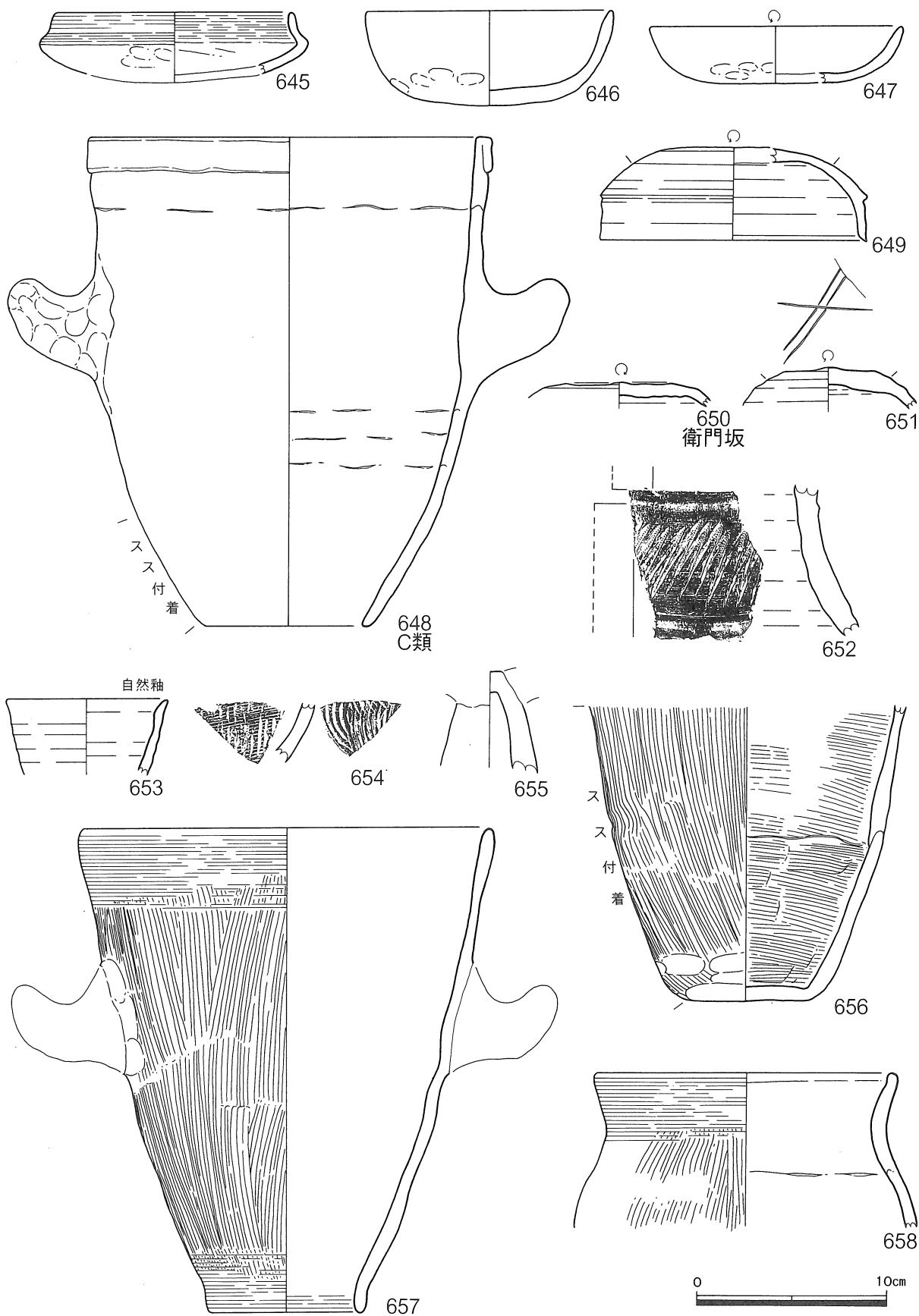
第65図 古墳中期～奈良時代土器実測図 25

594=SK51 595=SK52
 596~616=SK53 617=SK54
 618~620=SK55 621=SK56
 622~626=SK58



第66図 古墳中期～奈良時代土器実測図 26

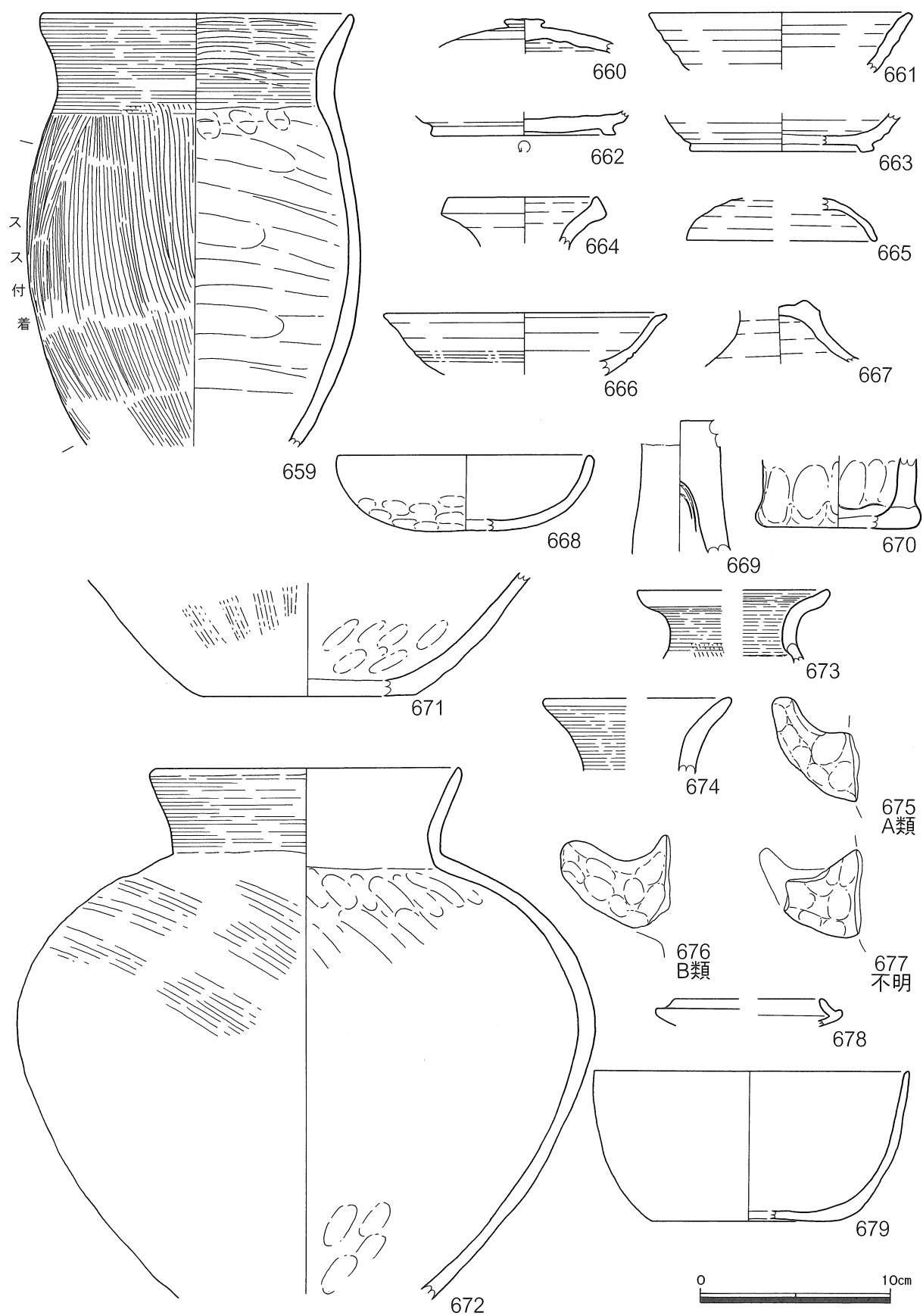
627～637=SK60
638～644=SK61



第67図 古墳中期～奈良時代土器実測図 27

645～648=SK61
656=SK66

649～655=SK62
657・658=SK67



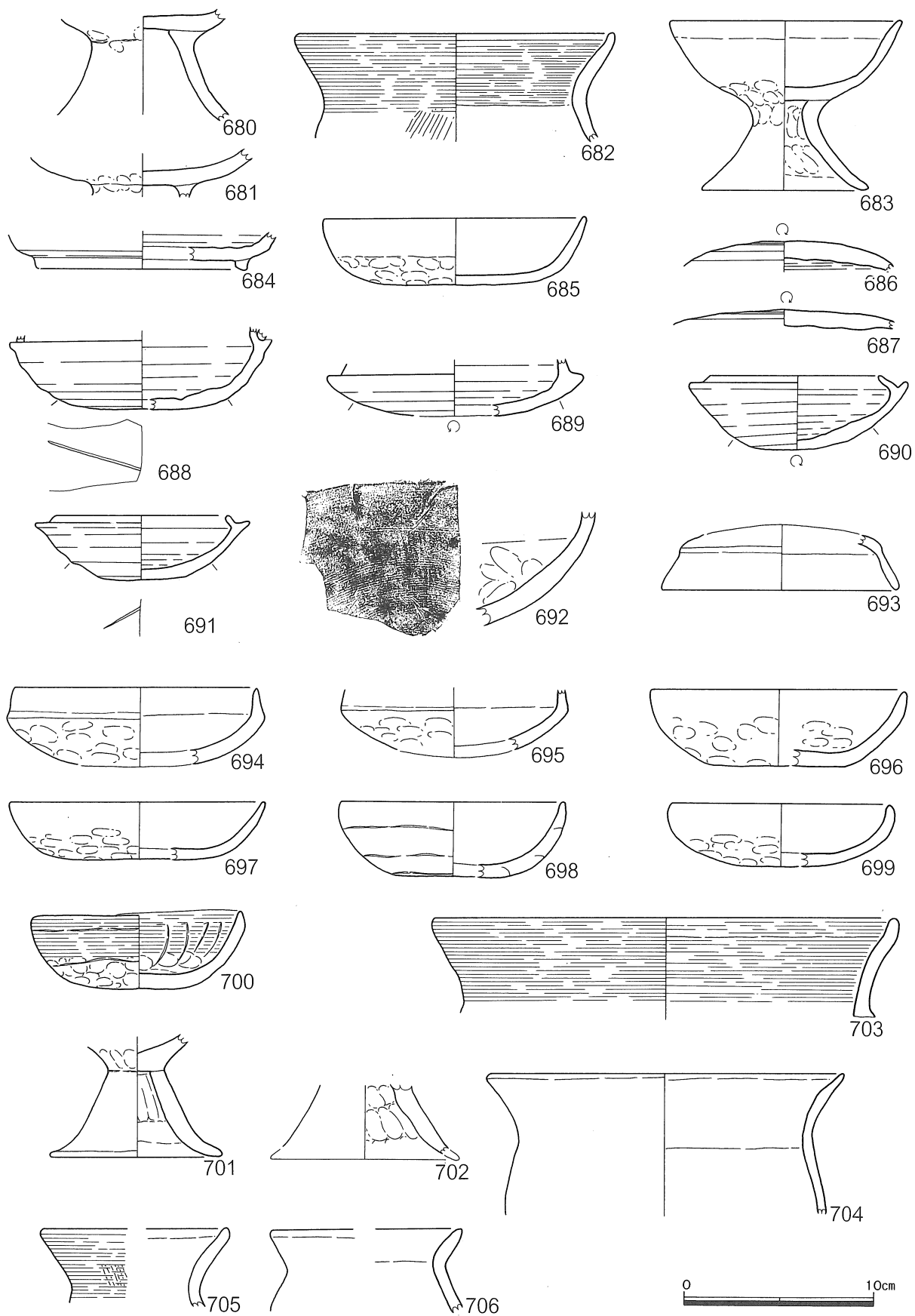
第68図 古墳中期～奈良時代土器実測図 28

659=SK67

660~664=SK68

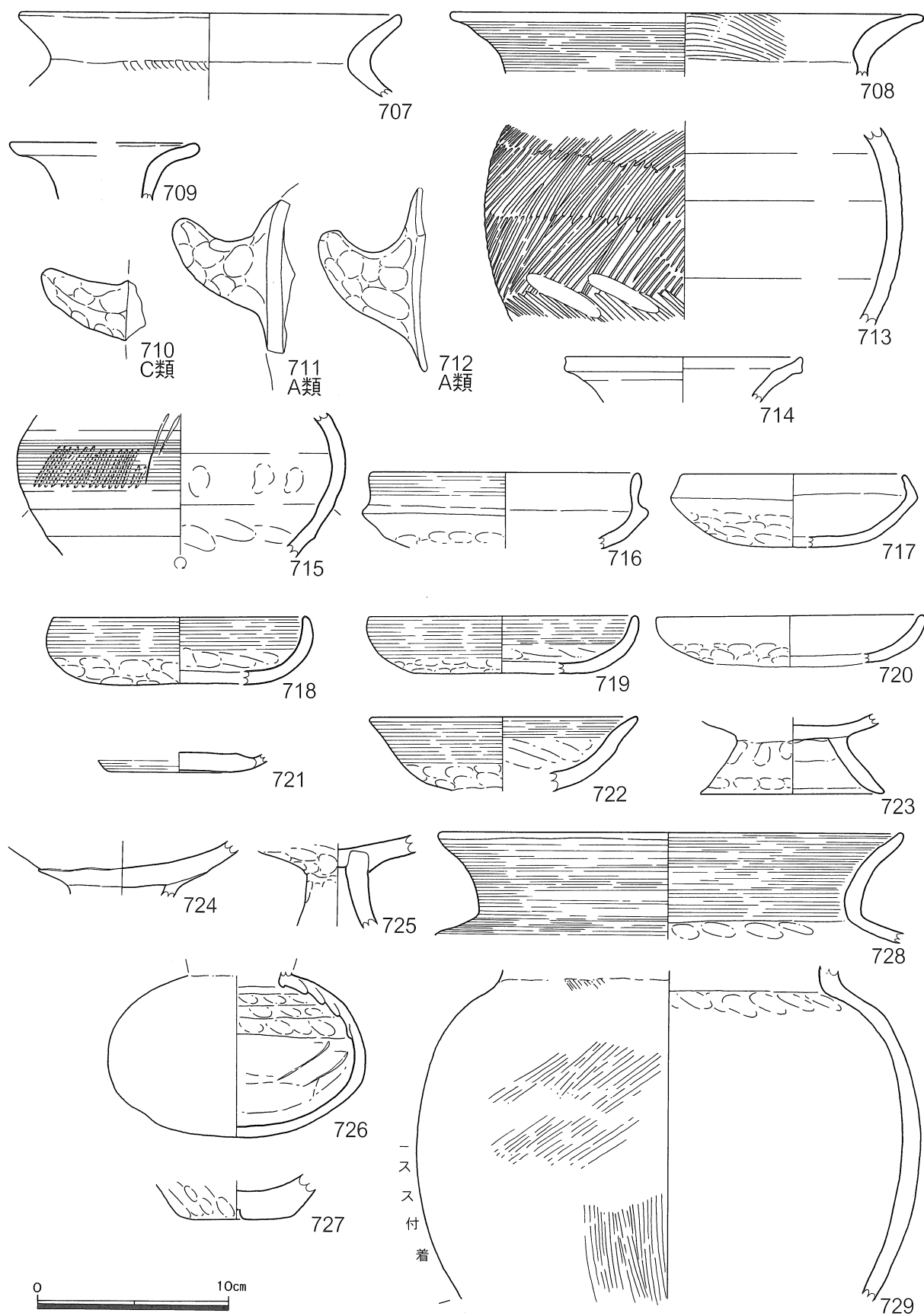
665~677=SK69

678・679=SK70



第69図 古墳中期～奈良時代土器実測図 29

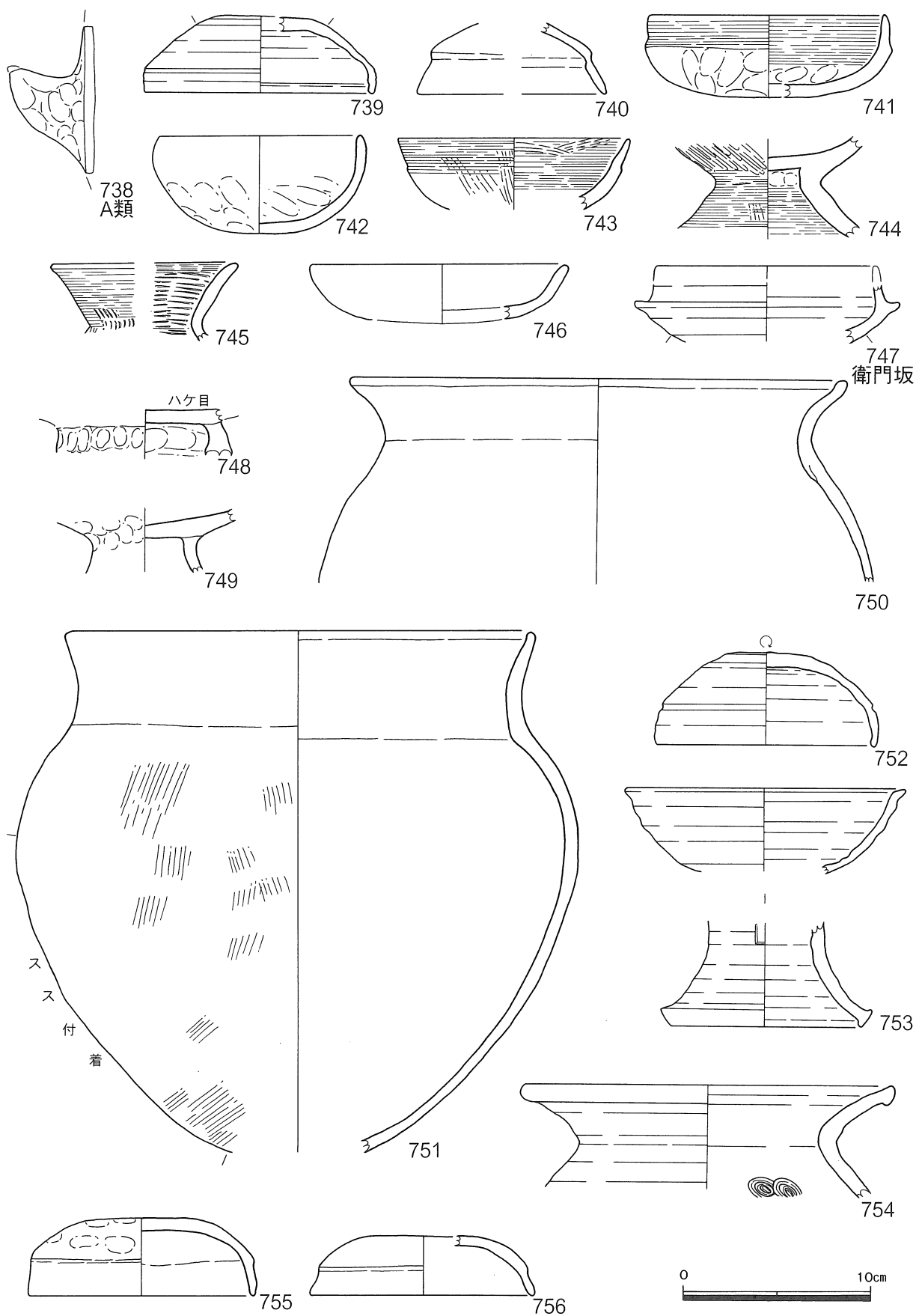
680～682=SK71 683=SK72
 684=SK73 685=SK74
 686～706=SK76



第70図 古墳中期～奈良時代土器実測図 30

707～711=SK76
714～729=SK79

712・713=SK78



第72図 古墳中期～奈良時代土器実測図 32

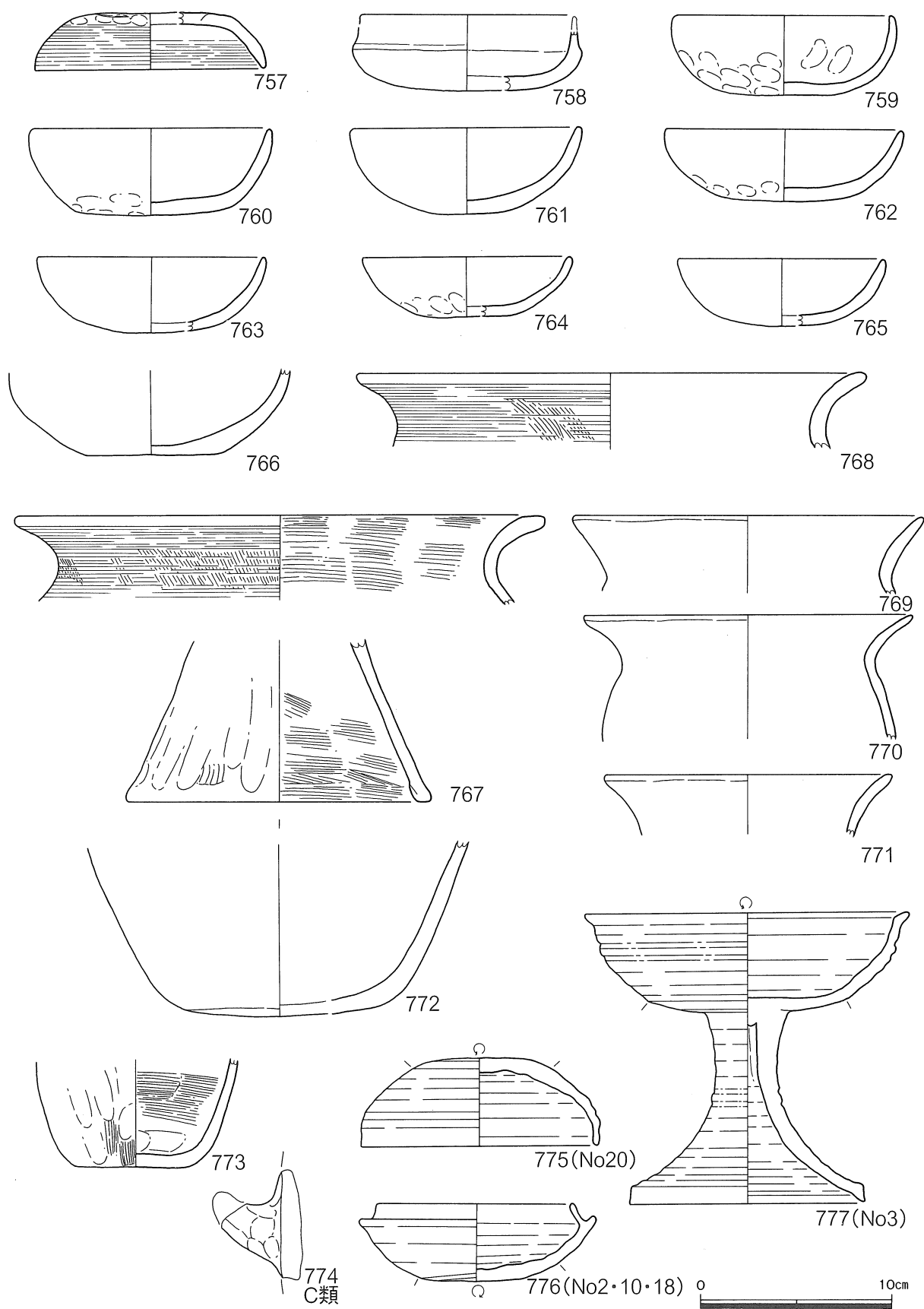
738=SK79

739~745=SK80

747~750=SK81

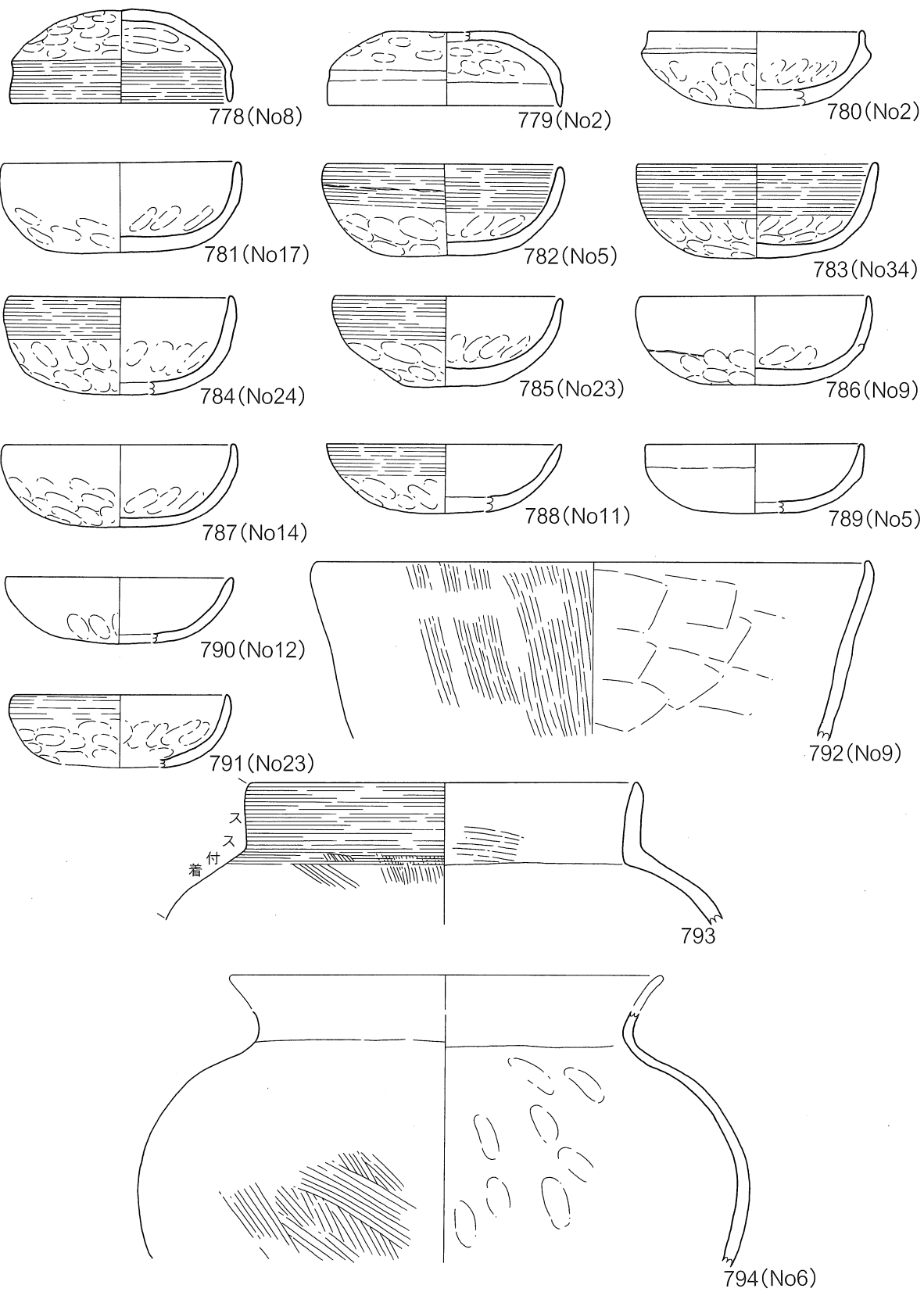
751=SK83

752~756=SK89



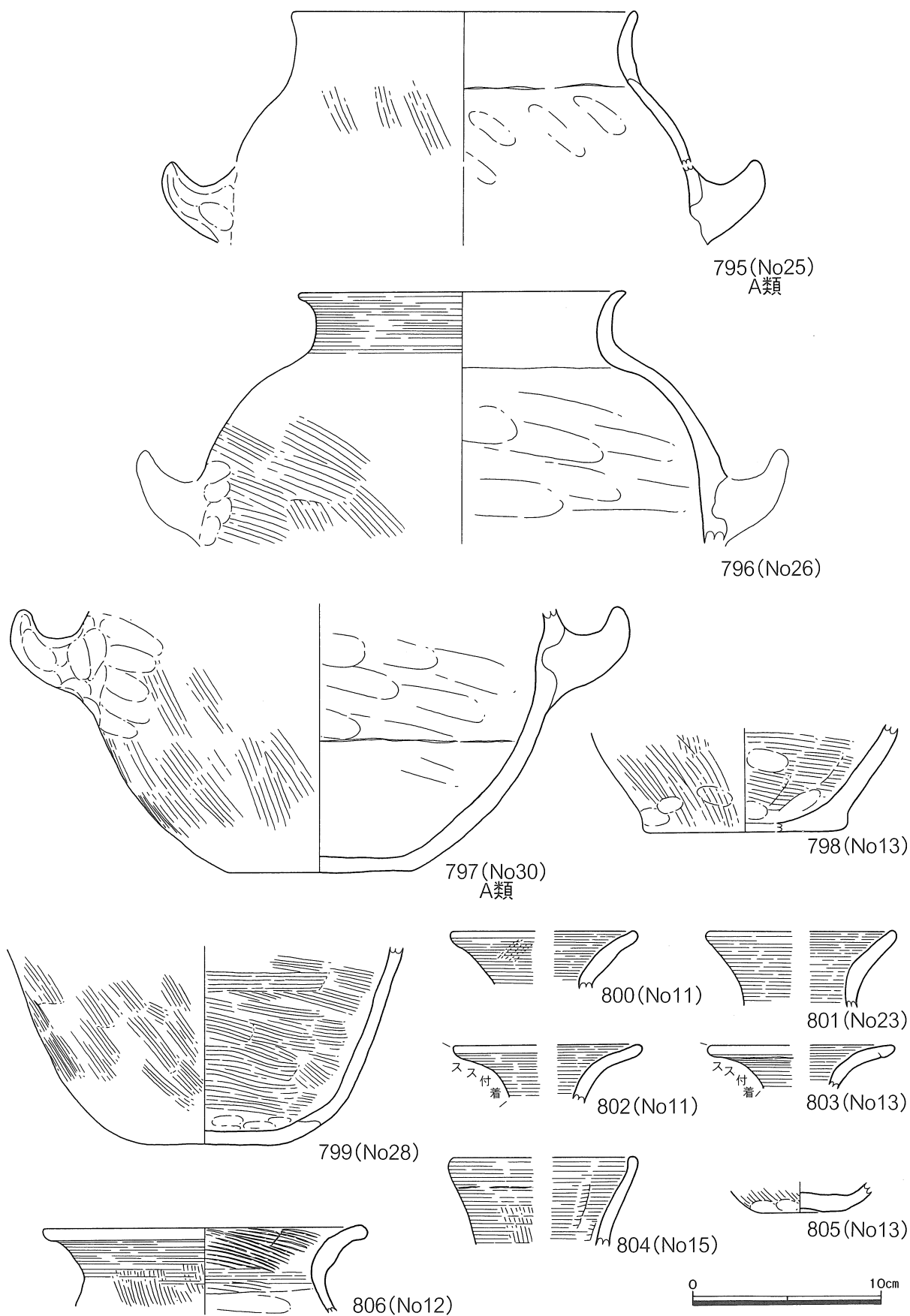
第73図 古墳中期～奈良時代土器実測図 33

757～774=SK89
775～777=SD236



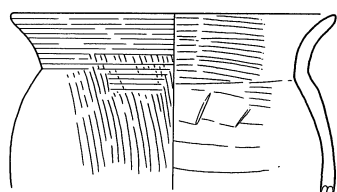
第74図 古墳中期～奈良時代土器実測図 34

778~794=SD236

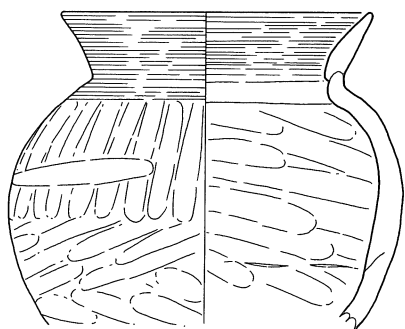


第75図 古墳中期～奈良時代土器実測図 35

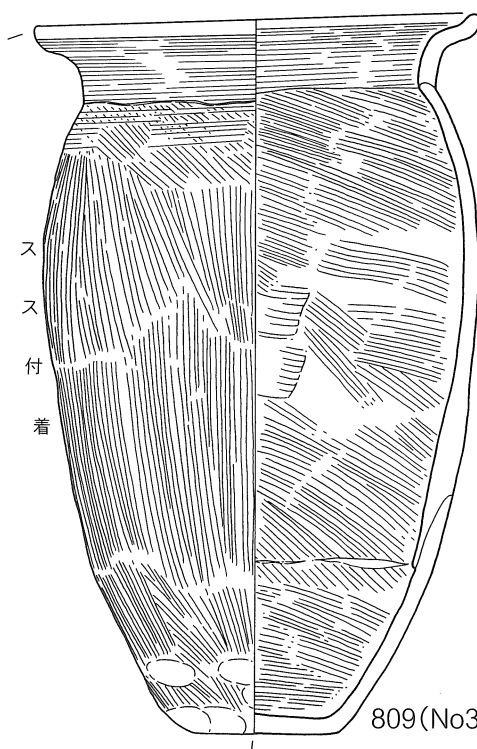
795～806=SD236



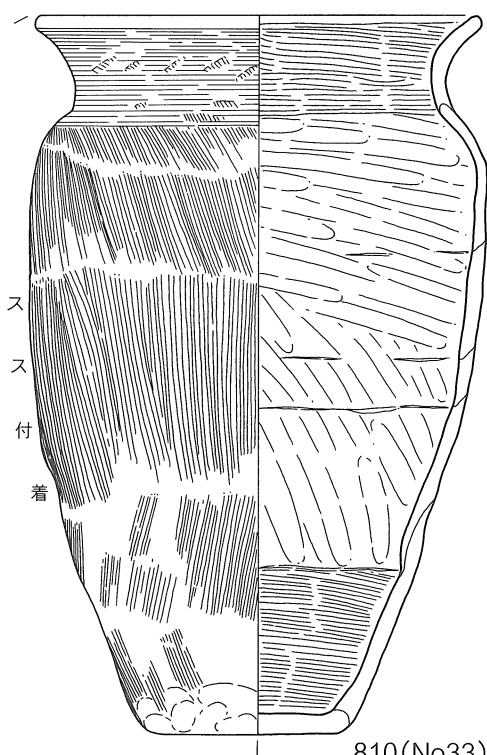
807(No11)



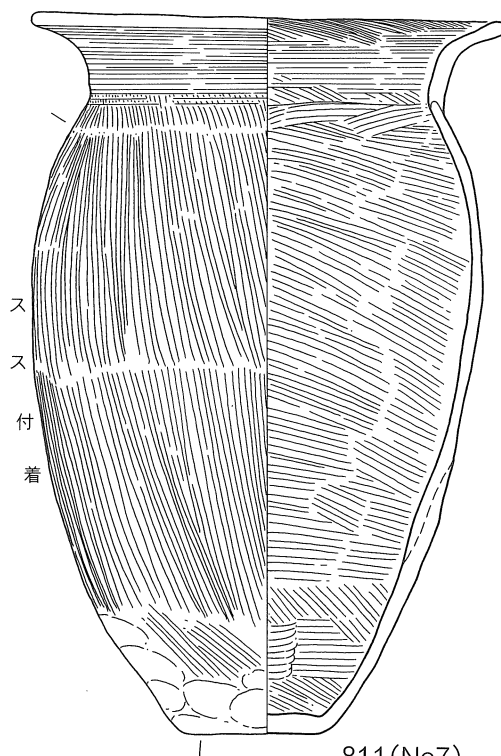
808(No31)



809(No32)



810(No33)

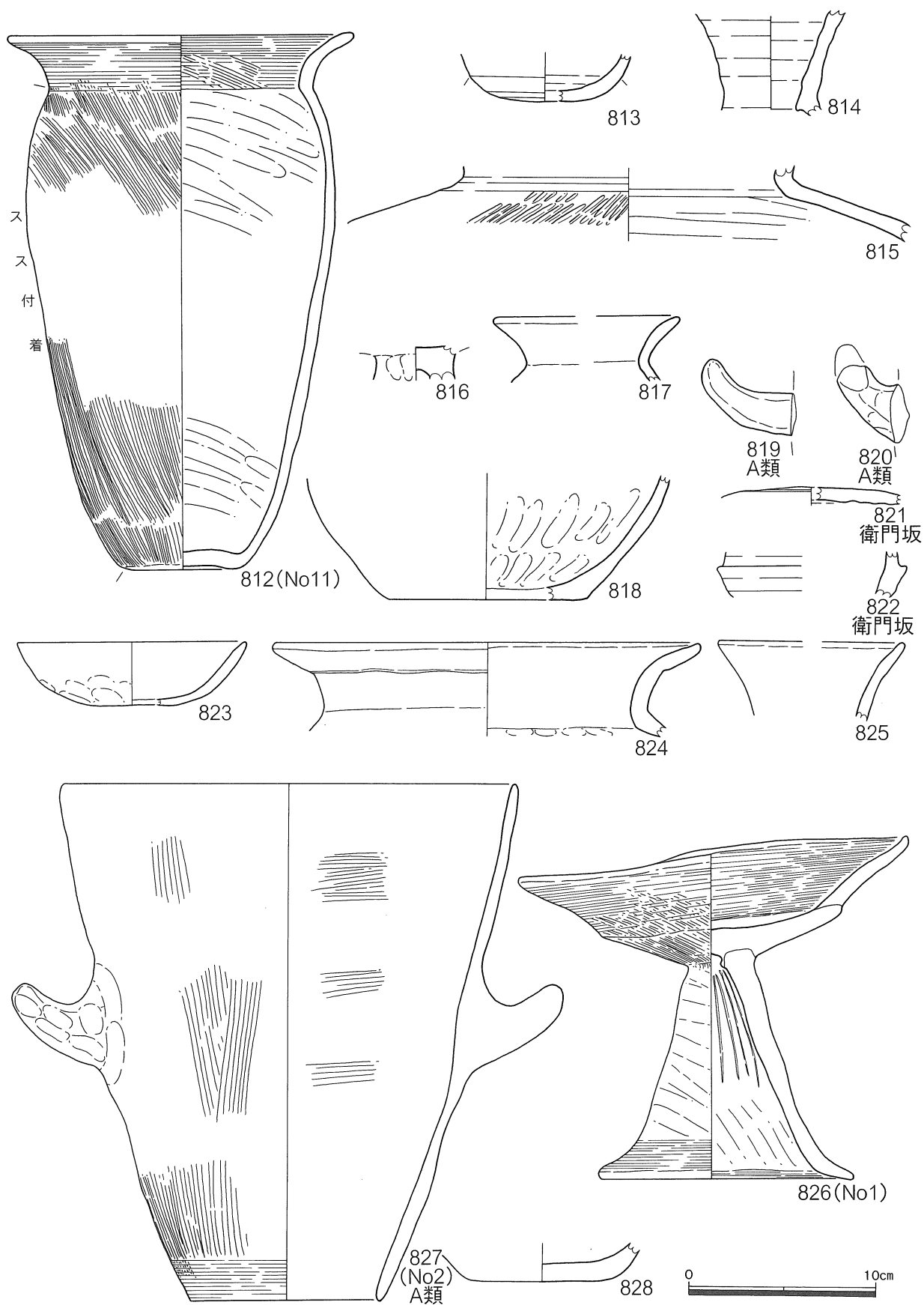


811(No7)



第76図 古墳中期～奈良時代土器実測図 36

807～811=SD236

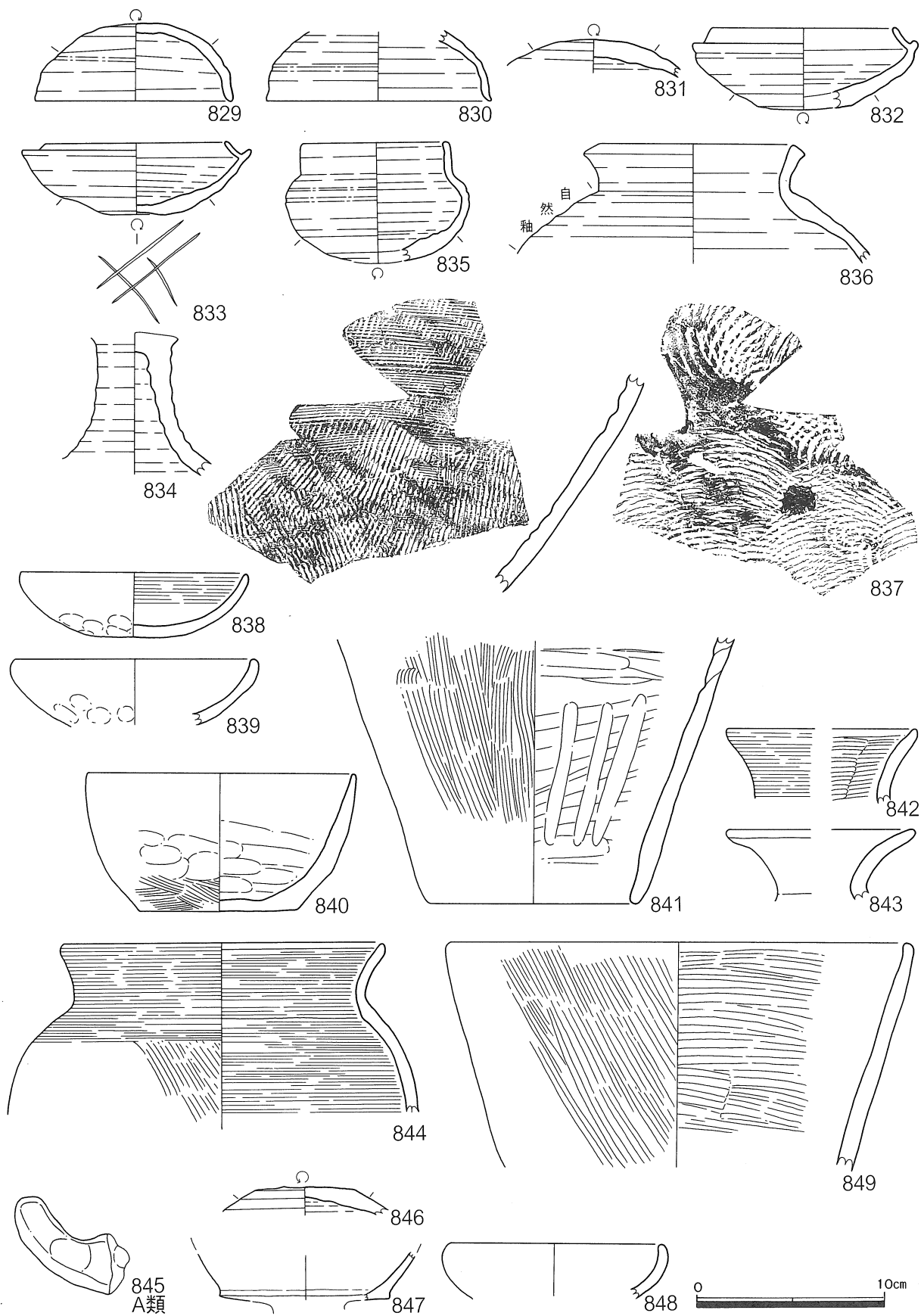


第77図 古墳中期～奈良時代土器実測図 37

812～820=SD236

821～825=SK92

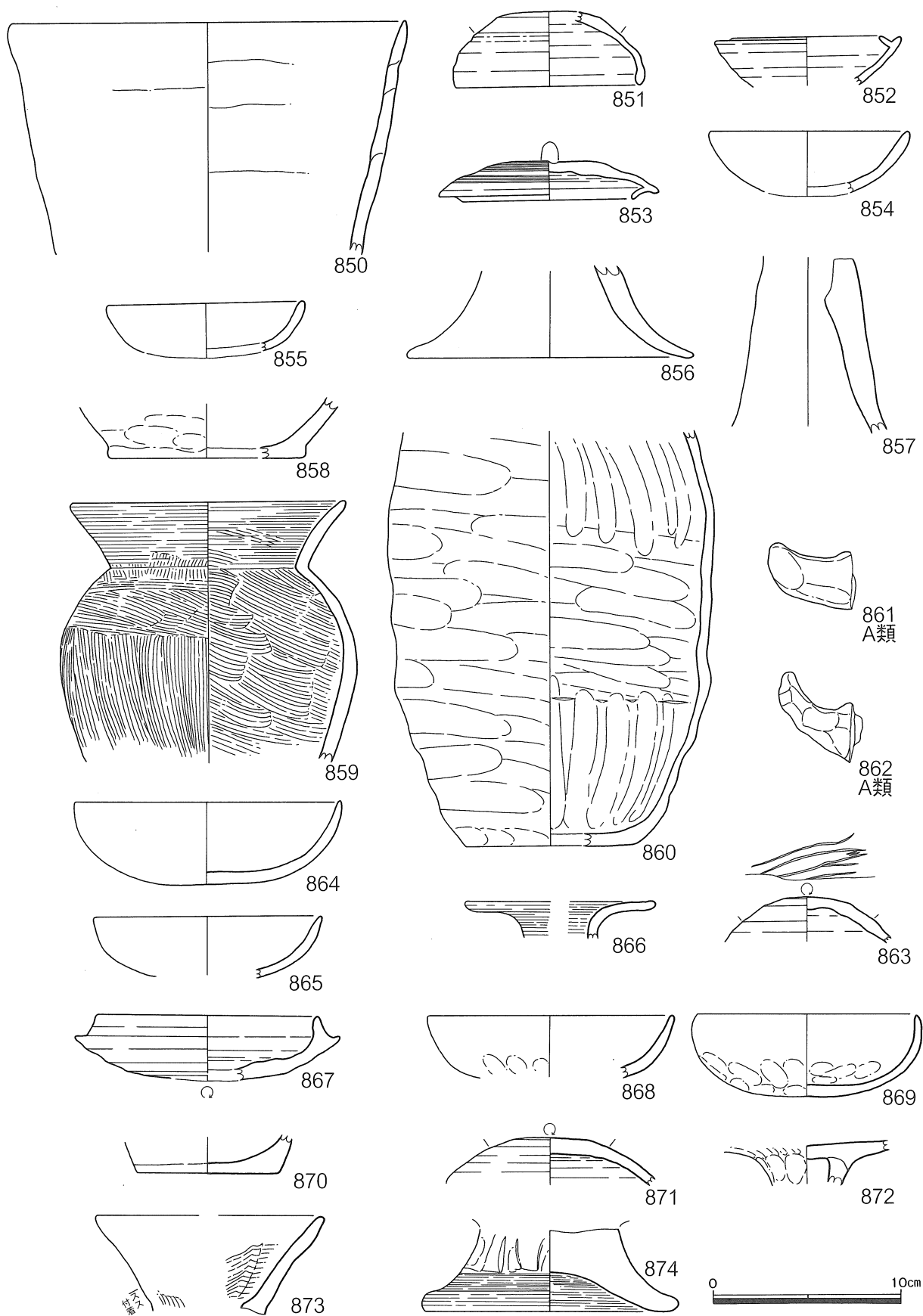
826～828=SK93



第78図 古墳中期～奈良時代土器実測図 38

829～845=SK94
847=SK96

846=SK95
848・849=SK98



第79図 古墳中期～奈良時代土器実測図 39

850=SK99

863=SK102

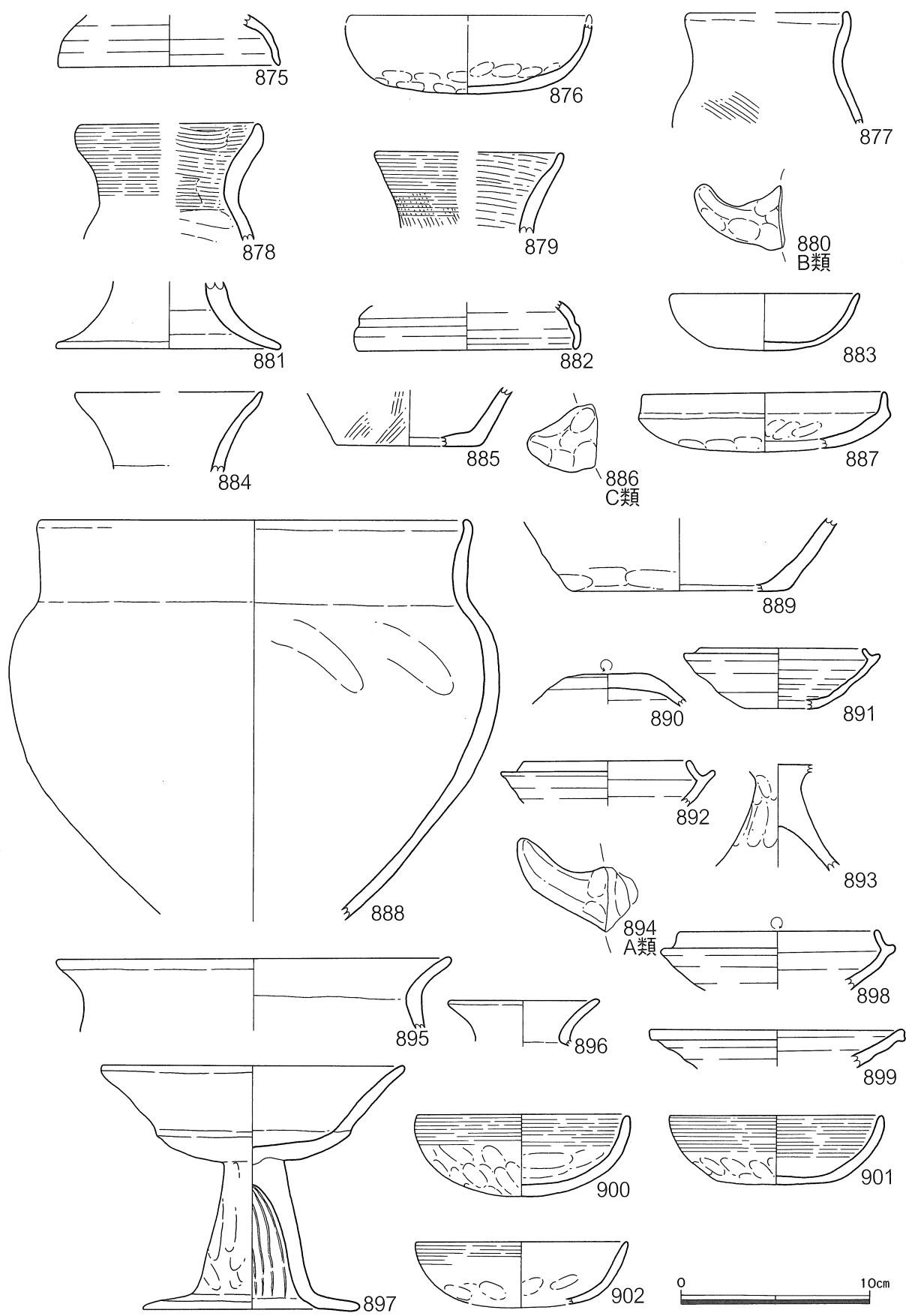
867~870=SK104

873・874=SK107

851~862=SK101

864~866=SK103

871・872=SK105



第80図 古墳中期～奈良時代土器実測図 40

875～879=SK108

880=SK109

881～886=SK111

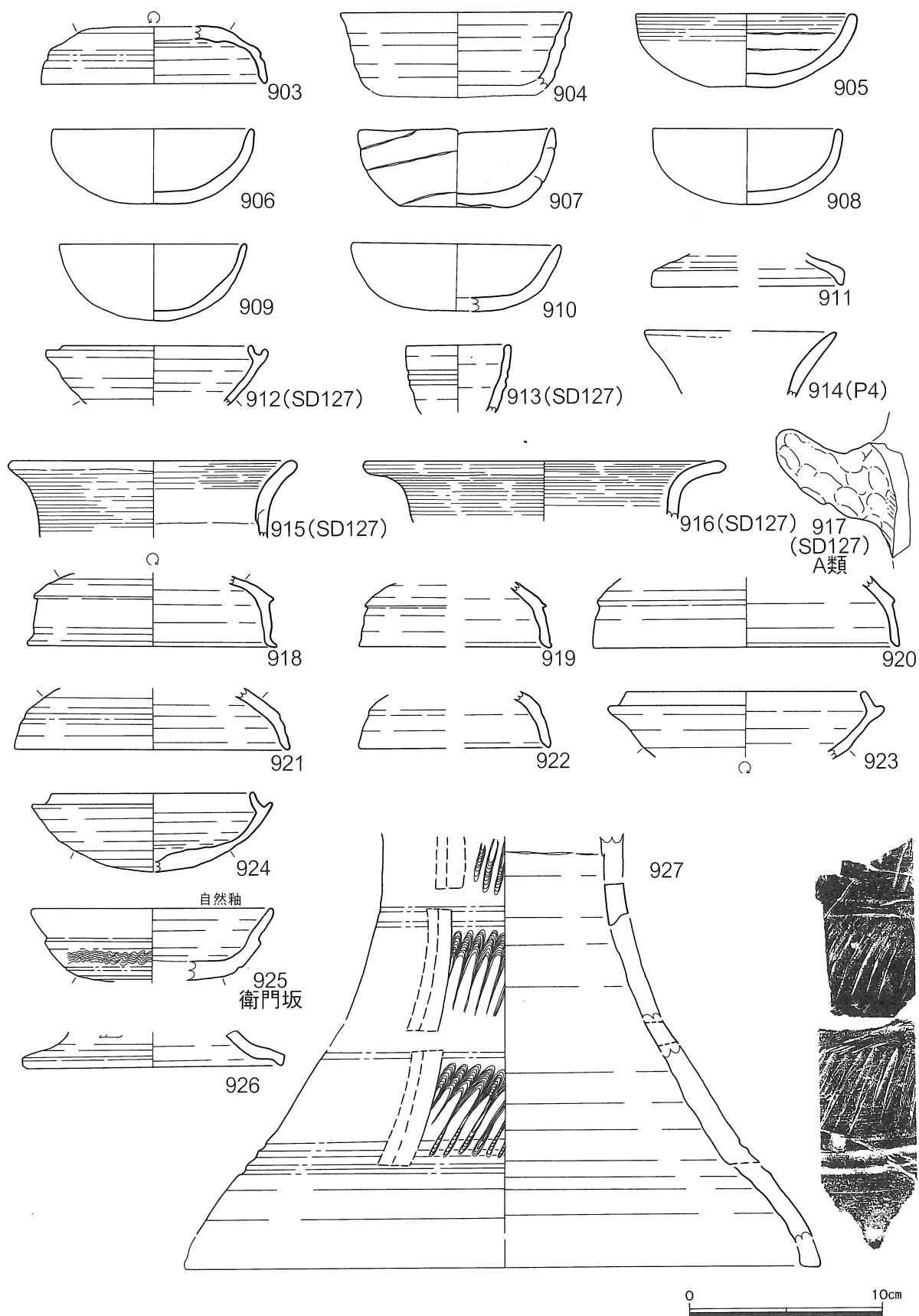
887～889=SK112

890～894=SK113

895・896=SK121

897=SK122

898～902=SK127



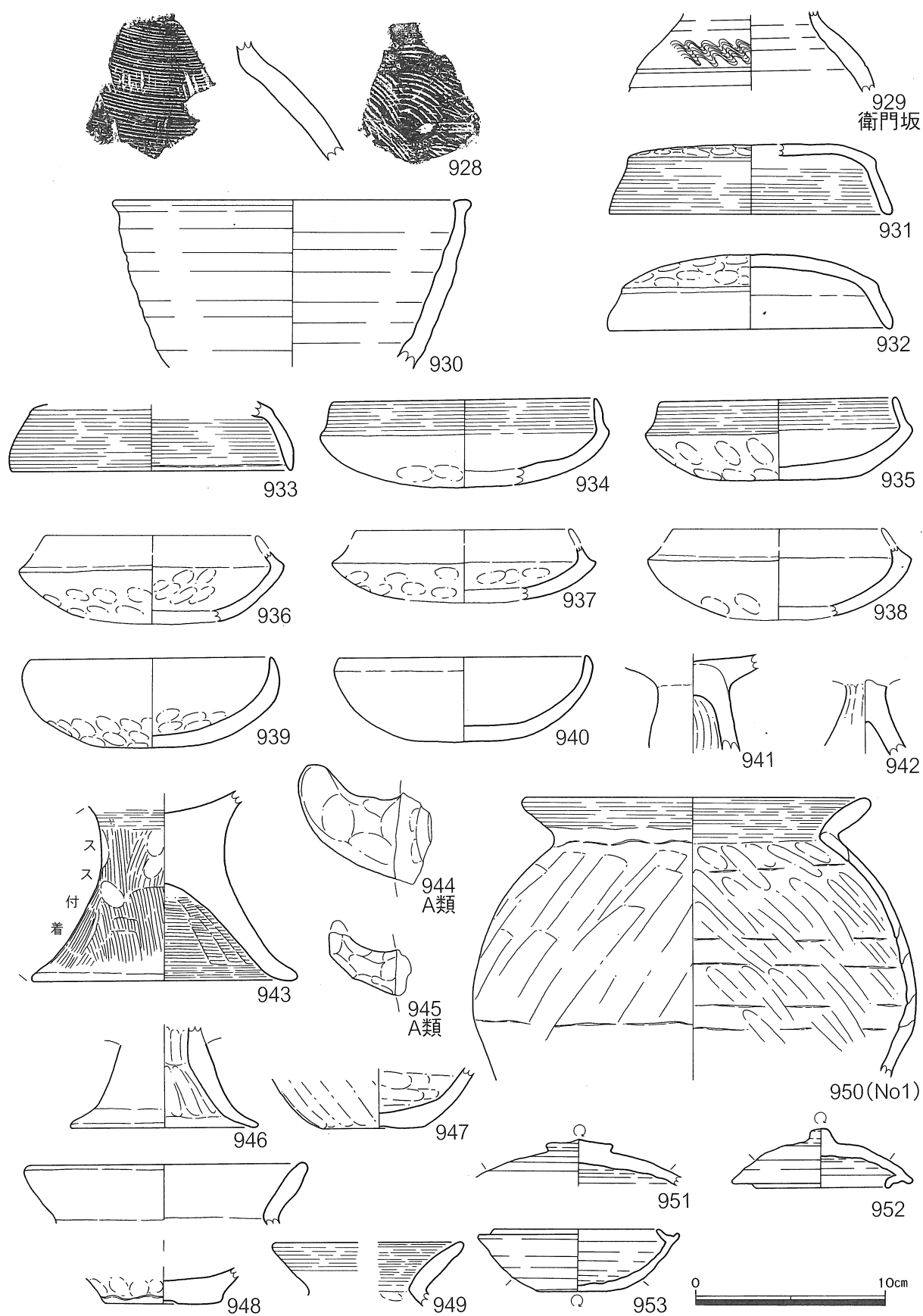
第81図 古墳中期～奈良時代土器実測図 41

903～910＝SK129

911＝SK202

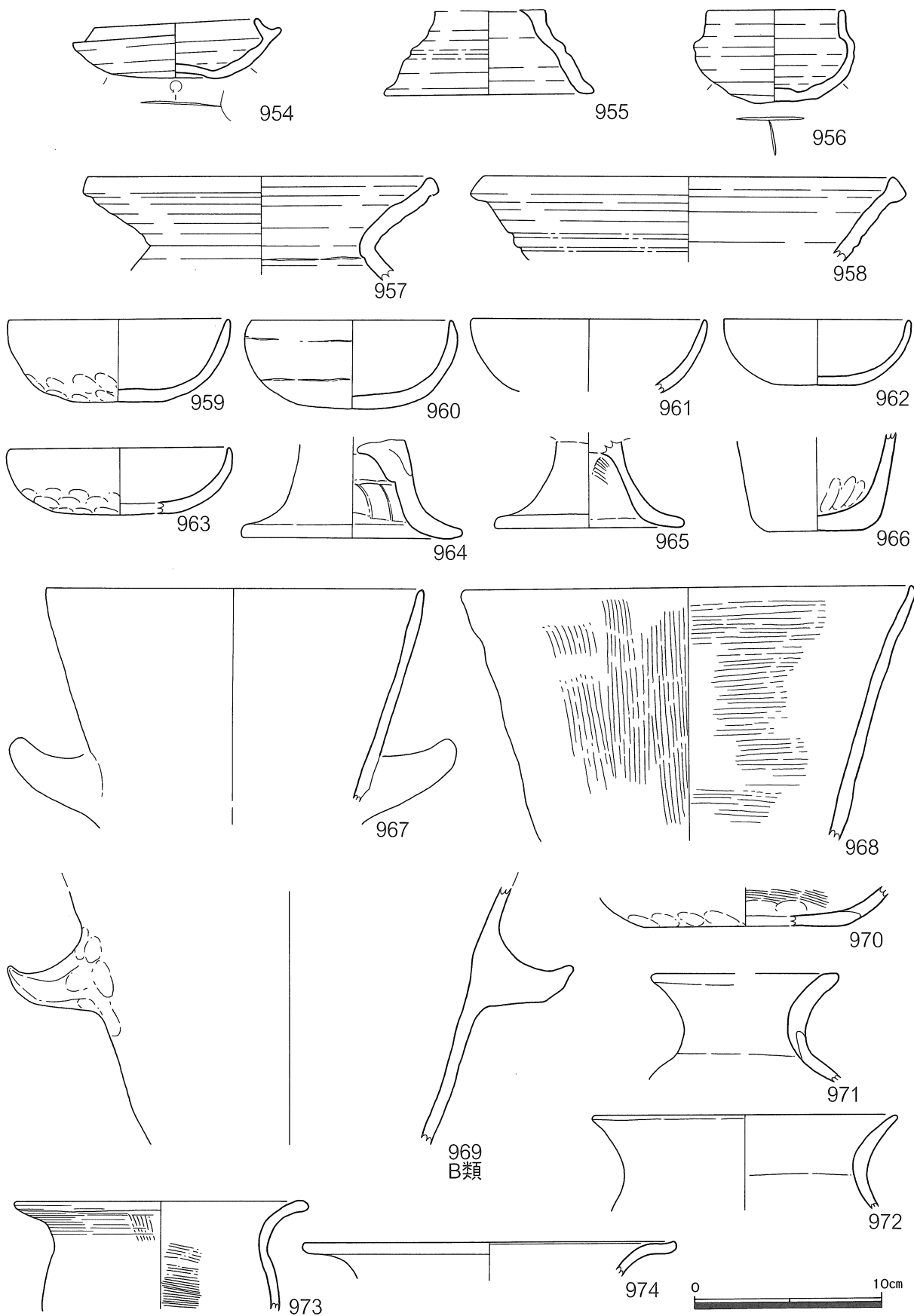
912～917＝SX1

918～927＝SX2



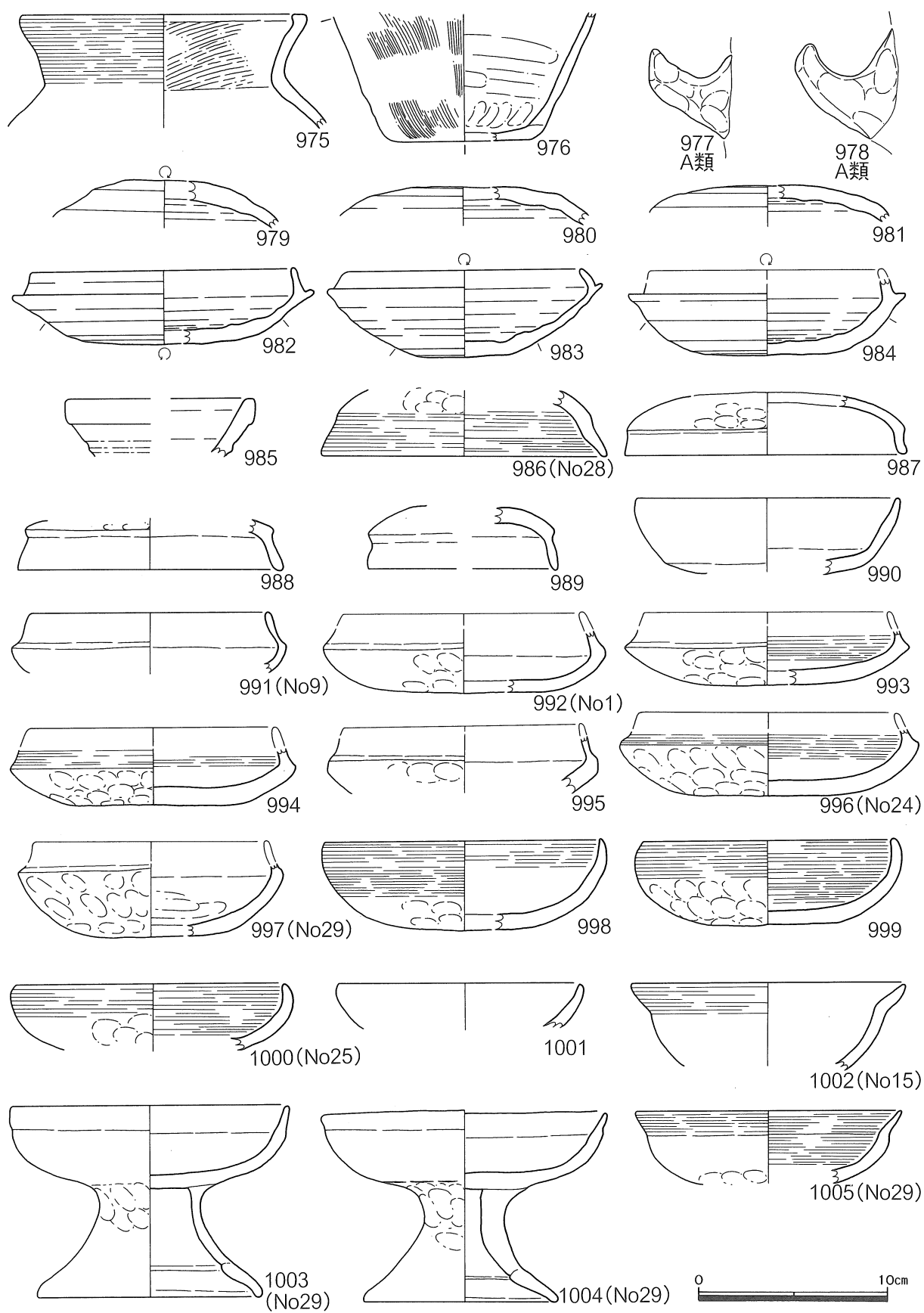
第82図 古墳中期～奈良時代土器実測図 42

928～945=SX2 946～950=SX4 (SD189)
951～953=SX5



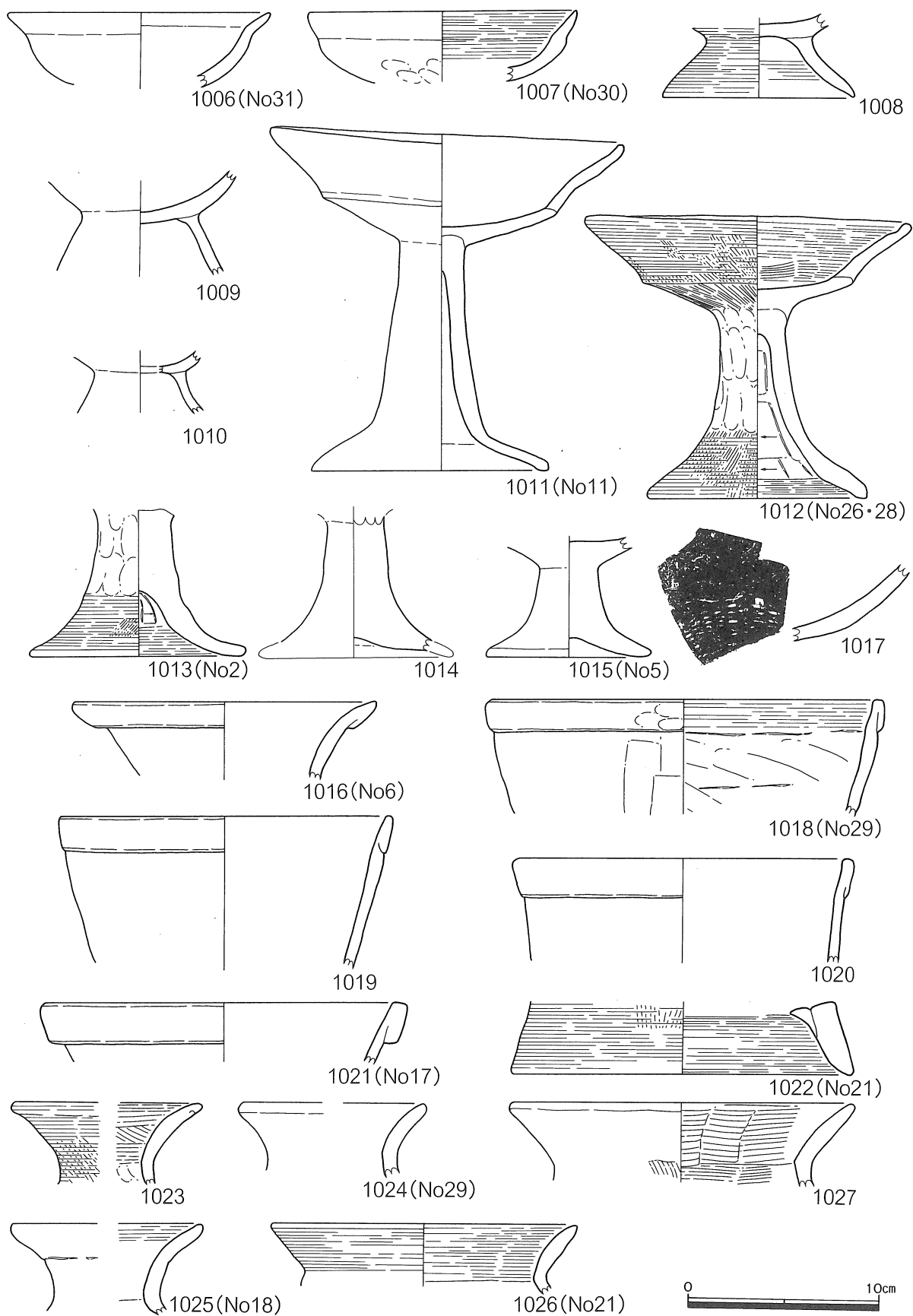
第83図 古墳中期～奈良時代土器実測図 43

954~974= SX5



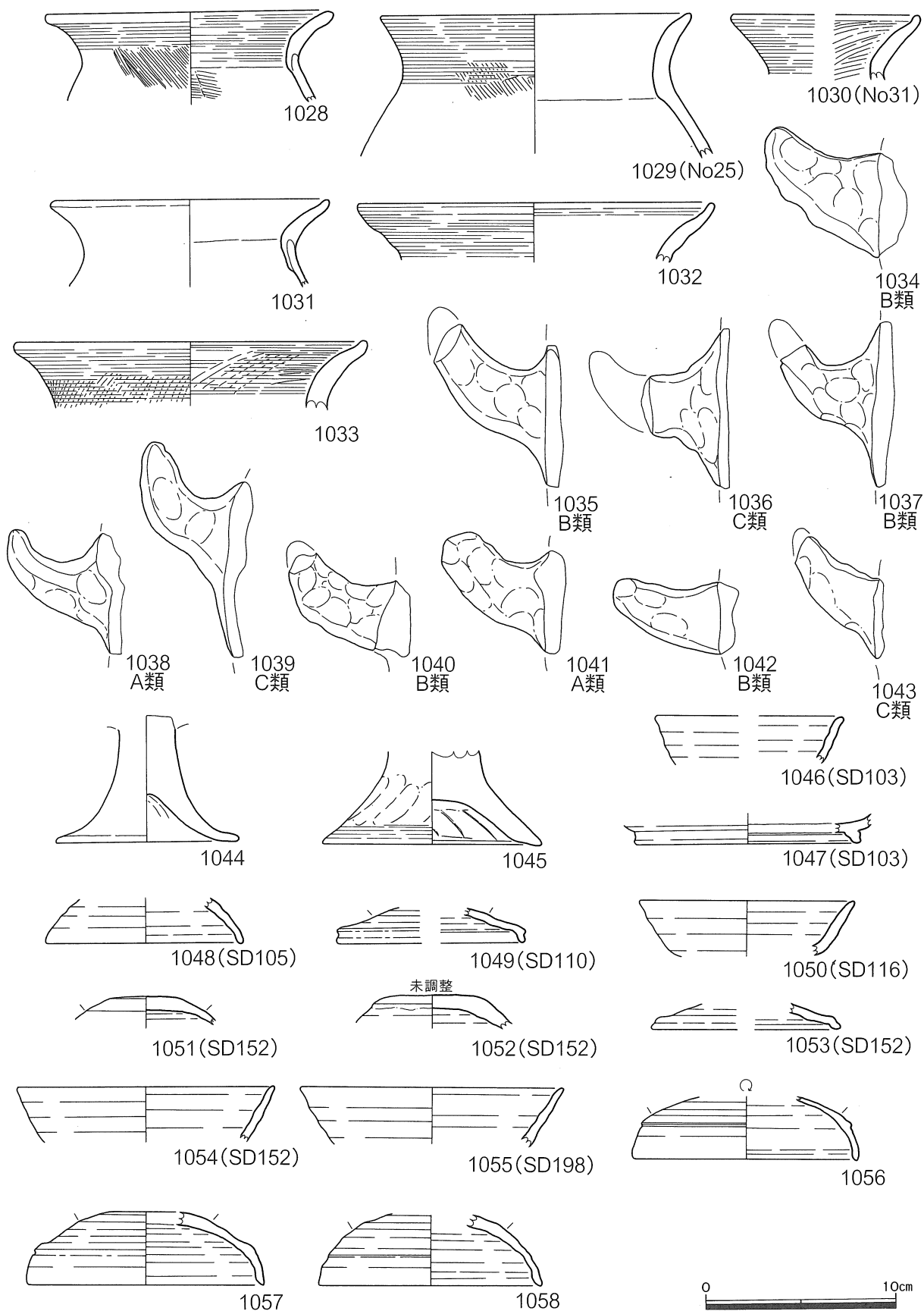
第84図 古墳中期～奈良時代土器実測図 44

975～978= SX5
979～1005= SX6



第85図 古墳中期～奈良時代土器実測図 45

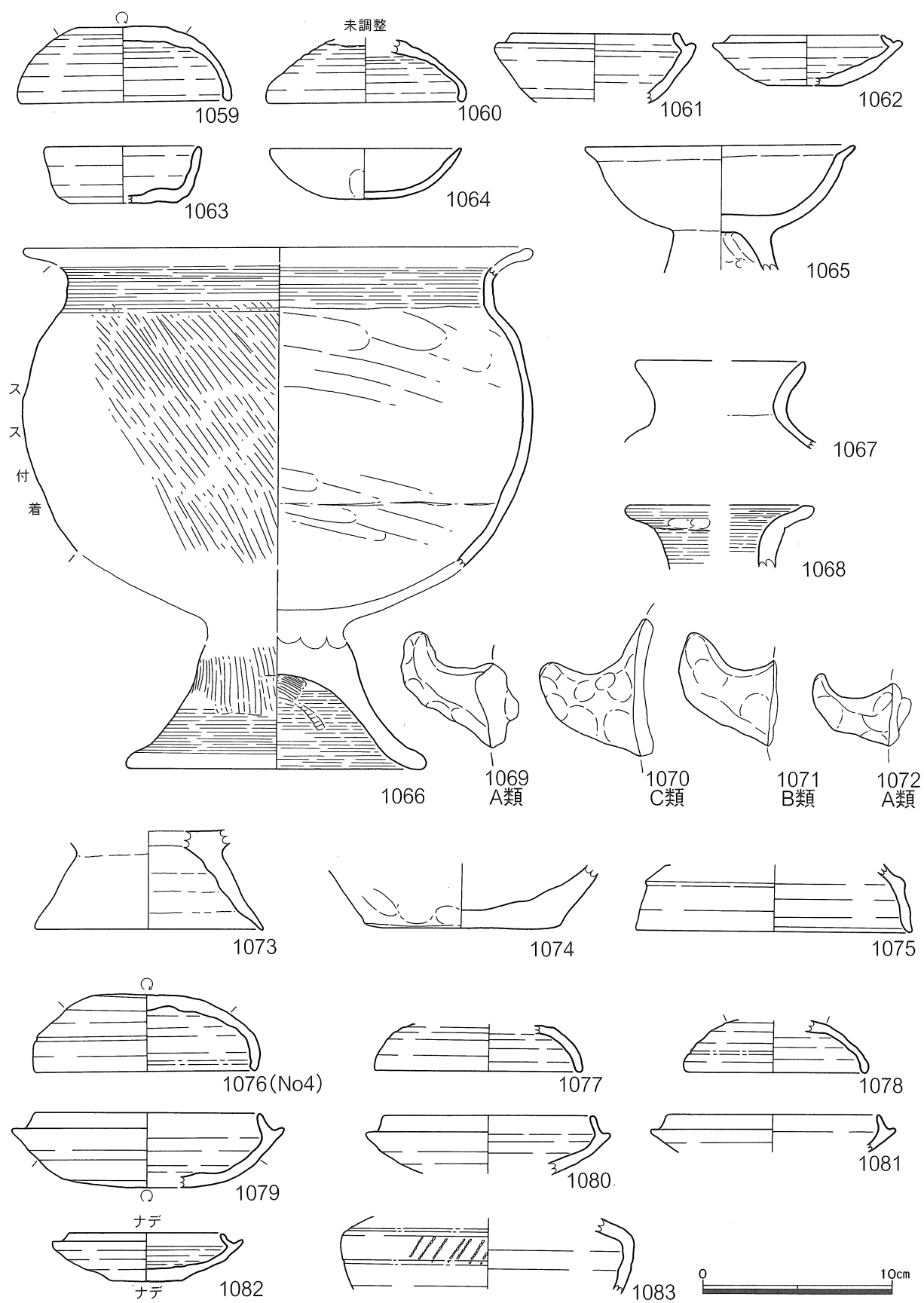
1006～1027= SX6



第86図 古墳中期～奈良時代土器実測図 46

1028～1043=SX6
1046～1050=畝1
1055=畝4

1044・1045=SX21
1051～1054=畝3
1056～1058=SD66

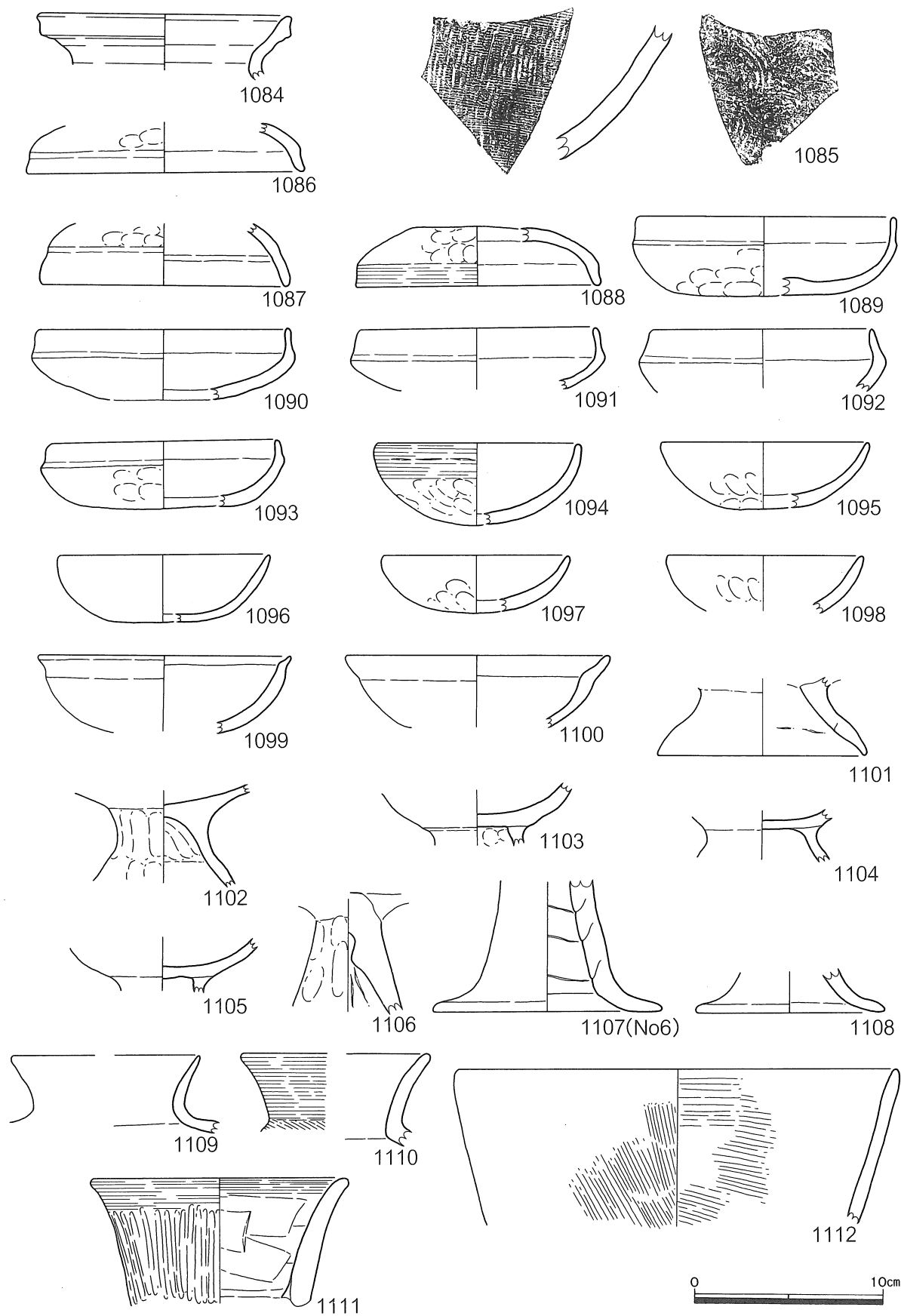


第87図 古墳中期～奈良時代土器実測図 47

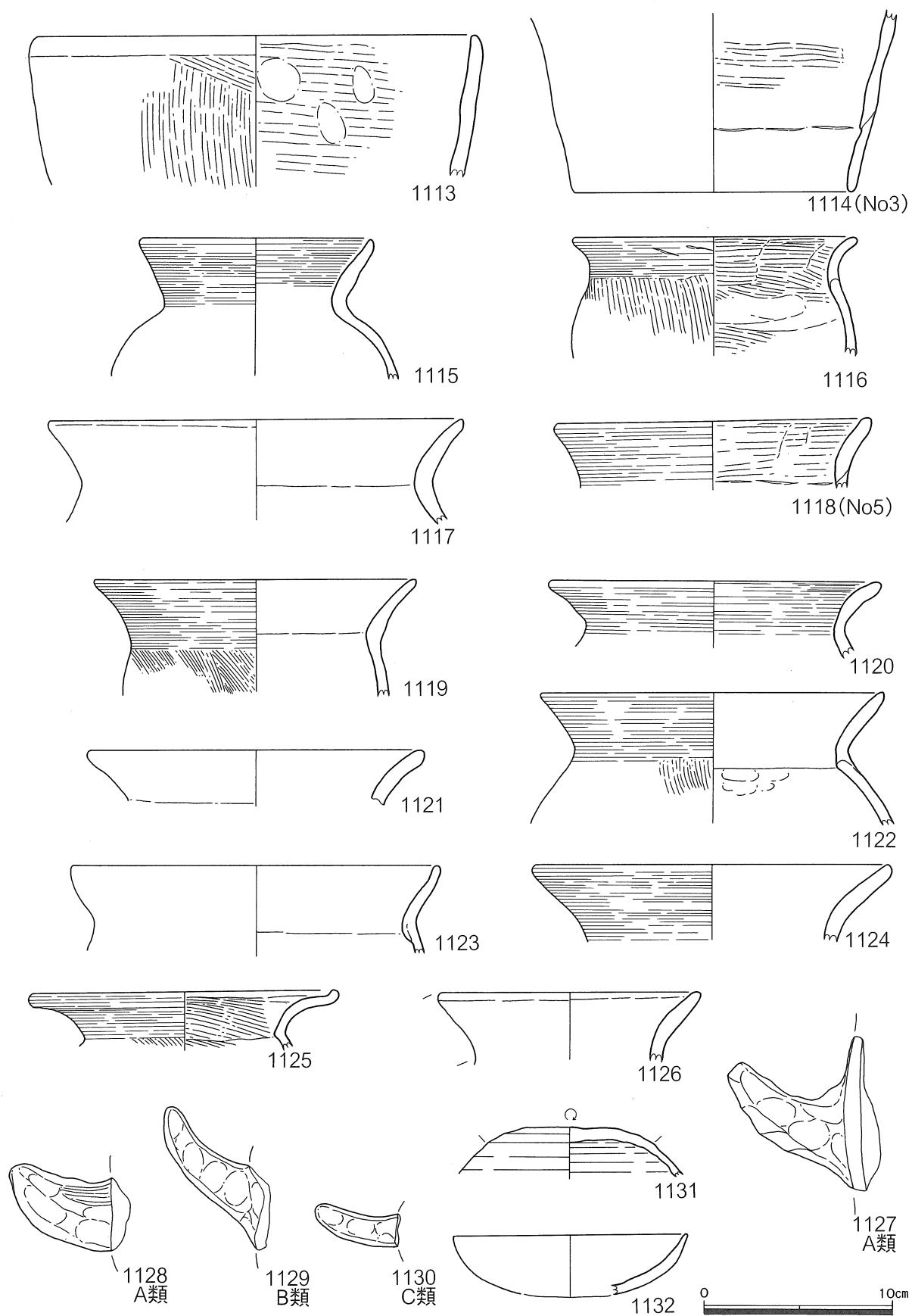
1059～1072=SD66

1073・1074=SD70

1075～1083=SD73



第88図 古墳中期～奈良時代土器実測図 48 1084～1112=SD73

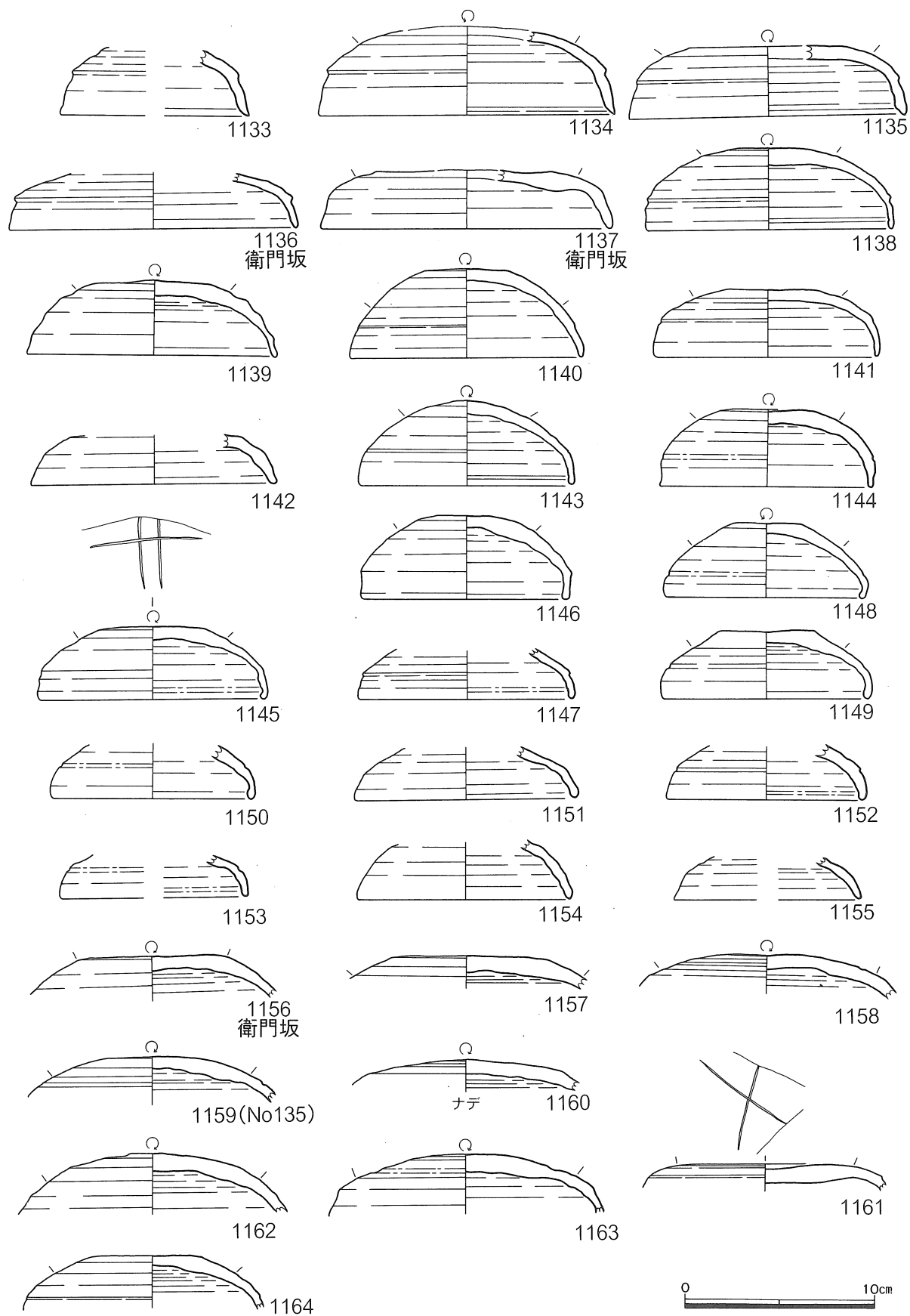


第89図 古墳中期～奈良時代土器実測図 49

1113~1130=SD73

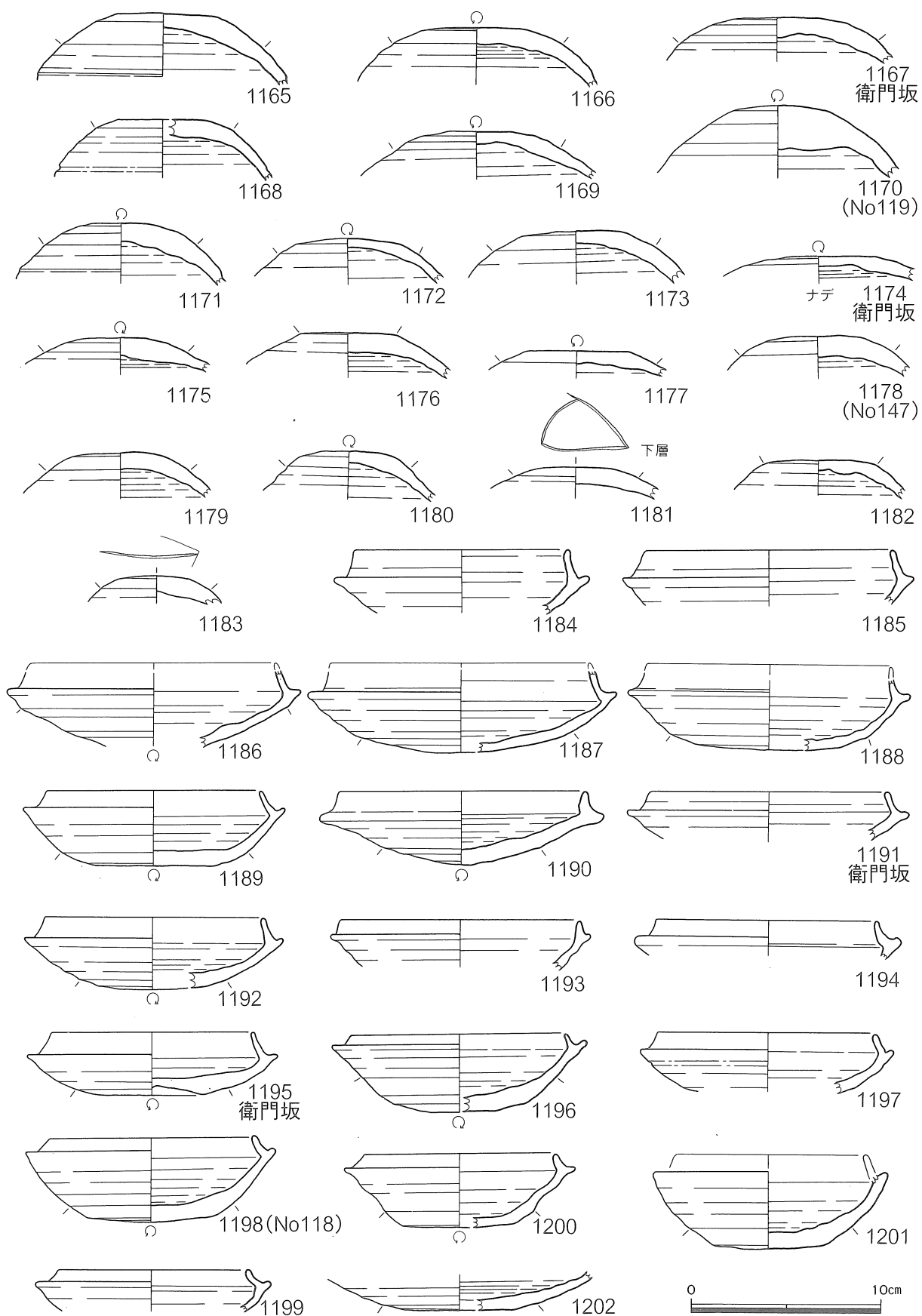
1131=SD75

1132=SD77



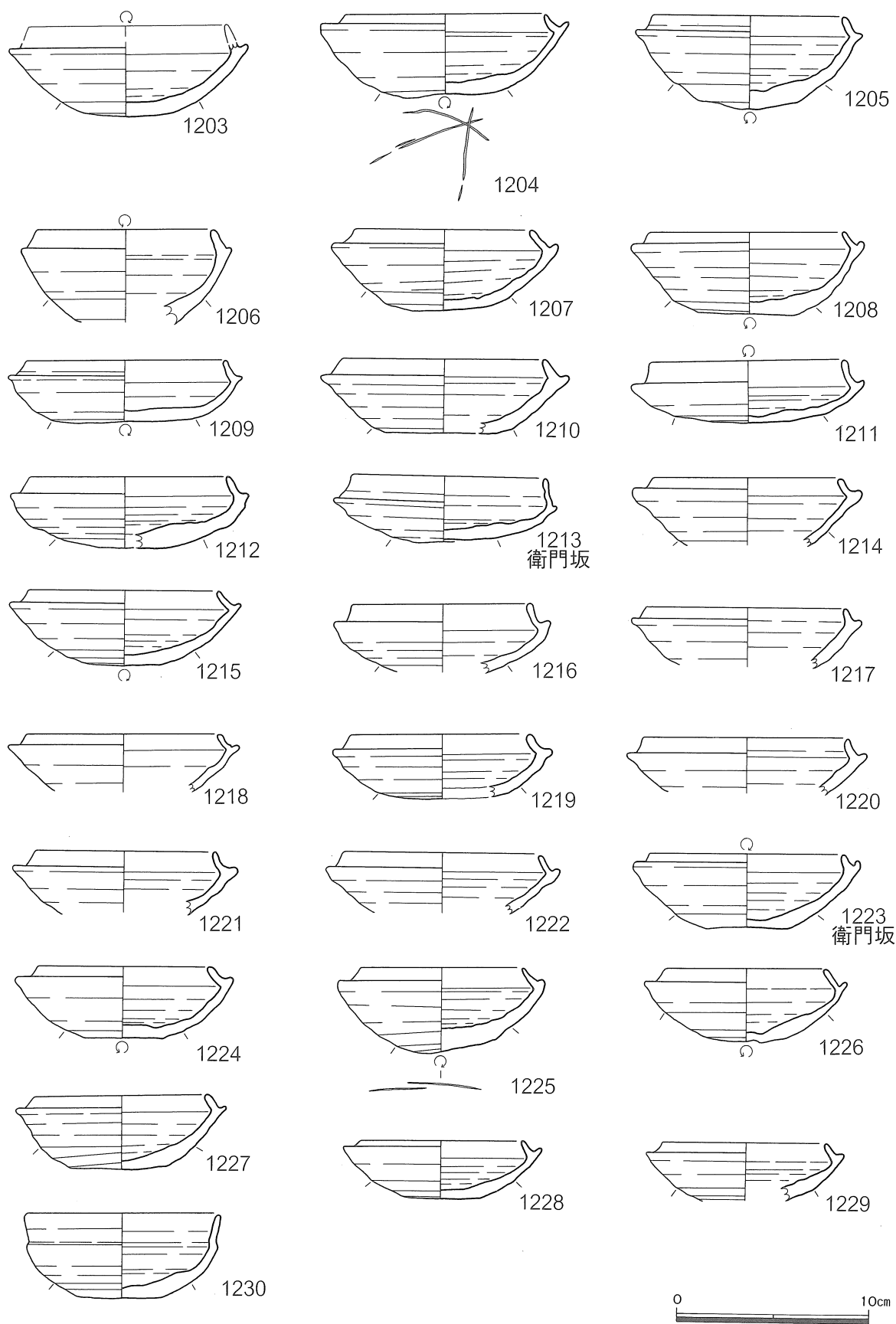
第90図 古墳中期～奈良時代土器実測図 50

1133~1164=SD80



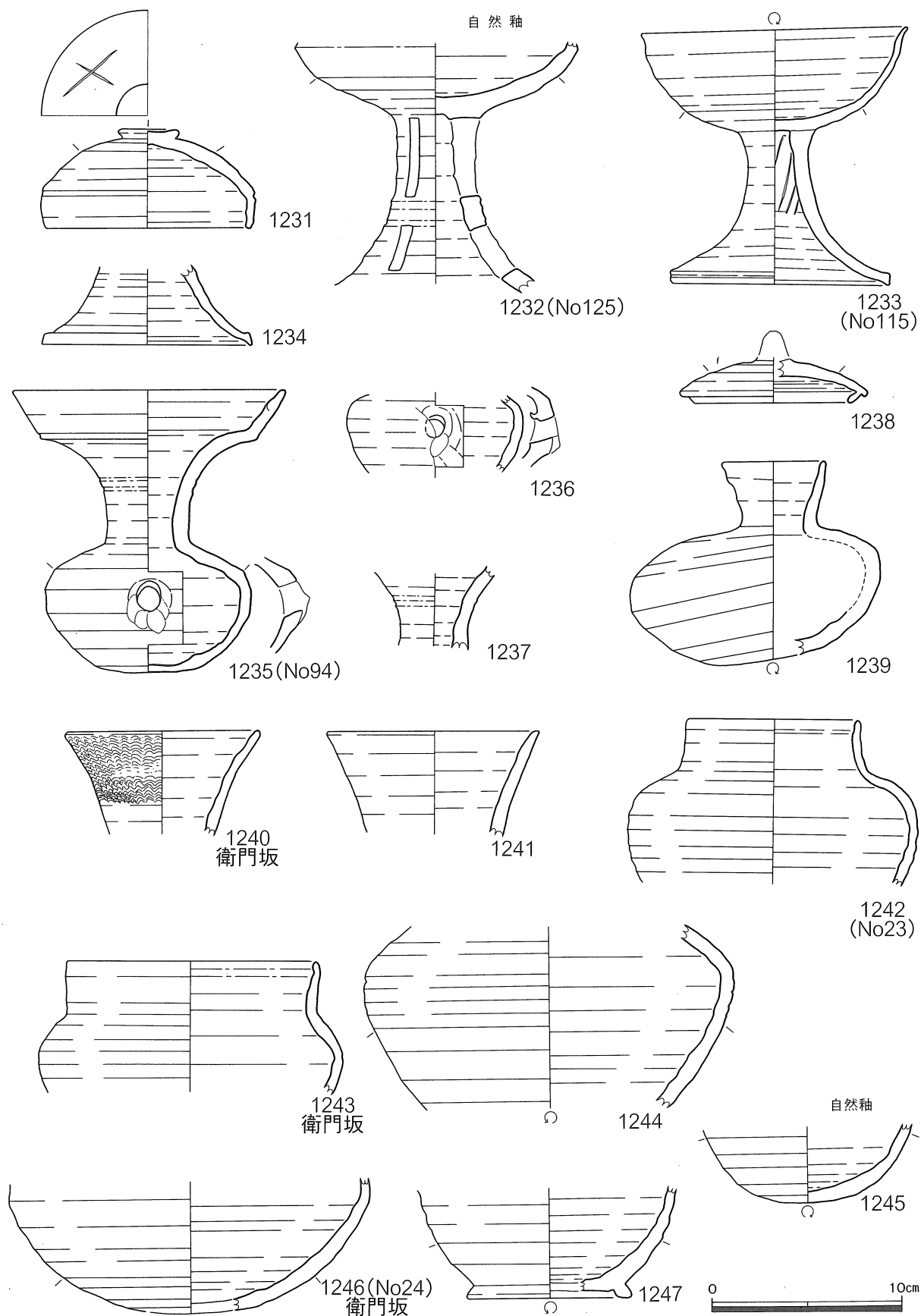
第91図 古墳中期～奈良時代土器実測図 51

1165～1202=SD80



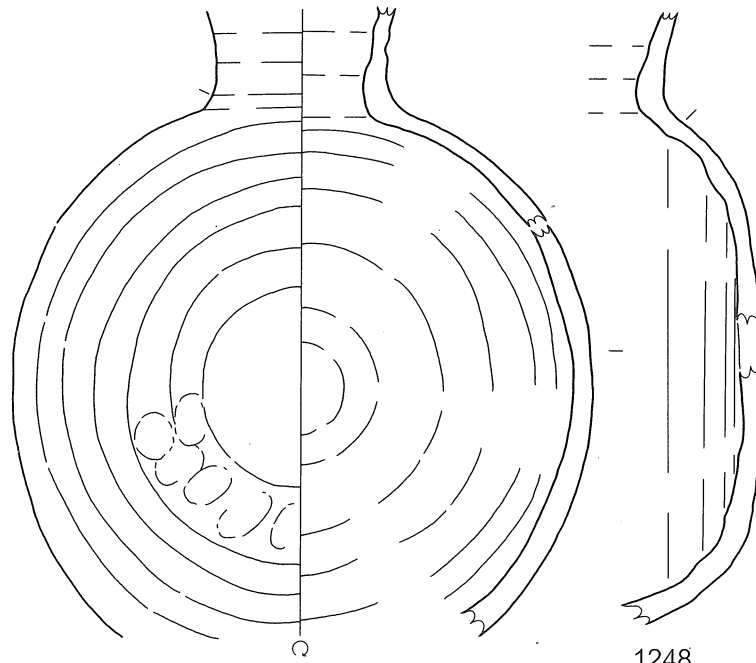
第92図 古墳中期～奈良時代土器実測図 52

1203~1230=SD80

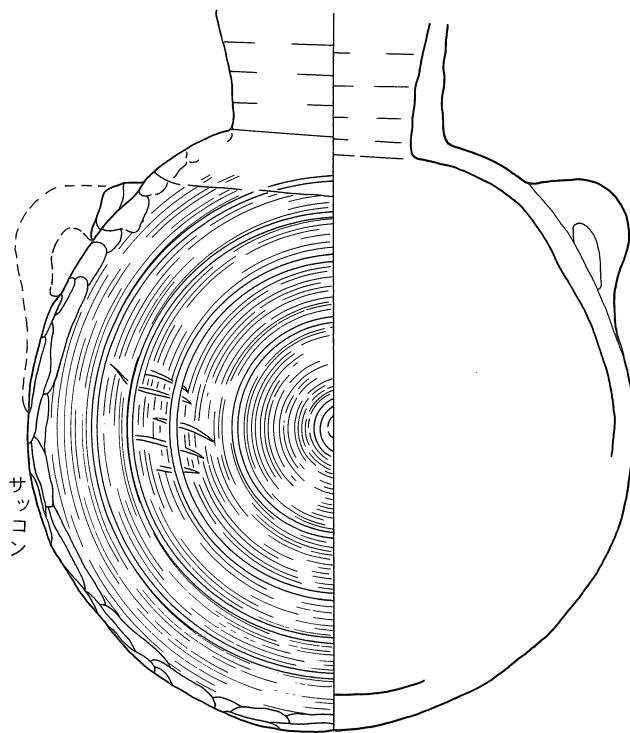


第93図 古墳中期～奈良時代土器実測図 53

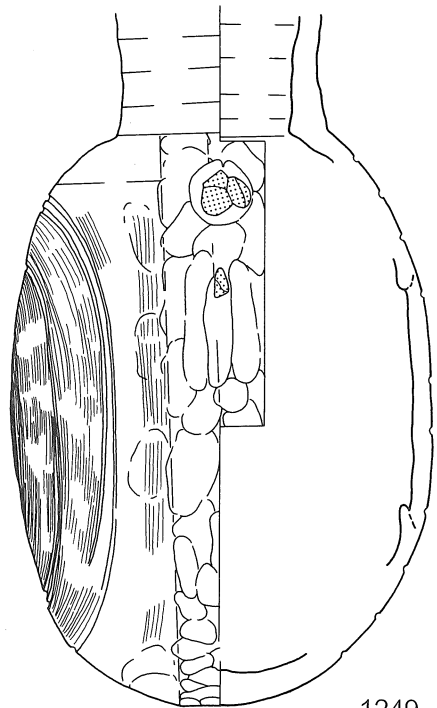
1231～1247=SD80



1248



サッコン

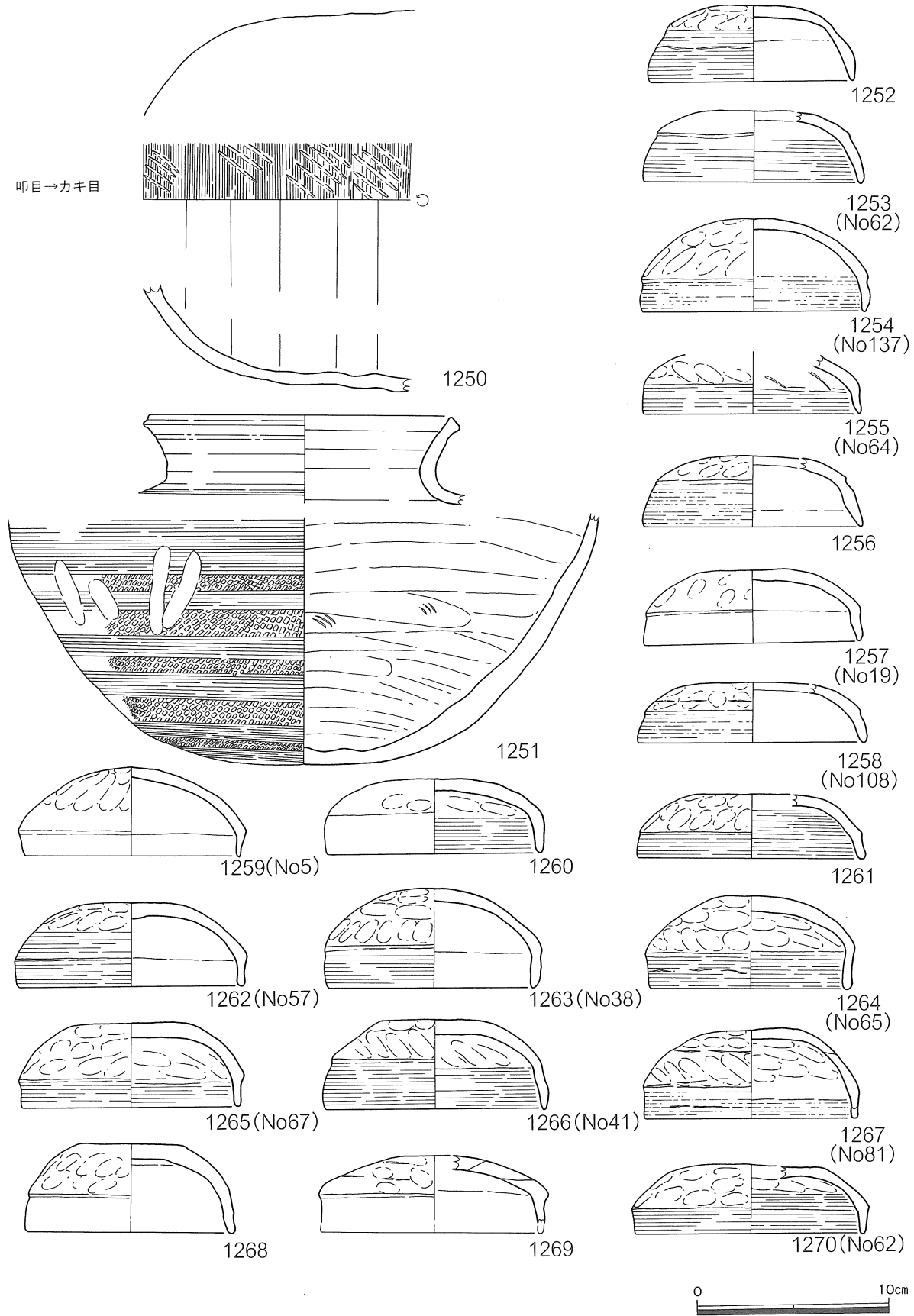


1249



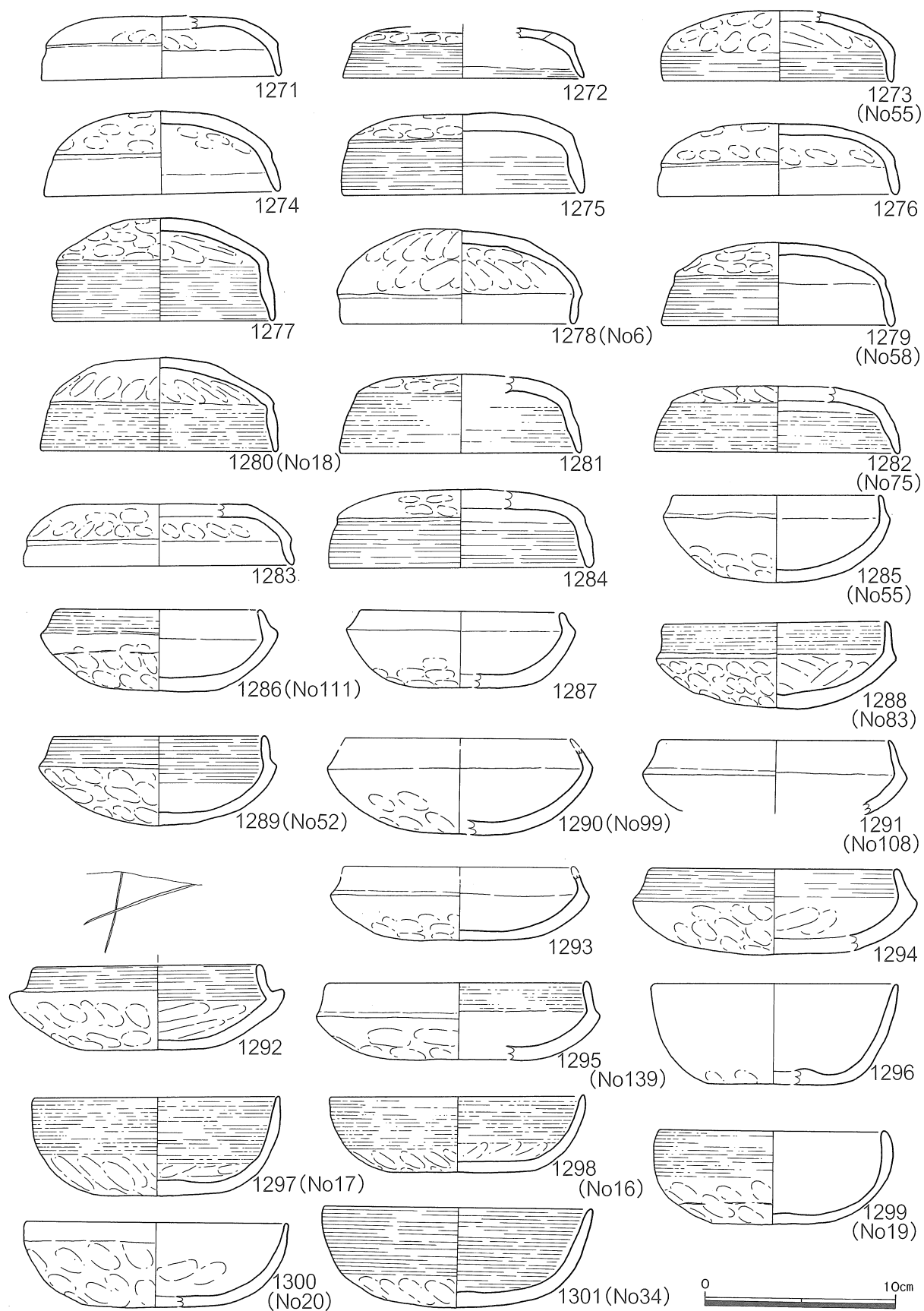
第94図 古墳中期～奈良時代土器実測図 54

1248・1249=SD80



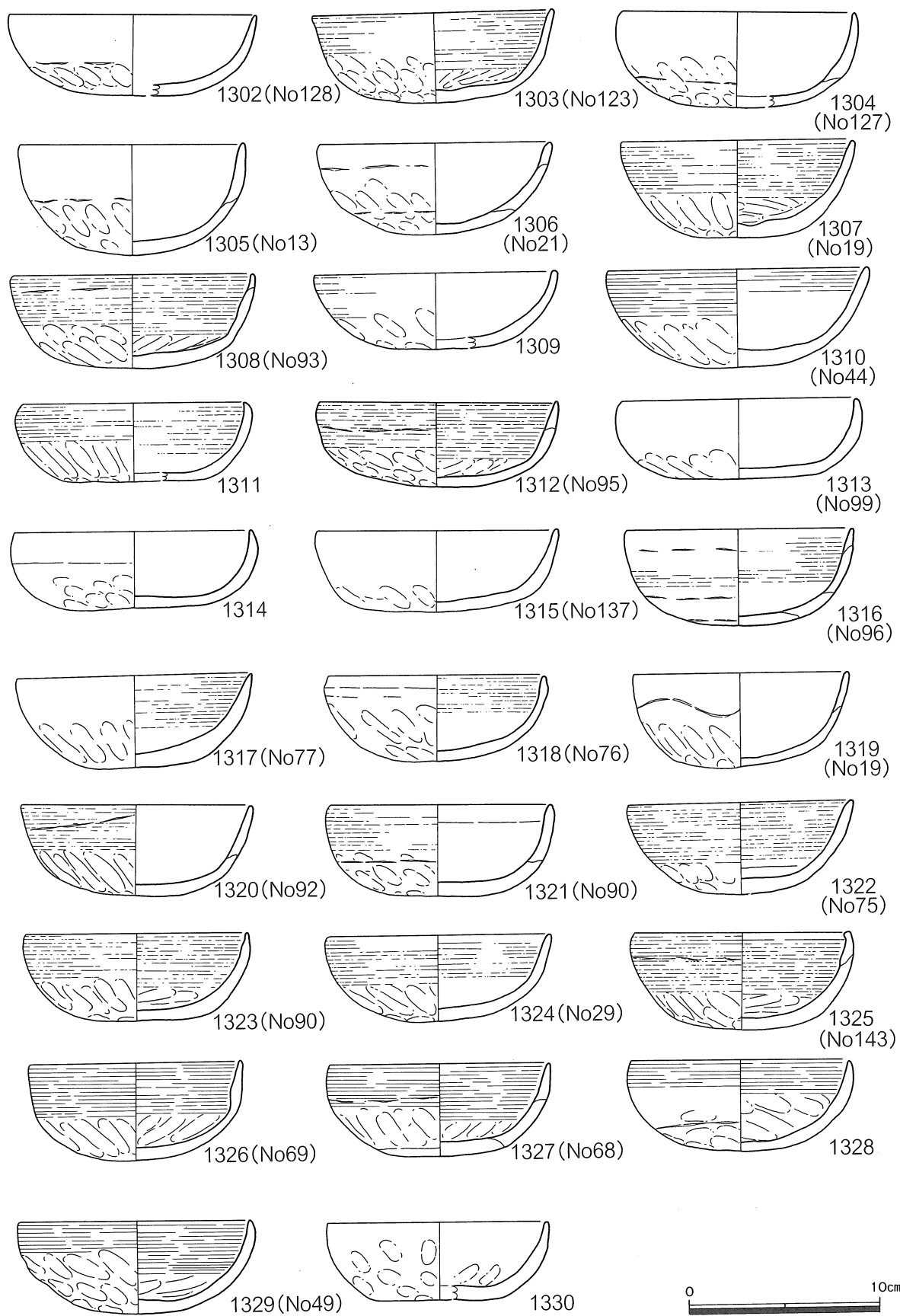
第95図 古墳中期～奈良時代土器実測図 55

1250～1270=SD80



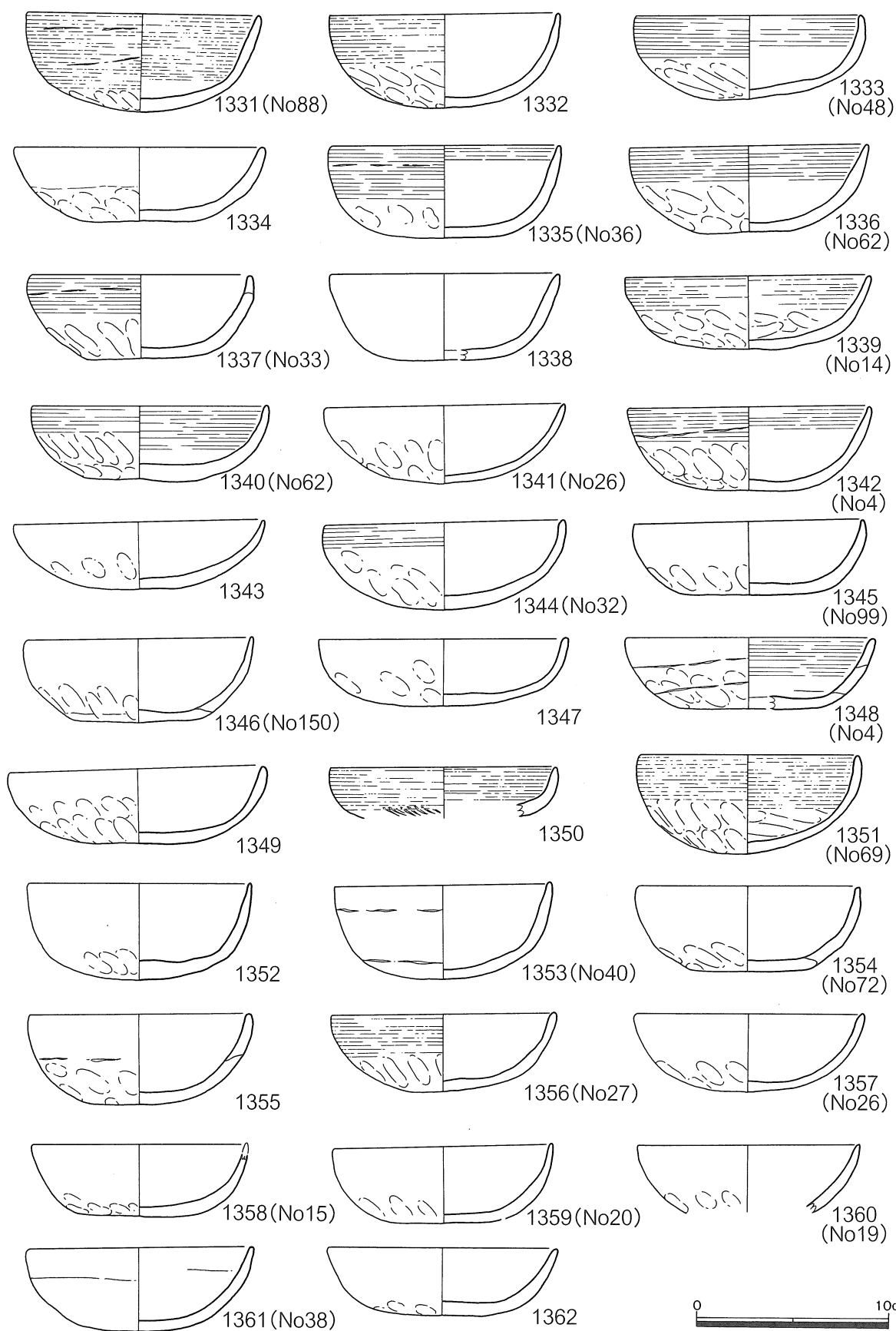
第96図 古墳中期～奈良時代土器実測図 56

1271~1301=SD80

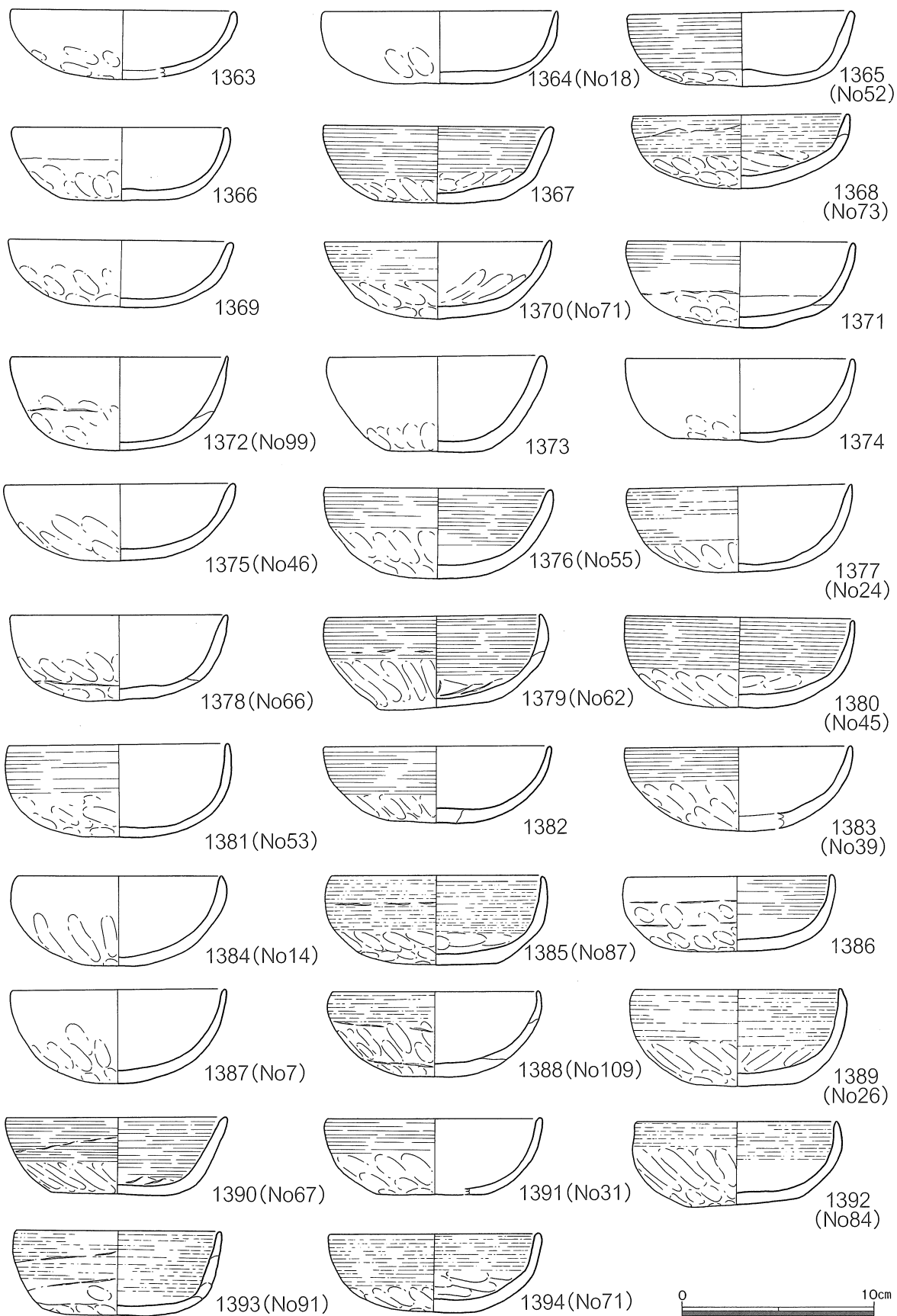


第97図 古墳中期～奈良時代土器実測図 57

1302～1330=SD80

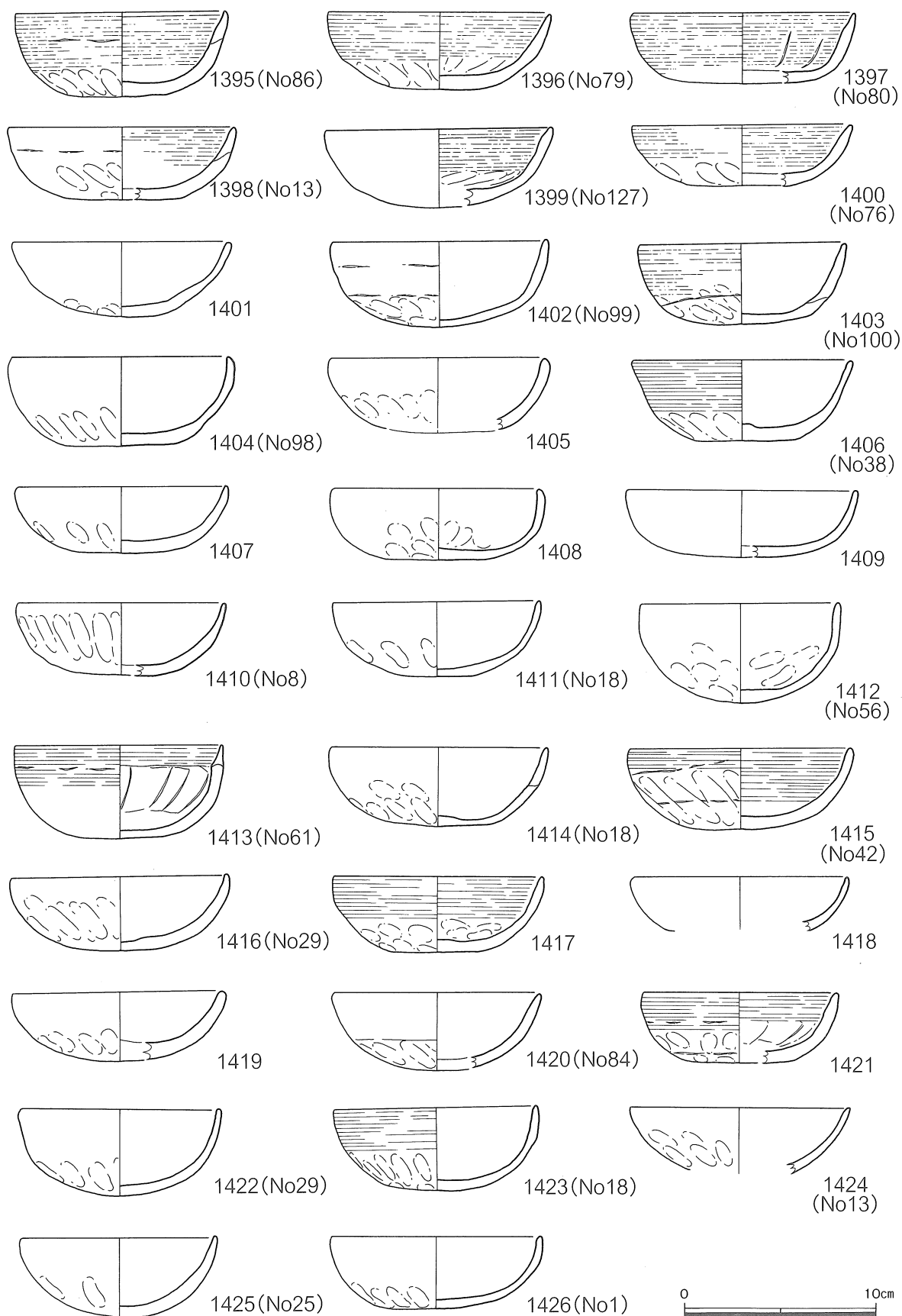


第98図 古墳中期～奈良時代土器実測図 58 1331～1362=SD80



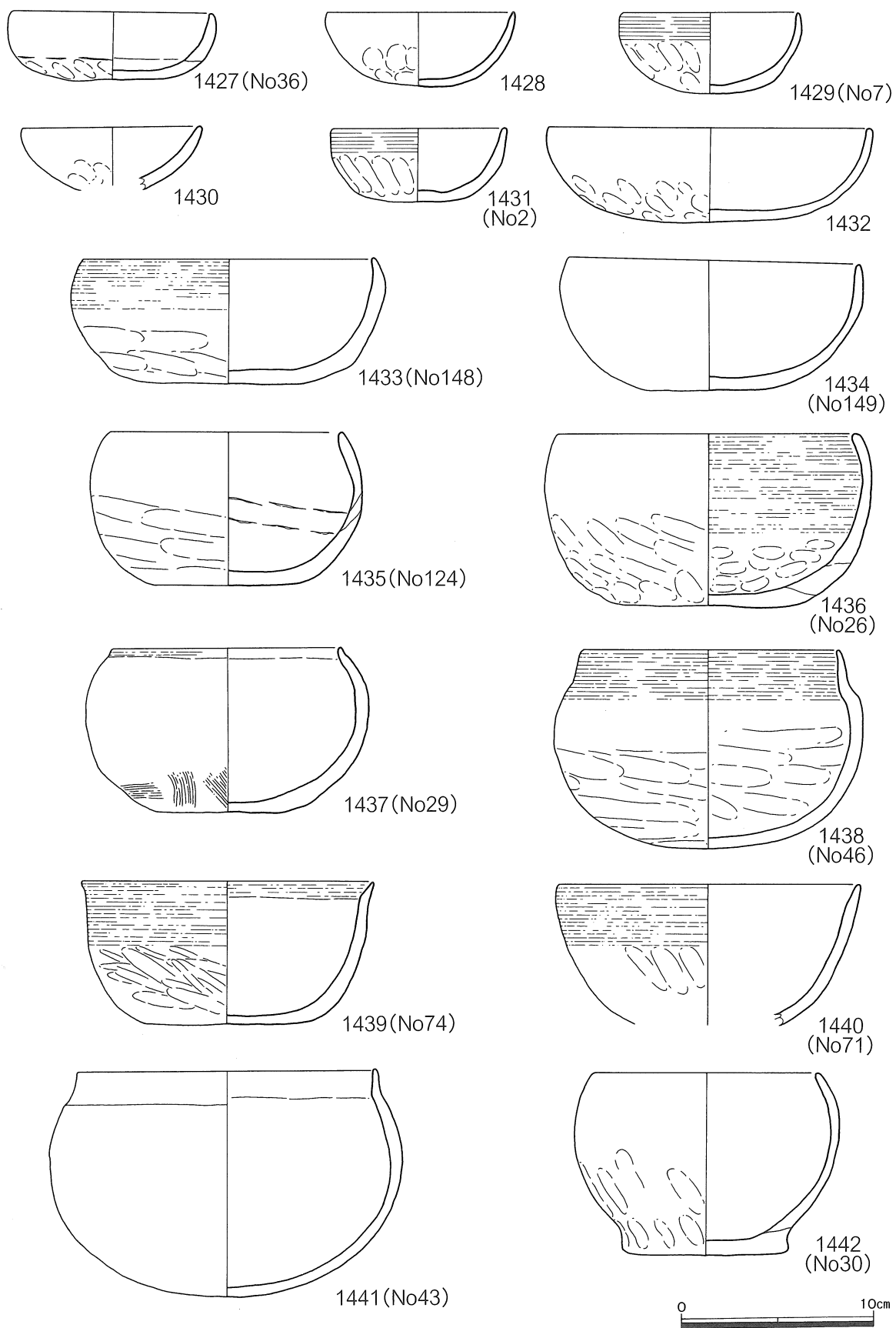
第99図 古墳中期～奈良時代土器実測図 59

1363～1394=SD80



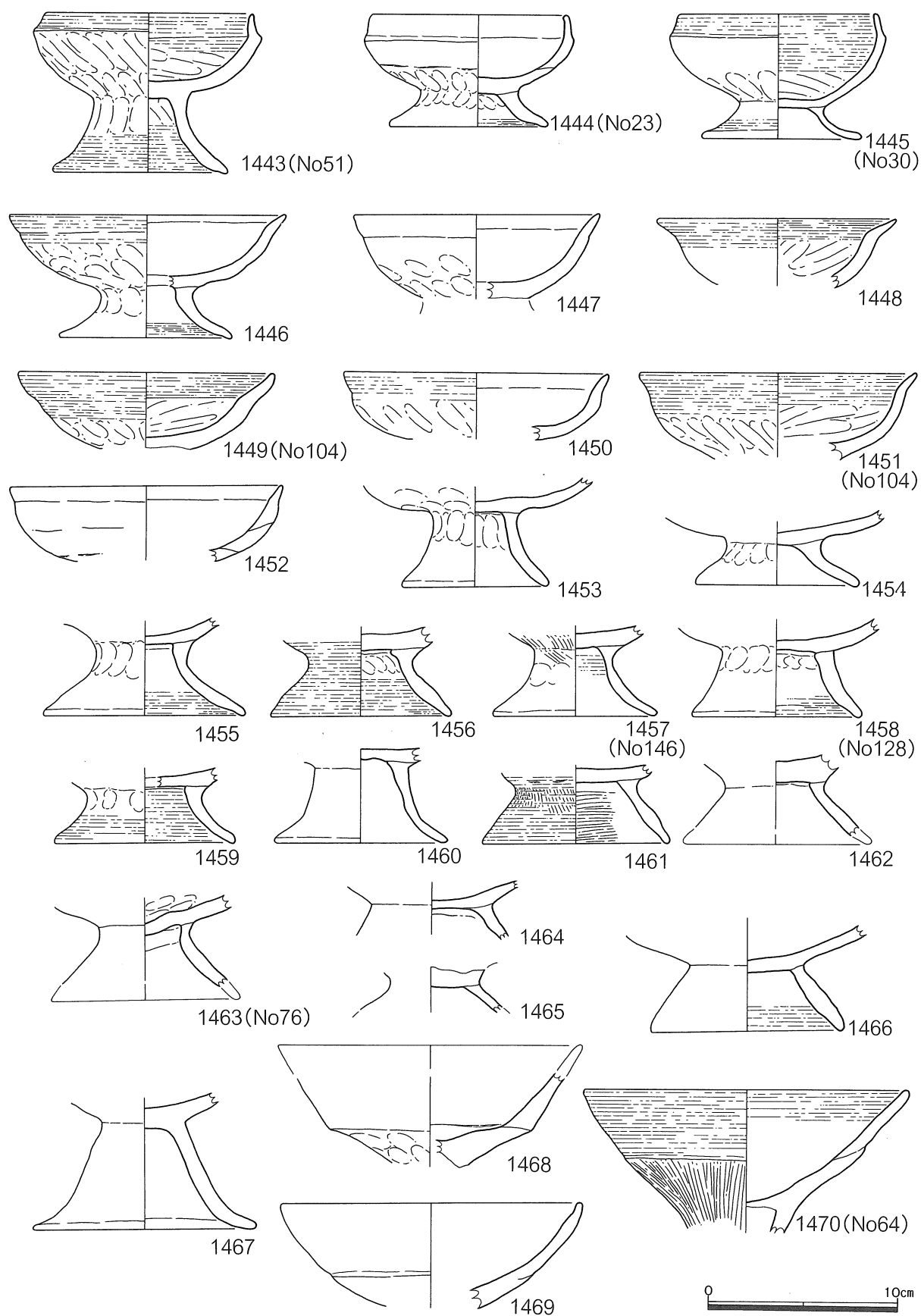
第100図 古墳中期～奈良時代土器実測図 60

1395～1426=SD80



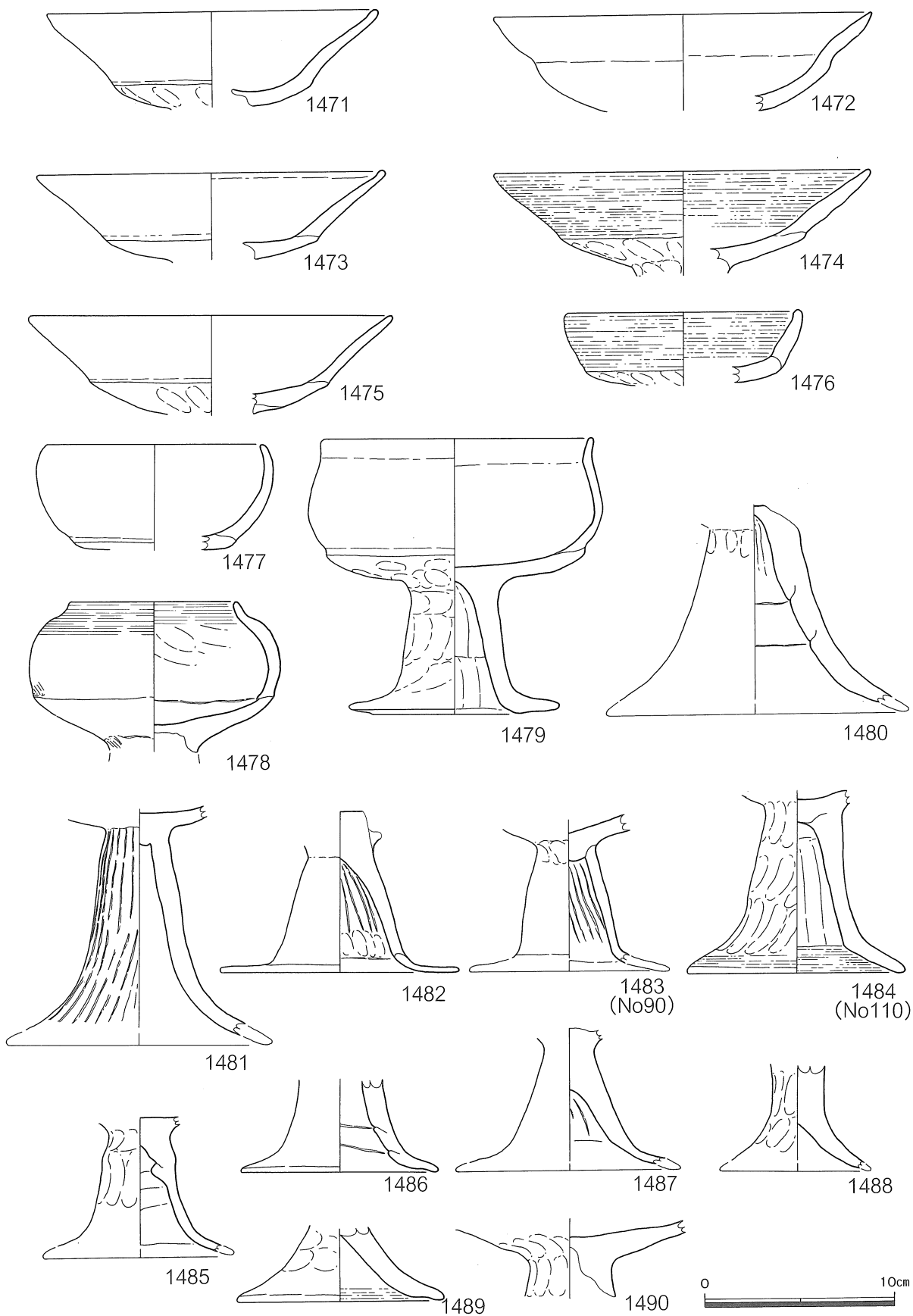
第101図 古墳中期～奈良時代土器実測図 61

1427~1442=SD80



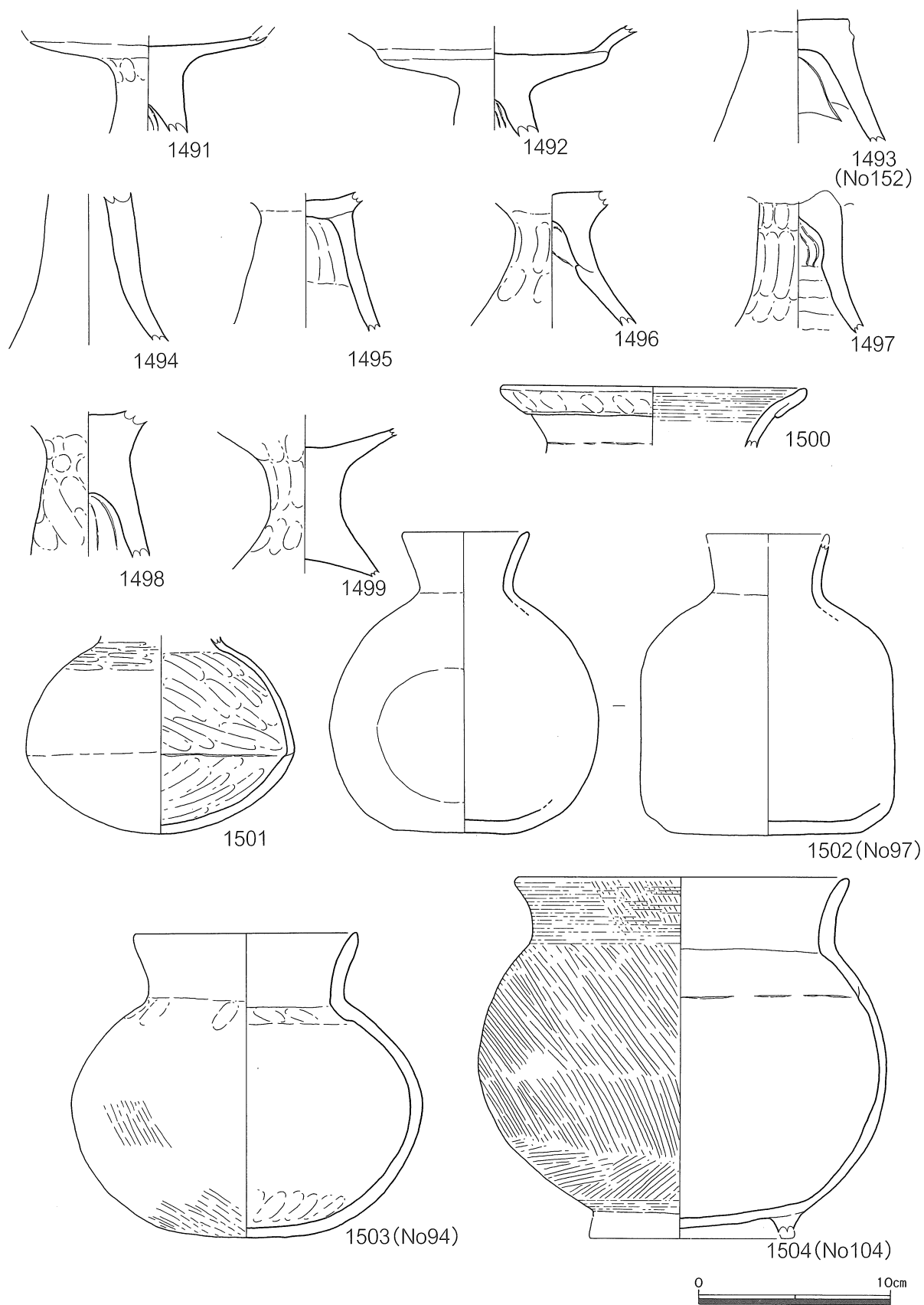
第102図 古墳中期～奈良時代土器実測図 62

1443～1470＝SD80



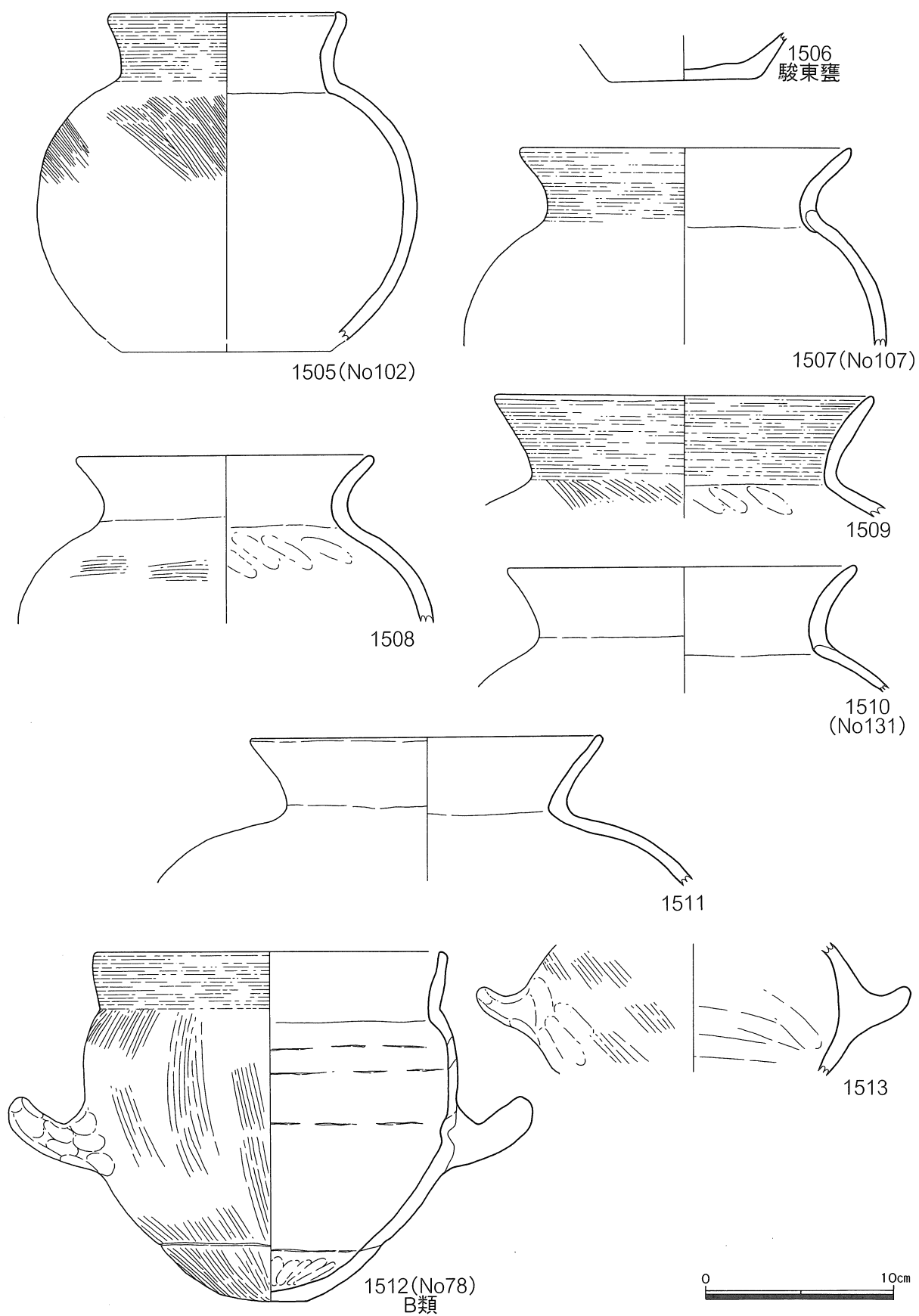
第103図 古墳中期～奈良時代土器実測図 63

1471~1490=SD80



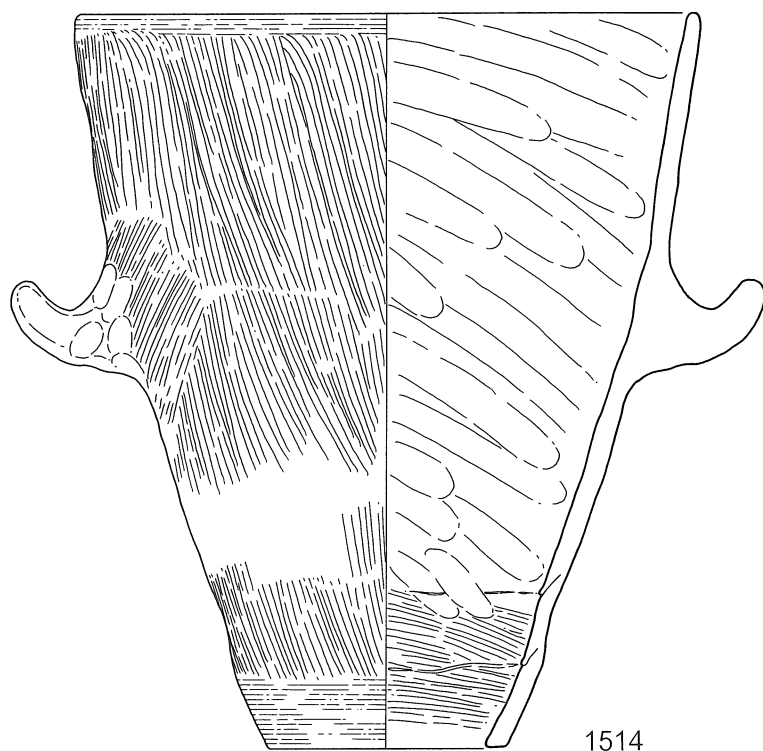
第104図 古墳中期～奈良時代土器実測図 64

1491～1504=SD80

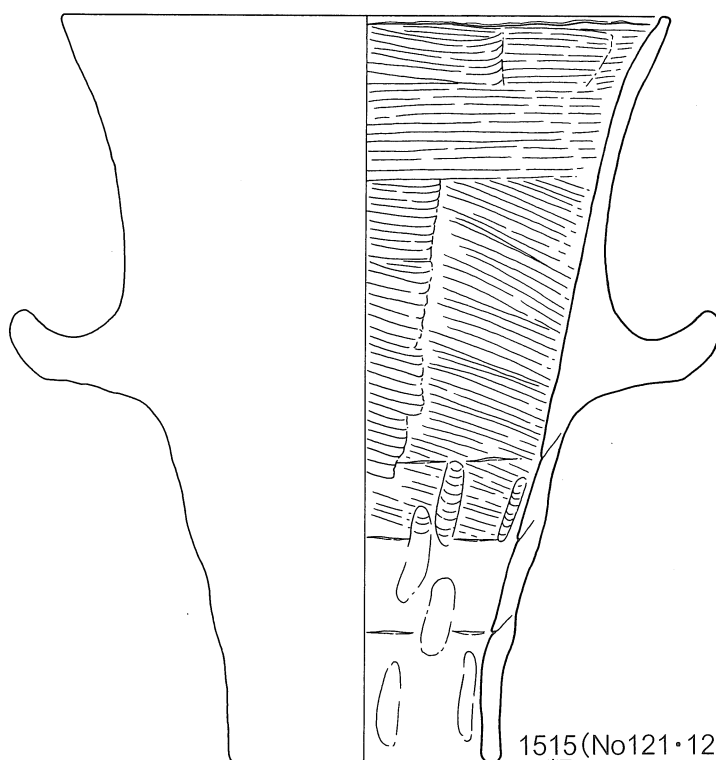


第105図 古墳中期～奈良時代土器実測図 65

1505～1513=SD80



1514
A類

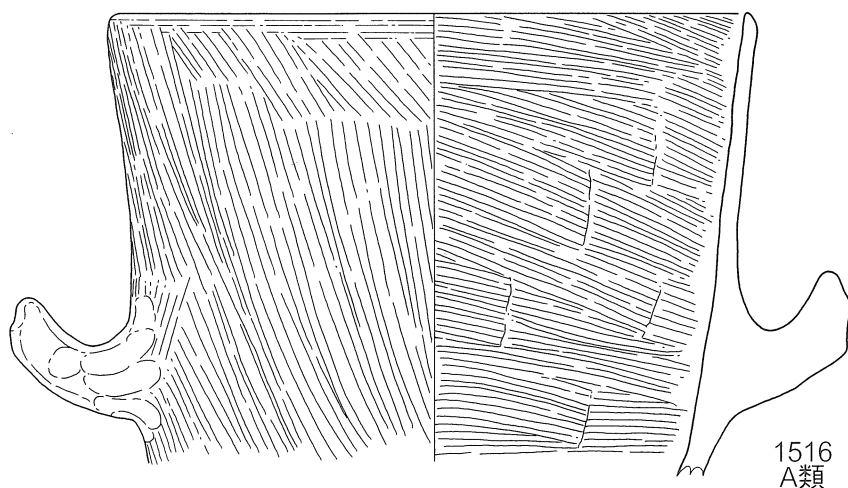


1515 (No121・127・133)
A類

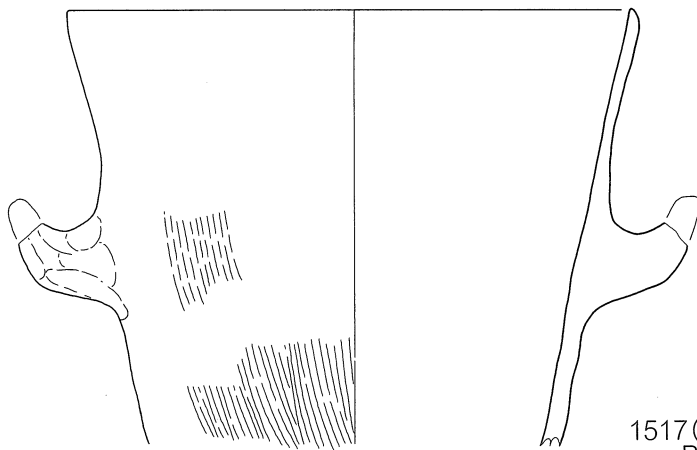
0 10cm

第106図 古墳中期～奈良時代土器実測図 66

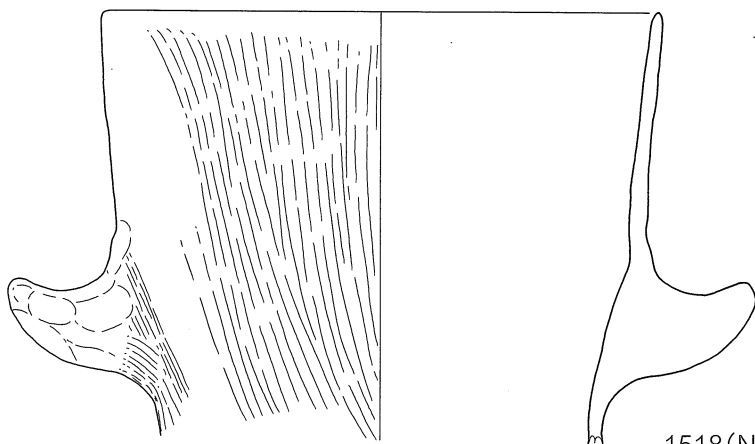
1514・1515=SD80



1516
A類



1517(No22)
B類

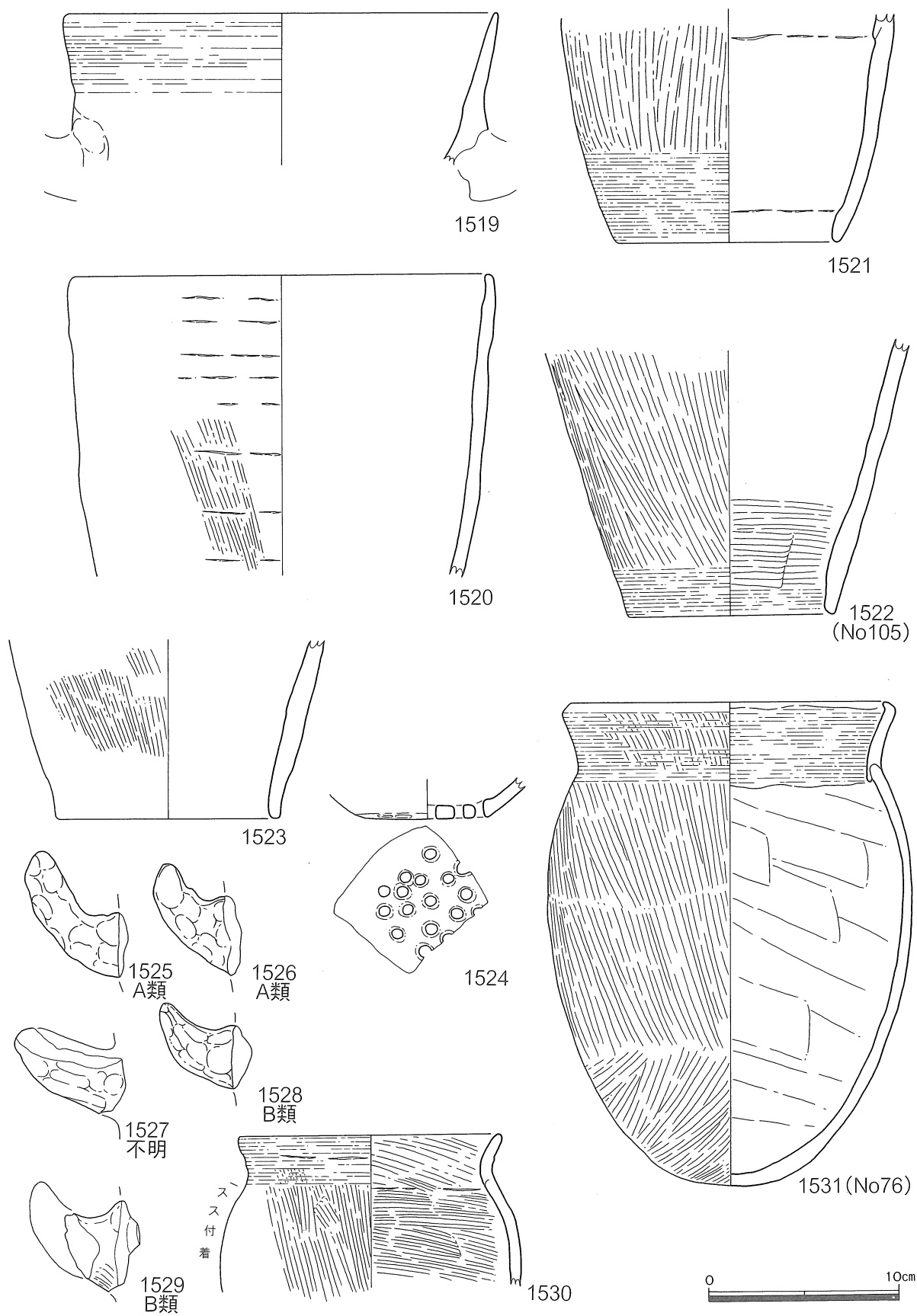


1518(No105)
B類



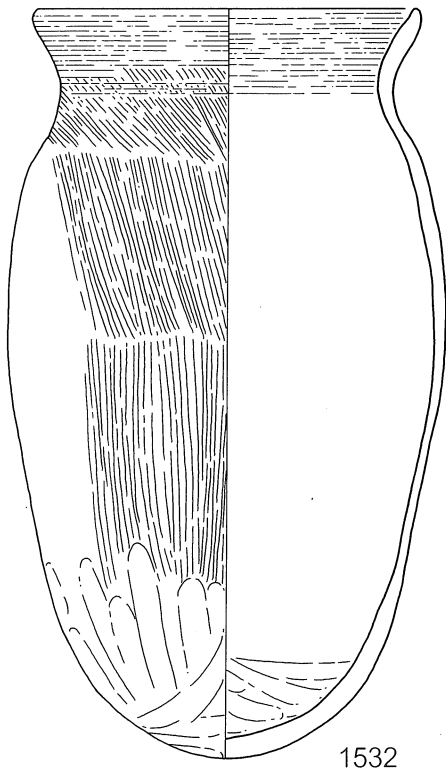
第107図 古墳中期～奈良時代土器実測図 67

1516～1518=SD80

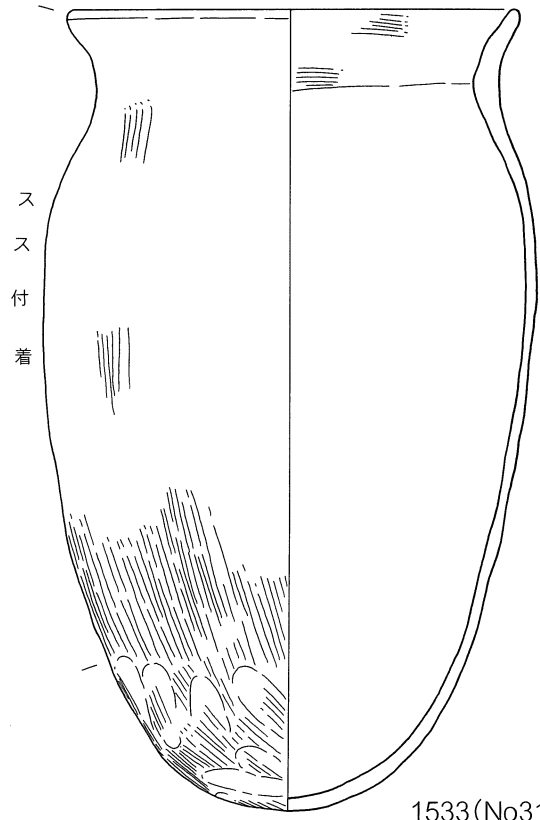


第108図 古墳中期～奈良時代土器実測図 68

1519～1531=SD80

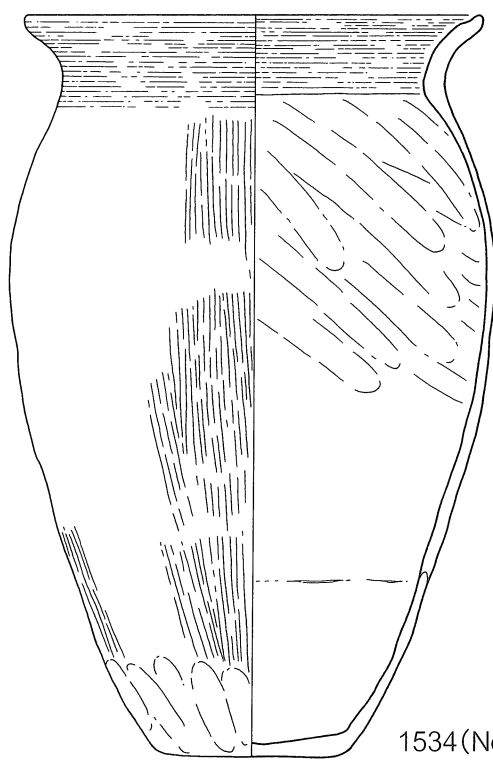


1532

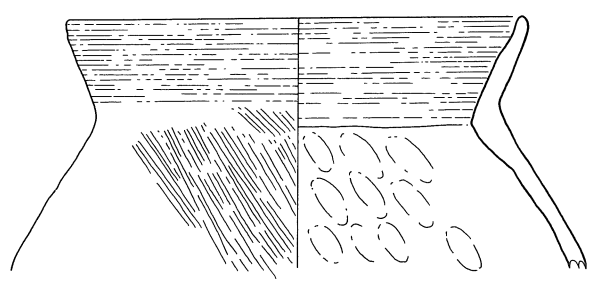


ス
ス
付
着

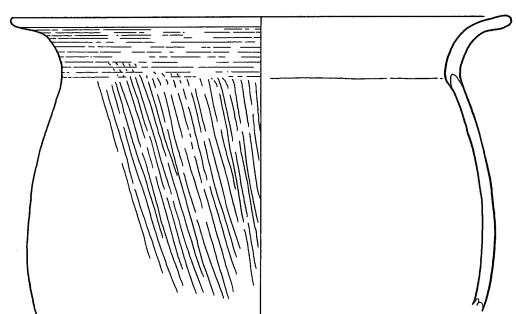
1533(No31)



1534(No89)



1535

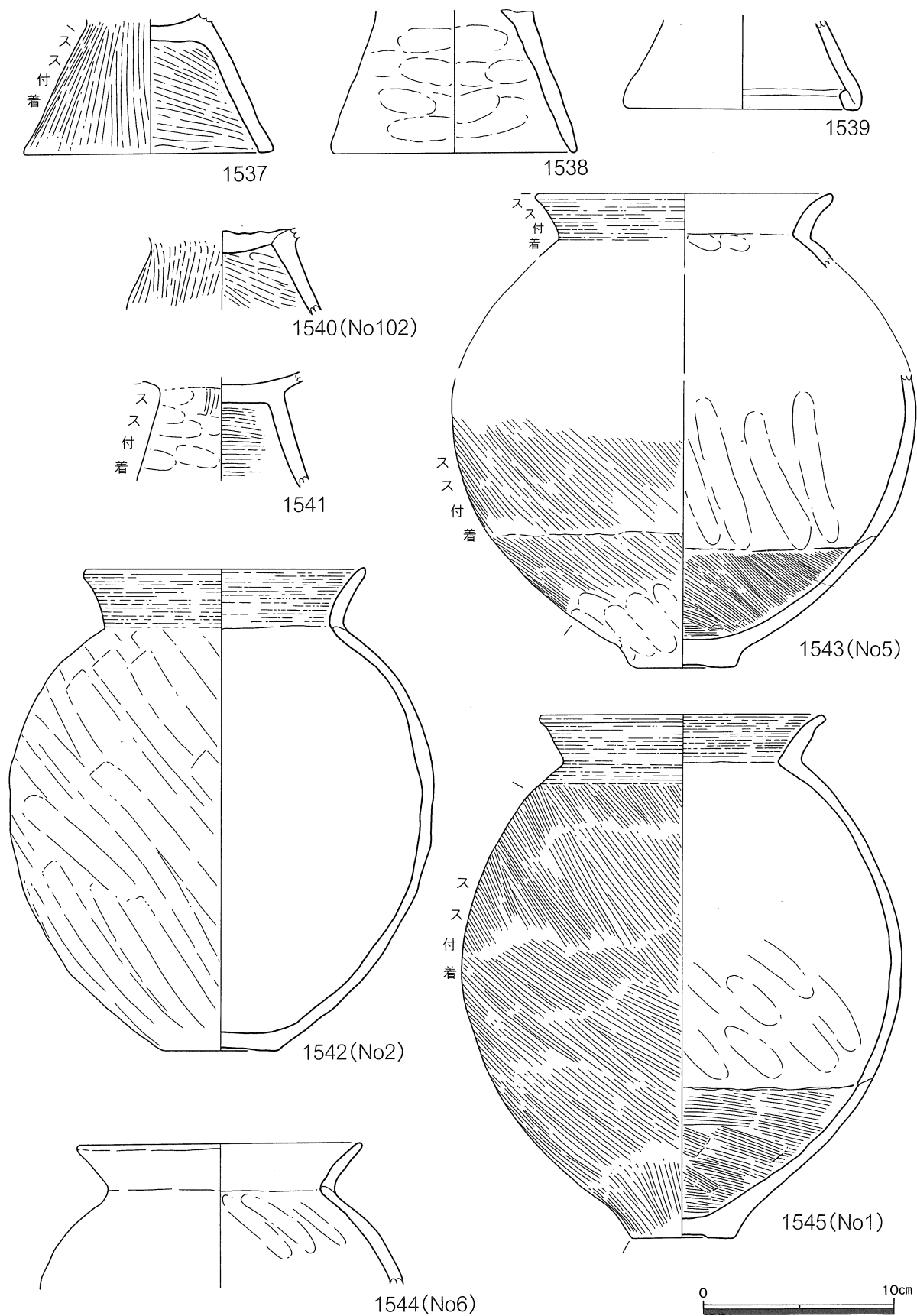


1536
(No106)



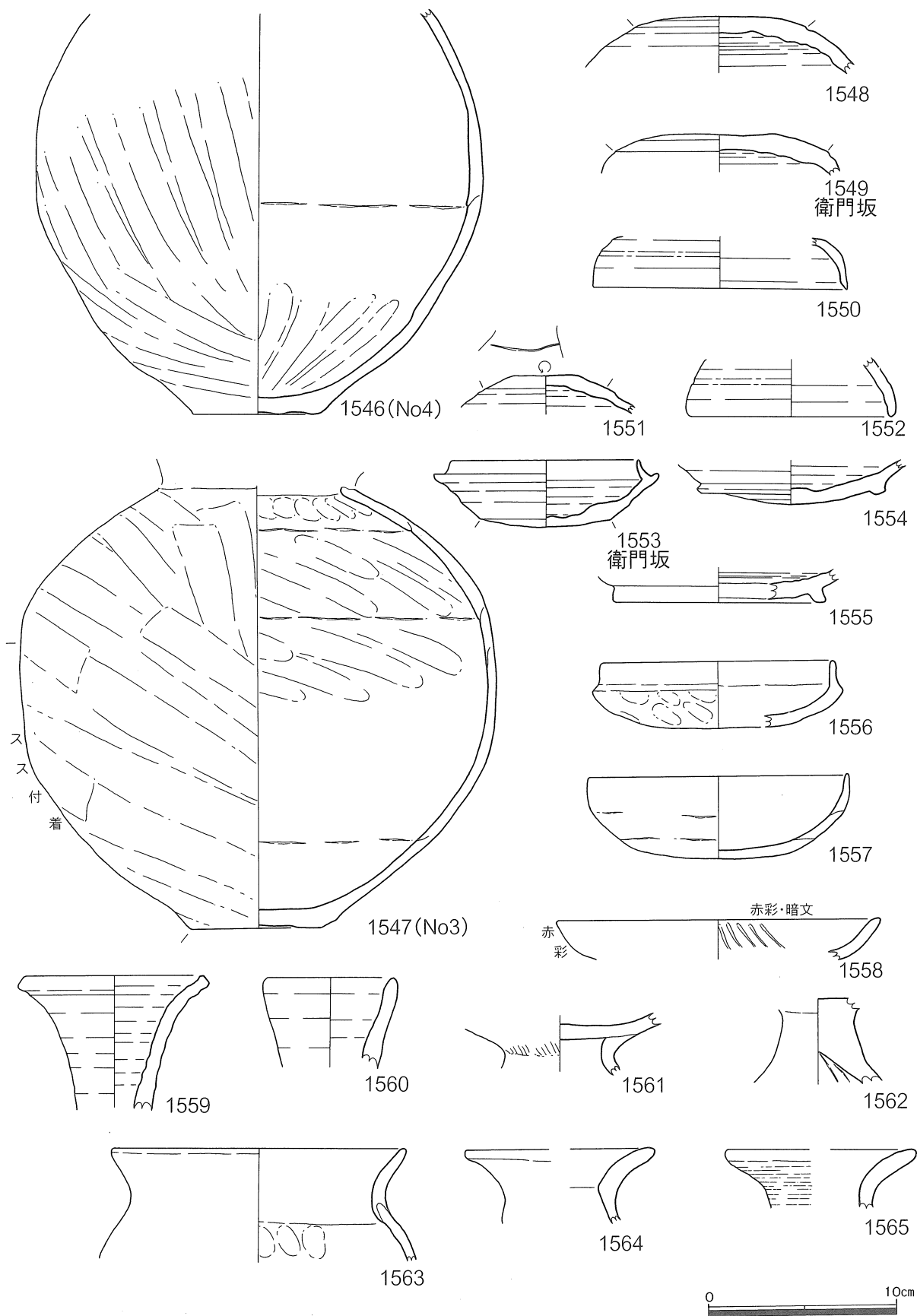
第109図 古墳中期～奈良時代土器実測図 69

1532～1536=SD80



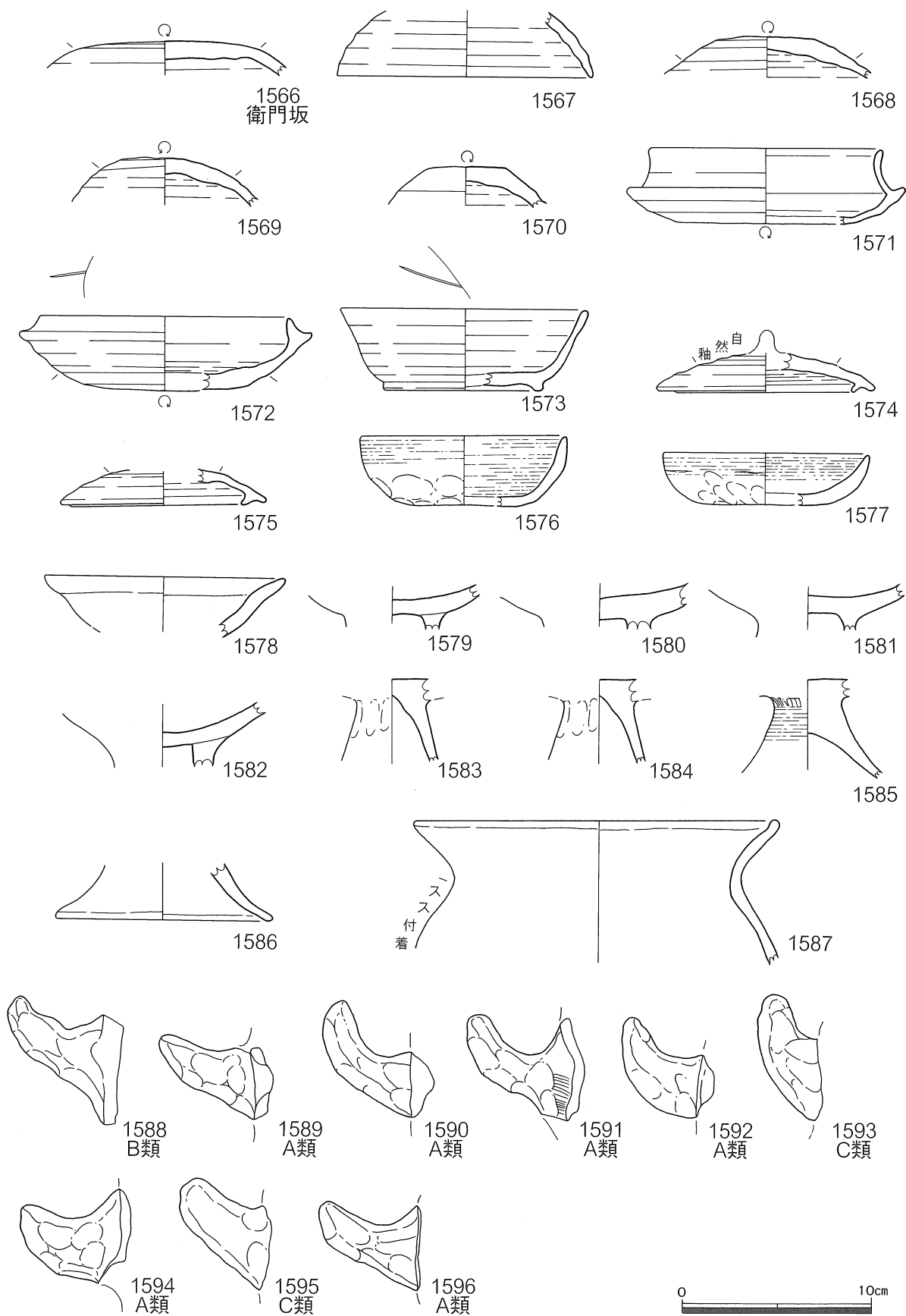
第110図 古墳中期～奈良時代土器実測図 70

1537～1541=SD80
1542～1545=SD93



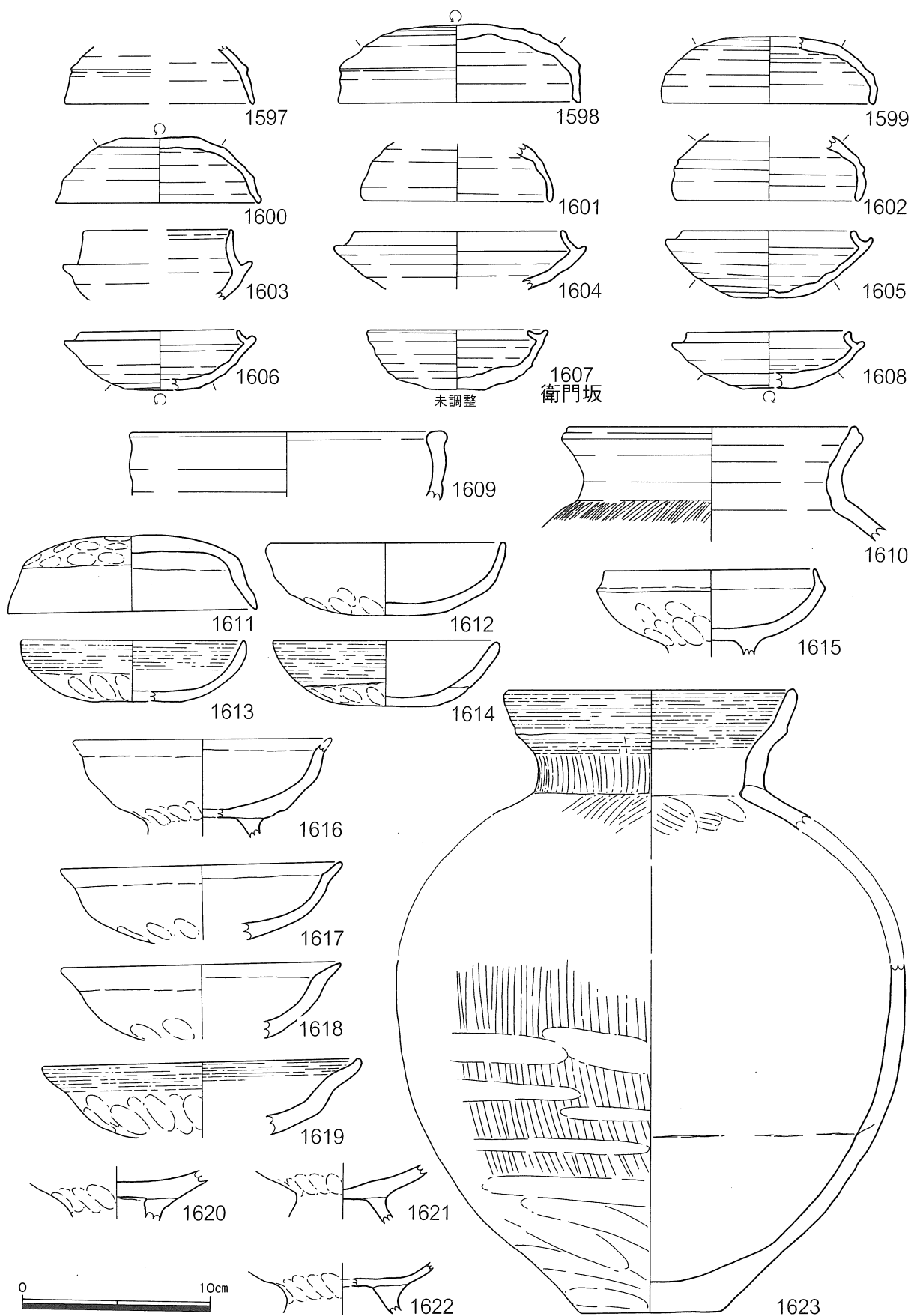
第111図 古墳中期～奈良時代土器実測図 71

1546・1547=SD93
1548～1565=SD123



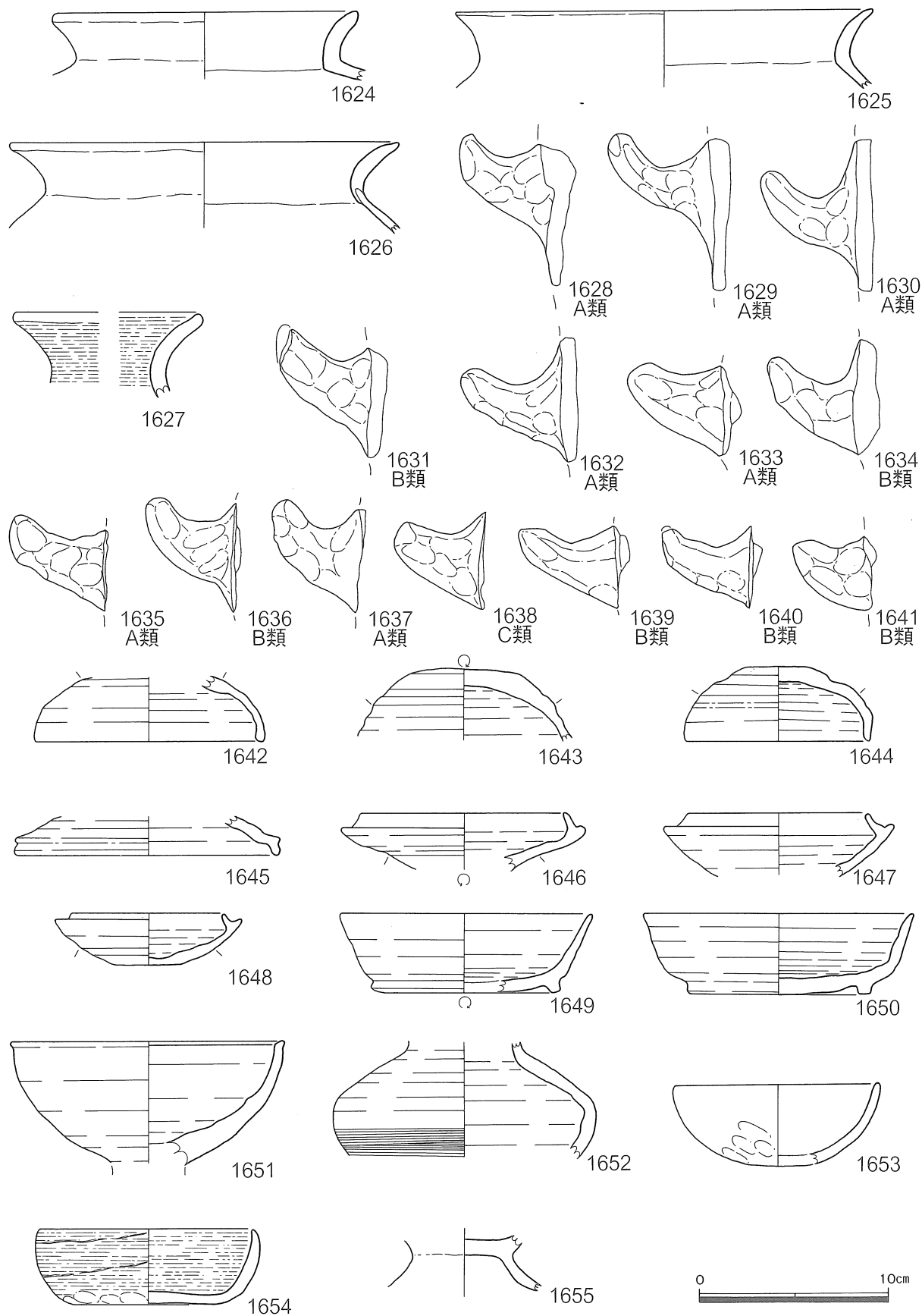
第112図 古墳中期～奈良時代土器実測図 72

1566～1596=SD123



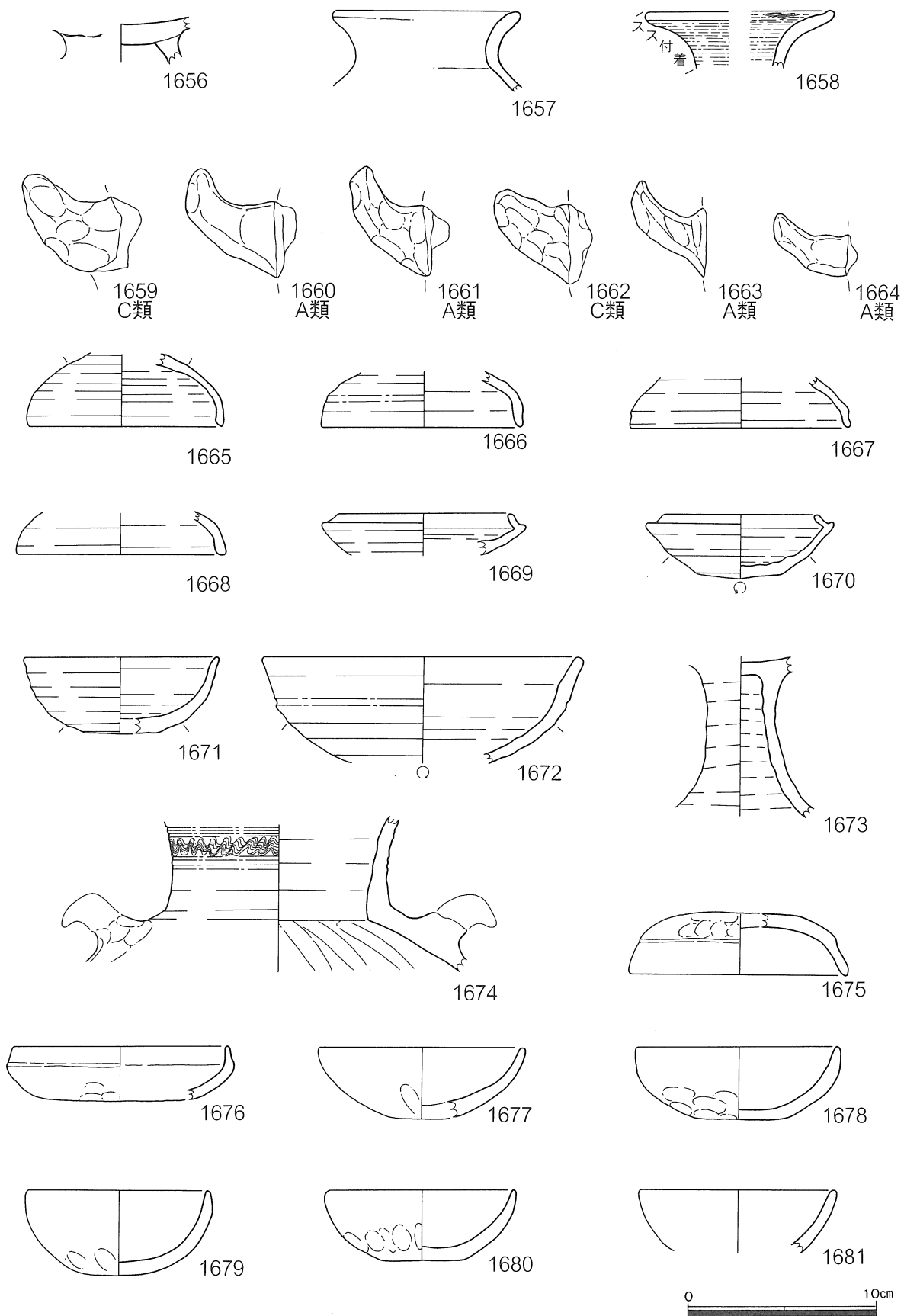
第113図 古墳中期～奈良時代土器実測図 73

1597~1623=SD126



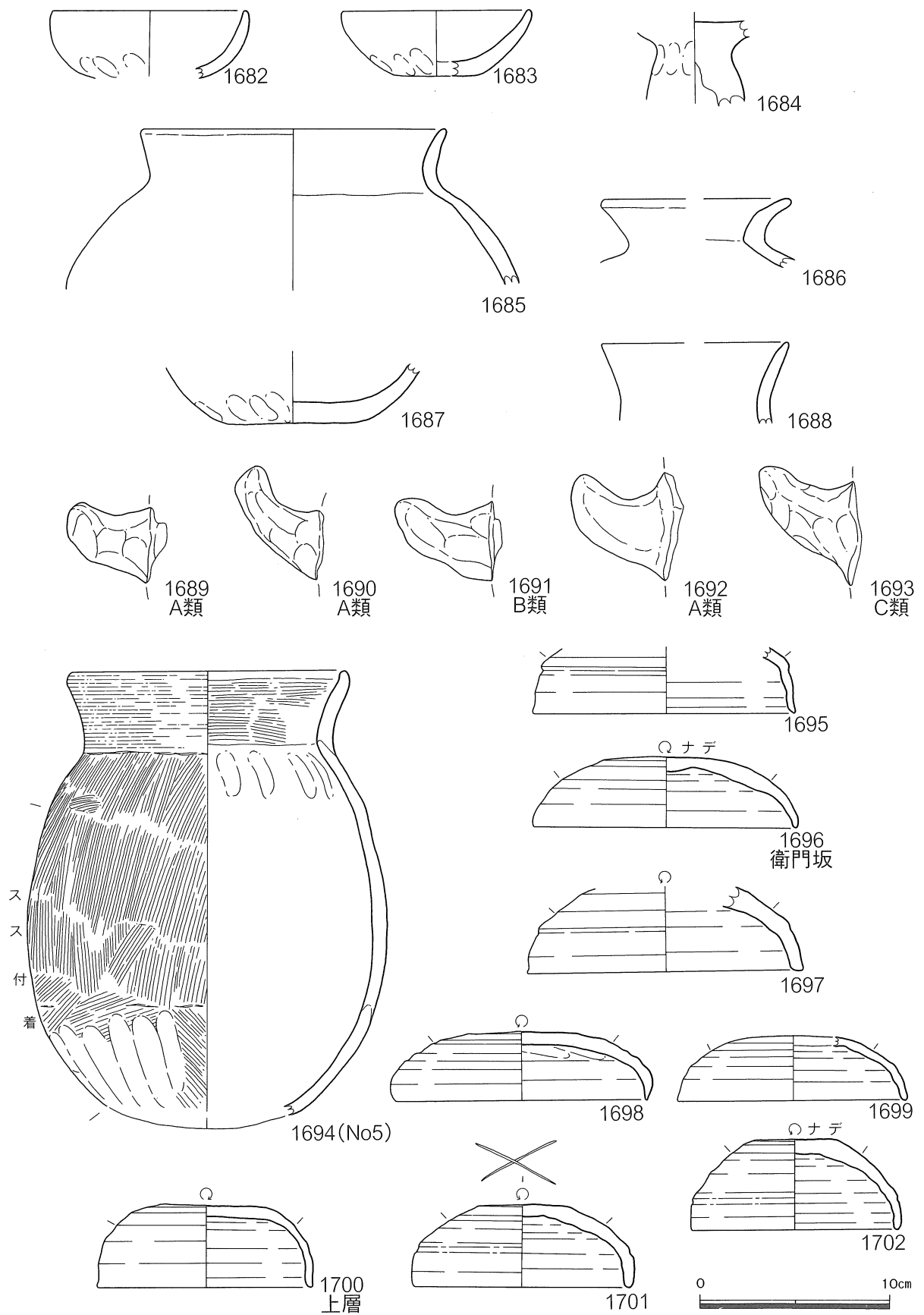
第114図 古墳中期～奈良時代土器実測図 74

1624～1641=SD126
1642～1655=SD126



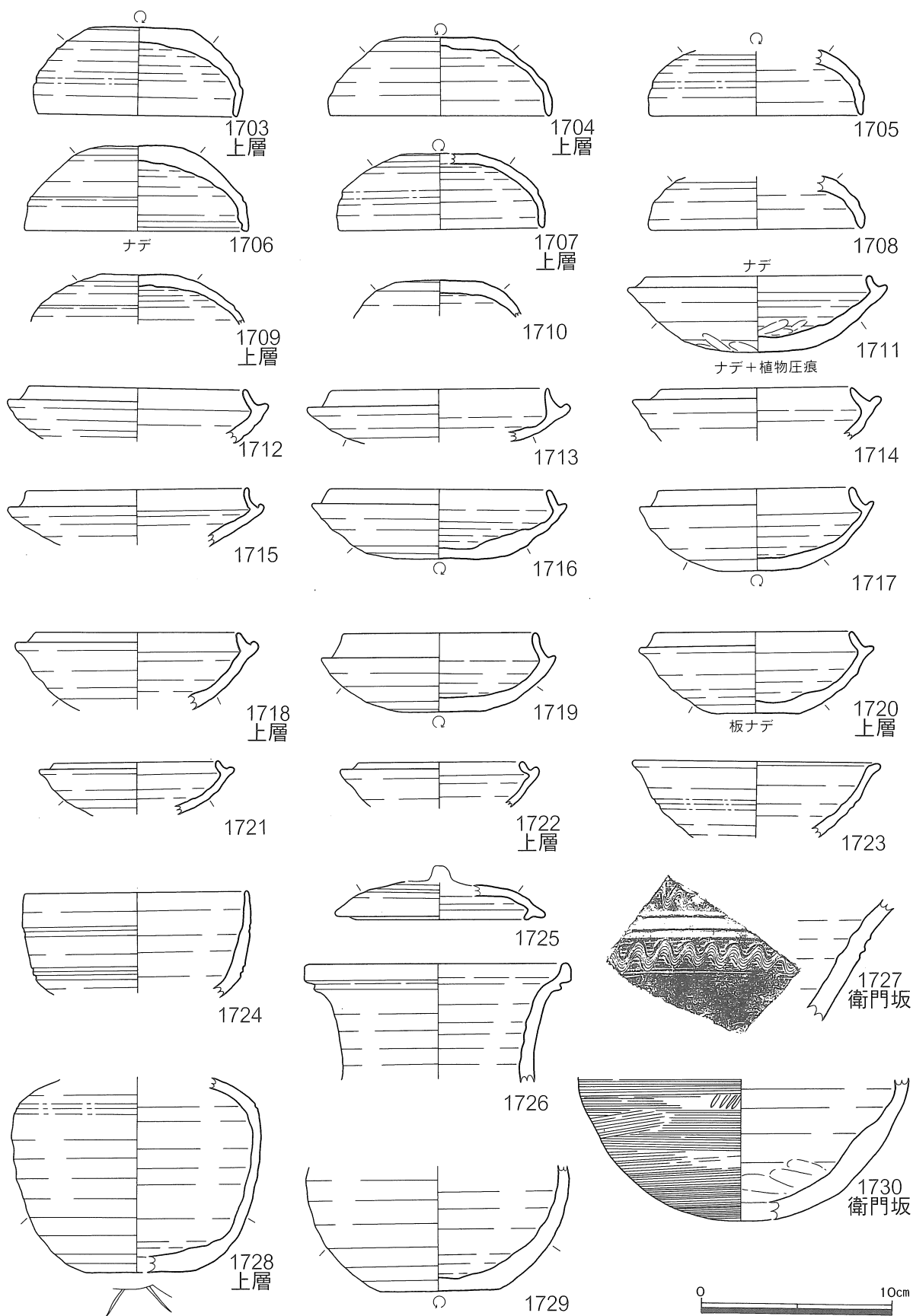
第115図 古墳中期～奈良時代土器実測図 75

1656～1664=SD138
1665～1681=SD140



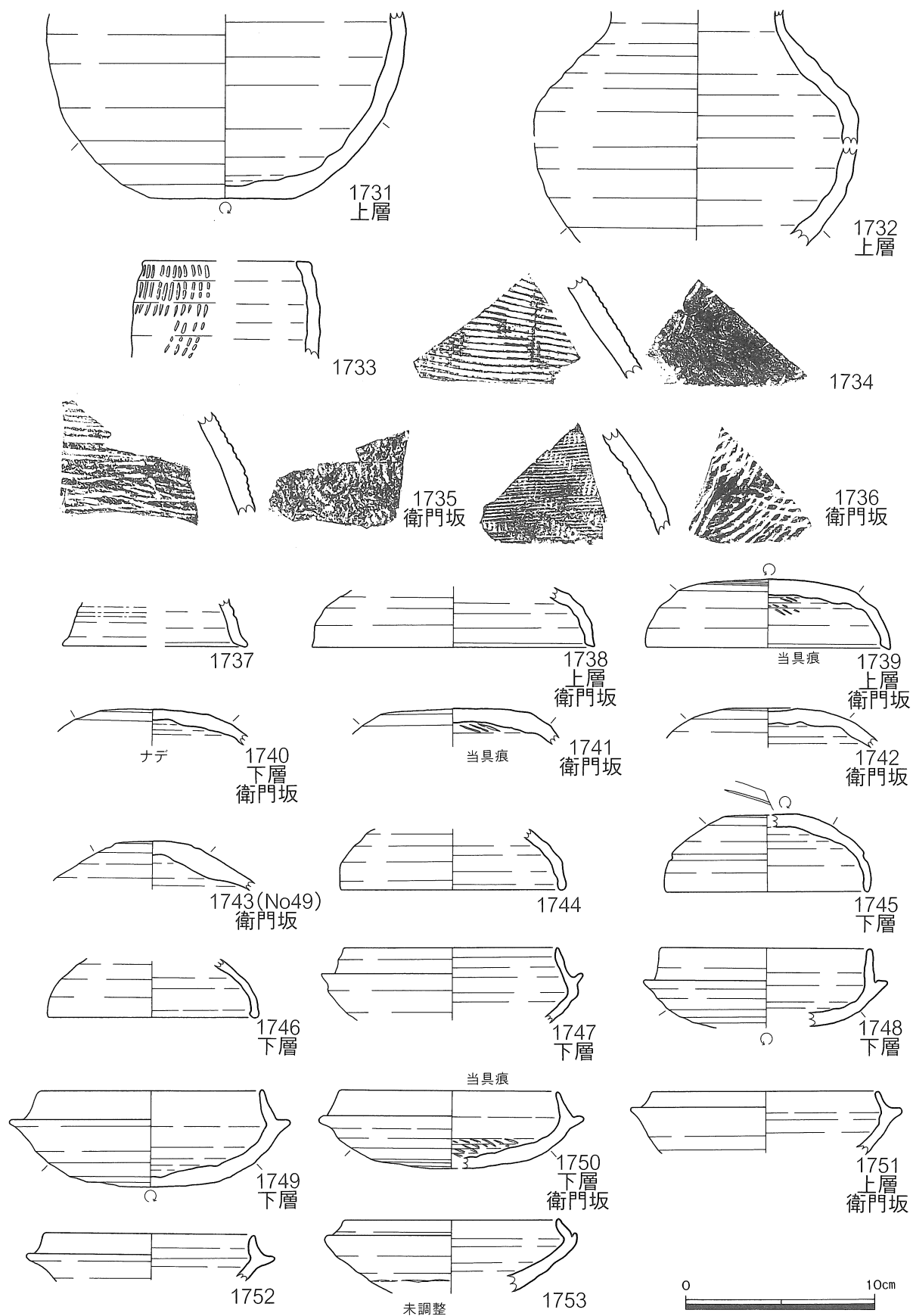
第116図 古墳中期～奈良時代土器実測図 76

1682～1693=SD140
1694～1702=SD148



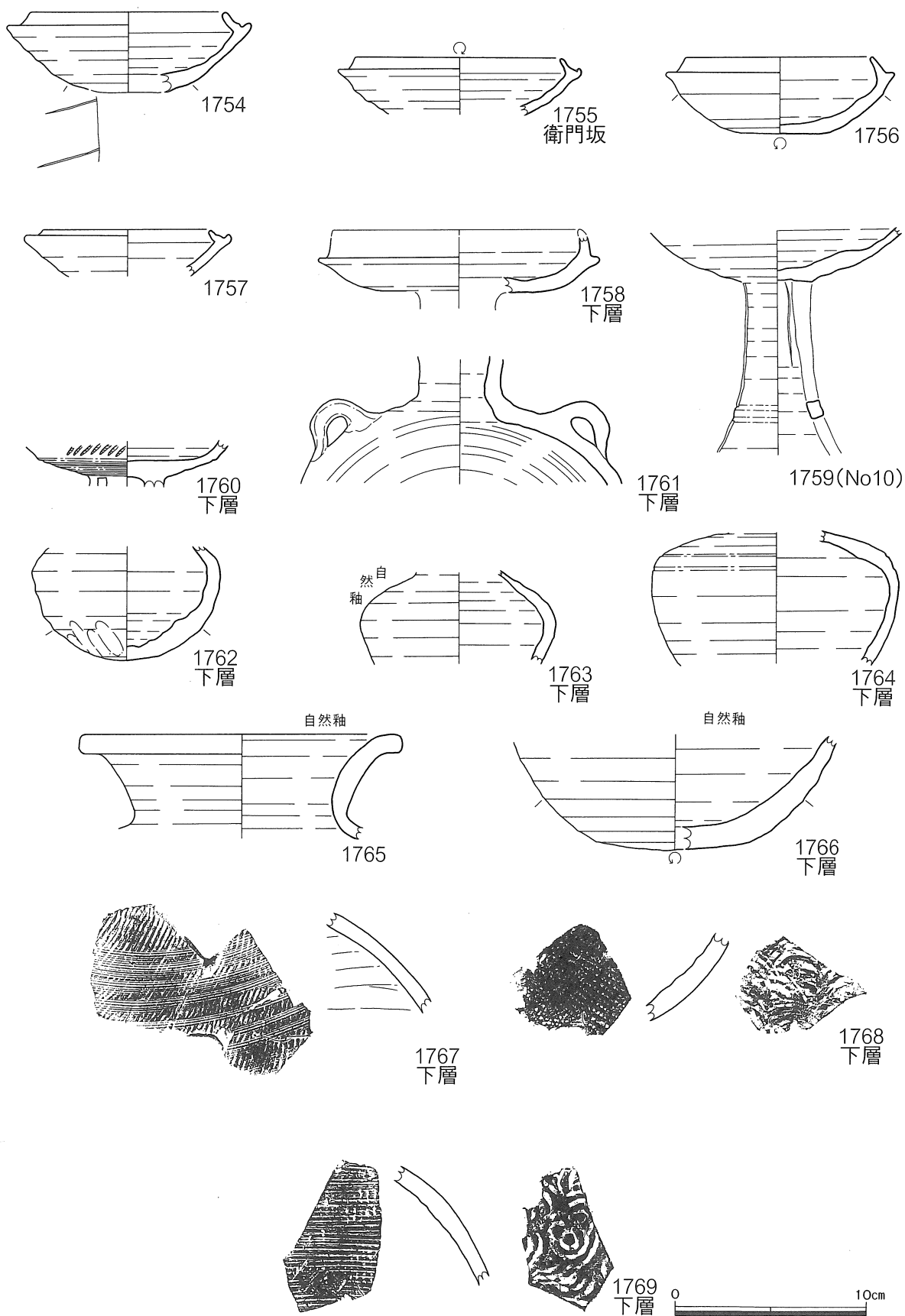
第117図 古墳中期～奈良時代土器実測図 77

1703～1730=SD148



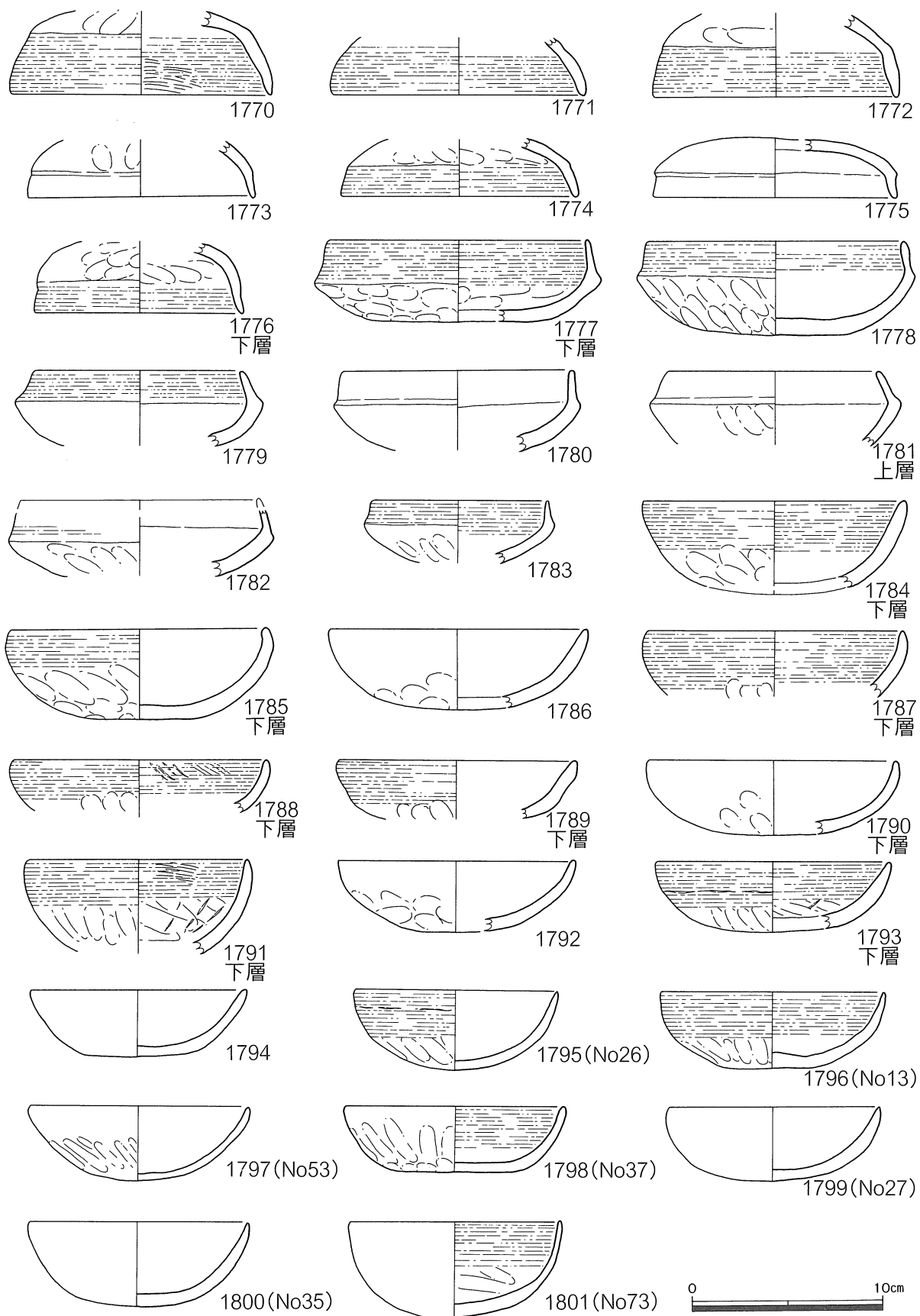
第118図 古墳中期～奈良時代土器実測図 78

1731~1753=SD148



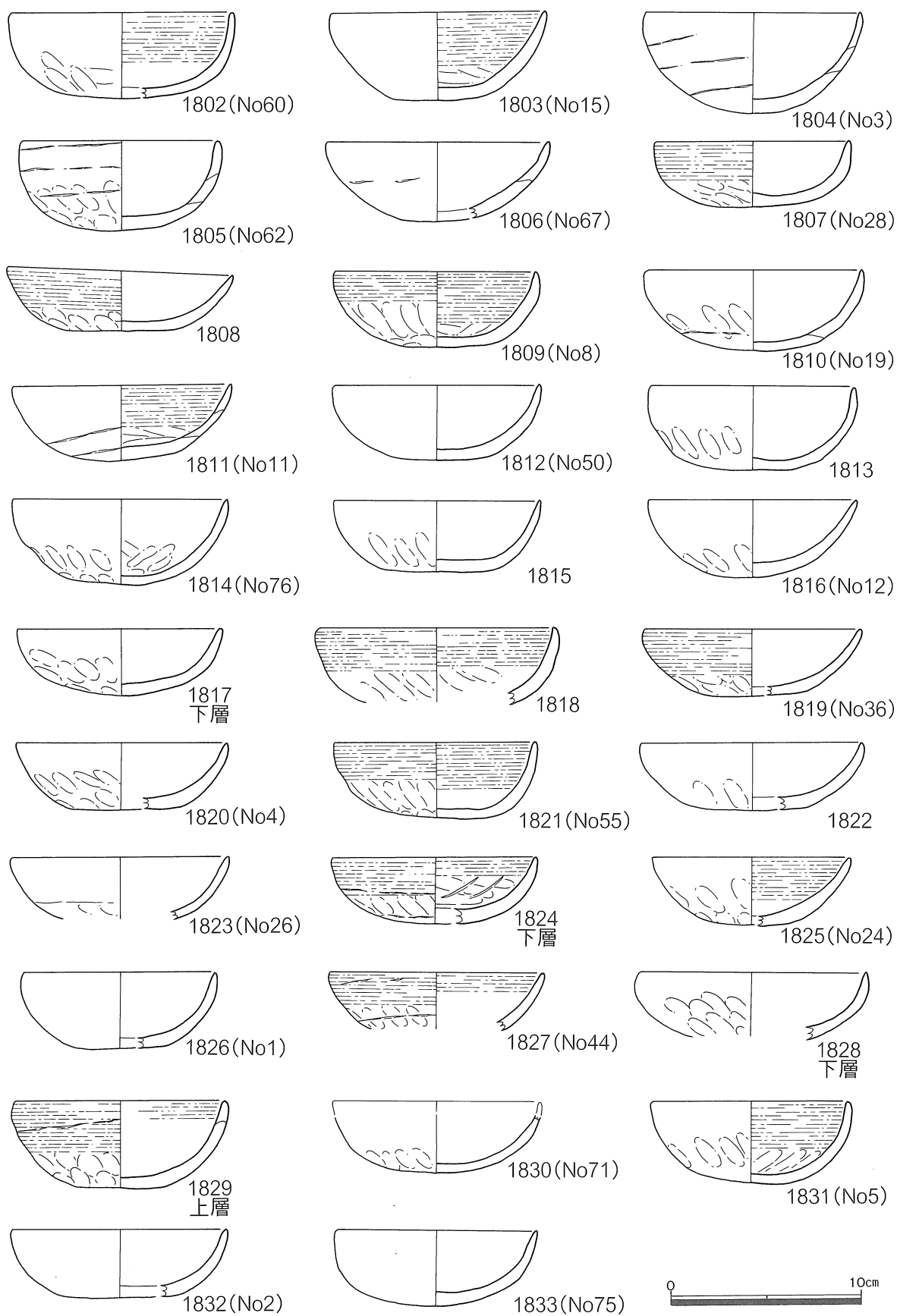
第119図 古墳中期～奈良時代土器実測図 79

1754～1769＝SD148



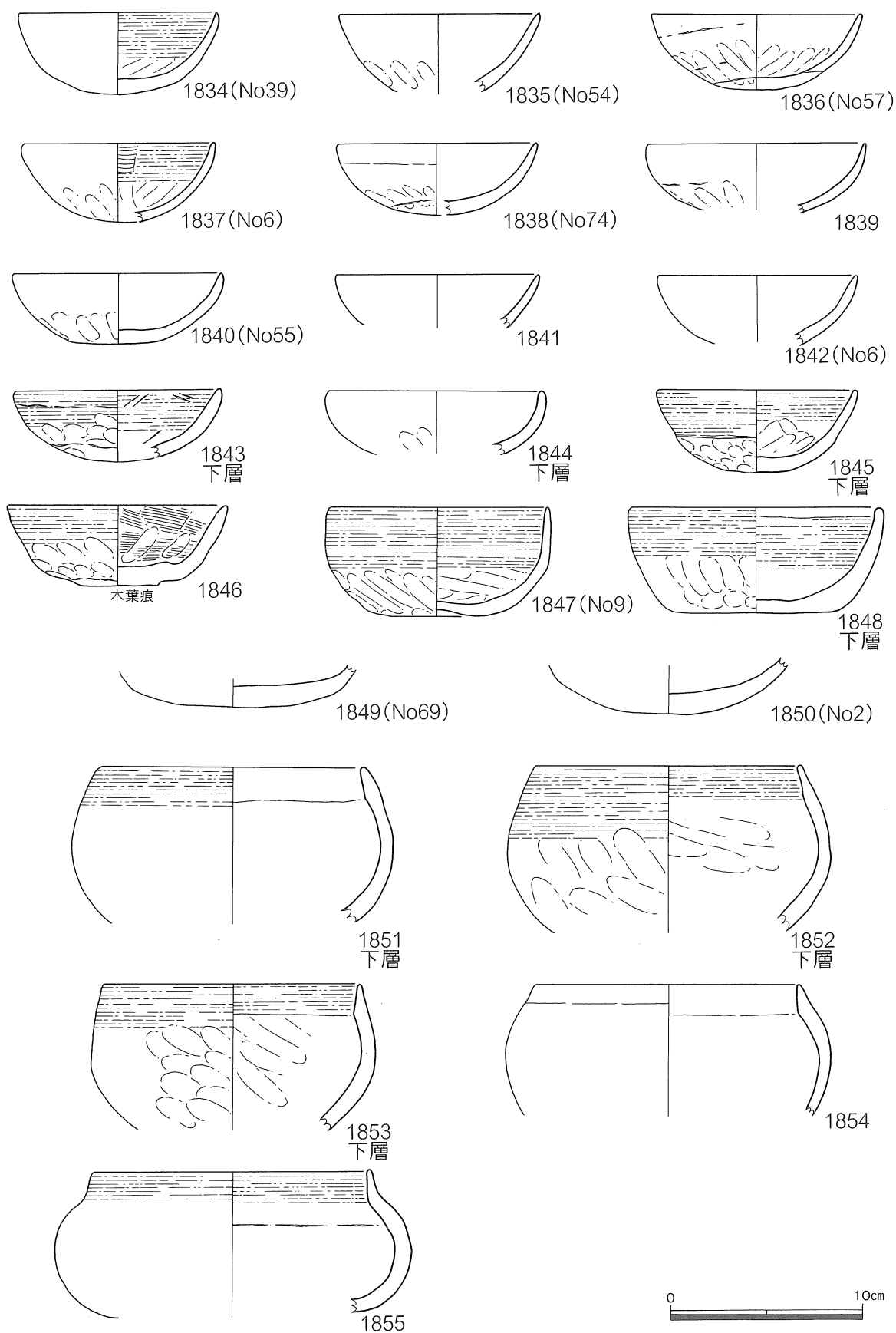
第120図 古墳中期～奈良時代土器実測図 80

1770～1801=SD148



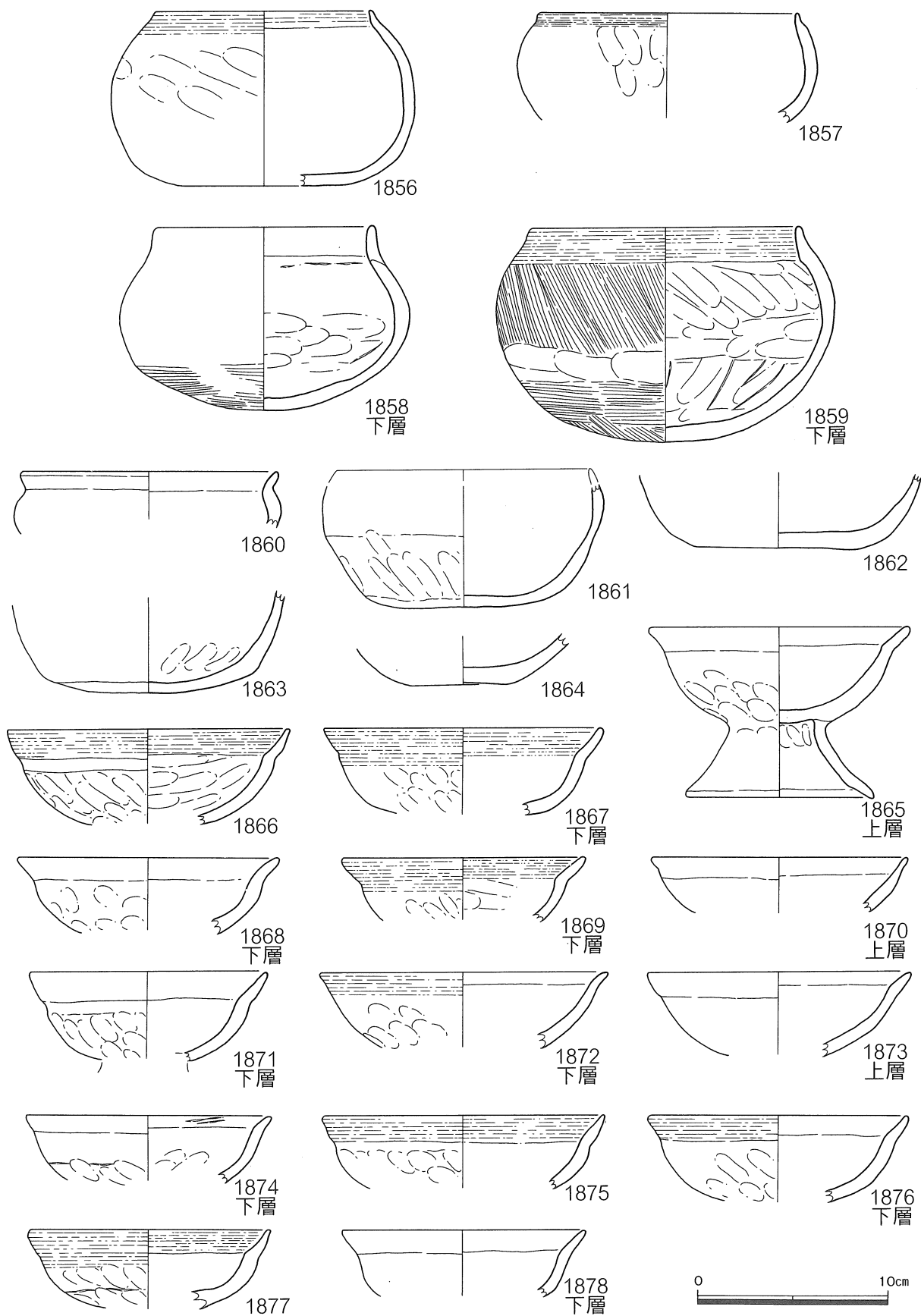
第121図 古墳中期～奈良時代土器実測図 81

1802～1833=SD148



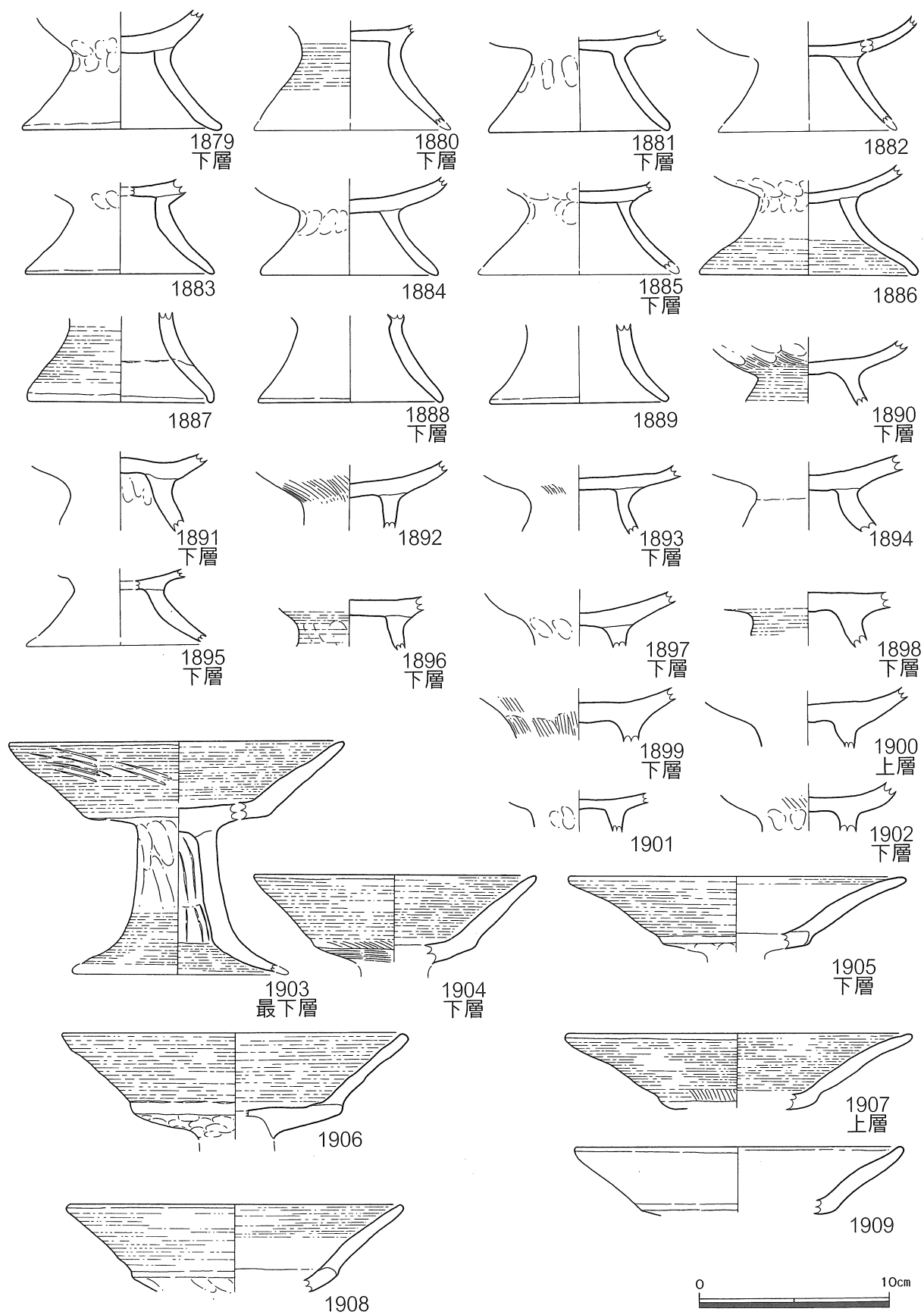
第122図 古墳中期～奈良時代土器実測図 82

1834~1855=SD148



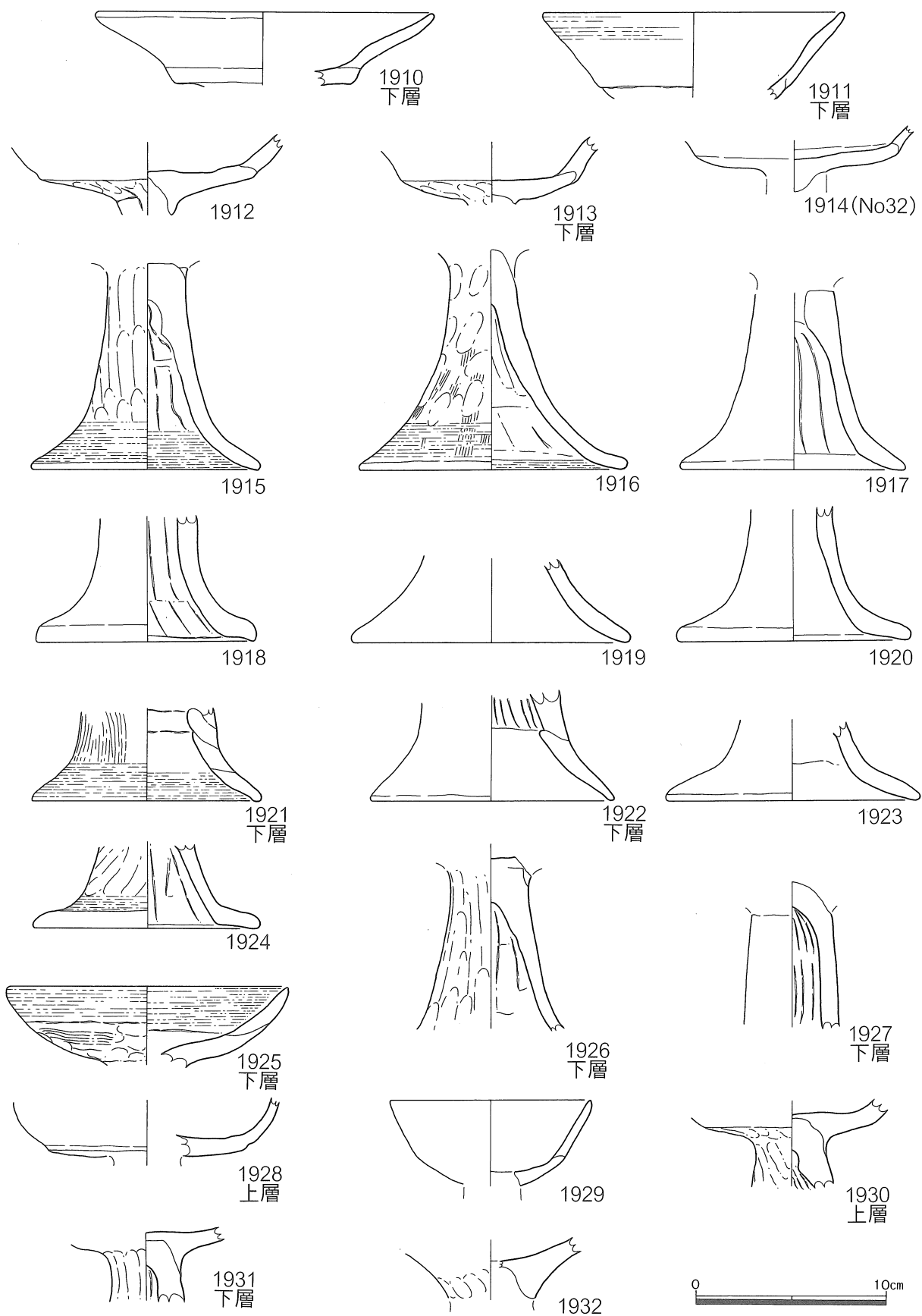
第123図 古墳中期～奈良時代土器実測図 83

1856～1878=SD148



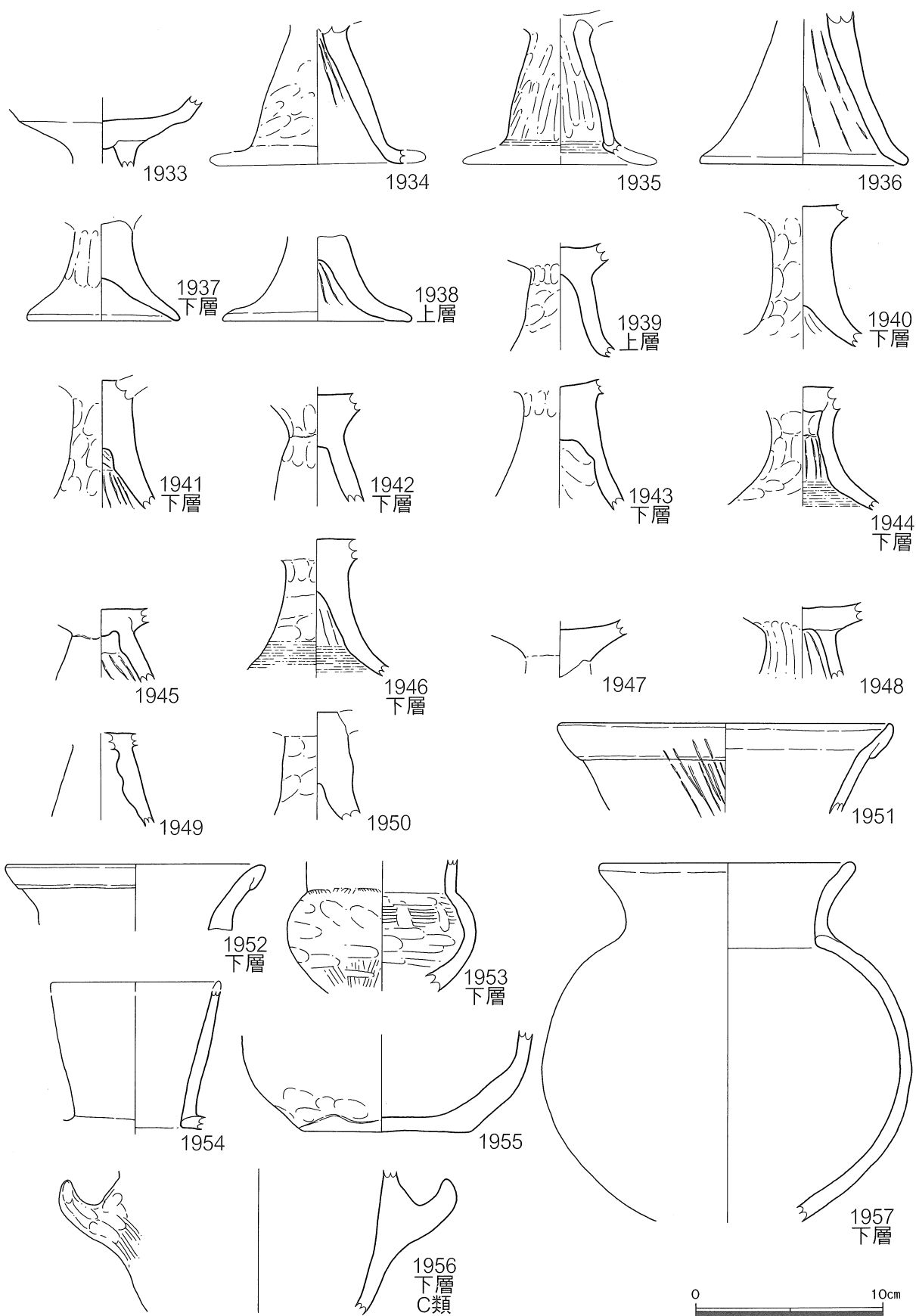
第124図 古墳中期～奈良時代土器実測図 84

1879～1909=SD148



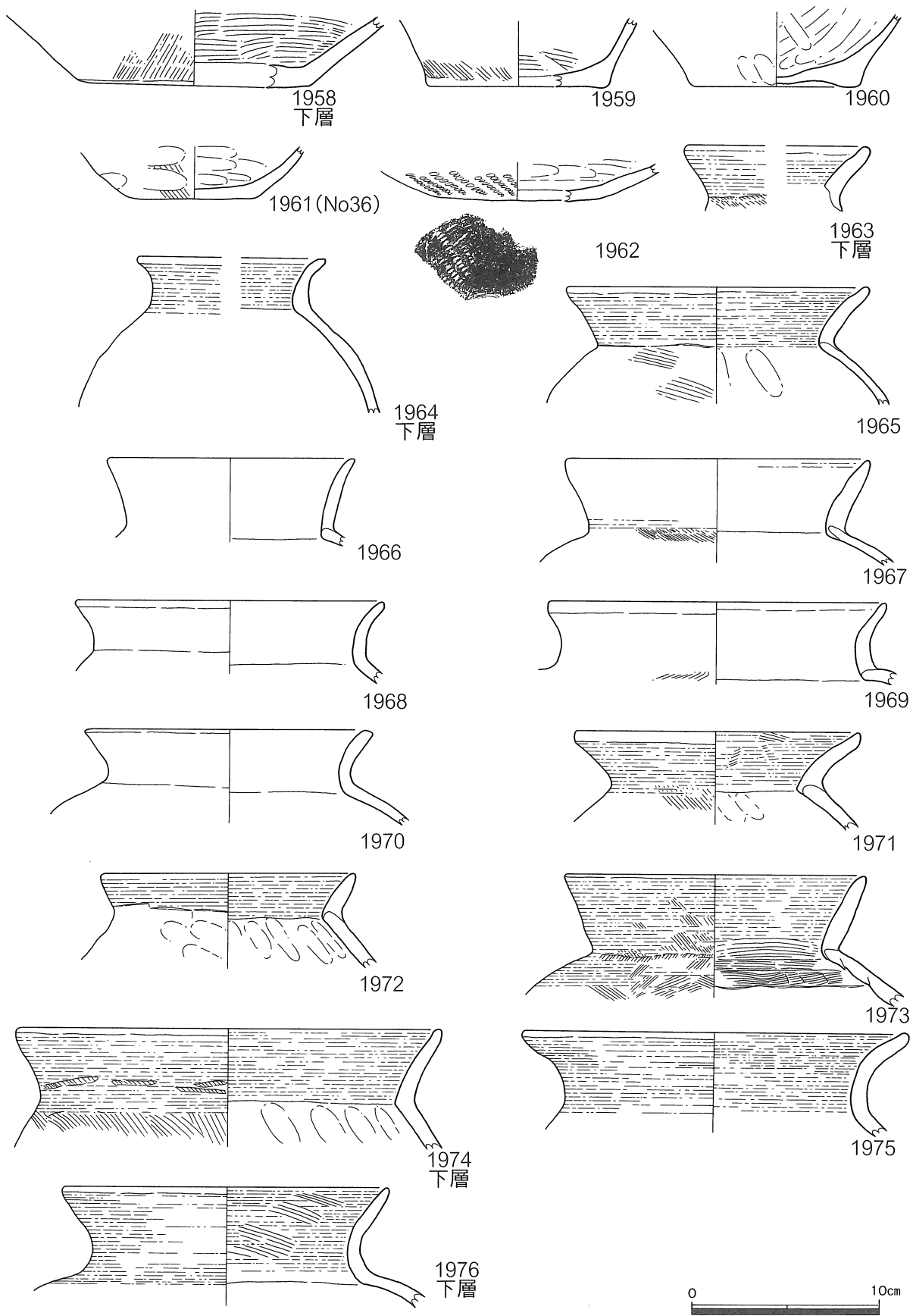
第125図 古墳中期～奈良時代土器実測図 85

1910～1932=SD148



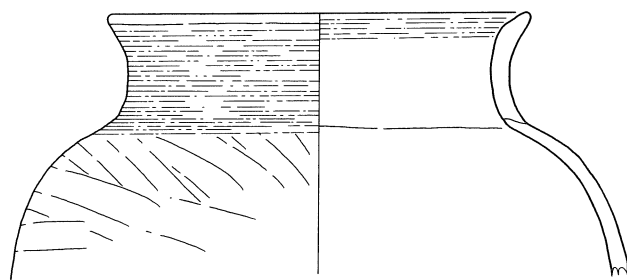
第126図 古墳中期～奈良時代土器実測図 86

1933～1957=SD148

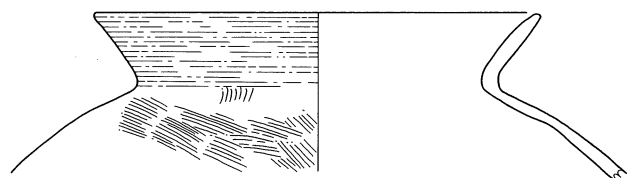


第127図 古墳中期～奈良時代土器実測図 87

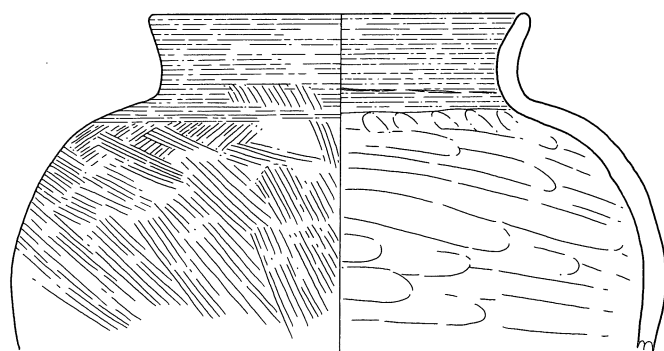
1958～1976=SD148



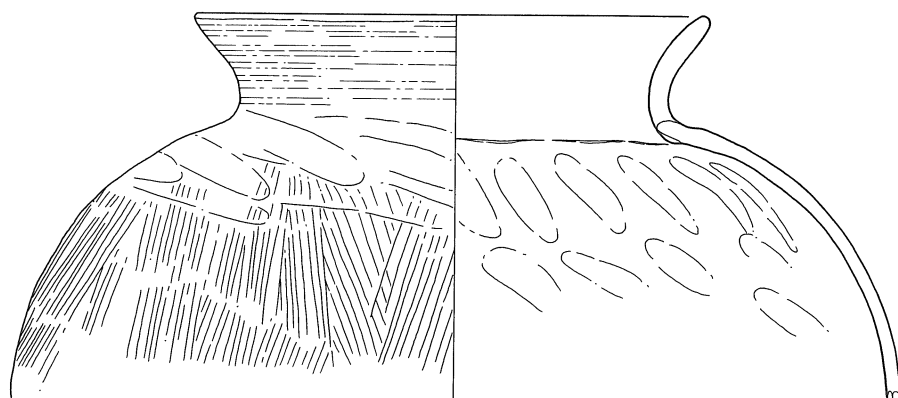
1977(No30)



1978(No54)



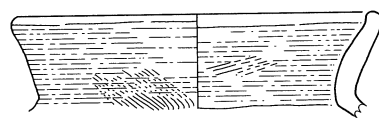
1979



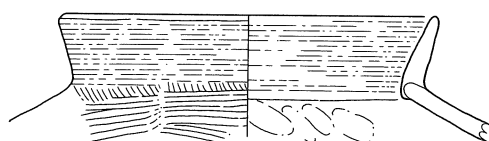
1980
下層



1981



1982
下層

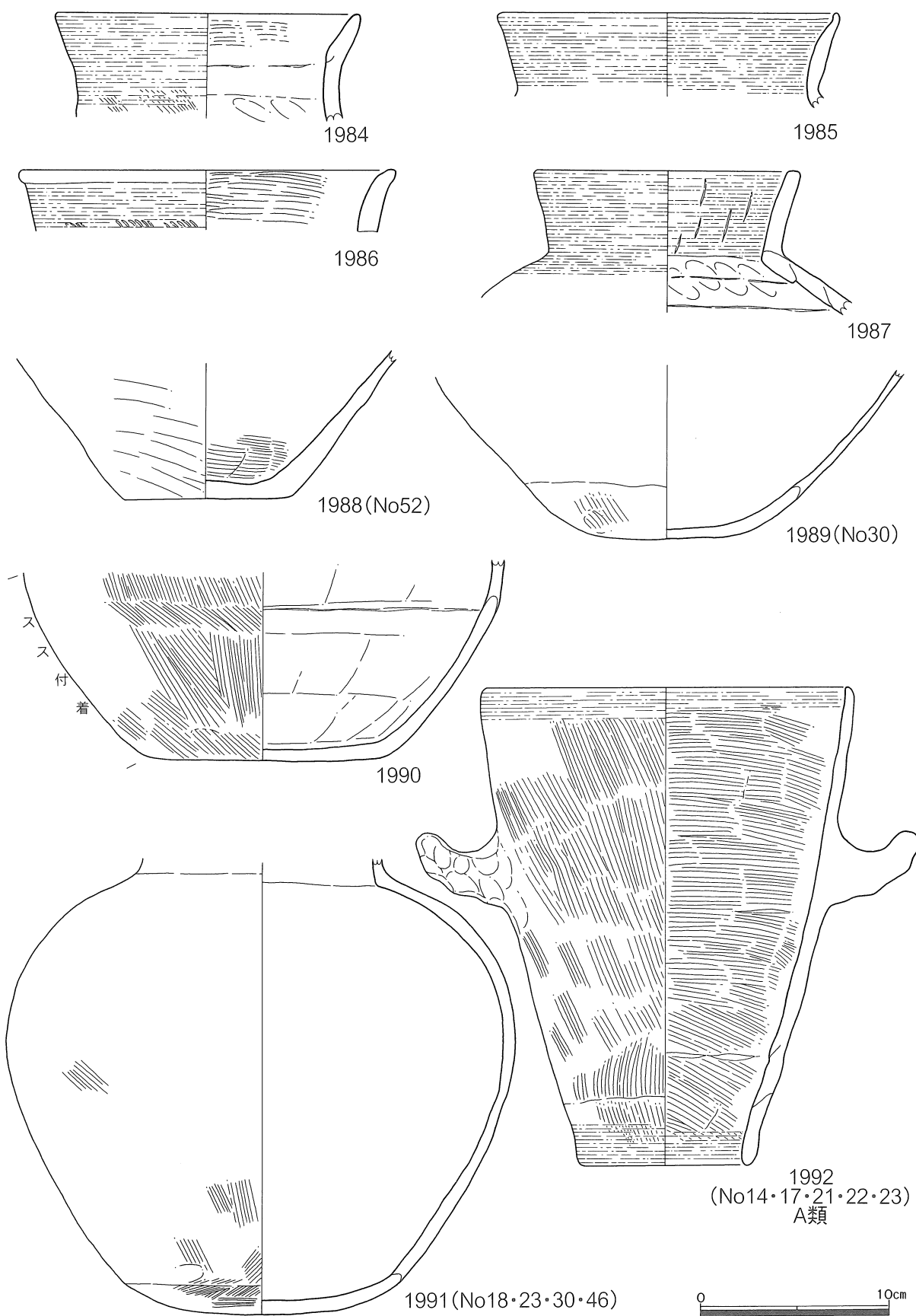


1983



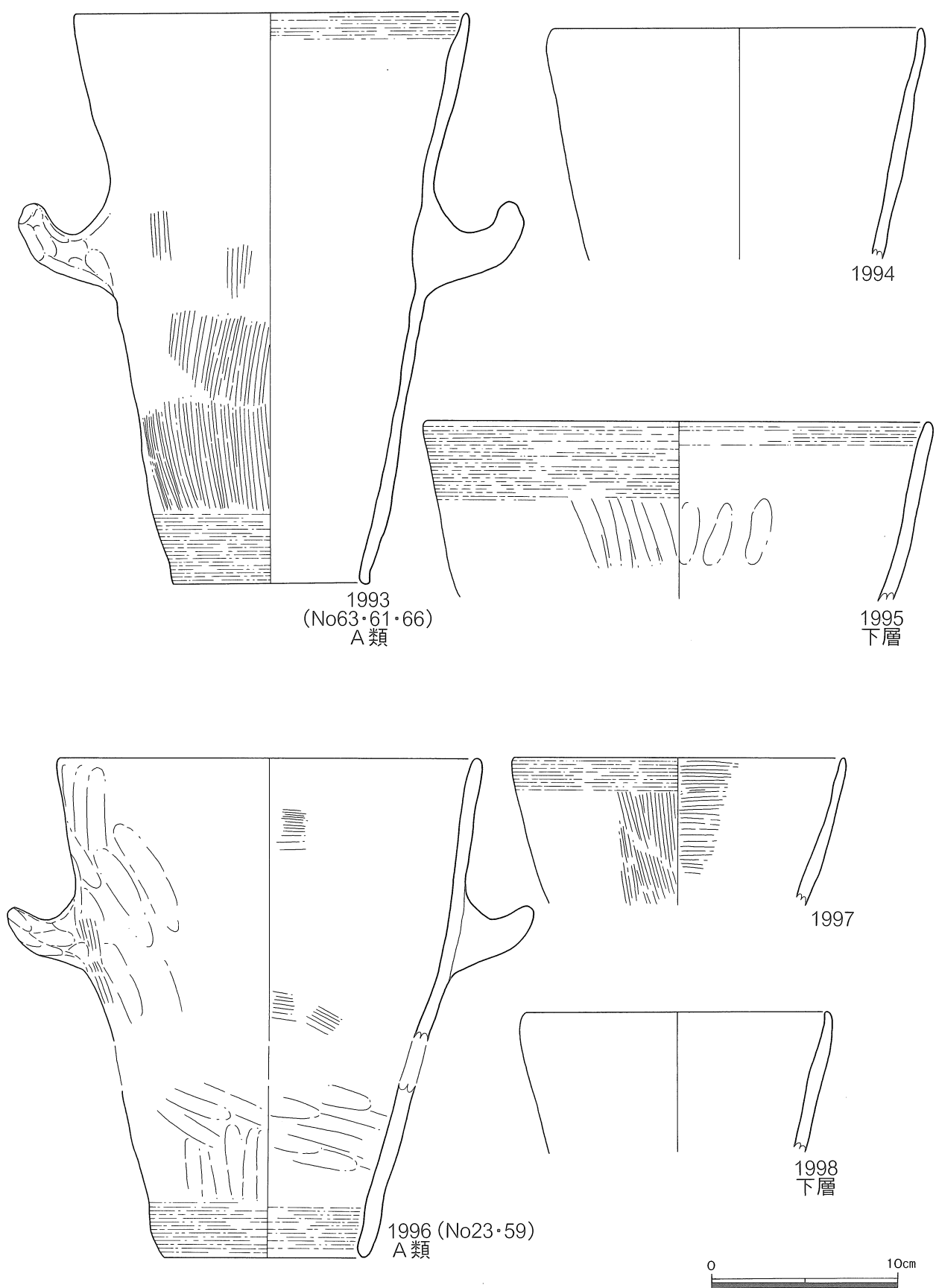
第128図 古墳中期～奈良時代土器実測図 88

1977～1983=SD148



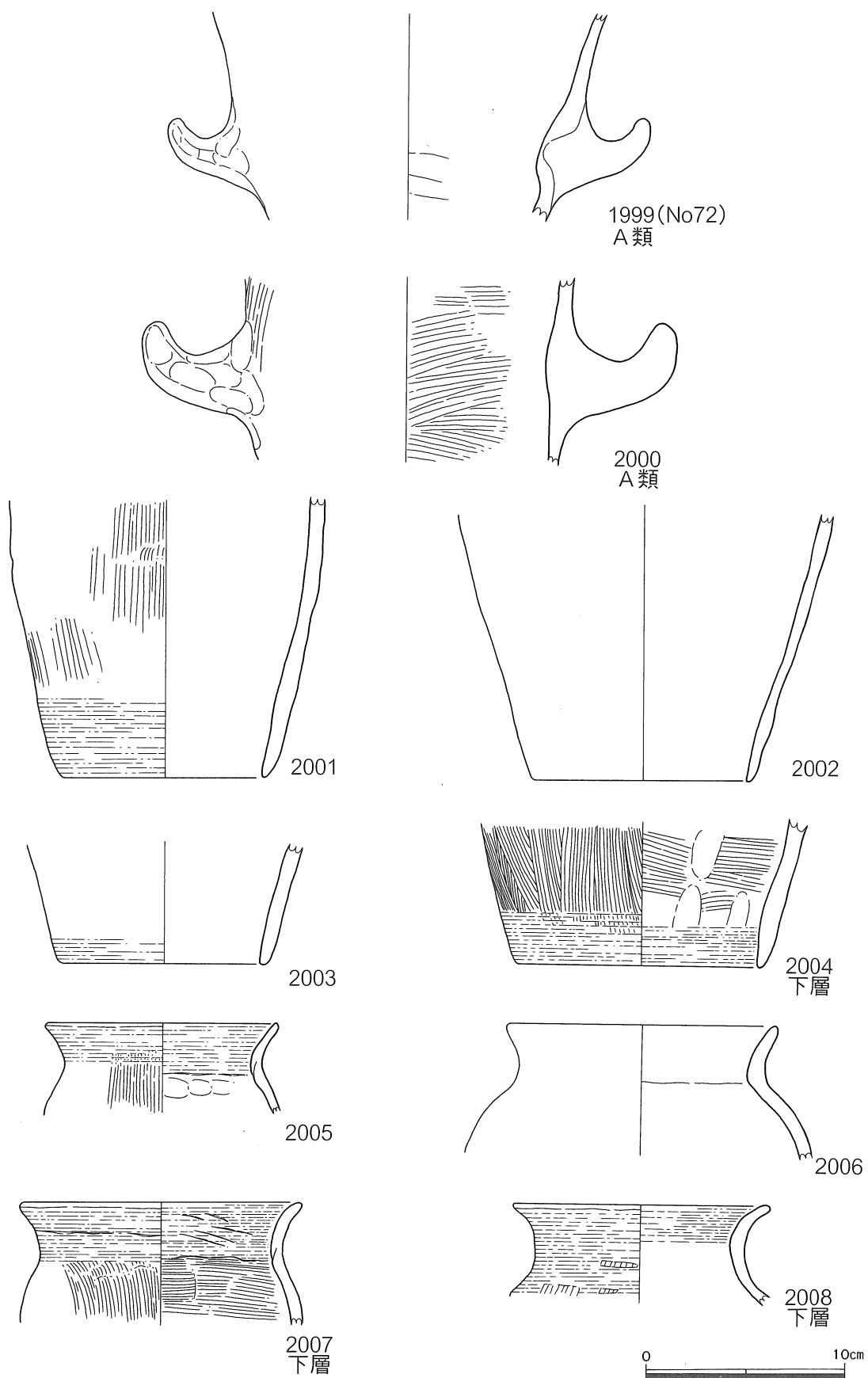
第129図 古墳中期～奈良時代土器実測図 89

1984～1992=SD148



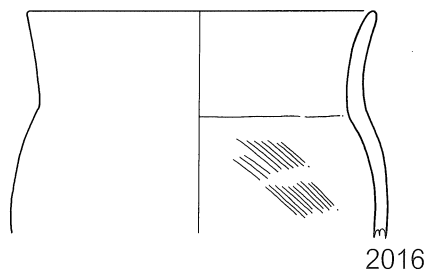
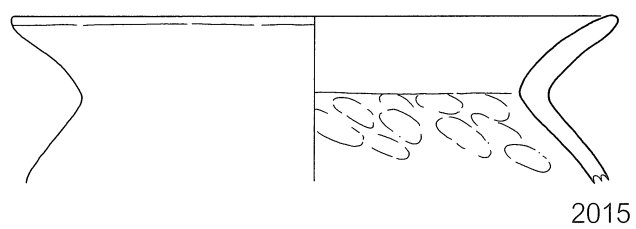
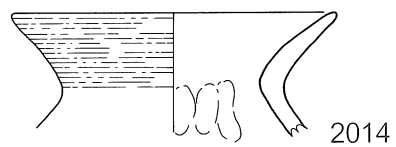
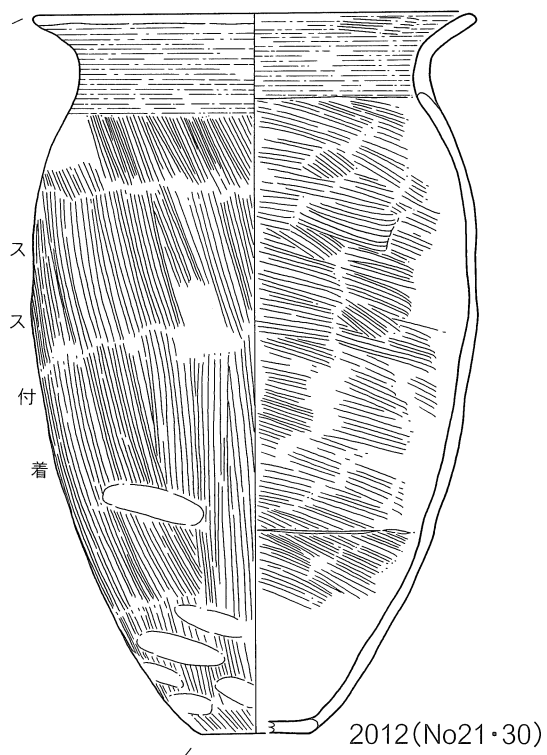
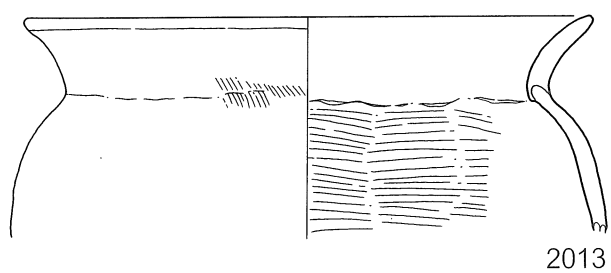
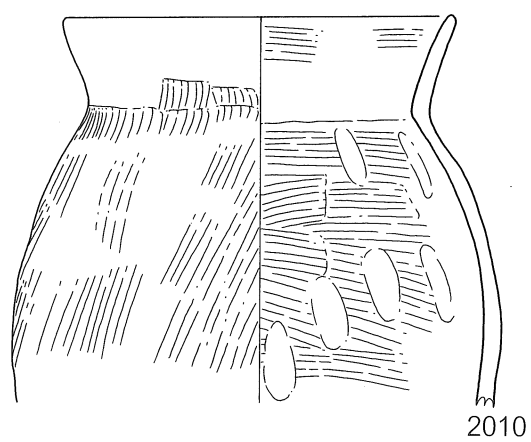
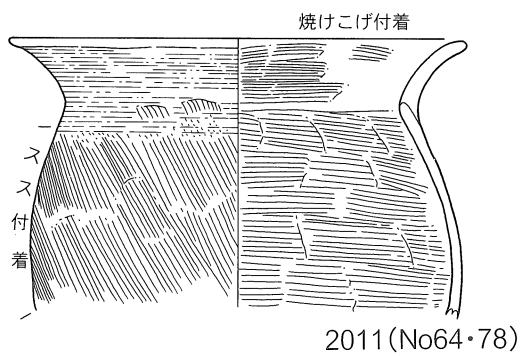
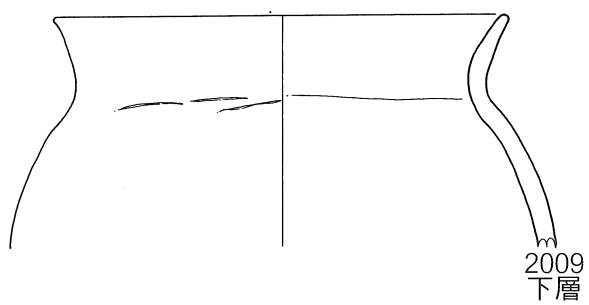
第130図 古墳中期～奈良時代土器実測図 90

1993～1998=SD148



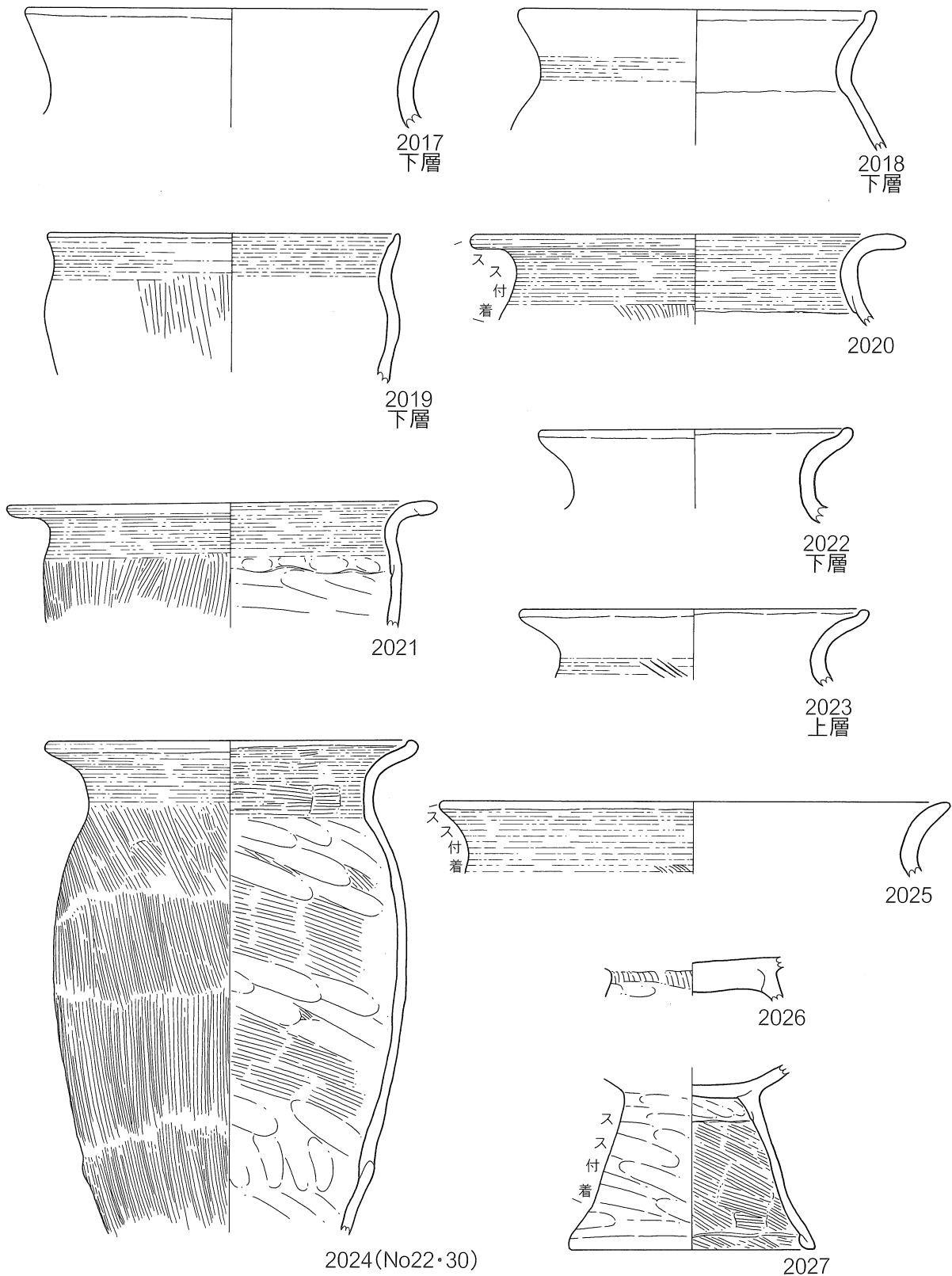
第131図 古墳中期～奈良時代土器実測図 91

1999～2008=SD148



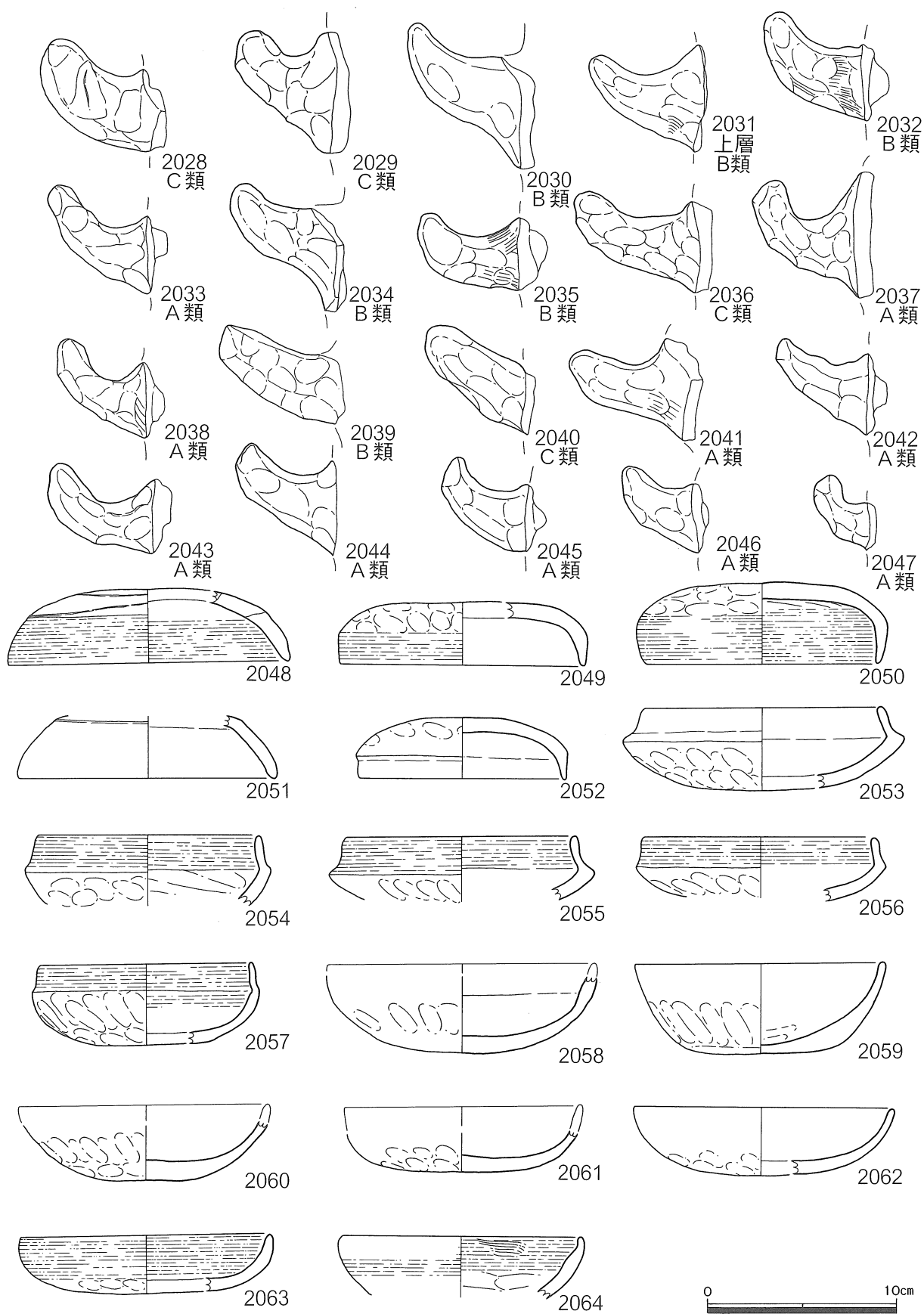
第132図 古墳中期～奈良時代土器実測図 92

2009～2016＝SD148



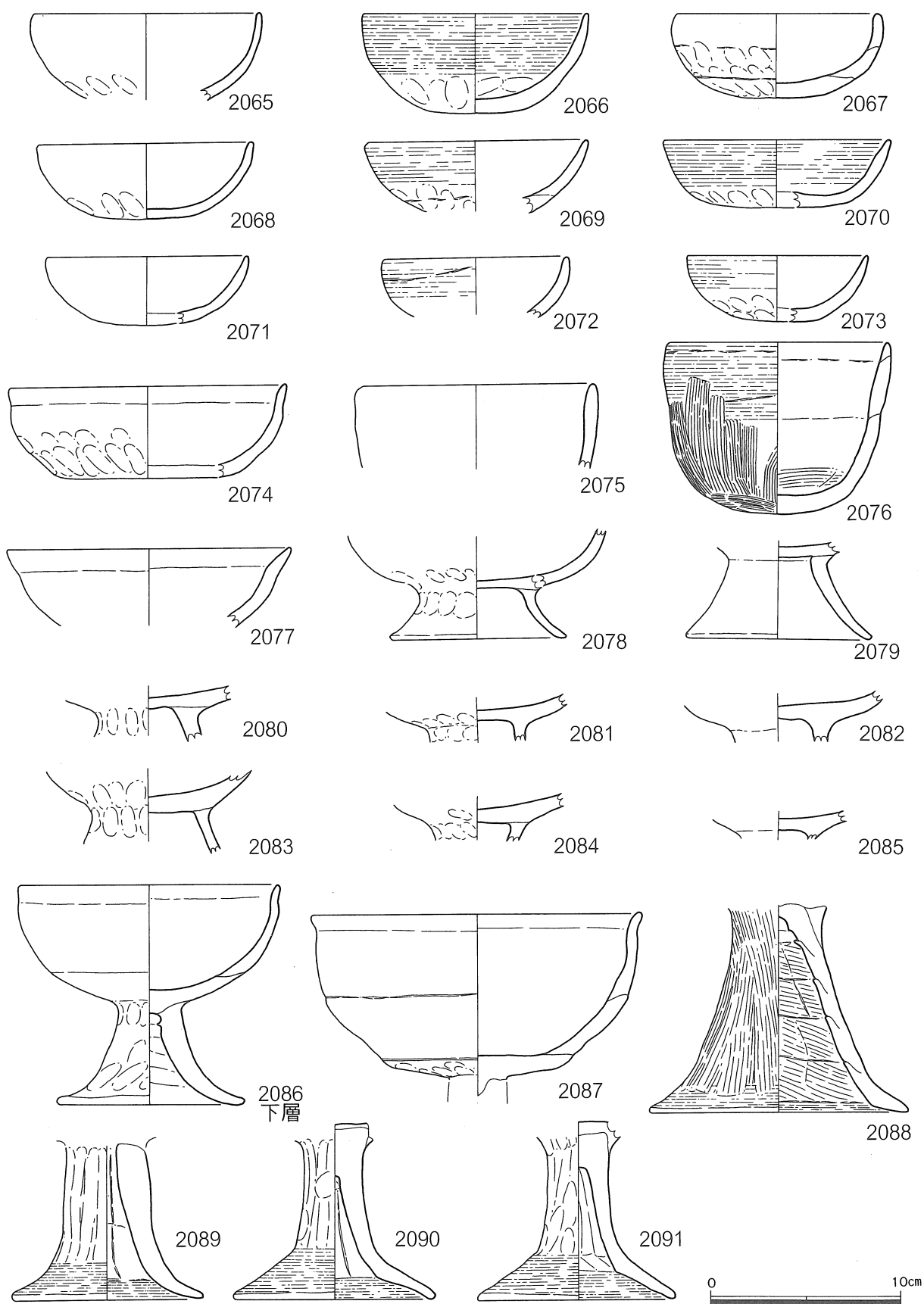
第133図 古墳中期～奈良時代土器実測図 93

2017～2027=SD148



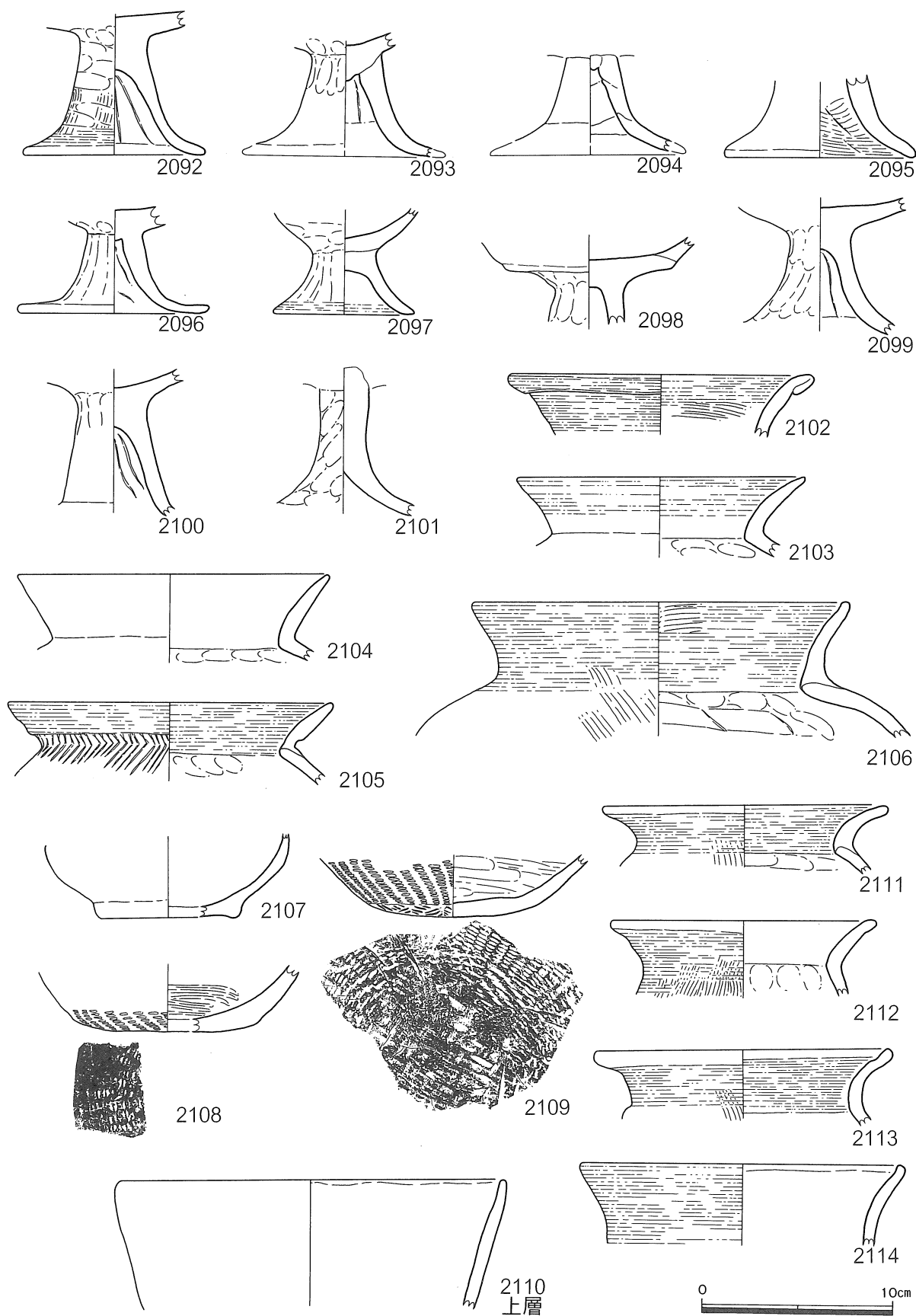
第134図 古墳中期～奈良時代土器実測図 94

2028～2064=SD148



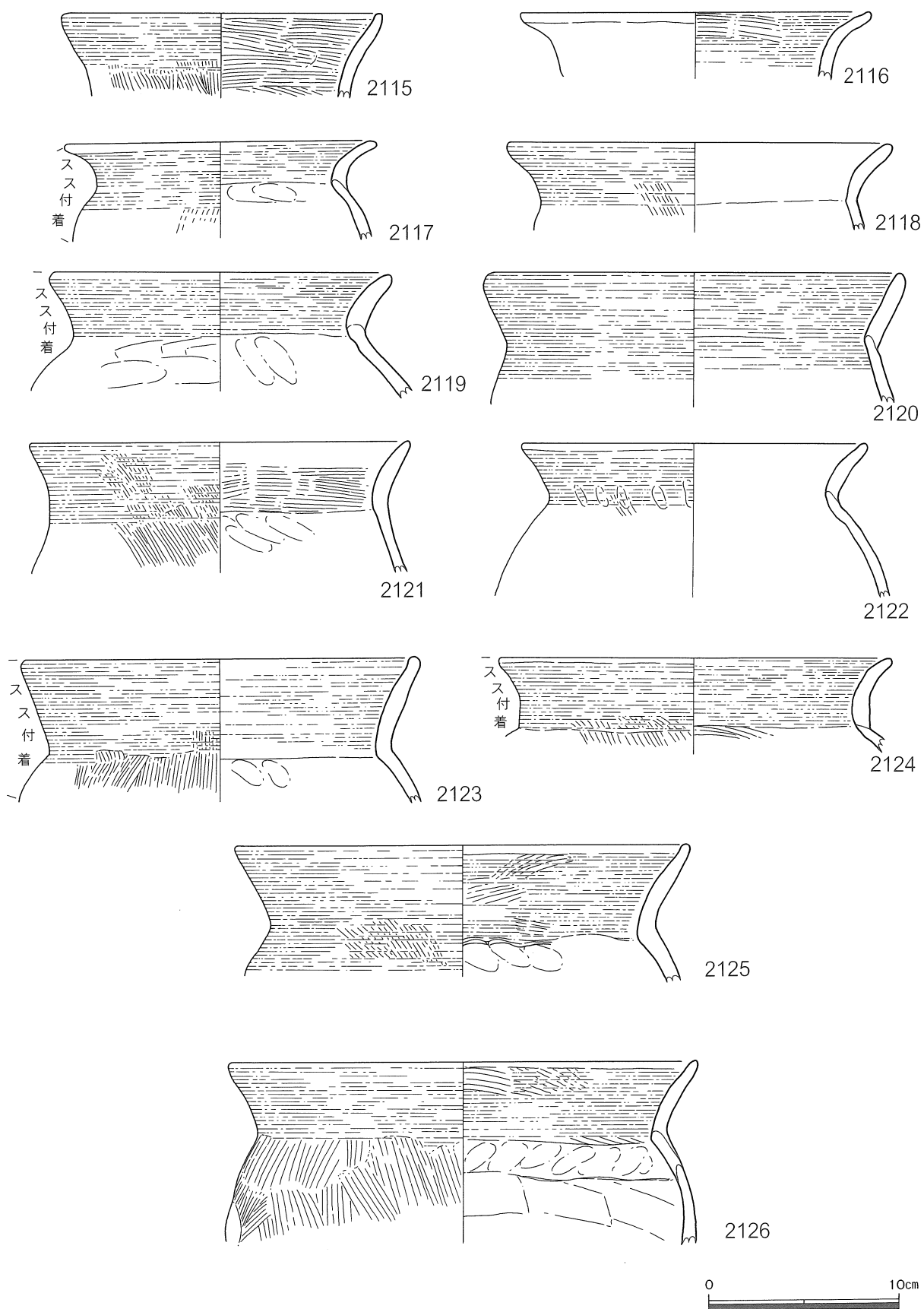
第135図 古墳中期～奈良時代土器実測図 95

2065～2091＝SD148



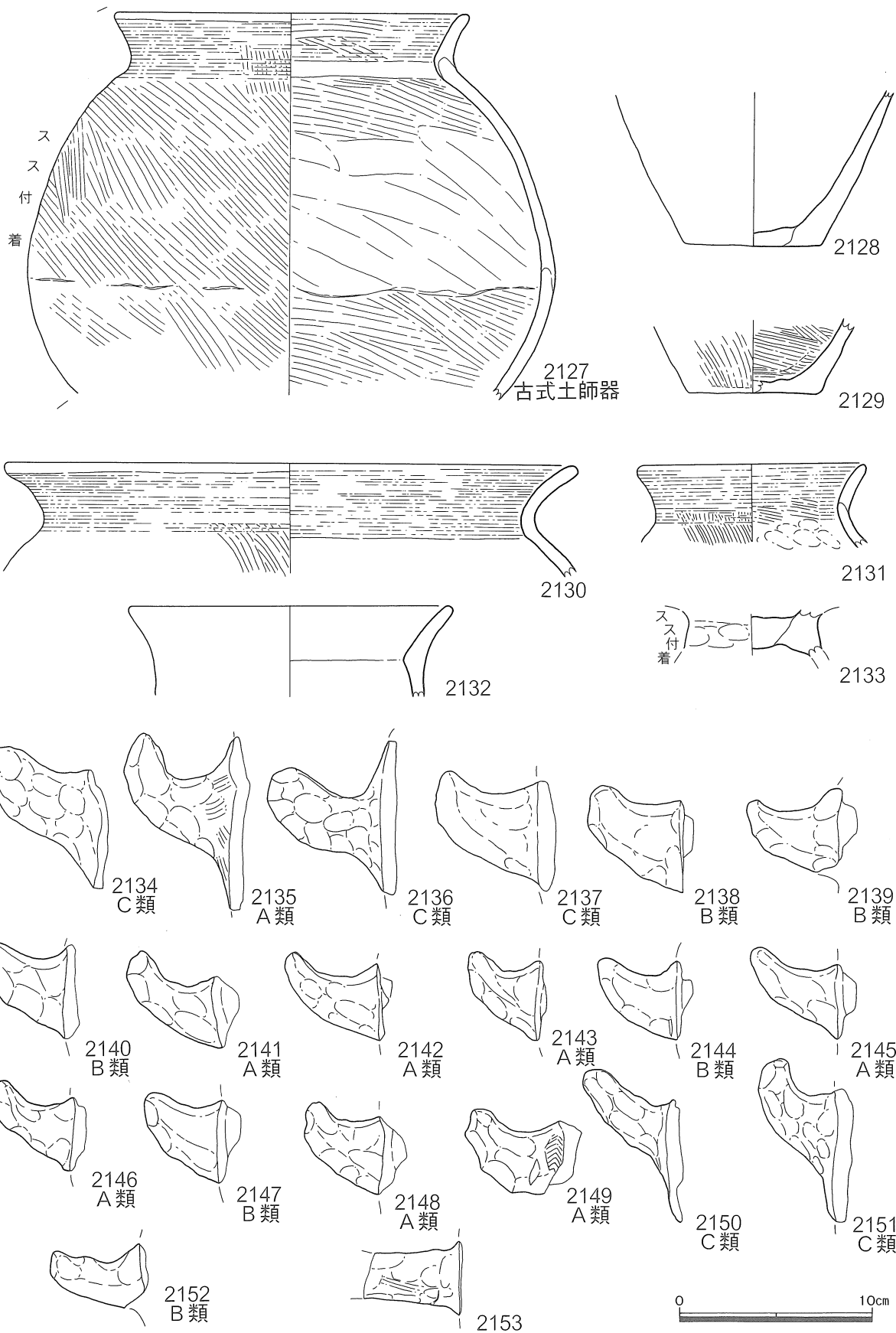
第136図 古墳中期～奈良時代土器実測図 96

2092～2114=SD148



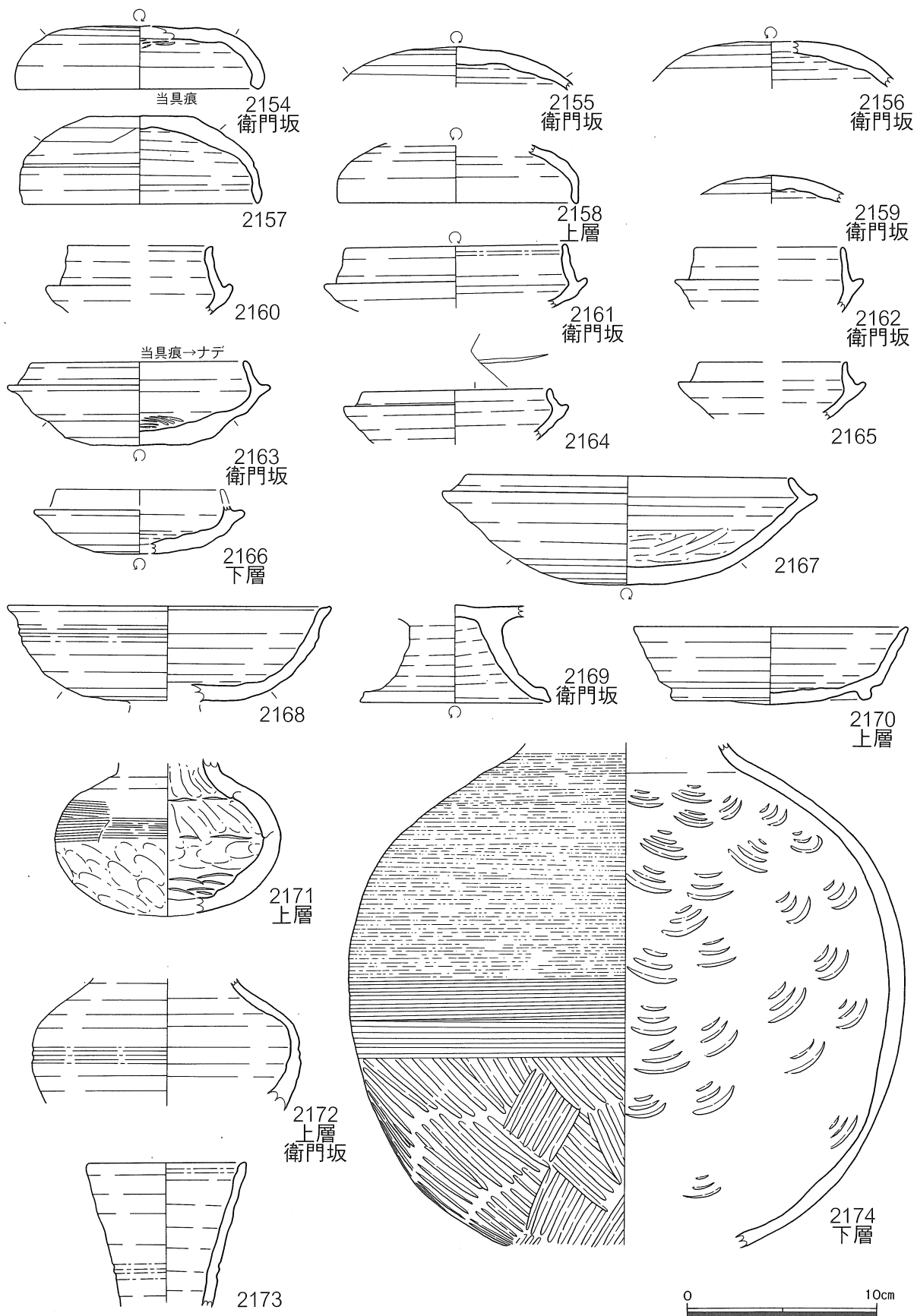
第137図 古墳中期～奈良時代土器実測図 97

2115～2126=SD148



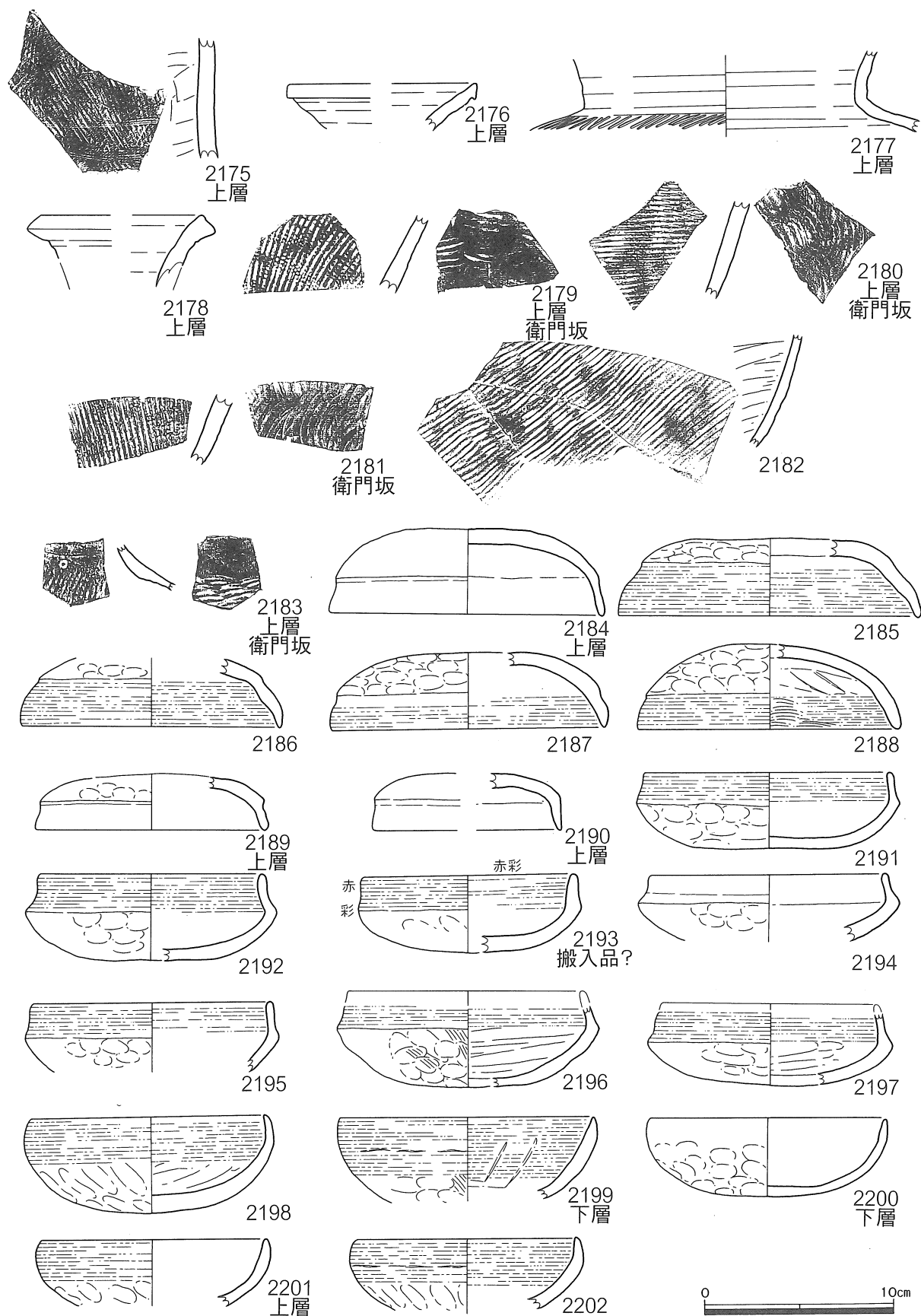
第138図 古墳中期～奈良時代土器実測図 98

2127～2153=SD148



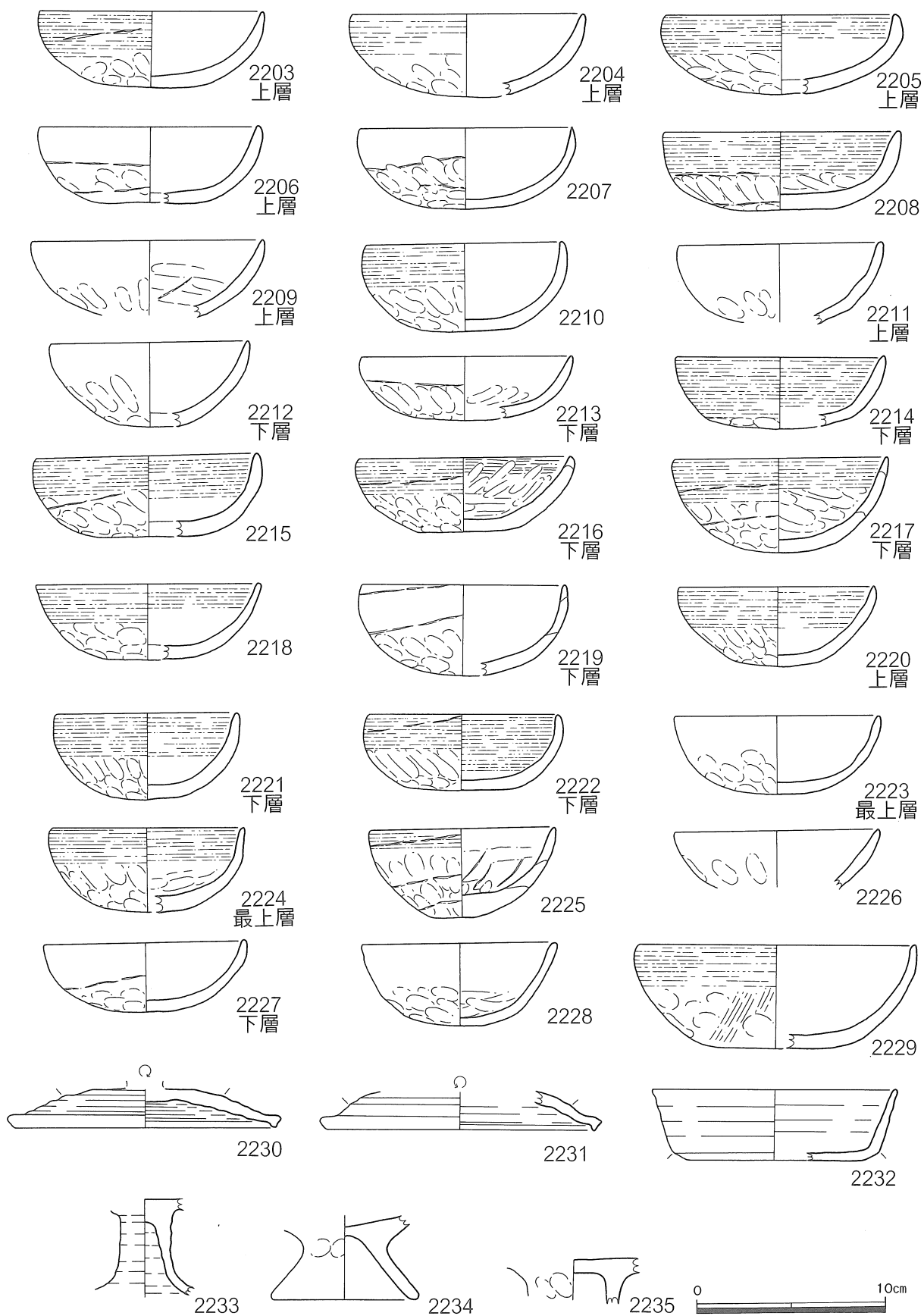
第139図 古墳中期～奈良時代土器実測図 99

2154～2174=SD148



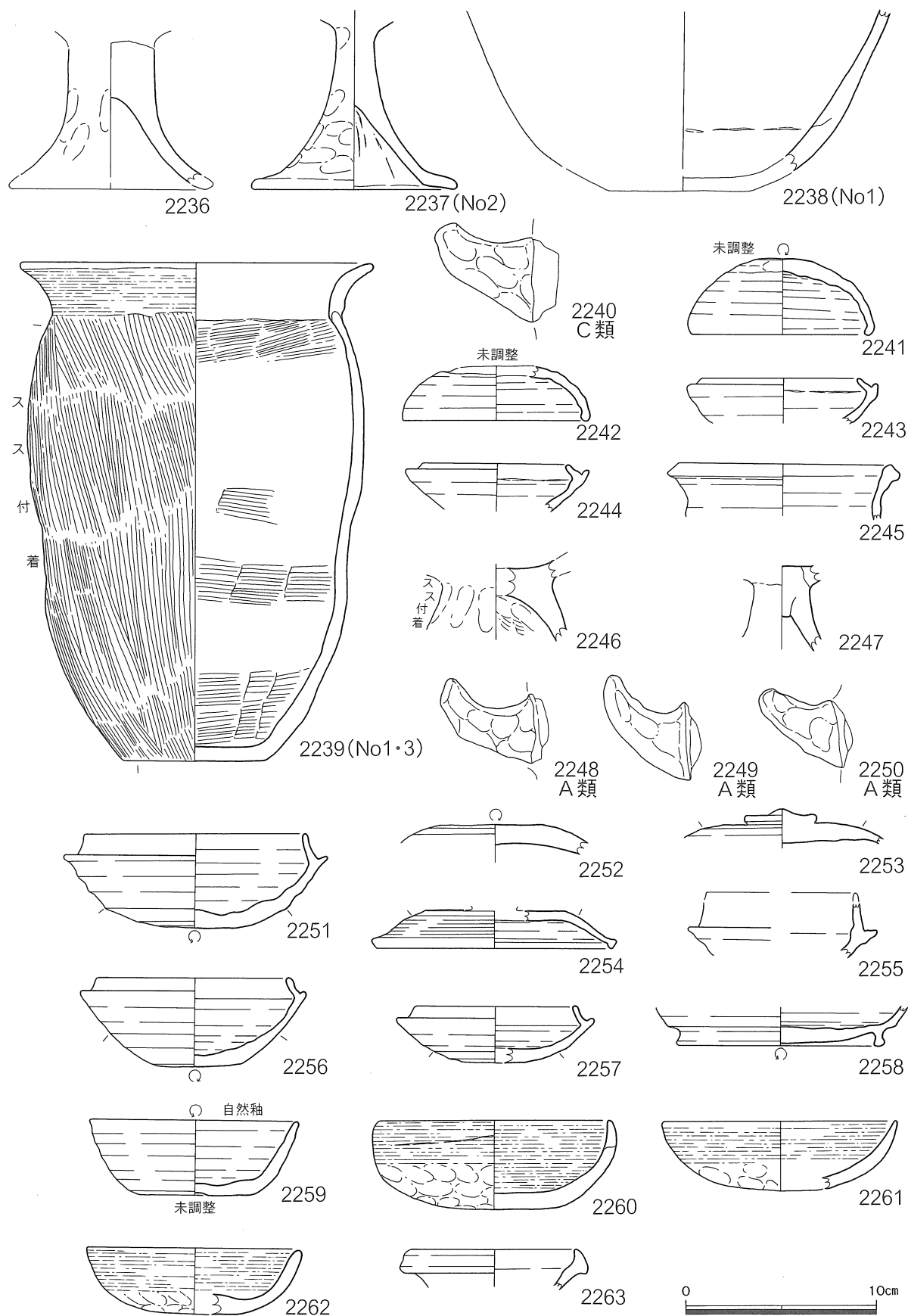
第140図 古墳中期～奈良時代土器実測図 100

2175～2202=SD148



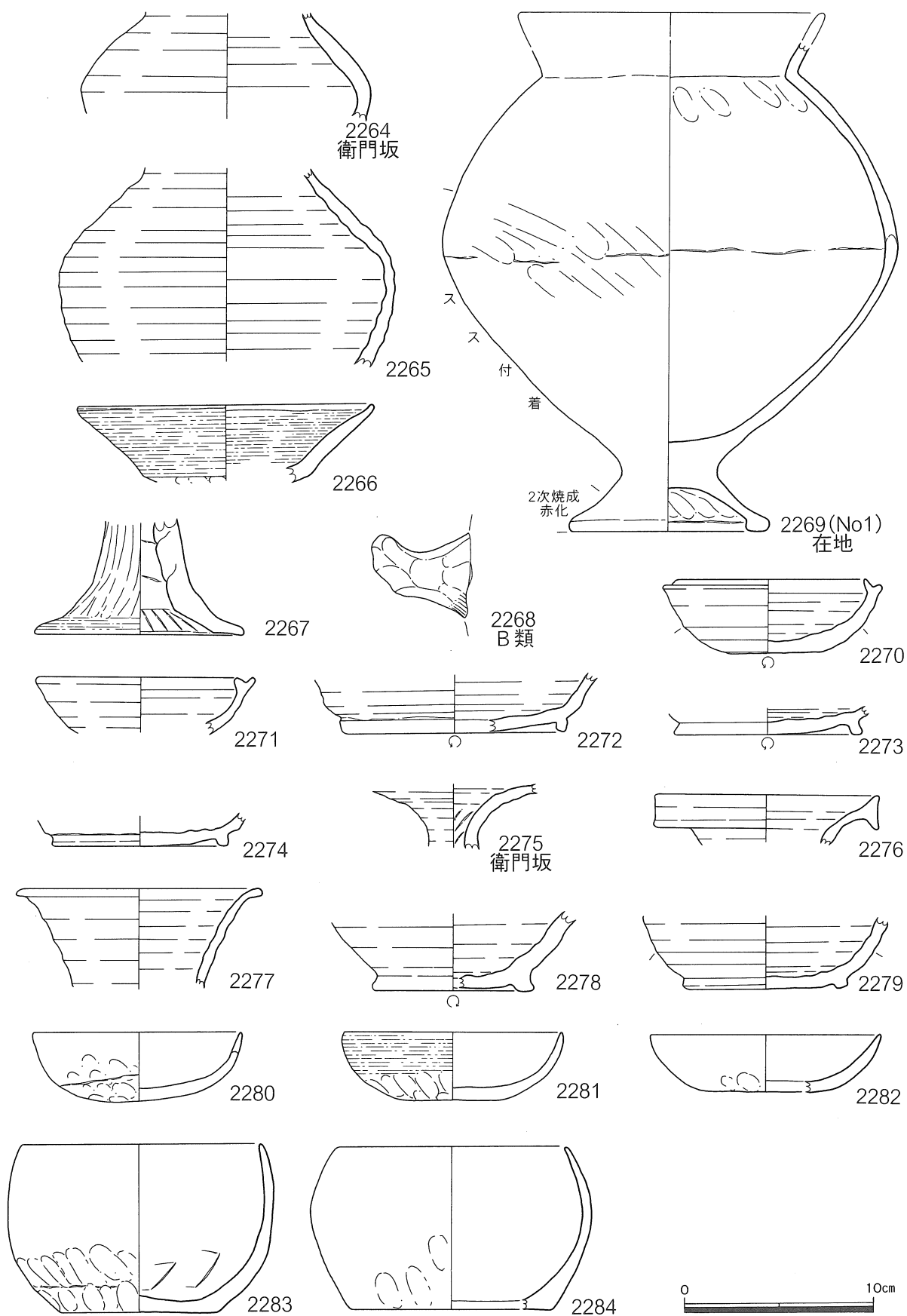
第141図 古墳中期～奈良時代土器実測図 101

2203～2229=SD148
2230～2235=SD150



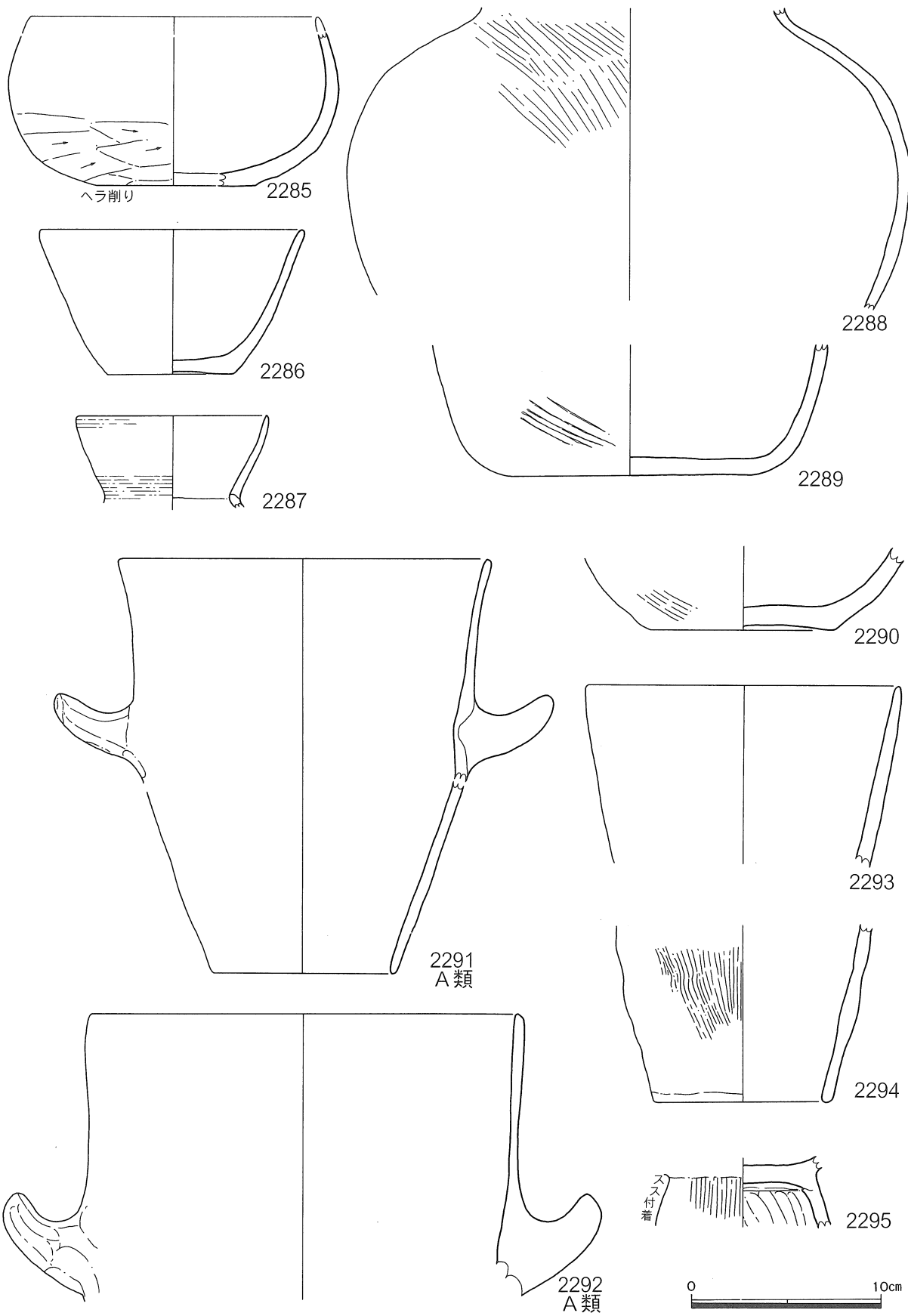
第142図 古墳中期～奈良時代土器実測図 102

2236～2240=SD150 2241～2250=SD152
2251=SD164 2252～2263=SD165



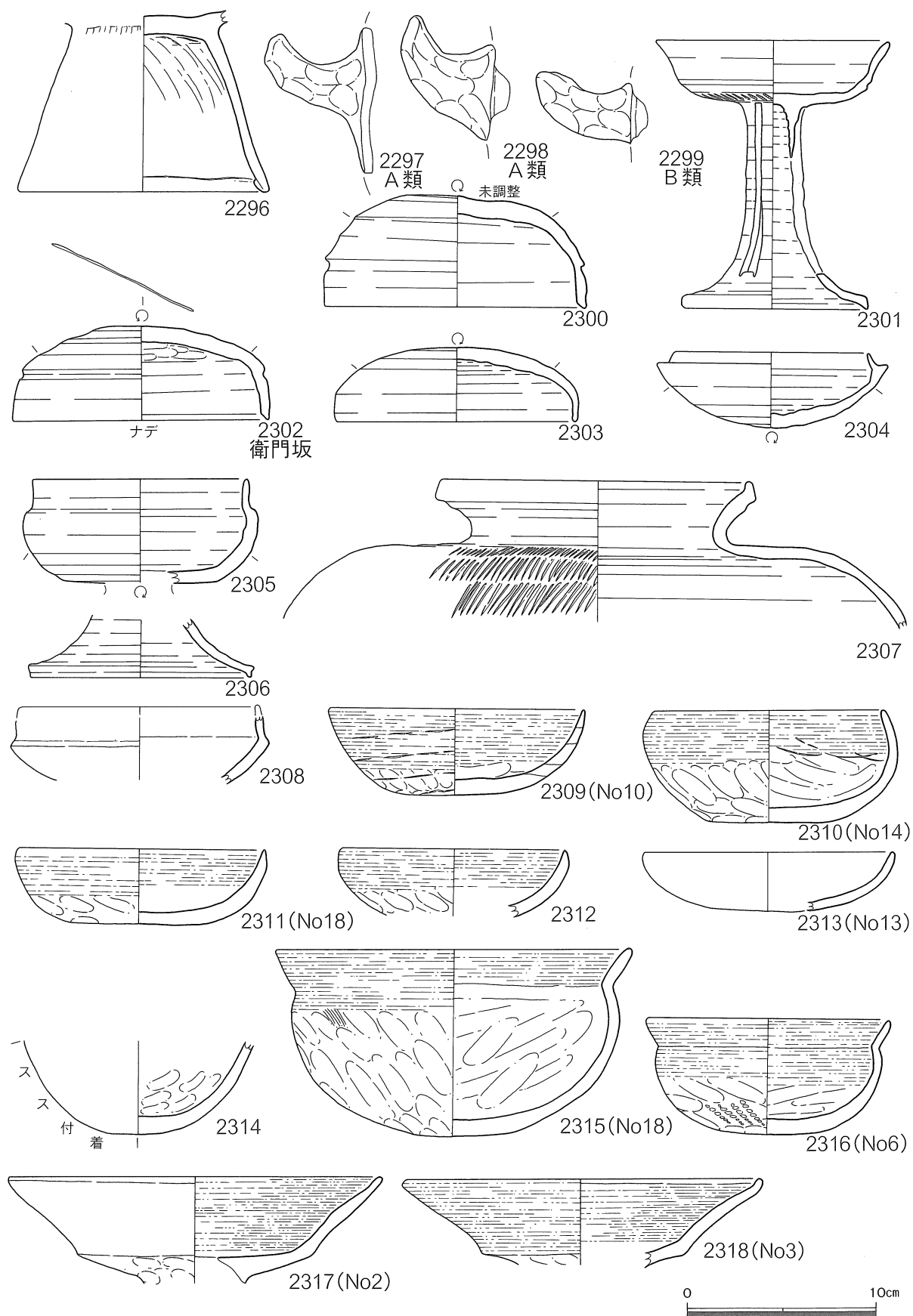
第143図 古墳中期～奈良時代土器実測図 103

2264～2266=SD165
 2269=SD194
 2270～2284=SD202



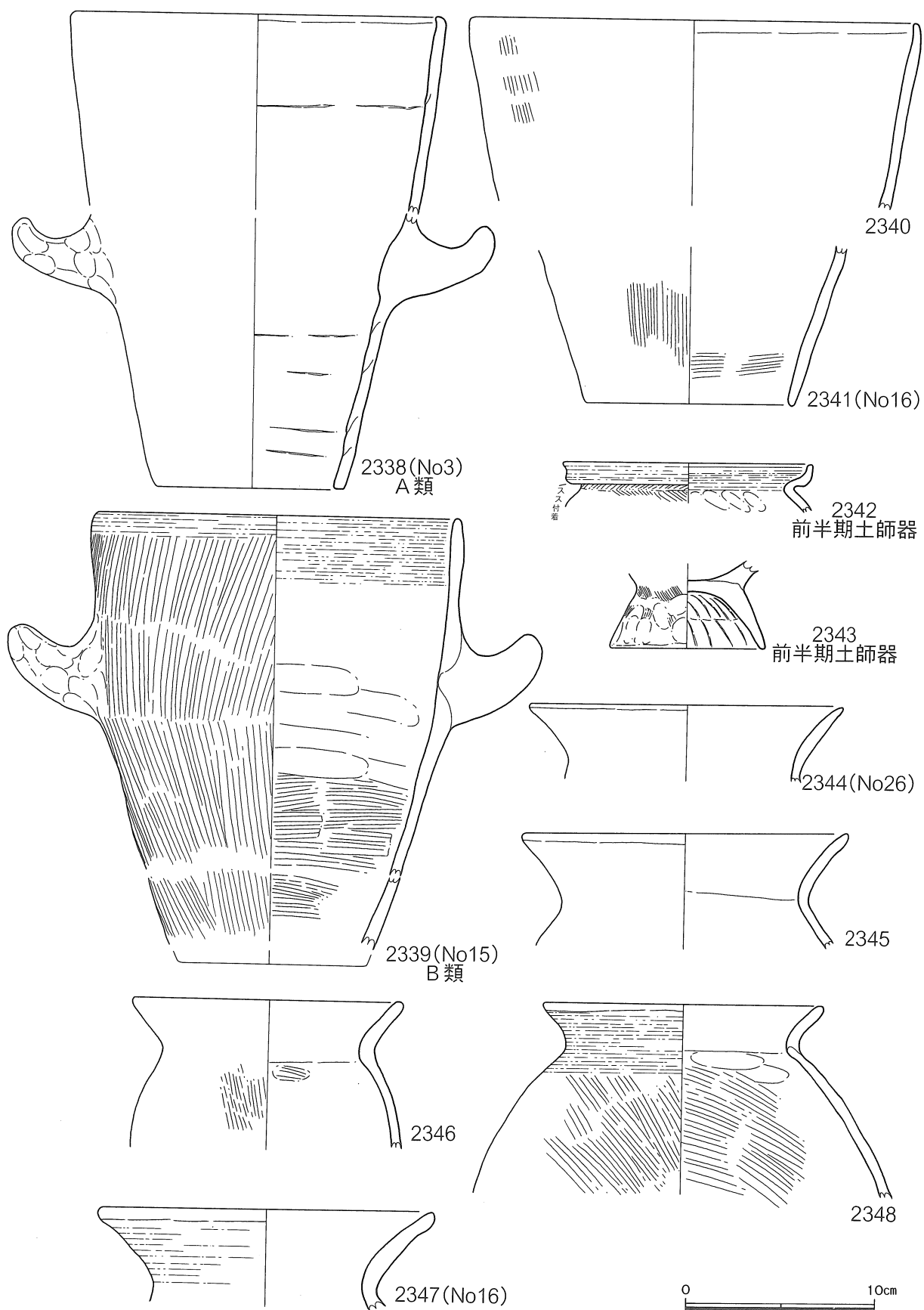
第144図 古墳中期～奈良時代土器実測図 104

2285～2295=SD202



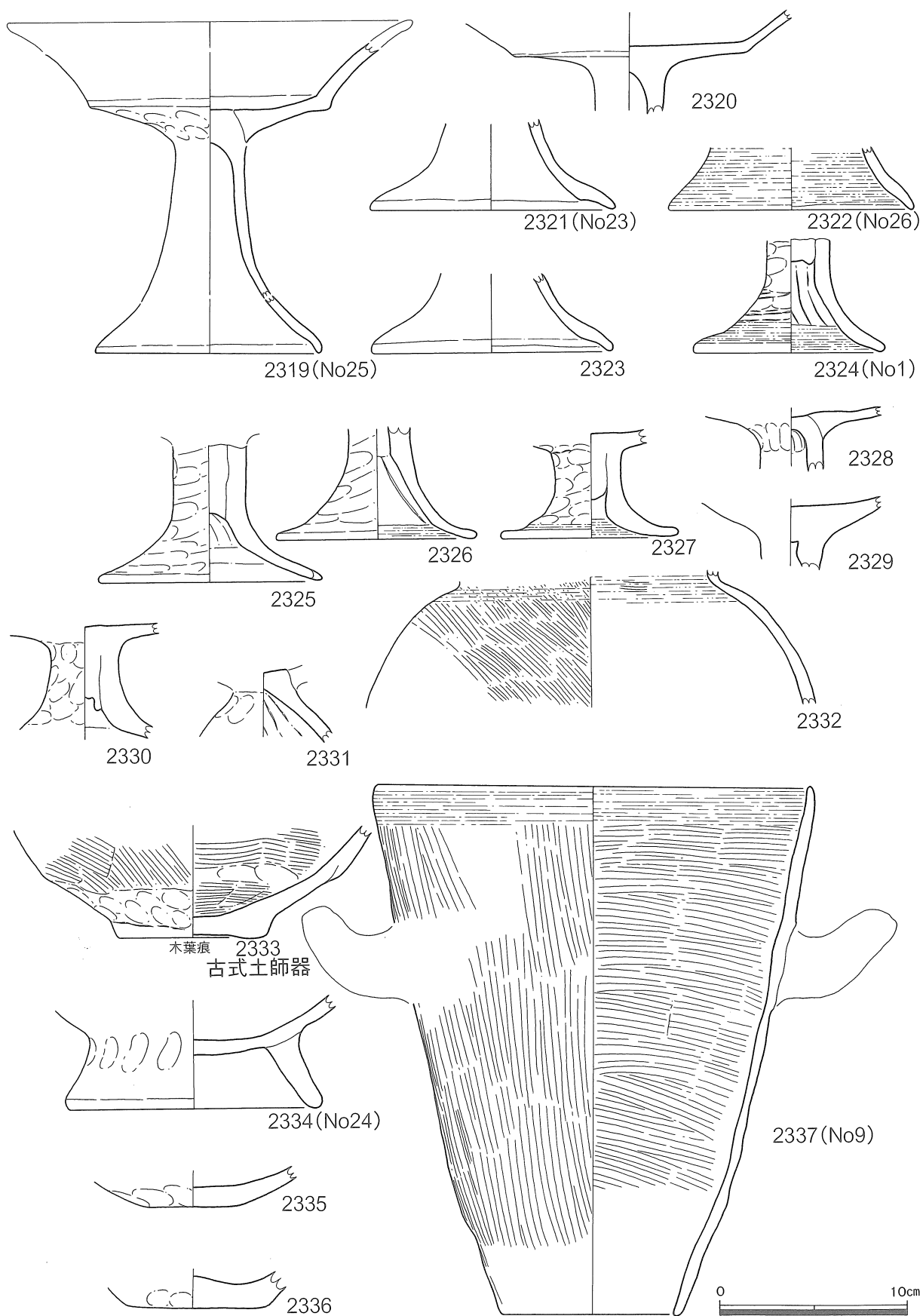
第145図 古墳中期～奈良時代土器実測図 105

2296～2299＝SD202
 2300・2301＝SD205
 2302～2318＝SD217



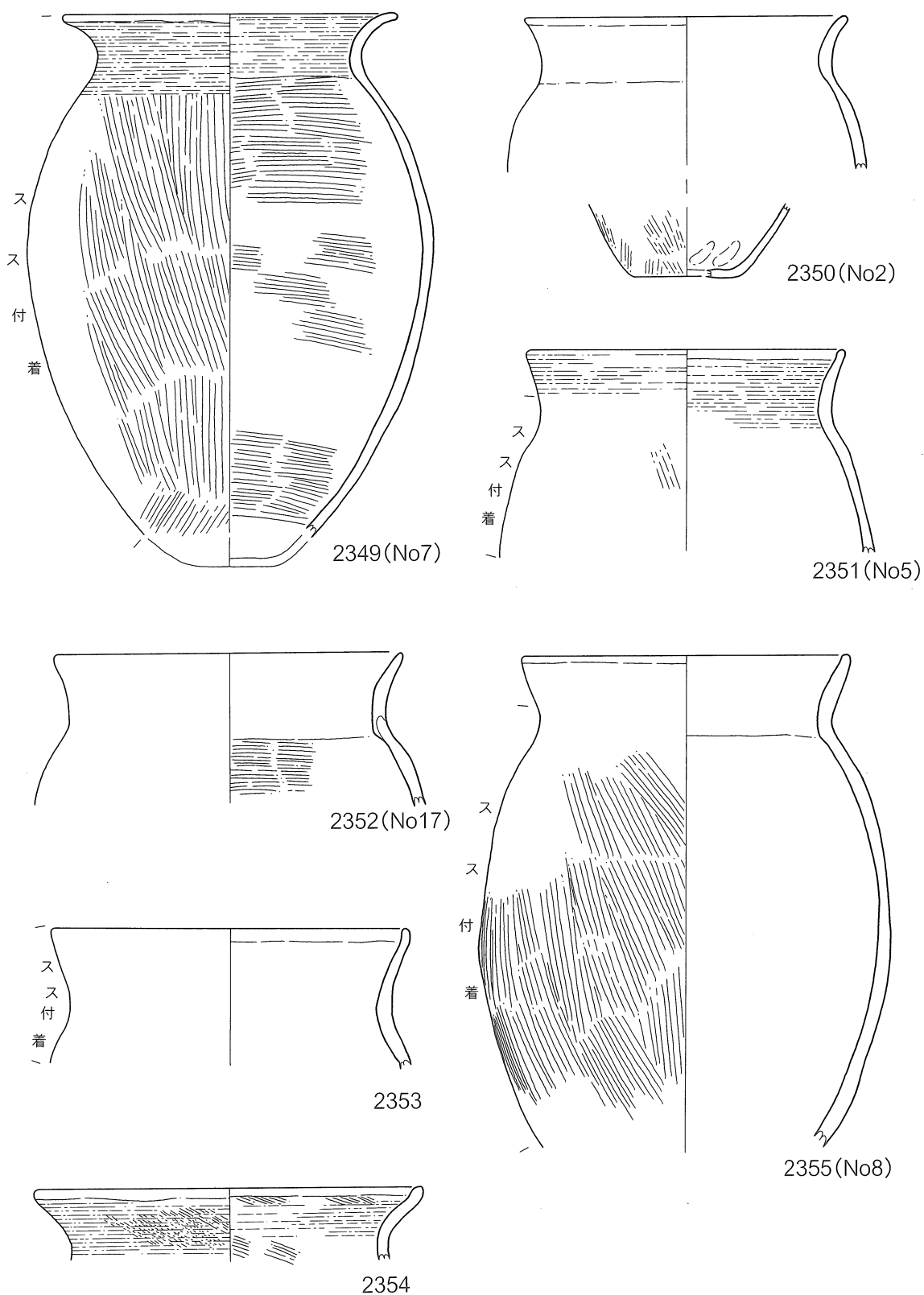
第147図 古墳中期～奈良時代土器実測図 107

2338～2348=SD217



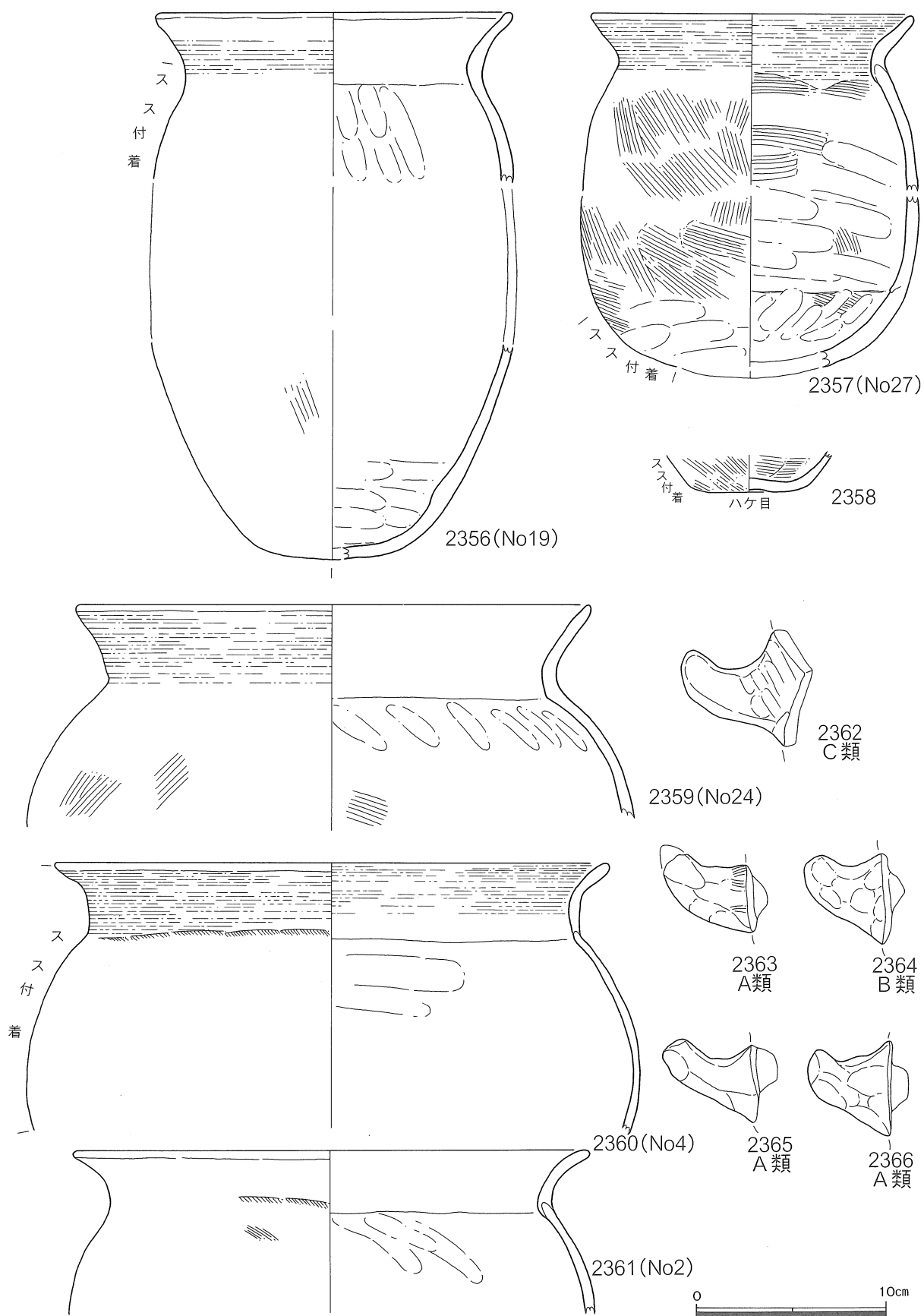
第146図 古墳中期～奈良時代土器実測図 106

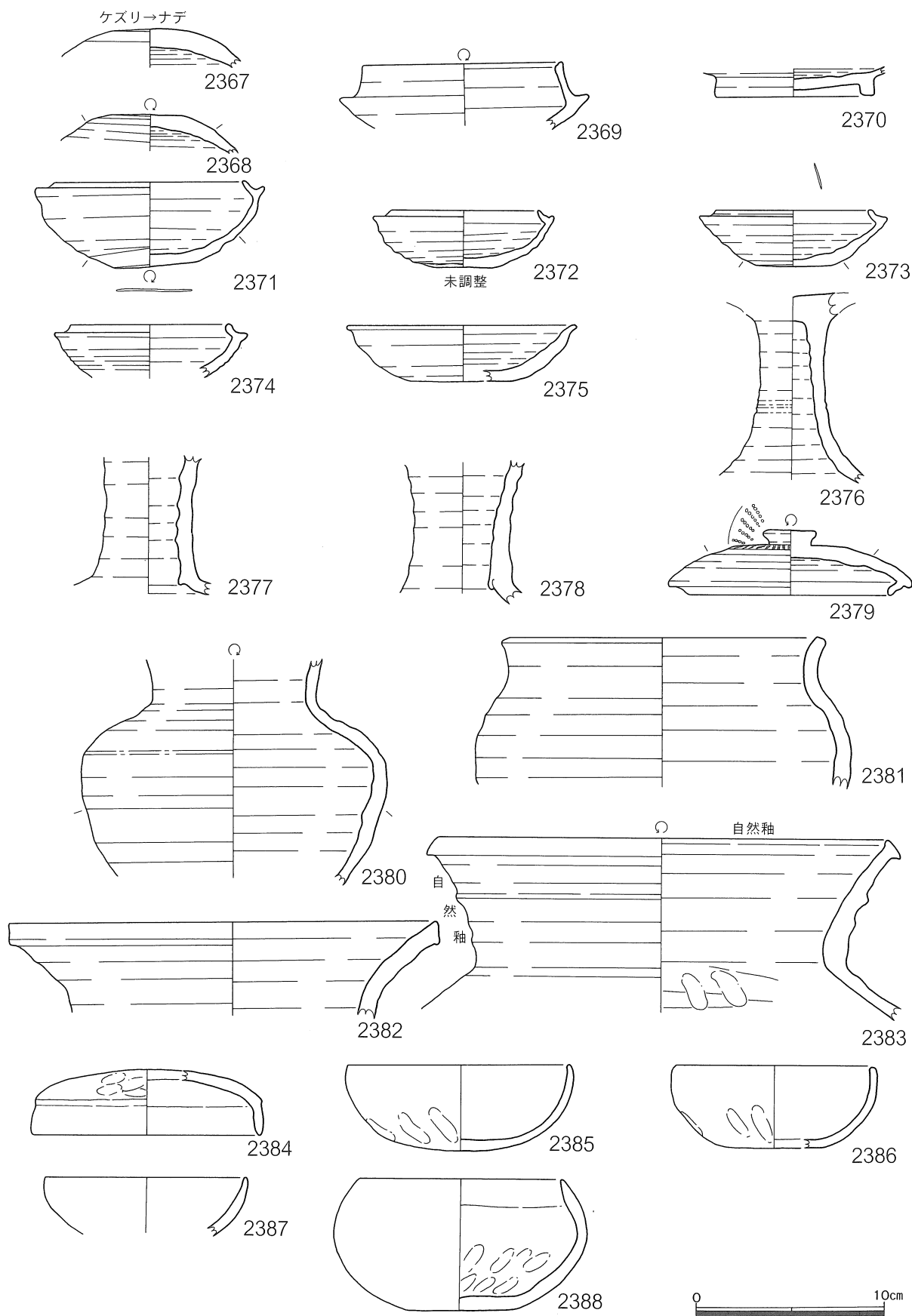
2319～2337=SD217



第148図 古墳中期～奈良時代土器実測図 108

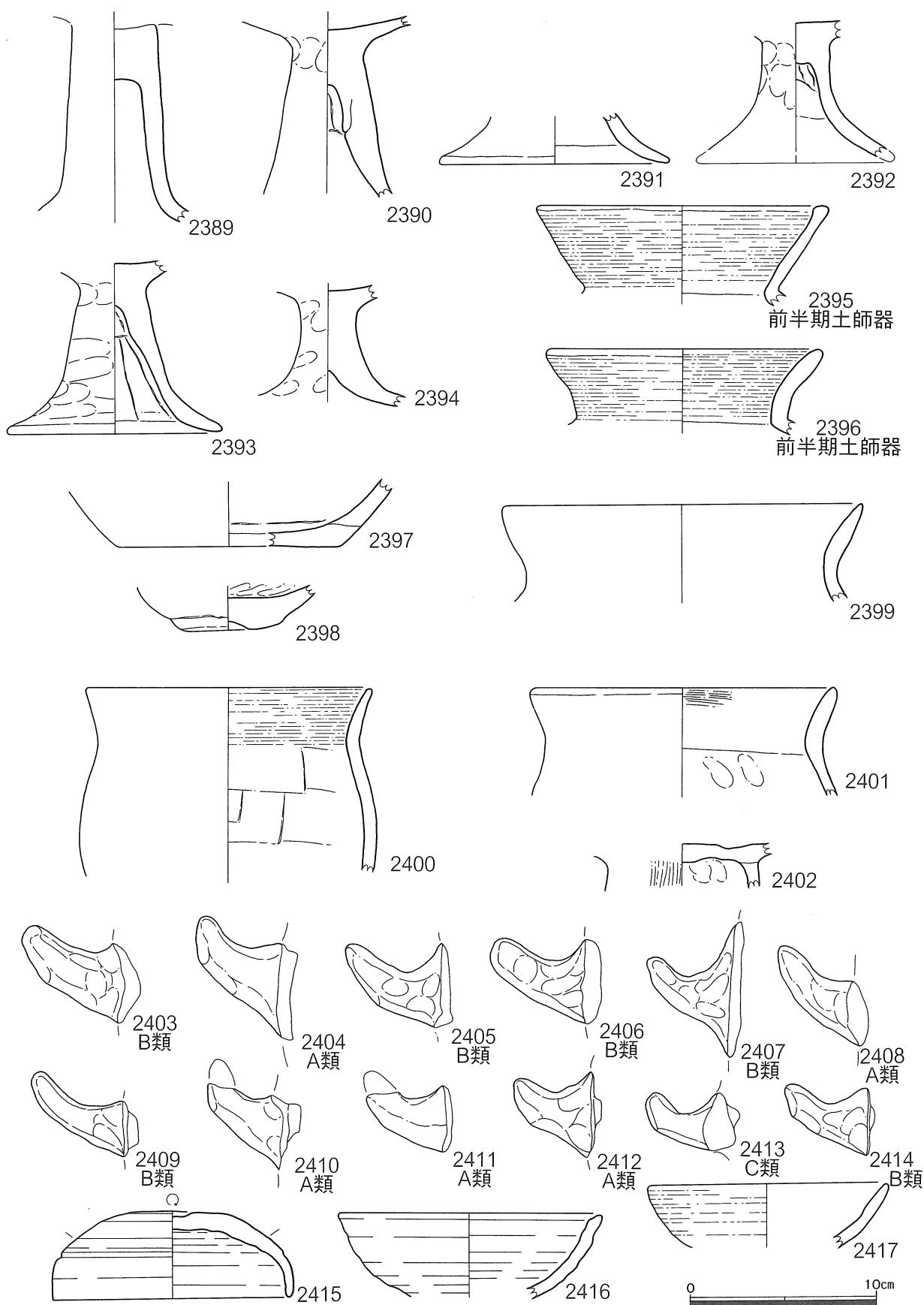
2349～2355=SD217





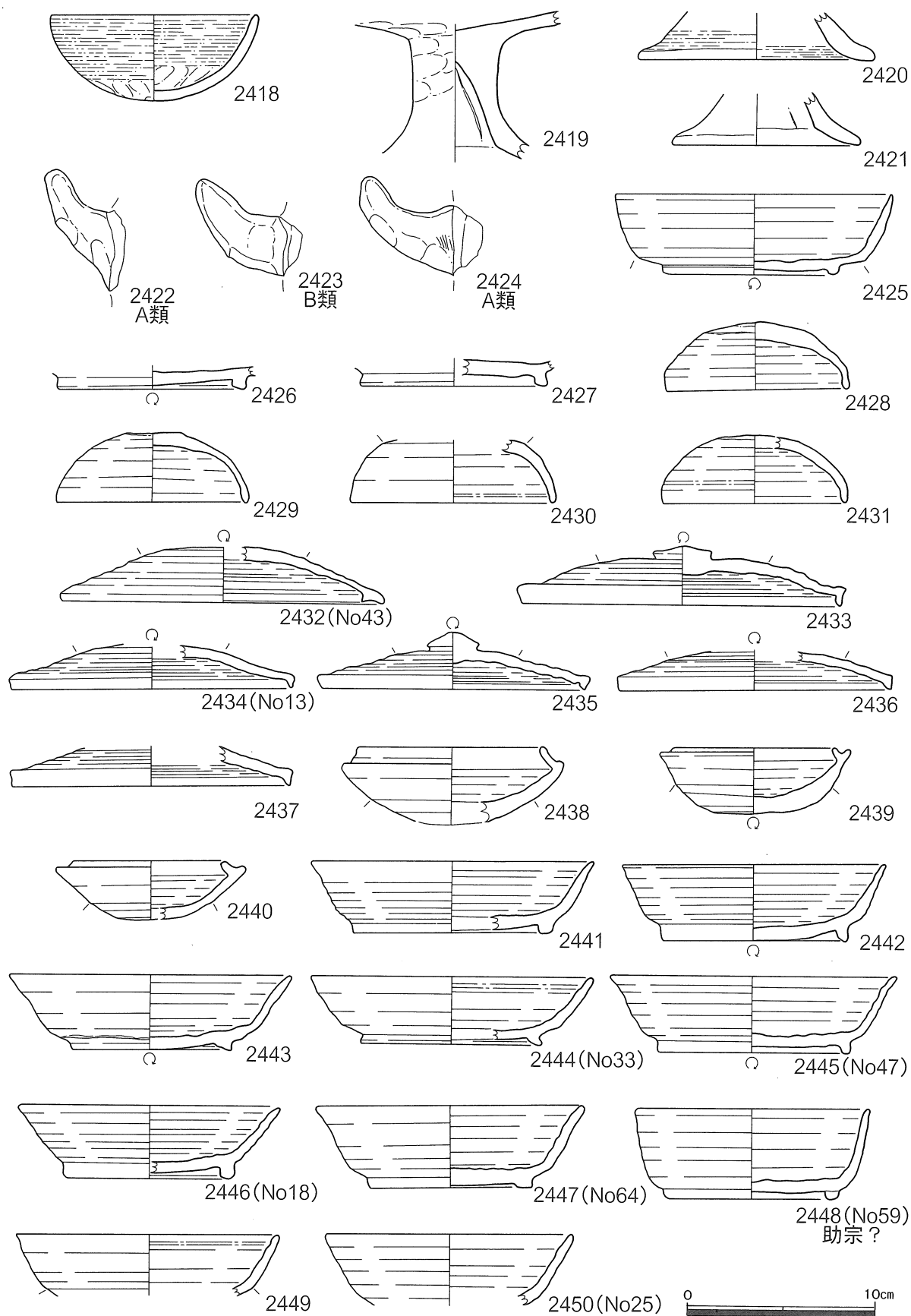
第150図 古墳中期～奈良時代土器実測図 119

2367～2388=SD219



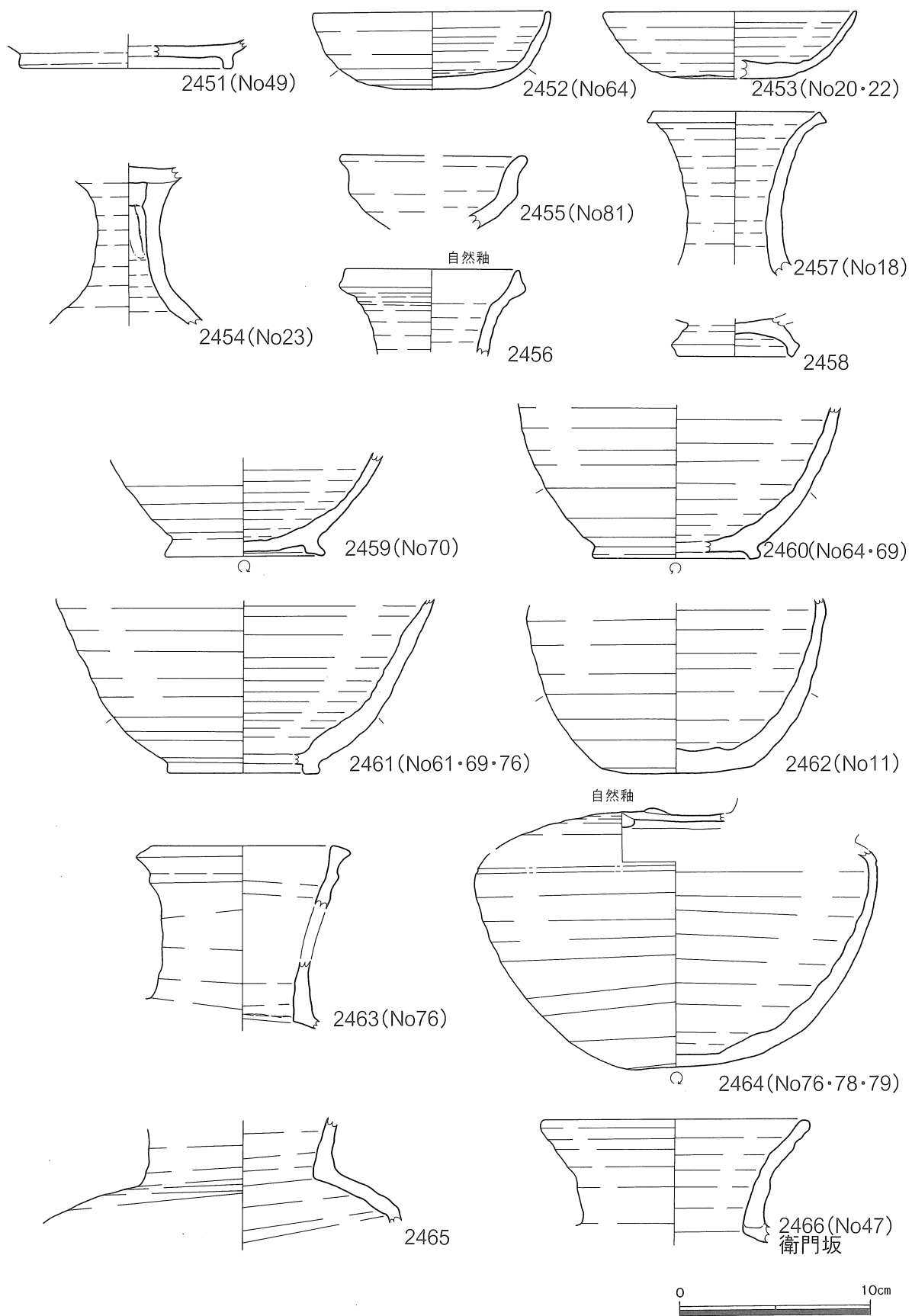
第151図 古墳中期～奈良時代土器実測図 111

2389～2414=SD219
 2415=SD221
 2416・2417=SD236



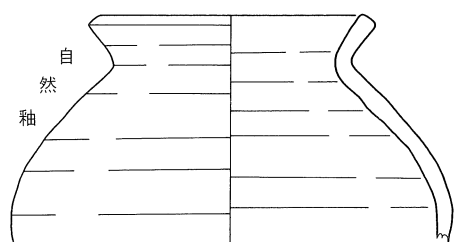
第152図 古墳中期～奈良時代土器実測図 112

2418～2424=SD236
 2425～2427=SD237
 2428～2450=SD244上層

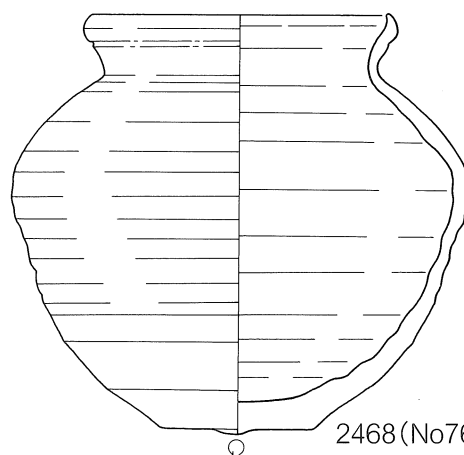


第153図 古墳中期～奈良時代土器実測図 113

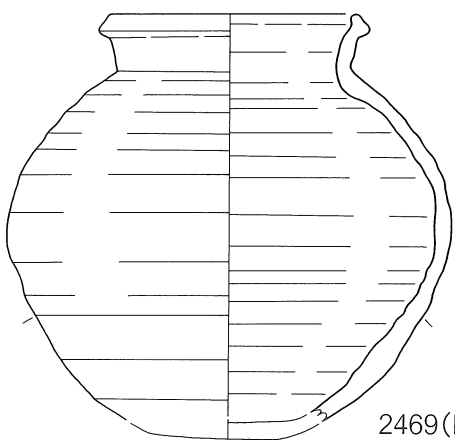
2451～2466=SD244上層



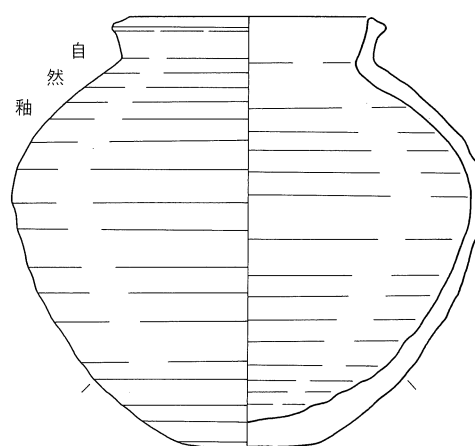
2467(No42)



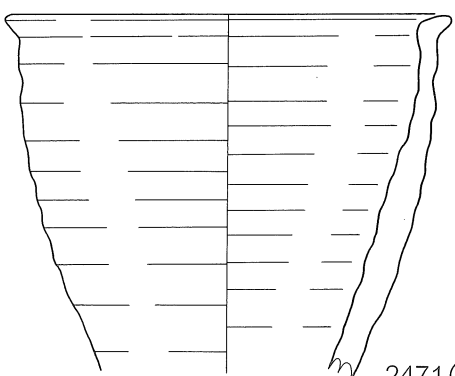
2468(No76)



2469(No78)



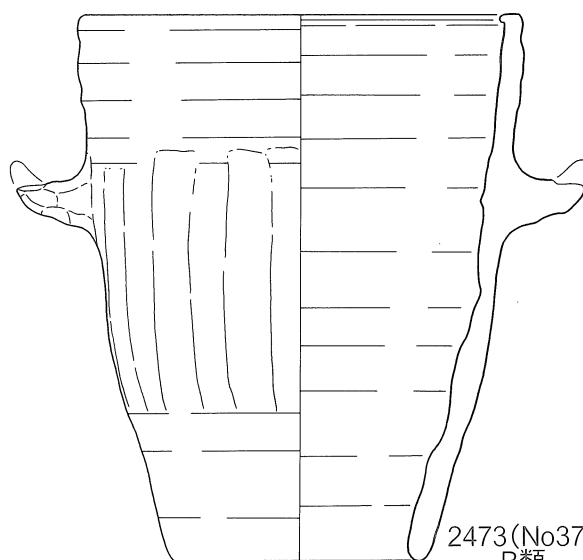
2470(No30・73)



2471(No30)

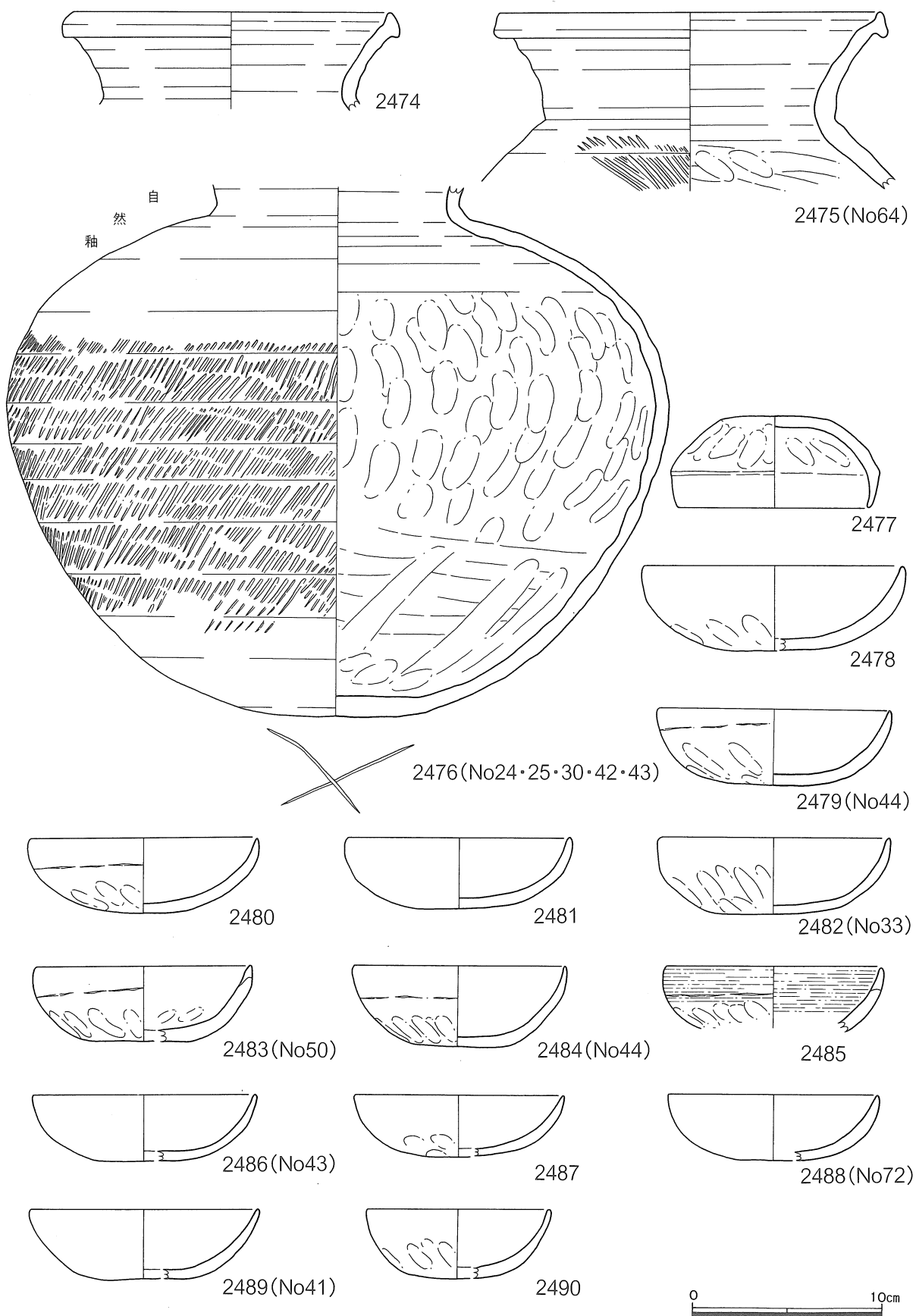


2472(No56)



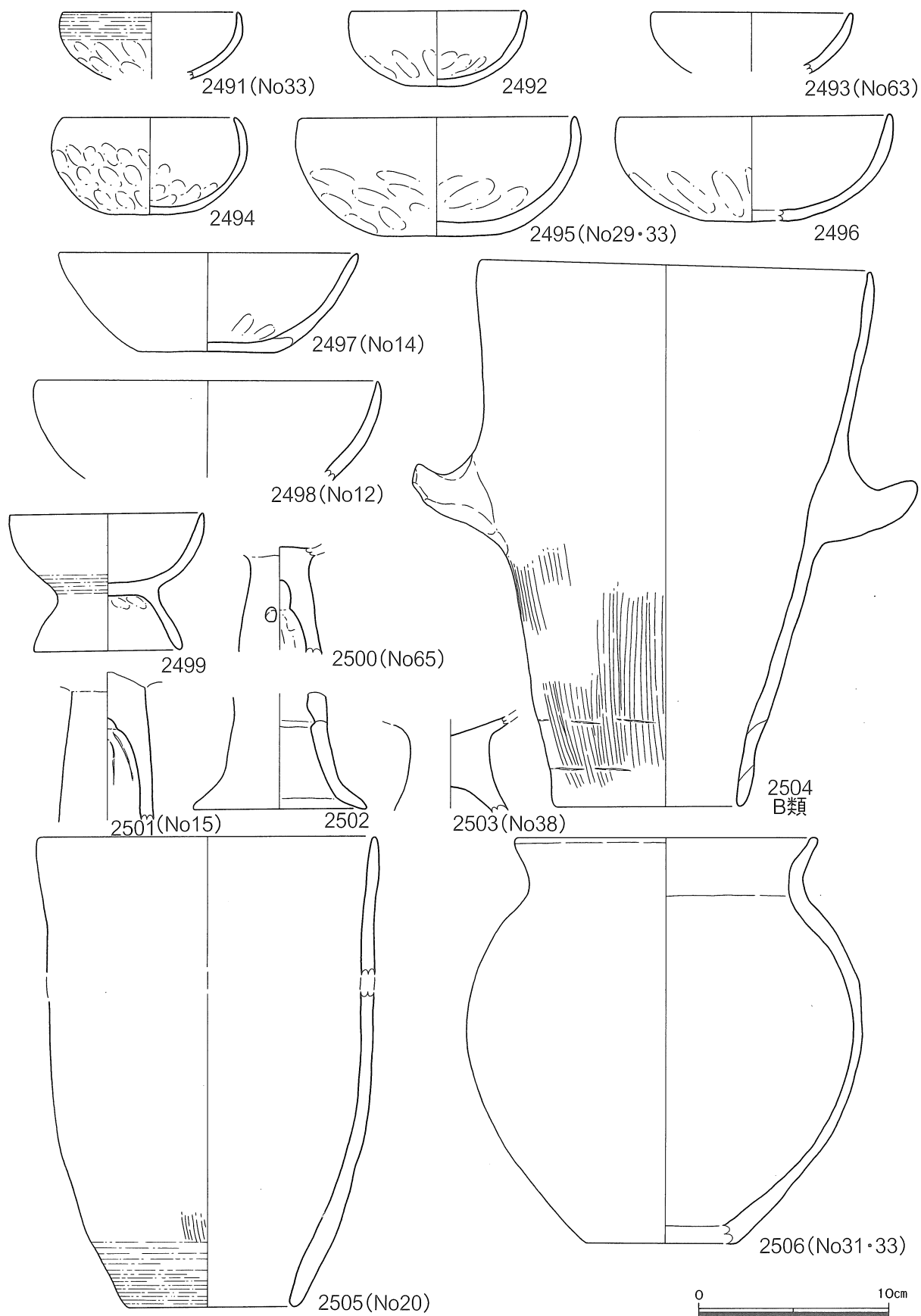
2473(No37)
B類





第155図 古墳中期～奈良時代土器実測図 115

2474～2490=SD244上層



第156図 古墳中期～奈良時代土器実測図 116

2491～2506=SD244上層